

# 秋田県の 絶滅のおそれのある 野生生物

Threatened Wildlife of Akita Prefecture 2002

2002

秋田県版  
レッドデータ  
ブック

動物編

Red  
Data  
Book of  
Akita  
Prefecture  
Animals



秋田県環境と文化のむら協会

表紙写真

アオサナエ 高橋 雅彌撮影	クマゲラ 小笠原 嵩撮影	シナイモツゴ 杉山 秀樹撮影
タガメ 高橋 雅彌撮影	ホンドモモンガ 泉 祐一撮影	フタオレウスグロエダシャク 梅津 一史撮影
ニホンアカガエル 梅津 一史撮影	ハンエンカクツツトビケラ 青谷 晃吉撮影	エゾコギセル 川口 洋治撮影

哺乳類



カゲヤコウモリ 絶滅危惧種 I B 類 (EN)  
向山 満撮影 P. 29



ヤマコウモリ 絶滅危惧種 I B 類 (EN)  
横山 正義撮影 P. 30



ニホンウサギコウモリ 絶滅危惧種 I B 類 (EN)  
向山 満撮影 P. 31



ホンドザル 絶滅危惧種 I B 類 (EN)  
青木 満撮影 P. 31



ニホンコキクガシラコウモリ 絶滅危惧種 II 類 (VU)  
向山 満撮影 P. 33



ニホンユビナガコウモリ 絶滅危惧種 II 類 (VU)  
向山 満撮影 P. 34



ニホンコテングコウモリ 絶滅危惧種 II 類 (VU)  
向山 満撮影 P. 34



ニホンテングコウモリ 絶滅危惧種 II 類 (VU)  
向山 満撮影 P. 35



ホンドモモンガ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
泉 祐一撮影 P. 35



ニッコウムササビ 準絶滅危惧種 (NT)  
小笠原 嵩撮影 P. 37



ヤマネ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
揚妻 直樹撮影 P. 35



シジュウカラガン 絶滅危惧種ⅠA類 (CR)  
西出 隆撮影 P. 49

## 鳥 類



ホンドオコジョ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
長崎 富雄撮影 P. 36



ハクガン 絶滅危惧種ⅠA類 (CR)  
西出 隆撮影 P. 49



モジロコウモリ 準絶滅危惧種 (NT)  
向山 満撮影 P. 36



イヌワシ 絶滅危惧種ⅠA類 (CR)  
小笠原 嵩撮影 P. 49



クマゲラ 絶滅危惧種 I A類 (CR) 小笠原 高撮影 P. 50



コクガン 絶滅危惧種 I B類 (EN) 泉 祐一撮影 P. 51



オオセッカ 絶滅危惧種 I A類 (CR) 西出 隆撮影 P. 50



クマタカ 絶滅危惧種 I B類 (EN) 小笠原 高撮影 P. 52



オオヨシゴイ 絶滅危惧種 I B類 (EN) 西出 隆撮影 P. 51



チュウヒ 絶滅危惧種 I B類 (EN) 小笠原 高撮影 P. 52



クロサギ 絶滅危惧種 I B類 (EN) 船橋 功撮影 P. 51



アリスイ 絶滅危惧種 I B類 (EN) 西出 隆撮影 P. 52



トモエガモ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU) 武田 栄悦撮影 P. 53



オジロワシ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU) 三浦 哲也撮影 P. 54



オカヨシガモ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU) 西出 隆撮影 P. 53



オオワシ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU) 武田 栄悦撮影 P. 54



ピロードキンクロ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU) 佐藤 正生撮影 P. 53



ツミ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU) 伊藤 信義撮影 P. 55



ハチクマ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU) 船橋 功撮影 P. 54



ハイトカ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU) 小笠原 高撮影 P. 55



ハヤブサ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU) 小笠原 学撮影 P. 55



コアシサシ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU) 小笠原 嵩撮影 P. 57



チゴハヤブサ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU) 武田 栄悦撮影 P. 56



サンショウクイ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU) 武田 栄悦撮影 P. 57



コチョウゲンボウ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU) 佐藤 正生撮影 P. 56



チゴモズ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU) 石川 寿一撮影 P. 57



ミツユビカモメ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU) 佐藤 正生撮影 P. 56



アカモズ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU) 船橋 功撮影 P. 58



ヒレンジャク 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
武田 栄悦撮影 P. 58



ミサゴ 準絶滅危惧種 (NT)  
堤 朗撮影 P. 64

### 爬虫類



キバシリ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
後藤 恭子撮影 P. 58



タカチホヘビ 情報不足種 (DD)  
田中 政行撮影 P. 89



ユキホオジロ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
小笠原 高撮影 P. 59



シロマガダ 情報不足種 (DD)  
佐々木 昇撮影 P. 89

### 両生類



イスカ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
原田 勇成撮影 P. 59



ニホンアカガエル 準絶滅危惧種 (NT)  
梅津 一史撮影 P. 97

淡水魚類



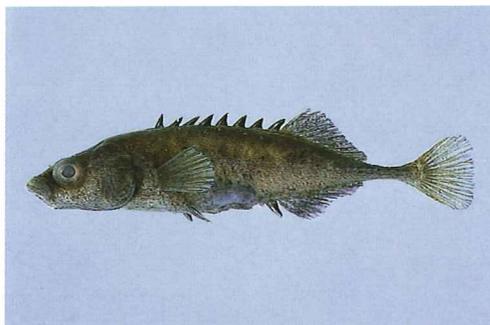
クニマス 絶滅種 (EX) 杉山 秀樹撮影 P. 107



アカザ 絶滅危惧種 I A類 (CR) 杉山 秀樹撮影 P. 108



シナイモツゴ 絶滅危惧種 I A類 (CR) 杉山 秀樹撮影 P. 107



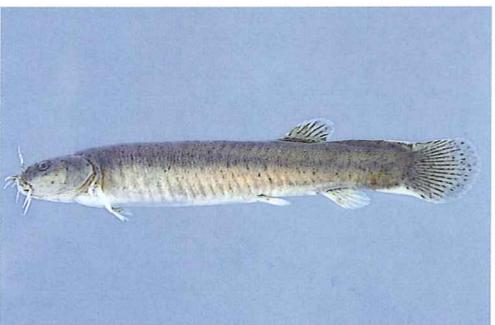
イバラトミヨ雄物型 絶滅危惧種 I A類 (CR) 杉山 秀樹撮影 P. 108



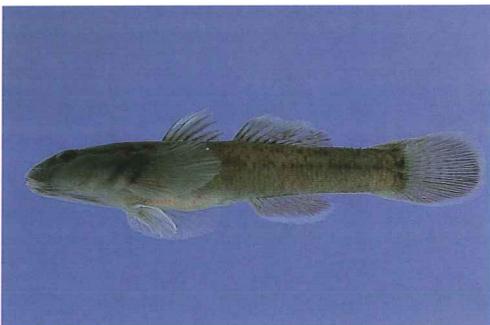
ゼニタナゴ 絶滅危惧種 I A類 (CR) 杉山 秀樹撮影 P. 107



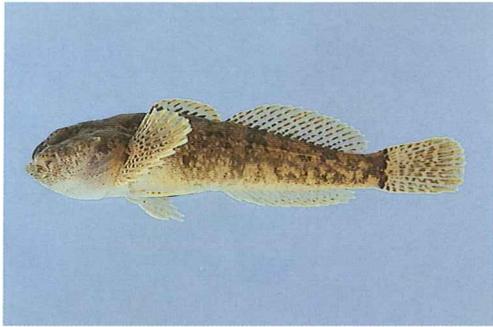
チチブ 絶滅危惧種 I B類 (EN) 杉山 秀樹撮影 P. 109



ホトケドジョウ 絶滅危惧種 I A類 (CR) 杉山 秀樹撮影 P. 108



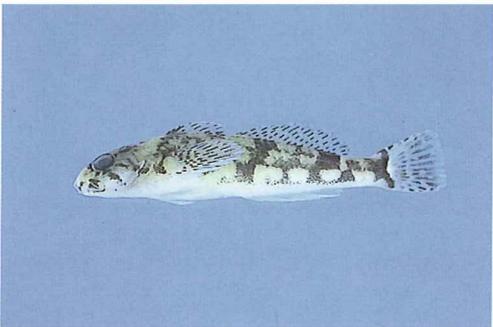
クロヨシノボリ 絶滅危惧種 I B類 (EN) 杉山 秀樹撮影 P. 109



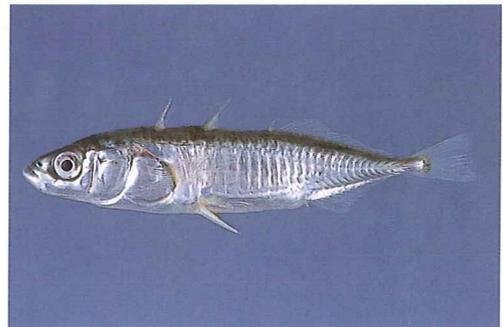
ハナカジカ 絶滅危惧種 I B類 (EN)  
杉山 秀樹撮影 P. 109



ギバチ 絶滅危惧種 II類 (VU)  
杉山 秀樹撮影 P. 111



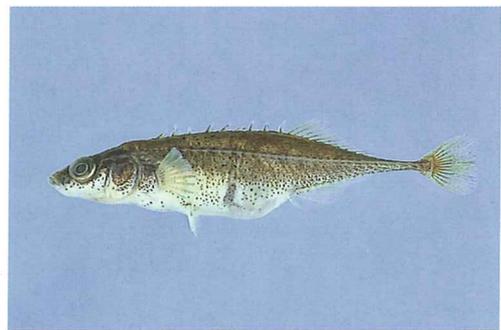
カジカ中卵型 絶滅危惧種 I B類 (EN)  
杉山 秀樹撮影 P. 110



イトヨ降海型 絶滅危惧種 II類 (VU)  
杉山 秀樹撮影 P. 111



マルタ 絶滅危惧種 II類 (VU)  
杉山 秀樹撮影 P. 110



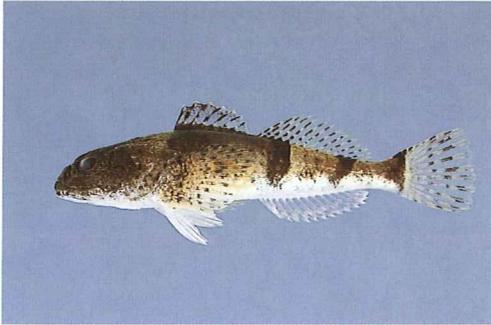
トミヨ・淡水型 絶滅危惧種 II類 (VU)  
杉山 秀樹撮影 P. 111



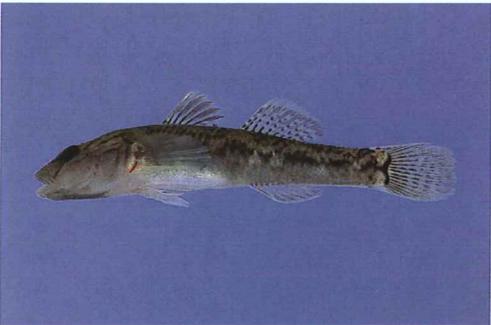
エゾウグイ 絶滅危惧種 II類 (VU)  
杉山 秀樹撮影 P. 110



カンキョウカジカ 絶滅危惧種 II類 (VU)  
杉山 秀樹撮影 P. 112



アユカケ (カマキリ) 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
杉山 秀樹撮影 P. 112



シマヨシノボリ陸封型 地域個体群 (LP)  
杉山 秀樹撮影 P. 115



ルリヨシノボリ陸封型 地域個体群 (LP)  
杉山 秀樹撮影 P. 116

## 昆虫類



オオウラギンヒョウモン 絶滅種 (EX)  
梅津 一史撮影 P. 125



ホンサナエ 絶滅危惧種ⅠA類 (CR)  
高橋 雅彌撮影 P. 126



アオサナエ 絶滅危惧種ⅠA類 (CR)  
高橋 雅彌撮影 P. 126



ヒメサナエ 絶滅危惧種ⅠA類 (CR)  
高橋 雅彌撮影 P. 126



オジロサナエ 絶滅危惧種ⅠA類 (CR)  
高橋 雅彌撮影 P. 127



コシボソヤンマ 絶滅危惧種 I A類 (CR)  
高橋 雅彌撮影 P. 127



カトリヤンマ 絶滅危惧種 I A類 (CR)  
高橋 雅彌撮影 P. 127



ヤブヤンマ 絶滅危惧種 I A類 (CR)  
高橋 雅彌撮影 P. 128



マークオサムシ 絶滅危惧種 I A類 (CR)  
佐藤 福男撮影 P. 128



クマガイクロアオゴミムシ 絶滅危惧種 I A類 (CR)  
佐藤 福男撮影 P. 128



アオバネホソクビゴミムシ 絶滅危惧種 I A類 (CR)  
佐藤 福男撮影 P. 129



テラニシセスジゲンゴロウ 絶滅危惧種 I A類 (CR)  
佐藤 福男撮影 P. 129



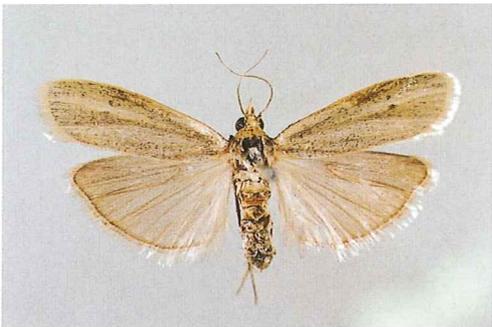
クロモンエグリトビケラ 絶滅危惧種 I A類 (CR)  
熊谷 和樹撮影 P. 130



チビウスキオオメイガ 絶滅危惧種 I A類 (CR)  
佐々木 明夫撮影 P. 130



キマダラモドキ 絶滅危惧種 I A類 (CR)  
梅津 一史撮影 P. 131



ギンスジマダラメイガ 絶滅危惧種 I A類 (CR)  
佐々木 明夫撮影 P. 131



キタルリモンエダシャク 絶滅危惧種 I A類 (CR)  
梅津 一史撮影 P. 132



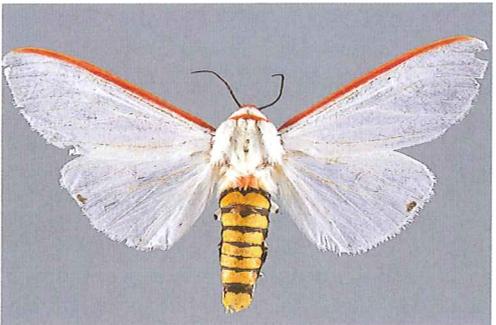
クロシジミ 絶滅危惧種 I A類 (CR)  
梅津 一史撮影 P. 131



クワヤマエグリシャチホコ 絶滅危惧種 I A類 (CR)  
梅津 一史撮影 P. 132



フタスジチョウ 絶滅危惧種 I A類 (CR)  
梅津 一史撮影 P. 131



マエアカヒトリ 絶滅危惧種 I A類 (CR)  
梅津 一史撮影 P. 132



チョウカイシロコブガ 絶滅危惧種 I A類 (CR)  
梅津 一史撮影 P. 133



キタヨトウ 絶滅危惧種 I A類 (CR)  
梅津 一史撮影 P. 134



アオモンギンセダカモクメ 絶滅危惧種 I A類 (CR)  
梅津 一史撮影 P. 133



テンモントガリヨトウ 絶滅危惧種 I A類 (CR)  
梅津 一史撮影 P. 134



シロミチビヨトウ 絶滅危惧種 I A類 (CR)  
佐々木 明夫撮影 P. 133



セプトモクメヨトウ 絶滅危惧種 I A類 (CR)  
梅津 一史撮影 P. 135



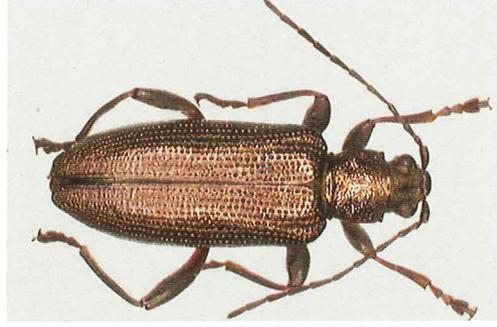
クシロモクメヨトウ 絶滅危惧種 I A類 (CR)  
梅津 一史撮影 P. 134



ナナメヒメヨトウ 絶滅危惧種 I A類 (CR)  
佐々木 明夫撮影 P. 135



オツネントンボ 絶滅危惧種 I B 類 (EN)  
高橋 雅彌撮影 P. 136



キアシネクイハムシ 絶滅危惧種 I B 類 (EN)  
佐藤 福男撮影 P. 137



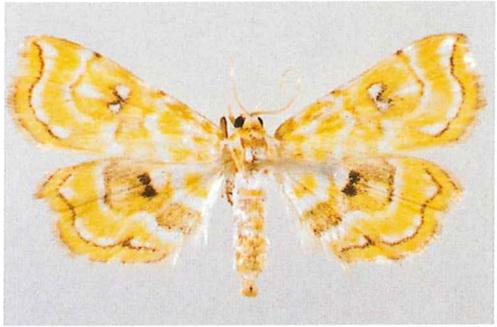
マダラナニワトンボ 絶滅危惧種 I B 類 (EN)  
高橋 雅彌撮影 P. 136



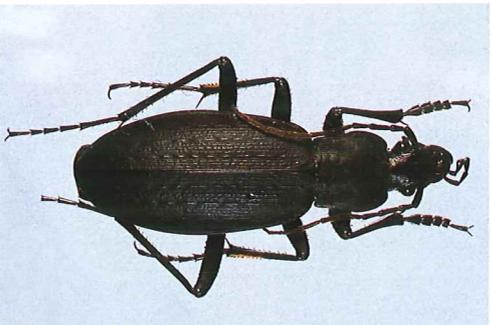
ソトシロスジズメイガ 絶滅危惧種 I B 類 (EN)  
佐々木 明夫撮影 P. 138



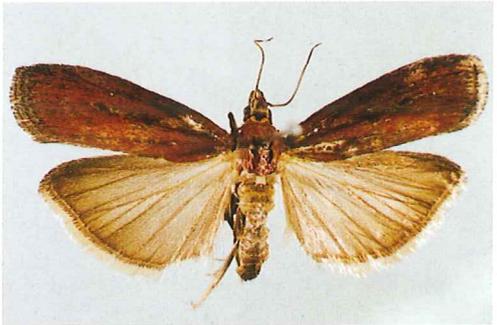
カワラゴミムシ 絶滅危惧種 I B 類 (EN)  
佐藤 福男撮影 P. 136



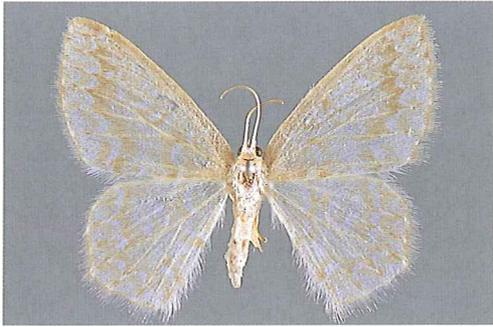
ウスキズメイガ 絶滅危惧種 I B 類 (EN)  
佐々木 明夫撮影 P. 138



クロナガオサムシ 絶滅危惧種 I B 類 (EN)  
佐藤 福男撮影 P. 137



フタクロテンマダラメイガ 絶滅危惧種 I B 類 (EN)  
佐々木 明夫撮影 P. 138



ヒメナミガタアオシャク 絶滅危惧種 I B類 (EN)  
梅津 一史撮影 P. 139



キブサヒメエダシャク 絶滅危惧種 I B類 (EN)  
高橋 雅彌撮影 P. 140



シタベニヒメシャク 絶滅危惧種 I B類 (EN)  
梅津 一史撮影 P. 139



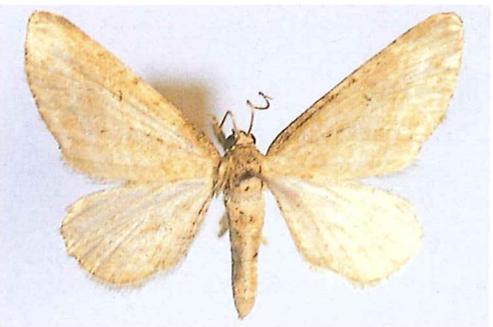
フタオレウスグロエダシャク 絶滅危惧種 I B類 (EN)  
梅津 一史撮影 P. 140



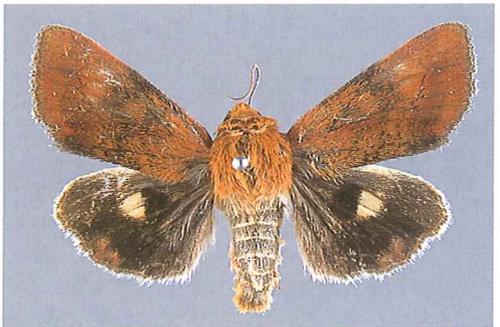
ヒメシタコバネナミシャク 絶滅危惧種 I B類 (EN)  
高橋 雅彌撮影 P. 139



ウスジロドクガ 絶滅危惧種 I B類 (EN)  
梅津 一史撮影 P. 141



シロマダラカバナミシャク 絶滅危惧種 I B類 (EN)  
高橋 雅彌撮影 P. 140



ニセタバコガ 絶滅危惧種 I B類 (EN)  
梅津 一史撮影 P. 141



クロヤガ 絶滅危惧種 I B類 (EN)  
佐々木 明夫撮影 P. 141



ダイセンセダカモクメ 絶滅危惧種 I B類 (EN)  
梅津 一史撮影 P. 143



ハマヤガ 絶滅危惧種 I B類 (EN)  
梅津 一史撮影 P. 142



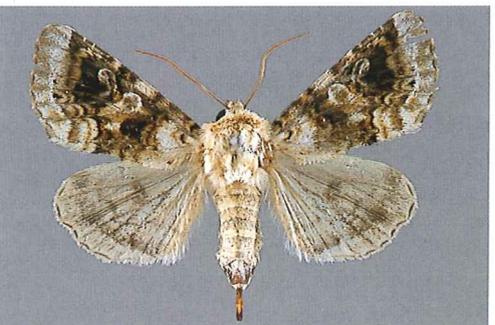
ミヤマショウブヨトウ 絶滅危惧種 I B類 (EN)  
梅津 一史撮影 P. 143



シロオビヨトウ 絶滅危惧種 I B類 (EN)  
梅津 一史撮影 P. 142



マガリスジコヤガ 絶滅危惧種 I B類 (EN)  
梅津 一史撮影 P. 144



コハイロヨトウ 絶滅危惧種 I B類 (EN)  
梅津 一史撮影 P. 142



シラユキコヤガ 絶滅危惧種 I B類 (EN)  
梅津 一史撮影 P. 144



シロスジキンウワバ 絶滅危惧種 I B 類 (EN)  
梅津 一史撮影 P. 144



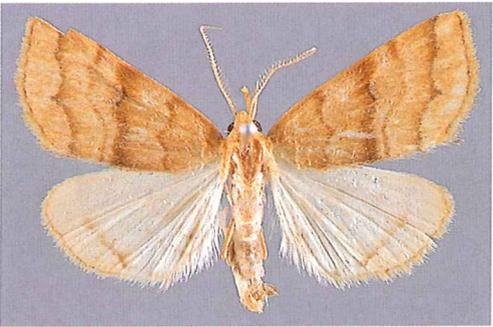
タガメ 絶滅危惧種 II 類 (VU)  
高橋 雅彌撮影 P. 146



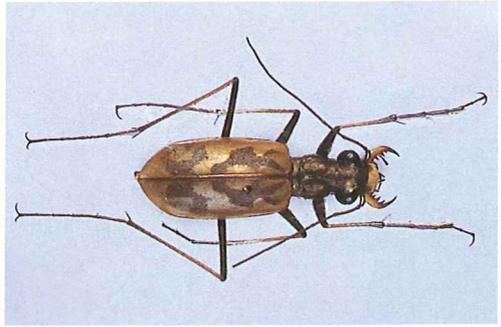
ウンモンキシタバ 絶滅危惧種 I B 類 (EN)  
梅津 一史撮影 P. 145



アイヌハンミョウ 絶滅危惧種 II 類 (VU)  
加納 彦一撮影 P. 146



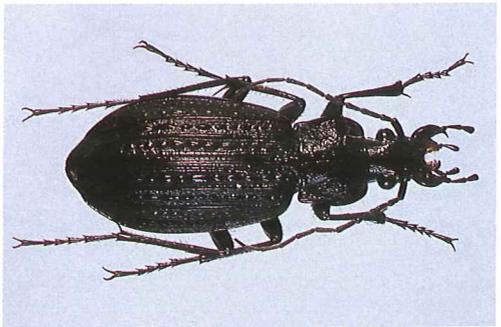
ヨスジカバイロアツバ 絶滅危惧種 I B 類 (EN)  
梅津 一史撮影 P. 145



カワラハンミョウ 絶滅危惧種 II 類 (VU)  
佐藤 福男撮影 P. 146



オオキトンボ 絶滅危惧種 II 類 (VU)  
高橋 雅彌撮影 P. 145



アカガネオサムシ 絶滅危惧種 II 類 (VU)  
佐藤 福男撮影 P. 147



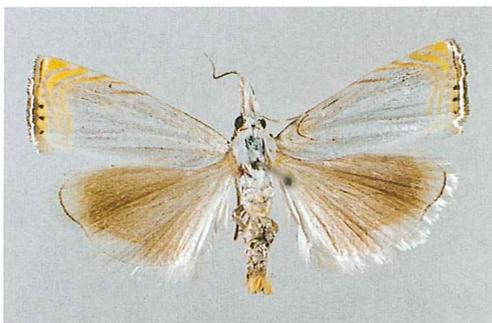
ハヤチネヌレチゴミムシ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
佐藤 福男撮影 P. 147



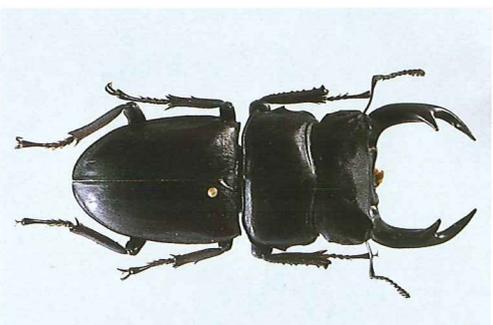
ハンエンカクツツビケラ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
青谷 晃吉撮影 P. 148



チンメルマンセスジゲンゴロウ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
佐藤 福男撮影 P. 147



モリオカツトガ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
佐々木 明夫撮影 P. 149



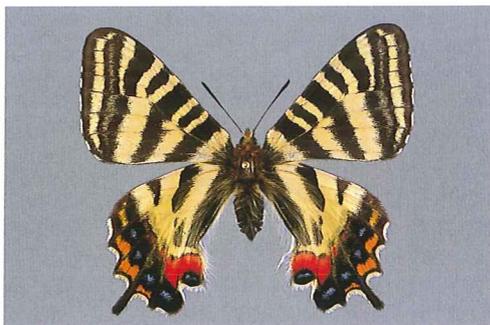
オオクワガタ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
梅津 一史撮影 P. 148



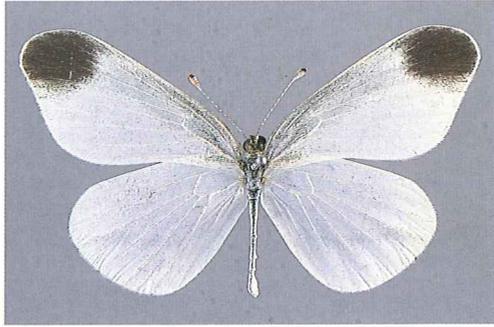
ウスマダラミズメイガ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
佐々木 明夫撮影 P. 149



ババホタルトビケラ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
青谷 晃吉撮影 P. 148



ギフチョウ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
梅津 一史撮影 P. 149



ヒメシロチョウ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
梅津 一史撮影 P. 150



ギンツバメ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
梅津 一史撮影 P. 151



キタアカシジミ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
梅津 一史撮影 P. 150



ギンボンシヤチホコ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
梅津 一史撮影 P. 151



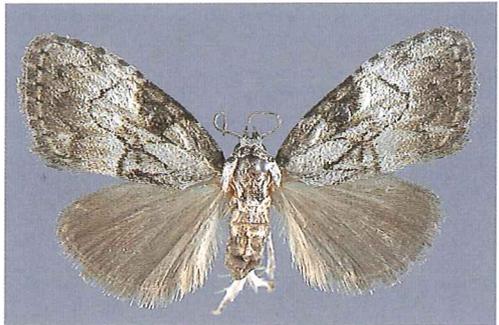
ホシミスジ北上高地亜種 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
高橋 雅彌撮影 P. 150



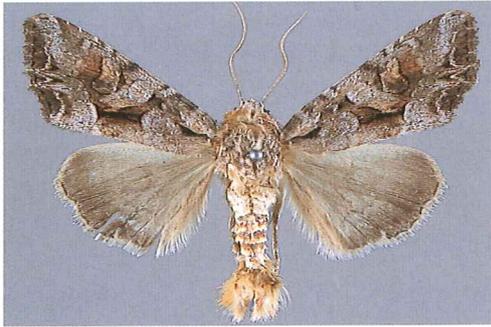
クロスジシロコブガ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
梅津 一史撮影 P. 152



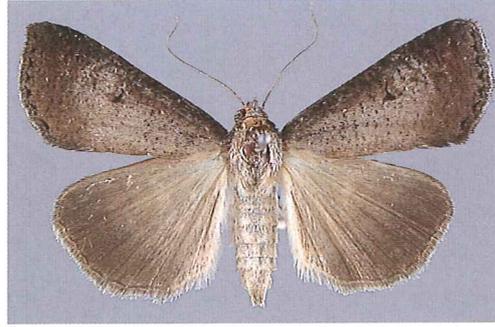
フタテンエダシャク 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
梅津 一史撮影 P. 151



ミカボコブガ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
梅津 一史撮影 P. 152



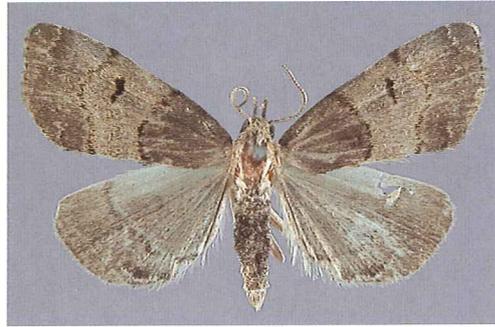
ムラサキヨトウ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
梅津 一史撮影 P. 152



スマレクビグロクチバ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
梅津 一史撮影 P. 154



アトロキリガ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
梅津 一史撮影 P. 153



ネグロアツバ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
梅津 一史撮影 P. 154



ミスジキリガ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
梅津 一史撮影 P. 153



オオセスジイトンボ 準絶滅危惧種 (NT)  
高橋 雅彌撮影 P. 154



ウスチャマエモンコヤガ 絶滅危惧種Ⅱ類 (VU)  
梅津 一史撮影 P. 153



アオハダトンボ 準絶滅危惧種 (NT)  
高橋 雅彌撮影 P. 155



シノビアミメカワゲラ 情報不足種 (DD)  
(株)自然科学調査事務所提供 P. 170

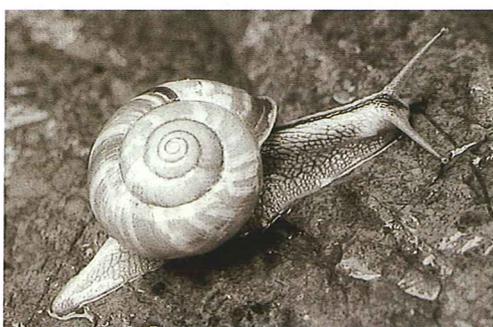


スカシベッコウ 絶滅危惧種 I B 類 (EN)  
川口 洋治撮影 P. 202

### 陸産貝類



ハコダテヤマキサゴ 絶滅危惧種 I A 類 (CR)  
川口 洋治撮影 P. 201



ヒタチマイマイ 絶滅危惧種 I B 類 (EN)  
川口 洋治撮影 P. 203



エゾギセル 絶滅危惧種 I A 類 (CR)  
川口 洋治撮影 P. 201



ニクイロシブキツボ 絶滅危惧種 II 類 (VU)  
川口 洋治撮影 P. 203



イワテビロウドマイマイ 絶滅危惧種 I A 類 (CR)  
川口 洋治撮影 P. 202



カワグチレンズガイ 絶滅危惧種 II 類 (VU)  
川口 洋治撮影 P. 204

# 目 次

口 絵

発刊にあたって

秋田県 of 自然環境 of 概要 .....	7
秋田県版レッドデータブック of 概要 .....	11
掲載種 of 解説	
哺乳類 .....	23
鳥類 .....	45
爬虫類 .....	85
両生類 .....	93
淡水魚類 .....	101
昆虫類 .....	119
陸産貝類 .....	197
秋田県 of 自然公園・自然環境保全地域等一覽 .....	209
著者、写真提供者 .....	213
索引 .....	215

# 発刊にあたって

秋田県は日本海と奥羽山脈に囲まれた約116万km<sup>2</sup>、全国第6位の県土を有しています。変化に富んだ地形と湿潤な気候のもと、豊かな自然がはぐくまれてきました。砂浜と岩礁からなる海岸地帯、古くから耕作が行われてきた平野部、白神山地のブナ林や原生的な和賀山塊に代表される山岳地帯など、県内には様々な自然環境が存在し、そこには多種多様な動植物が生息・生育してきました。

しかしながら、豊かな自然が残されてきた秋田県においても、近年の社会・経済システムや生活スタイルの変化は著しいものでした。様々な開発行為、宅地や農地の造成、森林の伐採、河川の整備などは、その地形を改変するだけでなく、多様な野生生物やその生息・生育環境にも多大な影響を及ぼしてきました。あるものは個体数を大きく減少させ、さらには絶滅に至ったものも知られています。

野生生物が減少、絶滅したということは、様々な生物が生息できる環境までもが失われてきたことを意味しています。このことはまた、我々人間がよって立つ自然環境が失われつつあることを示しているのです。このようなことを背景に近年、様々な野生生物とそれらが生息・生育できる自然環境の保全の重要性が広く認識されるようになりました。

野生生物を人為的に絶滅させないためには、まず絶滅のおそれのある種を的確に把握する必要があります。そのため秋田県では、秋田県版レッドリストの作成に取り組んできました。このたび秋田県の御協力により、「秋田県の絶滅のおそれのある野生生物2002 秋田県版レッドデータブック動物編」「同 植物編」を本協会より発行する運びとなりました。

本書は秋田県版レッドリストを基に県内の希少野生生物の現状を取りまとめたものであり、今後の希少野生生物の保護や生物多様性の保全対策などの基礎資料として活用されることを刊行の目的としています。県民のみならず、研究者、関係各機関等が広く本書を活用され、県内の自然環境保全の推進にそれぞれの立場からさらに御協力を賜りますようお願いいたします。

平成14年3月

秋田県環境と文化のむら協会会長 工藤英美

# 秋田県の 自然環境の概要

県内には、海岸地帯から高山帯までの間に、平野部、河川・湖沼地域、扇状地と湧水地帯、山麓帯から山地帯、亜高山帯等の様々な環境が存在する。そこには多種多様な生物が生息・生育し、独自の生態系を形成している。以下、主要な生態系毎に県内の自然環境の概要を述べる。

## 1. 森林生態系

森林は県内の生態系の中核をなしている重要な存在であり、県内に生息・生育する多くの動植物もまた、何らかの形で森林生態系にその存在基盤を依存している。

現在の森林面積は県内面積の70%余りを占めているが、森林面積の50%近くが針葉樹を中心とした人工林で、人工林の大半はスギ植林地である。その他の森林の多くは落葉広葉樹林であるが、その半分は伐採等様々な人為的影響を受けたコナラやミズナラなどからなる二次林となっている。ブナ林をはじめとする自然林の多くは、標高500~600m以上の山地部にまとまって残存している。

亜高山性の森林は、標高1,100m~1,200m以上の高標高地に遺存的に点在している。八幡平・駒ヶ岳一帯や鳥海山地域を除いていずれも小面積で連続性が少ないが、そのため固有性を保持しているとも言える。また、由利地方海岸部には暖地性の常緑広葉樹のタブノキ林等が小面積で残存している。

高標高地の森林は、日常生活圏から離れて位置すること、気象条件が厳しいことなどから、車道や登山道沿線等を除いて比較的自然性の高い生態系が維持されている。しかし、近年の中・高齢者登山ブームによる立ち入りや盗掘等の影響が懸念されている。

## 2. 草地生態系

県内における自然草原としては、高山ハイデや高山風衝草原、亜高山性広葉草原、雪田植生等のほか、山地帯に多く見られる雪崩地植生や高茎草本群落、岩壁植生、河川の氾濫原植生、海浜地の砂丘植生や海岸風衝草原、あるいは火山・硫気孔荒原などが代表的である。これらは砂丘植生と河川の氾濫原植生等を除いて連続性を欠いている上、面積も狭小であり、かつ遺存的に点在している。また、砂丘植生及び河川氾濫原植生等は、元来が不安定な立地に成立していると共に、人為的な影響を受けやすい状況となっている。

二次草原としては、シバ草地やススキ草地が主に里山地帯に点在している。比較的面积の大きい箇所は、寒風山一帯や一部の牧場及びスキー場等に限定されており、その他は小面積で残存しているに過ぎない。二次草原は、古くからの放牧・採草、火入れ等の人為的干渉により成立してきたが、農牧畜業の衰退や人為的干渉の減少に伴い大幅に面積を減少させ遷移による森林化が進行している。それに伴い、二次草原に依存して生息・生育する生物の減少が懸念され、二次草原の維持・管理が課題となっている。

## 3. 湿原生態系

県内には、釧路湿原や尾瀬ヶ原のような大規模な湿原は見られないが、低層湿原から高層湿原まで様々な発達段階の湿原が各所に点在している。

亜高山帯および山地帯上部に分布する中間湿原や高層湿原は、八幡平周辺、栗駒山、鳥海山等の主に自然公園内にあるため比較的自然度が高いが、場所によっては、盗掘・踏み付け等による影響も見られる。

一方、低山地帯や低湿地、河川氾濫原、砂丘後背地等に分布する湿原は、開田等、土地造成、公園造成などの人為的影響を古くから受けており、既に消失した湿原も多い。残されている湿原の多

くも、様々な開発行為や営農行為等から直接・間接の影響を受けており、その存続基盤は脆弱な状況にある。

また、八郎潟干拓地に成立したヨシ草原は、干拓事業により人工的に創り出された湿生湿原であるが、湿地としての規模は県内最大規模であり、鳥類等の生息地として重要である。

#### 4. 河川・湖沼生態系

県内には、雄物川、米代川、子吉川の三大河川のほか、馬場目川、水沢川、白雪川をはじめとした多くの独立中小河川が分布している。これら河川は水生生物の生息場所としてだけでなく、周辺の河畔林が河川環境の維持・保全や、様々な動植物の移動・分散ルート等としての役割も担っている。さらに河川上流部の渓谷林は、森林生態系との連続性の確保に大きな役割を果たしている。

県内に分布する三大湖沼である十和田湖、田沢湖、八郎湖は、おのおの大規模な生態系の改変を被っており、二次的に成立した生態系となっている。山間部に位置する湖沼においても、過去に様々な魚類の放流の影響を受けているケースが散見される。

平野部に位置する大小さまざまな河跡湖やため池群の中には、県内の生物相を特徴付ける希少な淡水魚類、水生植物や湿原植物が残存している。しかし、利水等を目的とした開発、ブラックバス等の移入種による在来種の駆逐等の問題がある。

また、平鹿・仙北地域等の扇状地に多く分布する湧水地帯には、希少なイバラトミヨ雄物型や水生植物が生息・生育する特異な生態系が形成されている。この生態系は水田地帯と密接な関係があり、当該地の広域的・一体的保全が課題となっている。

#### 5. 沿岸域生態系

県内の沿岸には暖流の対馬海流が北上しているため、緯度のわりには温暖な気候となっており、南方系の生物が由利地方、男鹿半島、岩館海岸等に線状に分布している。

県中央部で日本海に突出している男鹿半島西側一帯および北部の岩館海岸、南部の象潟海岸には自然性の高い岩礁海岸が発達し、海岸岩礁性の様々な生物群が分布している。またこれら岩礁地帯は、ハヤブサ等の猛禽類や、ウミウなどの繁殖地としても重要な位置を占めている。

岩礁海岸の間には長大な砂浜海岸が弧状に連なり、海岸砂丘植生が線状に分布しているが、道路・港湾整備やクロマツ植林による海岸防風林化等の影響を受け、本来の植生が大幅に減少している。また、砂丘後背地に見られる湿地・湖沼群も、主に江戸時代から昭和20年代にかけての開田や土地造成等の影響を受け、天王湿原などごく一部を除いて大幅に面積を減少させるとともに、自然性の低下が危惧されている。

県内の海岸線にはサンゴ礁および干潟は存在しないが、男鹿、八森、象潟の岩礁性海岸の地先には様々なタイプの藻場が分布し、特にホンダワラ類を主体とするガラモ場は、ハタハタの産卵場として不可欠な存在となっている。

また、沿岸部における特異な生態系として、塩沼湿地が小面積ながら男鹿半島の西部海岸に分布している。この塩沼湿地は、海釣り利用者等による踏みつけや漂着物による影響を部分的に受けている。

#### 6. 耕地生態系

県内の耕地面積は県面積の13%強を占め、そのうち水田が県面積の約11%を占めており森林に次ぐ面積となっている。これら耕作地の大半は、標高200m以下の低地に分布しており、標高の高い地

域の耕地の多くは戦後の開拓や近年の農地造成によるものである。このため、ヨシ群落やハンノキ林などの原植生は、谷湿原や池沼周辺部、河川氾濫原などに断片的に残存しているに過ぎない。

耕地生態系、特に水田地帯は、河川、ため池、用排水路等と、水を介して繋がった複合的な生態系をなしている。そこには、メダカ、カエル、ホタルなどの身近な生き物が数多く生息していたが、高度経済成長期を境として、社会・経済条件の大幅な変化から、耕地における生物多様性が減少してきている。このため、一部の水生植物や淡水魚、昆虫の中には、絶滅の危惧が指摘される種まで生じている。近年は農業関係の各種事業において、環境に配慮した対策が検討されているが、人為的な影響を非常に受けやすい生態系であることには変わりがない。

## 7. 都市生態系

県内の主な都市は、耕地生態系同様標高100m以下の平野部に集中している。これらは、低湿地においては水田地帯及びヨシ群落やハンノキ林から、丘陵地帯においては畑地および二次林地帯などから改変されたものと考えられる。

県内の都市地域は、概して都市公園面積率が低い。都市近郊丘陵部の二次林や海岸部のクロマツ防風林、河畔林等により森林生態系と回廊的または飛石状に連続性が確保されている地域が多い。反面、近年の都市開発は郊外の里山二次林地帯に進行しており、秋田市などでは都市中心域と森林との隔離が進行する傾向がみられる。また、都市公園や街路の植栽への郷土産樹種等の使用、河川整備時の多自然型工法等による親水性の確保と水生生物の生息・生育空間の回復が課題となっている。

- コケモモ・トウヒクラス  
域自然植生
- ブナクラス域自然林
- ブナクラス域二次林  
および二次草原
- ヤブツバキクラス域自然林
- (各クラス域共通)
- 河辺・湿原・塩沼地・  
砂丘植生
- 植林地・伐採跡地
- 水田・畑地・人工草地・  
開放水域
- 市街地・集落

秋田県現存植生図

1/750,000

出典：「自然環境管理計画 ネイチャー秋田21」  
(秋田県, 1987) 一部改変

# 秋田県版 レッドデータブックの概要

## 1. 作成の目的

レッドデータブックは、絶滅の危機にある種のリストであり、それらの種を多くの人々に広く知らせることにより種の絶滅を防止することを目的としている。

世界で最初のレッドデータブックは、1966年、国際自然保護連合（IUCN）によって発行され、その後、多くの国でレッドデータブックが作られてきた。

我が国では1989年、(財)日本自然保護協会と(財)世界自然保護基金日本委員会により「我が国における保護上重要な植物種の現状」が、1991年、環境庁（現環境省）により「日本の絶滅のおそれのある野生生物 ―脊椎動物編―」、「同 ―無脊椎動物編―」が発行された。

その後環境庁は、1994年にIUCNが採択したレッドリストカテゴリーの考え方を取り入れた新たなカテゴリーに基づき、レッドリストの見直しを行った。その結果は、1997年に両生類、爬虫類および植物、1998年に哺乳類および鳥類、1999年に汽水・淡水魚類、2000年に無脊椎動物（昆虫類、貝類、クモ類、甲殻類等）のレッドリストとして公表され、レッドデータブックとしては2000年に「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 爬虫類・両生類」、「同 植物Ⅰ（維管束植物）」および「同 植物Ⅱ（維管束植物以外）」が発行されている。

一方、都道府県においては、県版レッドデータブックの作成・公表が順次進められている。県版レッドデータブックが必要とされるのは、全国的には絶滅のおそれがないと評価されている種であっても県レベルでは絶滅に瀕している種があるなど、地域において種のおかれている状況が国レベルの状況とは必ずしも一致しないためである。したがって、県レベルで種の保全を行っていくためには、より地域に密着したレッドデータブックが必要なのである。

秋田県版レッドデータブックはこのような背景のもとに作成され、その目的は本県において絶滅のおそれのある種の現状を明らかにすることである。本書には、それ自体に法的強制力はないが、県民や事業者の皆様が本書を通じて絶滅の危機にある県内の動植物の現状を知っていただくことにより、県内の自然環境や生物多様性の保全に活用されることを期待するものである。

## 2. 掲載対象

今回対象とした分類群は、動物では哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、淡水魚類、昆虫類および陸産貝類、植物では維管束植物である。これらのうち、哺乳類では海棲哺乳類を対象から除き、鳥類では繁殖鳥および越冬鳥のみを対象とし、旅鳥、沖合に生息する海鳥等は対象としなかった。また昆虫類はトンボ目、カワゲラ目、カメムシ目のタガメ、コウチュウ目、トビケラ目、チョウ目のみを対象とした。対象外となった分類群については、環境省等他の機関によるレッドデータブック等を参照してほしい。

対象とした生物の単位は、種、地域個体群とし、維管束植物については雑種も対象に加えた。種の単位は、動物では種および亜種、植物では種、亜種および変種とした。

対象範囲は、本県全域に生息・生育するものとしたが、いわゆる迷鳥、迷蝶等や偶産と考えられるもの、帰化種・移入種等については対象としなかった。

## 3. 検討体制

本書に掲載した種は、平成10年度に設置した「秋田県版レッドリスト選定委員会」において検討し平成12年度までの3年間に公表してきた秋田県版レッドリストに、平成13年度に行った一部見直しを加えたものである。同委員会の構成は下記のとおり。

## 秋田県版レッドリスト選定委員会

### 【哺乳類】

揚妻 直樹 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター（理学博士）  
東 英生 哺乳類研究所  
向山 満 青森県立三戸高等学校

### 【鳥類】

小笠原 晁 秋田大学教育文化学部教授（理学博士）  
佐藤 磯男 男鹿市立男鹿東中学校  
高橋 一郎 秋田市立下浜中学校

### 【爬虫類、両生類】

本郷 敏夫 秋田県環境と文化のむら協会

### 【淡水魚類】

杉山 秀樹 秋田県水産振興センター

### 【昆虫類】

青谷 晃吉 秋田県教育庁義務教育課  
梅津 一史 秋田県立新屋高等学校  
佐々木明夫 秋田自然史研究会  
佐藤 福男 秋田県農業試験場  
高橋 雅彌 秋田県立秋田北高等学校  
成田 弘 環境省・希少野性動植物種保存推進員（農学博士）

### 【陸産貝類】

川口 洋治 日本貝類学会会員

### 【維管束植物】

沖田 貞敏 秋田県立西仙北高等学校  
菊地 卓弥 秋田県立鷹巣高等学校  
高田 順 秋田自然史研究会  
高橋 祥祐 秋田自然史研究会  
藤原 陸夫 長野県自然保護研究所  
松田 義徳 秋田県立雄勝高等学校

（氏名五十音順、敬称略）

#### 4. カテゴリー

秋田県版レッドデータブックカテゴリーは、環境省レッドデータブックカテゴリー（1997年環境庁公表）に準拠している。

##### 秋田県版レッドデータブックカテゴリー

絶滅種 (EX)	: 本県ですでに絶滅したと考えられる種。
野生絶滅種 (EW)	: 飼育・栽培下でのみ存続している種。
絶滅危惧種	: 絶滅の危機に瀕している種。
I A類 (CR)	: ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。
I B類 (EN)	: 絶滅危惧種 I Aほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。
II類 (VU)	: 絶滅の危険が増大している種。
準絶滅危惧種 (NT)	: 現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧種」に移行する可能性のある種。
情報不足種 (DD)	: 「絶滅危惧種」に移行する可能性はあるが、評価するだけの情報が不足している種。
地域個体群 (LP)	: 地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高い個体群。
分布上希少な雑種 (RH)	: 維管束植物独自のカテゴリー。雑種起源と考えられる希少種。
留意種 (N)	: 本県では絶滅のおそれはないが、国際的、国内的に保護を要すると評価されている種、現在講じられている保護策により絶滅の危険が回避されている種、過去に個体数・分布が著しく減少した種、他の機関で準絶滅危惧種以上の評価を受けている種。

環境省カテゴリーからの変更点は以下の4点である。

- ①カテゴリーの名称に“種”を付加。
- ②環境省では付属資料となっていた絶滅のおそれのある地域個体群をレッドデータブックカテゴリーに組み入れ、名称を「地域個体群」とした。
- ③維管束植物についてはレッドデータブック掲載種に準じて扱うべきと判断される雑種のためのカテゴリーとして「分布上希少な雑種」を設けた。
- ④本県では絶滅のおそれはないが、国際的、国内的に保護を要するとされている種などのためのカテゴリーとして「留意種」を設けた。

## 秋田県版レッドデータブックカテゴリー定義

区分および基本概念	定性的要件	定量的要件
<p>●<b>絶滅種</b> Extinct (EX) 本県ですでに絶滅したと考えられる種 (注1)</p>	<p>過去に本県に生息したことが確認されており、飼育・栽培下を含め、本県ですでに絶滅したと考えられる種</p>	
<p>●<b>野生絶滅種</b> Extinct in the Wild (EW) 飼育・栽培下でのみ存続している種</p>	<p>過去に本県に生息したことが確認されており、飼育・栽培下では存続しているが、本県において野生ですでに絶滅したと考えられる種</p> <p>【確実な情報があるもの】</p> <p>① 信頼できる調査や記録により、すでに野生で絶滅したことが確認されている。</p> <p>② 信頼できる複数の調査によっても、生息が確認できなかった。</p> <p>【情報量が少ないもの】</p> <p>③ 過去50年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない。</p>	
<p>○<b>絶滅危惧種 I 類</b> (CR+EN) 絶滅の危機に瀕している種</p> <p>現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。</p> <p>●<b>絶滅危惧種</b> T H R E A T E N E D</p>	<p>次のいずれかに該当する種</p> <p>【確実な情報があるもの】</p> <p>① 既知のすべての個体群で、危機的水準にまで減少している。</p> <p>② 既知のすべての生息地で、生息条件が著しく悪化している。</p> <p>③ 既知のすべての個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。</p> <p>④ ほとんどの分布域に交雑のおそれのある別種が侵入している。</p> <p>【情報量が少ないもの】</p> <p>⑤ それほど遠くない過去 (30年～50年) の生息記録以後確認情報がなく、その後信頼すべき調査が行われていないため、絶滅したかどうかの判断が困難なもの。</p>	<p><b>絶滅危惧種 I A 類</b> Critically Endangered (CR) ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。</p> <p>A. 次のいずれかの形で個体群の減少がみられる場合。 1. 最近10年間もしくは3世代のどちらか長い期間 (注2) を通じて、80%以上の減少があったと推定される。 2. 今後10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、80%以上の減少があると予測される。</p> <p>B. 出現範囲が100km<sup>2</sup>未満もしくは生息地面積が10km<sup>2</sup>未満であると推定されるほか、次のうち2つ以上の兆候が見られる場合。 1. 生息地が過度に分断されているか、ただ1カ所の地点に限定されている。 2. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に継続的な減少が予測される。 3. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に極度の減少が見られる。</p> <p>C. 個体群の成熟個体数が250未満であると推定され、さらに次のいずれかの条件が加わる場合。 1. 3年間もしくは1世代のどちらか長い期間に25%以上の継続的な減少が推定される。 2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測され、かつ個体群が構造的に過度に分断を受けるか全ての個体が1つの亜個体群に含まれる状況にある。</p> <p>D. 成熟個体数が50未満であると推定される個体群である場合。</p> <p>E. 数量解析により、10年間、もしくは3世代のどちらか長い期間における絶滅の可能性が50%以上と予測される場合。</p>
	<p><b>絶滅危惧種 I B 類</b> Endangered (EN) 絶滅危惧種 I A 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの</p>	<p>A. 次のいずれかの形で個体群の減少が見られる場合。 1. 最近10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があったと推定される。 2. 今後10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、50%以上の減少があると予測される。</p> <p>B. 出現範囲が500km<sup>2</sup>未満もしくは生息地面積が50km<sup>2</sup>未満であると推定されるほか、次のうち2つ以上の兆候が見られる場合。 1. 生息地が過度に分断されているか、5以下の地点に限定されている。 2. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に継続的な減少が予測される。 3. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に極度の減少が見られる。</p> <p>C. 個体群の成熟個体数が2,500未満であると推定され、さらに次のいずれかの条件が加わる場合。 1. 5年間もしくは2世代のどちらか長い期間に20%以上の継続的な減少が推定される。 2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測され、かつ個体群が構造的に過度に分断を受けるか全ての個体が1つの亜個体群に含まれる状況にある。</p> <p>D. 成熟個体数が250未満であると推定される個体群である場合。</p> <p>E. 数量解析により、20年間、もしくは5世代のどちらか長い期間における絶滅の可能性が20%以上と予測される場合。</p>

区分および基本概念	定性的要件	定量的要件
<p>○絶滅危惧種Ⅱ類 Vulnerable (VU) 絶滅の危険が増大している種</p> <p>現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧種Ⅰ類」のランクに移行することが確実と考えられるもの。</p> <p>●絶滅危惧種 T H R E A T E N E D</p>	<p>次のいずれかに該当する種</p> <p>【確実な情報があるもの】</p> <p>① 大部分の個体群で個体数が大幅に減少している。 ② 大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつある。 ③ 大部分の個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。 ④ 分布域の相当部分に交雑可能な別種が侵入している。</p>	<p>A. 次のいずれかの形で個体群の減少が見られる場合。</p> <p>1. 最近10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、20%以上の減少があったと推定される。 2. 今後10年間もしくは3世代のどちらか長い期間を通じて、20%以上の減少があると予測される。</p> <p>B. 出現範囲が2,500km<sup>2</sup>未満もしくは生息地面積が250km<sup>2</sup>未満であると推定され、また次のうち2つ以上の兆候が見られる場合。</p> <p>1. 生息地が過度に分断されているか、10以下の地点に限定されている。 2. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等について、継続的な減少が予測される。 3. 出現範囲、生息地面積、成熟個体数等に極度の減少が見られる。</p> <p>C. 個体群の成熟個体数が10,000未満であると推定され、さらに次のいずれかの条件が加わる場合。</p> <p>1. 10年間もしくは3世代のどちらか長い期間内に10%以上の継続的な減少が推定される。 2. 成熟個体数の継続的な減少が観察、もしくは推定・予測され、かつ個体群が構造的に過度に分断を受けるか全ての個体が1つの亜個体群に含まれる状況にある。</p> <p>D. 個体群が極めて小さく、成熟個体数が1,000未満と推定されるか、生息地面積あるいは分布地点が極めて限定されている場合。</p> <p>E. 数量解析により、100年間における絶滅の可能性が10%以上と予測される場合。</p>
<p>●準絶滅危惧種 Near Threatened (NT) 存続基盤が脆弱な種</p> <p>現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの。</p>	<p>次に該当する種</p> <p>生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。具体的には、分布域の一部において、次のいずれかの傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。</p> <p>a) 個体数が減少している。 b) 生息条件が悪化している。 c) 過度の捕獲・採取圧による圧迫を受けている。 d) 交雑可能な別種が侵入している。</p>	
<p>●情報不足種 Data Deficient (DD) 評価するだけの情報が不足している種</p>	<p>環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧の категорияに移行し得る属性（具体的には、次のいずれかの要素）を有しているが、生息状況をはじめとして、ランクを判定するに足る情報が得られていない種</p> <p>a) どの生息地においても生息密度が低く希少である。 b) 生息地が局限されている。 c) 生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。 d) 生活史の一部または全部で特殊な環境条件を必要としている</p>	
<p>●地域個体群 Threatened Local Population (LP)</p> <p>地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの。</p>	<p>次のいずれかに該当する地域個体群</p> <p>① 生息状況、学術的価値等の観点から、レッドデータブック掲載種に準じて扱うべきと判断される種の地域個体群で、生息域が孤立しており、地域レベルで見た場合絶滅に瀕しているかその危険が増大していると判断されるもの。 ② 地方型としての特徴を有し、生物地理学的観点から見て重要と判断される地域個体群で、絶滅に瀕しているか、その危険が増大していると判断されるもの。</p>	
<p>●分布上希少な雑種 Rare Hybrid (RH)</p>	<p>生育地が局限され、レッドデータブック掲載種に準じて扱うべきと判断される雑種で、絶滅に瀕しているか、その危険が増大していると判断されるもの。</p>	
<p>●留意種 Noteworthy (N)</p>	<p>① 本県では絶滅の恐れはないが、国際的、国内的に保護を要するとされている種。 ② 現在は保護策が講じられていて、差し迫った危機はないが、それが中止されれば絶滅危惧種Ⅱ類以上の危険度になる種。 ③ 過去に個体数・分布が著しく減少した種など。 ④ 他の機関で準絶滅危惧種以上の評価を受けている種。</p>	

(注1) 種:動物では種および亜種、植物では種、亜種および変種を示す。

(注2) 最近10年間もしくは3世代:1世代が短く3世代に要する期間が10年未満のものは年数を、1世代が長く3世代に要する期間が10年を越えるものは世代数を採用する。

## 5. 掲載種

### (1) 掲載種数

本書に掲載した種は計1,235種である。分類群毎の種数は下表に示す。

絶滅のおそれがあると判断された種（絶滅危惧種ⅠA類、絶滅危惧種ⅠB類および絶滅危惧種Ⅱ類）は720種である。また23種が絶滅種と判断された。

カテゴリー 分類群	絶滅種	野生絶滅種	絶滅危惧種				準絶滅危惧種	情報不足種	地域個体群	分布上希少な雑種	留意種	合計
			絶滅危惧種ⅠA類	絶滅危惧種ⅠB類	絶滅危惧種Ⅱ類	絶滅危惧種計						
哺乳類	1	0	0	8	12	20	2	2	0	—	5	30
鳥類	0	0	6	6	20	32	50	19	0	—	0	101
爬虫類	0	0	0	0	0	0	0	2	0	—	0	2
両生類	0	0	0	0	0	0	1	0	0	—	0	1
淡水魚類	1	0	5	4	7	16	8	1	2	—	0	28
昆虫類	3	0	30	29	27	86	46	45	1	—	8	189
陸産貝類	0	0	4	3	3	10	4	3	0	—	1	18
維管束植物	18	0	168	241	147	556	157	57	0	71	7	866
合計	23	0	213	291	216	720	268	129	3	71	21	1,235

(2) 動物編掲載種一覧

【哺乳類】

絶滅種 (EX)

ホンドジカ

絶滅危惧種 I B 類 (EN)

フジホオヒゲコウモリ

カグヤコウモリ

クロホオヒゲコウモリ

ヤマコウモリ

ヒナコウモリ

ニホンウサギコウモリ

ホンダザル

ニホンイイズナ

絶滅危惧種 II 類 (VU)

ホンシュウトガリネズミ

ホンシュウジネズミ

ニホンカワネズミ

ヒメヒミズ

ニホンコキガシラコウモリ

ニホンユピナガコウモリ

ニホンコテングコウモリ

ニホンテングコウモリ

ホンドモモンガ

ヤマネ

トウホクヤチネズミ

ホンドオコジョ

準絶滅危惧種 (NT)

モモジロコウモリ

ニッコウムササビ

情報不足種 (DD)

ミズラモグラ

コヤマコウモリ

留意種 (N)

ニホンキクガシラコウモリ

ニホンリス

ニホンツキノワグマ

ホンダギツネ

ニホンカモシカ

【鳥類】

絶滅危惧種 I A 類 (CR)

シジュウカラガン

ハクガン

イヌワシ

クマゲラ

オオセッカ

セッカ

絶滅危惧種 I B 類 (EN)

オオヨシゴイ

クロサギ

コクガン

クマタカ

チュウヒ

アリスイ

絶滅危惧種 II 類 (VU)

トモエガモ

オカヨシガモ

ビロードキンクロ

ハチクマ

オジロワシ

オオワシ

ツミ

ハイタカ

ハヤブサ

チゴハヤブサ

コチョウゲンボウ

ミツユビカモメ

コアジサシ

サンショウクイ

チゴモズ

アカモズ

ヒレンジャク

キバシリ

ユキホオジロ

イスカ

準絶滅危惧種 (NT)

ハジロカイツブリ

ミミカイツブリ

カンムリカイツブリ

ヒメウ

ヨシゴイ

ミゾゴイ

ササゴイ

マガン

オオヒシクイ

ヒシクイ

ハシビロガモ

オオホシハジロ

クロガモ

ミサゴ

オオタカ

サシバ

チョウゲンボウ

ヒクイナ

タマシギ

イカルチドリ

シロチドリ

ヤマシギ

オオジシギ

ワシカモメ

シロカモメ

トラフズク

コノハズク

オオコノハズク

アオバズク

ヤマセミ

アカショウビン

ブッポウソウ

コシアカツバメ

ビンズイ

キレンジャク

イワヒバリ

カヤクグリ

コマドリ

コルリ

ルリビタキ

トラツグミ

マミジロ

コサメビタキ

サンコウチョウ

コジュリン

ノジコ

オオジュリン

ベニヒワ

ハギマシコ

イカル

情報不足種 (DD)

アビ

オオハム

シロエリオオハム

アカエリカイツブリ

カワウ

サンカノゴイ

アマサギ

ダイサギ

チュウサギ

コサギ

シノリガモ

ケアシノスリ

ハイイロチュウヒ

クイナ

ヒメクイナ

アオシギ

アオバト

オオマシコ

オナガ

【爬虫類】

情報不足種 (DD)

タカチホヘビ

シロマダラ

【両生類】

準絶滅危惧種 (NT)

ニホンアカガエル

【淡水魚類】

絶滅種 (EX)

クニマス

絶滅危惧種 I A 類 (CR)

シナイモツゴ

ゼニタナゴ

ホトケドジョウ

アカザ  
イバラトミヨ雄物型

**絶滅危惧種 I B 類 (EN)**

チチブ  
クロヨシノボリ  
ハナカジカ  
カジカ中卵型

**絶滅危惧種 II 類 (VU)**

マルタ  
エゾウグイ  
ギバチ  
イトヨ降海型  
トミヨ・淡水型  
カンキョウカジカ  
アユカケ (カマキリ)

**準絶滅危惧種 (NT)**

スナヤツメ  
ヤリタナゴ  
アカヒレタピラ  
メダカ  
ビリンゴ  
スミウキゴリ  
シロウオ  
ミミズハゼ

**情報不足種 (DD)**

ウケクチウグイ

**地域個体群 (LP)**

シマヨシノボリ陸封型  
ルリヨシノボリ陸封型

**【昆虫類】**

**絶滅種 (EX)**

チャマダラセセリ  
オオウラギンヒョウモン  
カバシタムクゲエダシヤク

**絶滅危惧種 I A 類 (CR)**

ホンサナエ  
アオサナエ

ヒメサナエ  
オジロサナエ  
コシボソヤンマ  
カトリヤンマ  
ヤブヤンマ  
マークオサムシ  
クマガイクロアオゴミムシ  
アオバネソクビゴミムシ  
テラニセスジゲンゴロウ  
ミチノクケマダラカミキリ  
クロモンエグリトビケラ  
チビウスキオオメイガ  
ギンスジマダラメイガ  
クロシジミ  
フタスジチョウ  
キマダラモドキ  
キタルリモンエダシヤク  
クワヤマエグリシャチホコ  
マエアカヒトリ  
チョウカイシロコブガ  
アオモンギンセダカモクメ  
シロミミチビヨトウ  
クシロモクメヨトウ  
キタヨトウ  
テンモントガリヨトウ  
セプトモクメヨトウ  
ナナメヒメヨトウ  
ホクトギンウワバ

**絶滅危惧種 I B 類 (EN)**

オツネントンボ  
マダラナニワトンボ  
カワラゴミムシ  
ホソハンミョウ  
クロナガオサムシ  
キアシネクイハムシ  
ソトシロスジミズメイガ  
ウスキミズメイガ  
フタクロテンマダラメイガ  
ヒメナミガタアオシヤク  
シタベニヒメシヤク  
ヒメシタコバネナミシヤク  
シロマダラカバナミシヤク  
キブサヒメエダシヤク

フタオレウスグロエダシヤク  
ウスジロドクガ  
ニセタバコガ  
クロヤガ  
ハマヤガ  
シロオビヨトウ  
コハイイロヨトウ  
ダイセンセダカモクメ  
ミヤマショウブヨトウ  
ギンモンアカヨトウ  
マガリスジコヤガ  
シラユキコヤガ  
シロスジキンウワバ  
ウンモンキシタバ  
ヨスジカパイロアツバ

**絶滅危惧種 II 類 (VU)**

オオキトンボ  
タガメ  
アイヌハンミョウ  
カワラハンミョウ  
アカガネオサムシ  
ハヤチネヌレチゴミムシ  
チンメルマンセスジゲンゴロウ  
オオクワガタ  
ババホタルトビケラ  
ハンエンカクツツトビケラ  
モリオカツトガ  
ウスマダラミズメイガ  
ギフチョウ  
ヒメシロチョウ  
キタアカシジミ  
ホシミスジ北上高地亜種  
フタテンエダシヤク  
ギンツバメ  
ギンボシシャチホコ  
クロスジシロコブガ  
ミカボコブガ  
ムラサキヨトウ  
アトジロキリガ  
ミスジキリガ  
ウスチャマエモンコヤガ  
スミレクビグロクチバ  
ネグロアツバ

**準絶滅危惧種 (NT)**

オオセスジイトトンボ  
モートンイトトンボ  
ホソミオツネントンボ  
アオハダトンボ  
ムカシトンボ  
ミヤマサナエ  
ヤマサナエ  
マダラヤンマ  
オオトラフトンボ  
エゾトンボ  
ハッチョウトンボ  
コノシメトンボ  
ヒメアカネ  
ホソヒメクロオサムシ  
フトクチヒゲヒラタゴミムシ  
トウホクナガケシゲンゴロウ  
カノシマチビゲンゴロウ  
ニセルイスツブゲンゴロウ  
マルコガタノゲンゴロウ  
ホンシュウオオオイチモン  
ンジシマゲンゴロウ  
エンマハバビロガムシ  
オオチャイロハナムグリ  
クロツヤシモフリコメツキ  
イガブチヒゲハナカミキリ  
コボトケヒゲナガコバネカミキリ  
ヨコヤマヒゲナガカミキリ  
オオヨモギハムシ  
ベニカメノコハムシ  
クドウツトガ  
ヘリグロチャバネセセリ  
ハヤシミドリシジミ  
ヒョウモンチョウ  
ベニヒカゲ  
ミチノクヒメシヤク  
トビギンボシシャチホコ  
スゲドクガ  
ウスジロケンモン  
クモマウスグロヤガ  
シロテンキヨトウ  
ウスキトガリキリガ  
クロピロードヨトウ  
ヨコスジヨトウ

オオチャバネヨトウ  
キスジウスキヨトウ  
ガマヨトウ  
ヌマベウスキヨトウ

**情報不足種 (DD)**

シノビアミメカワゲラ  
アオカタピロオサムシ  
シラカミナガチビゴミムシ  
ダイコクコガネ  
カラフトマルトゲムシ  
トウホクミヤマヒサゴメツキ  
クロキカワムシ  
コウヤホソハナカミキリ  
ムモンベニカミキリ  
サメハダチョッキリ  
ツマグロトビケラ  
ルリハダホソクロバ  
ヤホシホソマダラ  
ヒカゲチョウ  
マンレイカギバ  
クラマトガリバ  
イチゴナミシャク  
フタモンコナミシャク  
ヤハズナミシャク

キバネトビスジエダシャク  
スモモエダシャク  
ヨスジキエダシャク  
ハガタフタオ  
イブキスズメ  
ゲンカイハガタシャチホコ  
ジョウザンケンモン  
オオカブラヤガ  
マエグロヤガ  
ナカグロヤガ  
タイリクウスイロヨトウ  
クロチャマダラキリガ  
チャイロカドモンヨトウ  
カバマダラヨトウ  
クマソオオヨトウ  
ヒメシロテンアオヨトウ  
ナンキンキノカワガ  
ベニエグリコヤガ  
ヒメクルマコヤガ  
モトグロコヤガ  
コシロシタバ  
プライヤキリバ  
ナミグルマアツバ  
サザナミアツバ  
マガリウスツマアツバ

アカマエアツバ

**地域個体群 (LP)**

ヤマトアザミテントウ玉川個体群

**留意種 (N)**

コバネアオイトトンボ  
エゾゲンゴロウモドキ(キタ  
ゲンゴロウモドキ)  
ギンイチモンジセセリ  
スジグロチャバネセセリ  
ヒメギフチョウ  
オオゴマシジミ  
ヒメシジミ  
オオムラサキ

**【陸産貝類】**

**絶滅危惧種 I A 類 (CR)**

ハコダテヤマキサゴ  
ヤマメタニシ  
エゾコギセル  
イワテヒロウドマイマイ

**絶滅危惧種 I B 類 (EN)**

スカシベッコウ

ヒメコハクモドキ  
ヒタチマイマイ

**絶滅危惧種 II 類 (VU)**

ニクイロシブキツボ  
スジキビ  
カワグチレンズガイ

**準絶滅危惧種 (NT)**

ミヨシギセル  
ササミケマイマイ  
オオタキマイマイ  
ミチノクマイマイ

**情報不足種 (DD)**

ナミコギセル  
ヤマコウラナメクジ  
コシタカオオベソマイマイ

**留意種 (N)**

クイロキセルガイモドキ

## 6. 解説項目

- (1) 和名  
和名を掲載した。
- (2) 目名・科名  
目名と科名を掲載した。
- (3) 学名等  
学名、命名者と命名年を記載した。
- (4) 秋田県版ランク  
秋田県版レッドデータブックでのランクを記載した。
- (5) 環境省ランク等  
環境省（旧環境庁）レッドデータブック、レッドリストでのランクを掲載した。また、哺乳類についてはIUCN（国際自然保護連合）および日本哺乳類学会によるランクも掲載した。

### IUCNカテゴリー

Extinct	EX（絶滅）
Extinct in the Wild	EW（野生絶滅）
Threatened	（絶滅危惧）
Critically Endangered	CR（危機的絶滅寸前）
Endangered	EN（絶滅寸前）
Vulnerable	VU（危急）
Lower Risk	（低リスク）
Conservation Dependant	LR（cd）（保全依存）
Near Threatened	LR（nt）（準絶滅危惧）
Least Concern	（軽度懸念）
Data Deficient	DD（情報不足）
Not Evaluated	（未評価）

（本書では英文字の略号をつけたもののみを掲載した。）

### 日本哺乳類学会カテゴリー

絶滅
絶滅危惧
危急
希少
普通
不能

（本書では絶滅、絶滅危惧、危急、希少のみを掲載した。）

- (6) 国内外の分布  
国内外の分布を記載した。

- (7) 県内の分布  
県内の分布を記載した。本項目の記載内容には既に絶滅している分布も含まれている。
- (8) 本種の概要  
形態的特徴、生態等を記載した。
- (9) 本種の現状  
主に県内での生息状況等を記載した。
- (10) 生存に対する脅威  
減少・絶滅の要因として推定されるものを記載した。
- (11) 特記事項  
その他特記すべき事項を記載した。
- (12) 現在講じられている保護対策  
天然記念物の指定、生息地の国立・国定公園、県立自然公園および自然環境保全地域の指定の有無、その他の保護対策を記載した。

# 哺乳類 概説

本県の哺乳類の絶滅危険度評価にあたっては、現地調査を行わず、文献調査のみにより、数ヶ月間という短期間で行うことが求められた。しかも、県内には哺乳類の研究が乏しく、利用できる情報も限られていた。その限られた情報をもとに、可能な限りの検討を加え、各動物種の絶滅危険度の評価を試みた。このため、今後情報が増えれば、検討対象となる生息種数や種の絶滅危険度は大きく変わる可能性がある。事実、本レッドデータブックに掲載されているヒナコウモリは、レッドリスト策定作業を始めた時点では秋田県での生息が知られていなかった。ところが、策定作業中に秋田市でこのコウモリのオス1頭が発見された。オスがただ1頭だけ確認されただけで秋田県の動物にすべきでないという意見もあったが、生息している可能性があるので急ぎレッドリストに加えることになった。そして作業終了後に大曲市に繁殖コロニーが確認され、ヒナコウモリが県内に生息していることが確実となった。この例からも解るように、本県のように情報が乏しい場合には、情報が少しでも増えると、種の絶滅の危険度に対する我々の認識も変化してゆくのである。したがって、本書の利用にあたっては、種の絶滅の危険度には不確定要素が多いということ念頭におく必要がある。

これまで諸団体が様々なレッドリストを作成してきたが、絶滅危険度は研究者が主観的に判定することが多く、問題とされてきた。そこで、本県の哺乳類の絶滅危険度はIUCN（国際自然保護連合）が推奨する数値データを基にした判定方法にできるだけ準拠するように心がけた。これに従えば、同じ生息情報（生息面積や生息地数など）から評価される絶滅危険度は研究者によって違いがなくなり、より客観的な評価を下すことができる。ただし、こうした評価をするのにあまりにも情報が不足している種も少なくなかった。ある程度、情報が集まった種については統計的手法を行い分析したが、その場合においても情報量が少ないために必ずしも妥当な手法を用いることができなかった。この問題は生息情報を増やすことで十分に解決できる。できるだけ早く調査を行い、情報を増やして、それに基づいて絶滅危険度を再評価すべきである。

今回のレッドリスト策定は、秋田県における哺乳類相を把握する作業から始めた。その結果、過去約100年間に県内には50種の陸上哺乳類が生息していた可能性があることが解った。しかし、この中でニホンオオカミやニホンカワウソなど3種については過去に県内に生息していた可能性は高いが、確実に生息していた証拠がないとして、本県に生息する哺乳類とはしなかった。また、ホンドリジカは本県では1940年代に絶滅したと考えられた。したがって、現存する本県の陸生哺乳類は46種となった。その内訳は在来種としてコウモリ類が14種、ネズミ類8種、食肉類（ネコ目）8種、モグラ類7種、ウサギ類1種、有蹄類1種、霊長類1種である。これに外国からの移入種6種（ネズミ類5種、食肉類1種）が加わる。コウモリ類は普段あまり見かけないが、実に本県の哺乳類相の1/4を占めており、県内の種の多様性に大きく貢献していることが示された。また、哺乳類全体の1割以上が移入種によって占められていることにも注目する必要がある。全般的には、日本で普通に生息している哺乳類は本県に概ね生息しているといえる。しかし、現存する在来種の数（40種）は隣県の青森県・岩手県・宮城県と比べると少ないようである。北海道と南西諸島を除く地域に生息する日本の在来哺乳類は86種程と言われているが、本県ではその半分に満たない種数になる。この理由として3つの可能性が考えられる。一つ目は元来生息している哺乳類が少ない可能性、二つ目は他県と同じ程度の哺乳類が分布していたが、発見される以前に絶滅した可能性、三つ目は調査が進んでおらず、まだ発見されていない種が残されている可能性である。現時点では、そのどれなのかは判断できない。しかし、恐らくは3番目の可能性が高いのではと思われる。先に紹介したヒナコウモリの例のように、今後調査を重ねれば県内で初記載される哺乳類が増加することは十分にあり得る。

絶滅したホンドリジカを含めた41種の在来種について絶滅危険度を検討した。その結果、絶滅種が

1種、絶滅危惧種ⅠB類が8種、絶滅危惧種Ⅱ類が11種、準絶滅危惧種が3種、情報不足種が2種（絶滅危惧種ⅠA類相当が1種、絶滅危惧種ⅠB類相当が1種）、留意種が5種となった。つまり現生種の7割以上が多かれ少なかれ絶滅の危険性をもっていることになる。特にコウモリ類については確認されている14種中13種が絶滅の危険にあると考えられた。絶滅が懸念された29種のうち何種類かについては今後の調査によっては絶滅危険度が下がる可能性がある。しかし、それでも秋田の哺乳類の大半の生息状況が厳しいものであるという結論に大きな変化は生じないと考えられ、この事実を重く受け止める必要がある。また、今回は絶滅の危険性がないとされた種でも、その生息状況に十分注意を払う必要がある。移入種の動向にも注意が必要である。

なお、今回はアザラシ類（4種）とクジラ類（10数種）の海棲哺乳類については評価対象にしなかった。しかし、本県沿岸を生息域としている可能性のあるこれら海棲哺乳類もIUCNや環境省・水産庁の絶滅危険度評価によれば、そのほとんどの種の絶滅が危惧されている。海の生態系も陸の生態系とともに我々に大きく関わっており、できるだけ早く海棲哺乳類の生息状況調査を行い、県版レッドリストの策定を行うべきである。

哺乳類の掲載種の説明では「本種の概要」については県内での知見が乏しいので、主として他地域での研究成果を基に解説している。「本種の状況」と「生存に対する脅威」については県内での生息状況や農林産物被害、保護上の問題点などを記載した。「特記事項」にはその種の分類学的な位置付けや調査研究の緊急性などを示している。また、IUCNの2000年版の絶滅危険度、日本哺乳類学会が1997年に評価した絶滅危険度も記載した。それぞれその種が地球上から絶滅する危険度および日本から絶滅する危険度を表している。当然、国際的および国内の絶滅危険度が高いほど、県内での絶滅危険度も高くなる傾向にある。

本県には優れた自然環境が多く残されているといわれている。しかし、一見、人の目には豊かな自然に映っても、哺乳類たちにとって必ずしも棲みやすいとは限らないことをレッドリスト策定作業を通じて改めて認識した。策定作業を行っていて、もう一つ感じたことは、本県における哺乳類の調査研究が非常に不足しているということである。このことは野生生物に対する県民の関心が低いこと、そして、野生生物の現状が適切に把握できていないことを表している。このままでは、生きていたことさえ知られぬままに、県内から消失してしまう種が出てこないとも限らない。野生生物の研究をより充実させる必要がある。大規模開発を行う場合には環境アセスメント（環境影響評価）を実施することが義務づけられるようになってきた。今回の策定作業ではそのような報告書も参考にしたが、調査対象種や調査方法が明記されていなかったり、不統一だったりして、情報の取り扱いに苦慮した。得られる情報は広く有効利用できるように、調査計画に対してきめの細かな配慮が求められる。また、中小規模の開発を行う際にも環境アセスメントを義務づけていく必要がある。今回の絶滅危険度の評価はできるだけ各哺乳類の生息地面積、確認生息地数、生息個体数などの生息情報を用いるようにした。しかし、絶滅危険度の評価は本来、それぞれの種の生態や個体群動態・遺伝的特性・生息環境の変動性などを基にした、「存続可能性分析」を行って決定されるのが望ましい。「存続可能性分析」による絶滅危険度判定ができるように、動物の生息情報をより整備・充実することが、本県での当面の目標となるであろう。

本県の哺乳類の生息状況は非常に厳しいことが示されたが、その原因は地球規模で進行している種の絶滅の主要原因と同じ生息環境の攪乱にあると考えられる。山林の開発や人工林化、河川改修などは動物から生息地を奪う。ただし、生息地が攪乱されても、そこに生息し続ける動物も少なくない。しかし、そのような動物であっても、生息地攪乱の影響は数十年も後になって強く現れることも解ってきている。現在、いくつかの動物が農林産物に対して被害を与えているが、その根本原因は数十年前に行われた森林開発などの生息地の攪乱である可能性が高いと考えられる。したがっ

て、農作物被害の対策と野生動物の保全を両立するためには、生息地の改変を控えると同時に、攪乱された生息地の回復を行う必要がある。また、本県の森林は現在でも里山などの開発によって縮小・分断化が進行している。コンクリートの建物やアスファルト道路など社会基盤を将来世代に残すことはとても大切である。しかし、多様な動物相やそれを育む豊かな自然を未来に引き継いでいくことも我々の義務である。動物が豊かに棲める自然は、人間も豊かに、そして安全に暮らせる環境の基礎になる。本書を見ながら、我々がこれから何をすべきか改めて考えて欲しい。

(揚妻直樹)

ウシ目シカ科

絶滅種

## ホンドジカ

IUCN:DD (情報不足) 環境省:該当なし

*Cervus nippon nippon* Temminck,1838

◆**国内外の分布** ニホンジカは日本・中国・朝鮮などに十数亜種が分布する。その一亜種であるホンドジカは本州に分布するが、東日本では分布が限られており、特に日本海側ではほとんど分布しない。

◆**県内の分布** 絶滅

◆**本種の概要** 体重は成熟オスが60kg程度、成熟メスが40kg程度だが地域の変異が大きい。オスは角をもち、最大4本に枝分かれますが、メスには角がない。秋に交尾し、春に1仔出産する。メスを中心とした母系社会を形成する。

◆**本種の現状** 江戸時代までは県内各地に生息していたが、その後、狩猟圧などにより各地で絶滅したと考えられている。男鹿半島には昭和初期まで生息していたが、1943年に最後の1頭が捕獲されたとある。最近50年間には信頼できる生息情報がない。

◆**特記事項** 2001年に西仙北町で本種が交通事故にあっている。ただし、この個体が人為的に持ち込まれたものか、自然に分布したものは調査が必要である。

(揚妻直樹)

コウモリ目ヒナコウモリ科

絶滅危惧種 I B類

## フジホオヒゲコウモリ

日本哺乳類学会:希少 環境省:絶滅危惧II類

*Myotis fujimensis* Imazumi,1954

◆**国内外の分布** 基産地の富士山から本州の東北地方にかけて分布している。

◆**県内の分布** 真木渓谷の調査で生息が確認されている。森林性コウモリの調査が進めば他の地域からも確認されると思われる。

◆**本種の概要** 前腕長34mm前後、体重6g前後の小型種である。黒褐色の長毛が密生していて黒っぽく見えるが、明るい茶色の金属光沢をしていることもあり色彩変異が大きい。

◆**本種の現状** 秋田県における知見は少ないが、全国的には森林性コウモリの中では比較的広範囲に生息が確認されている。したがって、調査が進めば県内の森林内に広範囲に生息している可能性がある。現時点では生息確認地点が1ヶ所であること、全国的にも希少種とされていることから絶滅危惧種 I B類と判断される。

◆**生存に対する脅威** 森林を生息地としている典型的な森林性コウモリであることから、森林面積の減少が直接的脅威となる。森林の中でも年間を通して恒常的に餌となる昆虫を供給できる広葉樹林の保全が重要で、現在生息が確認されている森林の保全が大切である。また、小型種で移動能力が低いと考えられることから森林面積減少や生息地の分断は長期的に見ると個体群維持に悪影響が予想される。緑の回廊などで隣接した生息地間で遺伝子交流が可能になるような措置も重要である。

◆**特記事項** 近縁なエゾホオヒゲコウモリ、シナノホオヒゲコウモリ、オゼホオヒゲコウモリと本種をまとめてヒメホオヒゲコウモリとする考え方もある。

◆**現在講じられている保護対策** 良好な森林をすみかとしていることから、自然公園などでの森林保全が保護に役立っている可能性がある。

(向山 満)

コウモリ目ヒナコウモリ科

絶滅危惧種 I B類

## カグヤコウモリ

IUCN:LR (nt) (準絶滅危惧) 日本哺乳類学会:希少 環境省:絶滅危惧II類

*Myotis frater kaguyae* Imazumi,1956

◆**国内外の分布** 本亜種は日本固有種で本州中部以北と北海道に分布する。

◆**県内の分布** 白神山と真木渓谷の調査で確認されている。これまでの県内分布に関する情報が少ないが、今後森林棲コウモリの調査が進めばさらに広い地域から生息が確認されると思われる。

◆**本種の概要** 前腕長37mm前後、体重8g前後の小型種。黒褐色の体毛で被われているが、金属光沢が目立たない。フジホオヒゲコウモリによく似ているが、やや大型なことで、下腿長が長い。

◆**本種の現状** 秋田県における知見は少ないが、全国的には森林性コウモリの中で比較的広範囲に生息が確認されている。したがって、県内他の地点でも良好な森林が存在している場所であれば生息の可能性はある。生息確認地点が2ヶ所であること、全国的にも希少種とされていることから絶滅危惧種 I B類と判断される。

◆**生存に対する脅威** 典型的な森林性コウモリであることから、森林面積の減少は直接的な脅威となる。現在生息が確認されている広葉樹林の保全が大切である。採餌、休息、冬眠、繁殖などの全生活を森林に依存しているため広い範囲の保全が必要である。しかし、家屋に繁殖コロニーを形成した記録もあるので、人工誘致施設などの試行も必要である。

◆**特記事項** 亜種でなく種 (*Myotis frater*) としてのカグヤコウモリは国内だけでなく、トルキスタンからシベリア東部、中国南部に分布する。

◆**現在講じられている保護対策** 良好な森林をすみかとしていることから、自然公園などでの森林保全が保護に役立っている可能性がある。

(向山 満)

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

## コウモリ目ヒナコウモリ科

絶滅危惧種 I B 類

## クロホオヒゲコウモリ

IUCN:EN (絶滅寸前) 日本哺乳類学会: 危急 環境省: 絶滅危惧 I B 類

*Myotis pruinus* Yoshiyuki, 1971

◆**国内外の分布** 日本固有種。本州と四国の限られた地域からわずかな採集記録があるだけの稀産種であったが、最近になって本州の中国地方や九州からも知られるようになってきた。

◆**県内の分布** 鹿角市から記録がある。県内の森林地帯には他にも生息が予想されるが、森林性コウモリの調査がほとんど行われていないので詳しい状況は分からない。

◆**本種の概要** 前腕長が31mm前後、体重が4g前後の小型種。黒い体毛に先端が銀色の長い差し毛が目立つ。小型種が多いホオヒゲコウモリ属の中でも最小である。

◆**本種の現状** 秋田県における本種の知見は少ないが全国的には典型的な森林性とされており、秋田県においても良好な広葉樹林に依存しているものと考えられる。生息情報が1例しかないが信頼できる情報である。本種は全国的にも絶滅危険度の評価が高い種といえる。

◆**生存に対する脅威** 最近になって九州の照葉樹林帯からも採集報告があるが、他では広葉樹を中心とした良好な自然林からだけ知られている。したがって、広葉樹林の伐採は本種にとって直接的脅威となる。また、本種が小型種であることと翼の形状から移動性が少ないと考えられるので、個体群の維持には年間を通して安定した昆虫を供給でき、休息や冬眠に必要な樹洞を有する広大な森林の保全が重要である。

◆**特記事項** 県内の分布情報が極端に不足しているので、早急な生息調査が必要である。さらに、繁殖、休息冬眠場所、採餌範囲などの生態調査が望まれる。

◆**現在講じられている保護対策** 良好な自然林に生息するので、自然公園などによって保全されているかもしれない。

(向山 満)

## コウモリ目ヒナコウモリ科

絶滅危惧種 I B 類

## ヤマコウモリ

IUCN:LR (nt) (準絶滅危惧) 日本哺乳類学会: 希少 環境省: 絶滅危惧 II 類

*Nyctalus aviator* Thomas, 1911

◆**国内外の分布** 北海道から四国、九州まで広く生息が知られていたが、最近では中部地方以南では激減しているらしい。

◆**県内の分布** 男鹿半島などから生息情報があつたが、新しい知見は皆無であった。しかし、2002年1月に象潟町で冬眠集団が確認された。他には新しい情報がない。

◆**本種の概要** 前腕長60mm前後、体重40g前後で本州産としてはもっとも大型種である。明るい茶色の長毛が全身を被う美しいコウモリである。

◆**本種の現状** 全国的には都市部の公園から深い山中に至るまで、広範囲の大木の樹洞を住みかとしていることが知られている。本県においても生息が予想されていたところ、2002年1月になって約25頭が冬眠していた樹洞が象潟町で見つかった。しかし、樹洞のあった樹は伐採によって無くなってしまった。これからの調査で生息確認地点が増えたとしても、大木の樹洞を住みかとしていることから減少傾向が目立つ種と思われる。

◆**生存に対する脅威** 県外の知見によると市街地の社寺境内や公園から、原生林に至るまで広い範囲で生息が知られている。しかし、大型種である本種の生息にはより大きい樹洞がある大径木の存在が欠かせなく、さらに、餌になる大量の昆虫が年間を通して供給される広大な採餌場所が必要である。したがって、大径木の伐採や森林の減少は本種の生存に直接的、間接的な脅威となる。

◆**特記事項** 比較的都市部にも見られていたが、各地で減少傾向が伝えられている。そこで、秋田県内の新しい生息確認と分布調査が早急に必要である。

◆**現在講じられている保護対策** 山地においては自然公園などの指定によって、住みかとなる大木の保全が行われている可能性がある。

(向山 満)

## コウモリ目ヒナコウモリ科

絶滅危惧種 I B 類

## ヒナコウモリ

日本哺乳類学会: 希少 環境省: 絶滅危惧 II 類

*Vespertilio superans* Thomas, 1898

◆**国内外の分布** 北海道から本州、四国、九州まで広く生息情報があるが繁殖確認は少ない。国外ではシベリア東部、中国東部、台湾に分布する。

◆**県内の分布** 2000年3月に秋田市下浜で保護されてまもなく斃死した個体が標識記号から青森県天間林村で生まれた本種雄であることが確認された。確実な記録はこの1例だけで詳しい状況は分からなかったが、2001年になって大曲市の橋に1000頭を超えると思われる妊娠雌からなる繁殖コロニーが確認された。隣接する青森県にはいくつかの繁殖コロニーがあり、また、最近になって岩手県でも繁殖集団が発見されていることから、調査が進めば他にも秋田県内における繁殖集団の確認が予想される。

◆**本種の概要** 前腕長48mm前後、体重20g前後の中型種。暗褐色の体毛に白っぽい長毛が霜降り状に混じる。夏には明るい茶色の体毛に変わる。

◆**本種の現状** 本県における知見はないが、全国的にみると本来は森林性で樹洞をねぐらとしておりとみられている。しかし、近年は社寺、橋梁などの人工建造物に繁殖コロニーを形成している個体群が多くなっている。本県においても調査が進めば大曲市の橋のように、各地で確認される可能性が高い。生息確認が2例しかないがいずれも最近のもので確実である。全国的にも絶滅危険度の評価が高い。

◆**生存に対する脅威** 秋田県で現在確認されている繁殖コロニーは大曲市の橋の1例だけであるが、本来は樹洞を繁殖、休息などに利用していたと考えられている。隣接している青森県や岩手県では社寺仏閣、学校、橋梁などの人工物を利用しての例が多い。こうしたコロニー形成場所が改築などで失われることからコロニー消滅の例が各地にある。こうした直接的脅威の他に、森林伐採は餌となる昆虫の安定供給、樹洞の減少などの理由から間接的脅威となる。

◆**特記事項** 本種の保護では青森県においてバットハウスやバットボックスへの移住が成功しているため、本県のコロニー形成地点の現状把握を急ぎ、改築改造などによるコロニー消滅に対する対策準備が必要である。

◆**現在講じられている保護対策** 自然公園などの森林保全が保護に役立っているかもしれない。

(向山 満)

コウモリ目ヒナコウモリ科

絶滅危惧種 I B 類

## ニホンウサギコウモリ

日本哺乳類学会：希少 環境省：絶滅危惧 II 類  
*Plecotus auritus sacrimontis* G.Allen, 1908

◆**国内外の分布** 日本固有亜種で北海道、本州、四国に広く分布するが、西日本では少ない。

◆**県内の分布** 白神山地から採集報告がある。他にも大館市長走風穴には少数ながら繁殖コロニーが観察されている。

◆**本種の概要** 前腕長40mm前後、体重8g前後の小型種。灰褐色の体毛で被われているが腹面は白っぽい。耳介が長大であって、形態が似ているコウモリは他にない。

◆**本種の現状** 秋田県における知見は少ない。長走のような洞窟をすみかとしているが、採餌などは森林に依存しているものと考えられる。繁殖確認地点が1ヶ所であること、全国的にも希少種とされていることから絶滅危惧種 I B 類と判断される。

◆**生存に対する脅威** 生息洞窟の改造や付近の工事は洞窟放棄を伴うので直接的脅威となる。また、人が近づくことによる攪乱も洞窟放棄につながる。コロニーは洞窟に形成しても採餌は森林に依存していると考えられることから森林面積の減少は間接的脅威となる。他県の知見では人工建造物を繁殖や休息に利用している例もあるので、生息地の現状把握とその保全が急務である。

◆**特記事項** 他県では冬眠に洞穴を利用している例があるが、秋田県における知見がないので早急な分布調査と周辺部を含めた冬眠場所の保全が必要である。

◆**現在講じられている保護対策** 長走の風穴は国の天然記念物に指定されているが、高山植物群落がその対象となっており、コウモリが考慮されているわけではない。従って、観光利用のあり方によっては洞窟放棄につながる危険がある。餌場としての森林は自然公園などでの森林保全が保護に役立っている可能性がある。

(向山 満)

サル目オナガザル科

絶滅危惧種 I B 類

## ホンドザル

IUCN-DD (情報不足) 日本哺乳類学会：保護すべき地域個体群 環境省：絶滅のおそれのある地域個体群  
*Macaca fuscata fuscata* Blyth, 1875

◆**国内外の分布** ニホンザルは日本固有種である。亜種であるホンドザルは青森県から鹿児島県まで分布し、ヒトを除く霊長類の中で最も高緯度に分布する動物として有名である。海岸部から標高3000m以上の高山帯にも生息する。

◆**県内の分布** 過去には広く分布していたが、県内各地で絶滅したために、生息域が非常に狭まった。現在、群れの生息が確実なのは白神山地地域のみである。この他に八幡平および山形県境付近にも群れが生息している可能性があり、確認を急ぐ必要がある。なお、オスの単独個体については全県的に目撃されている。

◆**本種の概要** 体重は成熟オスで15kg前後、メスで10kg前後であるが地域の変異が大きい。主に果実・種子・葉・樹皮・虫類などを採食する。血縁関係にあるメス個体を中心に複数のオス・メスからなる数十頭の群れをつくる。メスは5歳程度で出産可能となり、秋に交尾し春に1仔出産する。オスは性成熟する頃に生まれた群れを出て、他の群れに入る。その後も群れを転々と移る傾向にある。

◆**本種の現状** 白神山地地域では比較的良好な森林に群れが連続的に分布しており、北東北の中では唯一安定した個体群といえる。近年、分布域の回復が見られている。しかし、現段階では県内の分布域は500km<sup>2</sup>程度で、成熟個体数も1000頭に及ばず、青森県側の個体群と交流がある点を差し引いても、絶滅を回避するのに十分であるとは判断できない。白神個体群以外についてはほとんど把握されていない。

◆**生存に対する脅威** 森林の多くは人工針葉樹林に改変されており、生息地の攪乱が著しい。近年、本種が分布域を回復している地域では農作物被害が発生しており、社会的にも不安定な状態が続いている。従って、この数十年以内に本種をとりまく環境はかなり悪化したと思われる。秋田県を含め東北の個体群では遺伝的変異性が乏しいため、個体群として脆弱である可能性がある。

◆**特記事項** 他県では農作物被害対策として有害駆除が行われているが、長期間かなりの駆除圧をかけても被害が軽減した例はほとんどない。農作物被害の主な原因は生息環境の攪乱と考えられるので、根本原因を除去する観点から、生息環境を回復させる必要がある。現状把握のために調査研究を継続的に行う必要がある。

◆**現在講じられている保護対策** 狩猟獣には指定されていない。生息地に関しては既存の森林生態系保護地域保存地区などの指定がある。しかし、本種の生息地を確保する観点からは十分とはいえない。農作物被害については捕獲によらない対策がとられている。ワシントン条約 (CITES) の付属書 II に掲載され、本種の保護のために国際的な商取引は制限されている。

(揚妻直樹)

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

ネコ目イタチ科

絶滅危惧種 I B 類

## ニホンイイズナ

日本哺乳類学会：危急 環境省：準絶滅危惧

*Mustela nivalis namiyei* Kuroda, 1921

- ◆**国内外の分布** イイズナは中国・朝鮮などユーラシア北部に広く分布する。ただし、亜種であるニホンイイズナは秋田県・青森県・岩手県の限られた地域のみ分布する。
- ◆**県内の分布** 森吉山などで生息の情報があるが、分布域・生息数は非常に限られているものと思われる。
- ◆**本種の概要** 尾を含む体長15-20cm、体重50-100gで、日本の食肉類（ネコ目）としては最も小さい。夏毛は背面褐色、腹面白色だが、冬毛は全体が白色になる。鳥・野ネズミ・虫類を採食する。
- ◆**本種の現状** 高標高の限られた地域に分布するものと思われるが、詳細は不明。
- ◆**生存に対する脅威** 山林開発により生息地が攪乱されてきた可能性がある。また、トラバサミなどによる狩猟により本種が誤って捕獲されている危険性があり、本種の保護上の問題となっている。
- ◆**特記事項** 環境省は青森県産のイイズナを特に「絶滅のおそれのある地域個体群」に指定していたことがある。情報が極端に不足しており、きわめて緊急に調査・研究する必要がある。
- ◆**現在講じられている保護対策** 積極的な保護活動はない。鳥獣保護法では狩猟獣となっていない。自然公園や保安林などによってある程度生息地が保全されているが、十分であるかどうかは不明である。

(揚妻直樹)

モグラ目ホンシュウトガリネズミ科

絶滅危惧種 II 類

## ホンシュウトガリネズミ

環境省：該当なし

*Sorex shinto shinto* Thomas, 1907

- ◆**国内外の分布** トガリネズミは中国・朝鮮などユーラシア北部に広く分布する。亜種であるホンシュウトガリネズミは本州中部以北の山地に生息する。
- ◆**県内の分布** 男鹿半島、森吉山、太平山などで生息の報告があるが情報は少ない。
- ◆**本種の概要** 尾を含む体長10-12cm、体重4-9g。森林内の腐植層に棲み、虫類などを採食する。
- ◆**本種の現状** 森林地帯に生息すると考えられるが詳細は不明。
- ◆**生存に対する脅威** 腐植層の乏しい人工針葉樹林の拡大によって生息地がかなり減少したものと推測される。生息地は小規模に分断されている傾向にあると考えられる。
- ◆**特記事項** 情報がきわめて少ないため緊急に調査を行うとともに、絶滅危険度を再評価する必要がある。
- ◆**現在講じられている保護対策** 積極的な保護活動はない。また、本種を保護する法制度はない。十和田八幡平国立公園に本種の生息地が含まれている可能性があるが、本種の現状がよく解らないため保全に役立っているかは不明である。

(揚妻直樹)

モグラ目トガリネズミ科

絶滅危惧種 II 類

## ホンシュウジネズミ

環境省：該当なし

*Crocidura dsinezumi chisai* Thomas, 1906

- ◆**国内外の分布** ホンシュウジネズミは日本と韓国済州島に分布しており、ほぼ日本固有種といってよい。本州以南には広く分布している。
- ◆**県内の分布** 真木溪谷などで生息の報告があるが、本種に関する情報はきわめて少ない。
- ◆**本種の概要** 尾を含む体長10-14cm、体重5-13g。低地林や河畔林に生息し、虫類を採食する。
- ◆**本種の現状** 本州に広く分布していると考えられているが、秋田県における情報は非常に不足している。
- ◆**生存に対する脅威** 低地林の開発や河川改修により、生息地が減少している危険性がある。
- ◆**特記事項** 現時点での生息情報が少ないので絶滅危惧種 II 類としたが、今後の研究により現状が把握されれば絶滅危惧ランクが引き下げられる可能性がある。現状調査が必要である。
- ◆**現在講じられている保護対策** 積極的な保護活動はない。また、本種を保護する法制度はない。いくつかの自然公園や保安林などによって、ある程度生息地が保全されているかもしれない。

(揚妻直樹)

モグラ目カワネズミ科

絶滅危惧種Ⅱ類

## ニホンカワネズミ

*Chimarrigale himalayica platycephala* (Temminck,1842)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 日本・台湾・東南アジアに分布する。日本では北海道と沖縄を除く地域に分布する。
- ◆**県内の分布** 秋田県では森吉山・八幡平・田沢湖畔などから生息情報がある。しかし、秋田県における本種の生息状況はよく解っていない。
- ◆**本種の概要** 尾を含む体長19-26cm、体重22-56g。溪流付近に生息し、小魚・水生昆虫などの水生動物を採食する。
- ◆**本種の現状** 全国的には広く分布していると考えられている。秋田県でも過去にはかなり広く分布していたと推定されるが、それに比べると現在の生息面積は狭められている。詳細は不明。
- ◆**生存に対する脅威** 河川改修・ダム建設、さらに農業などによって、かなり生息環境が悪化したものと推測される。
- ◆**特記事項** 日本産のカワネズミを国外のものとは別種とする考えもある。県内のカワネズミについて緊急に調査を行うとともに、絶滅危険度を再評価する必要がある。
- ◆**現在講じられている保護対策** 積極的な保護活動はない。また、本種を保護する法制度はない。いくつかの自然公園や保安林などによって、ある程度生息地が保全されていると考えられる。

(揚妻直樹)

モグラ目モグラ科

絶滅危惧種Ⅱ類

## ヒメヒミズ

*Dymecodon pilirostris* True,1886

環境省：該当なし

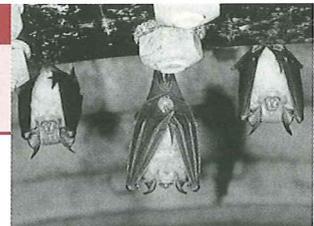
- ◆**国内外の分布** ヒメヒミズは日本固有種で、本州・四国・九州の高山に点々と分布する。
- ◆**県内の分布** 森吉山・八幡平・鳥海山などから目撃の報告があるが、生息状況はあまりよく解っていない。
- ◆**本種の概要** 尾を含む体長は10-13cm、8-15g、ヒミズに形態が良く似ている。高標高地の草地・森林に生息し、虫類を採食する。
- ◆**本種の現状** 北東北では低山にも生息すると考えられるが、詳細は不明。
- ◆**生存に対する脅威** 人工針葉樹林化によって生息地がかなり減少したものと推測される。本種はもともと個体数が少なく移動能力も低いと考えられるので、生息地の孤立化により、生存基盤が揺らいでいる可能性がある。
- ◆**特記事項** 緊急に調査を行うとともに、絶滅危険度を再評価する必要がある。
- ◆**現在講じられている保護対策** 積極的な保護活動はない。また、本種を保護する法制度はない。報告のあったいくつかの地点は自然公園に指定されており、ある程度は生息地が保全されていると考えられる。

(揚妻直樹)

コウモリ目キクガシラコウモリ科

絶滅危惧種Ⅱ類

## ニホンコキクガシラコウモリ

IUCN:LR (nt) (準絶滅危惧) 環境省：該当なし  
*Rhinolophus cornutus cornutus* Temminck,1835

- ◆**国内外の分布** 日本固有亜種で、北海道南部から本州、四国、九州まで全国的に広く分布している。
- ◆**県内の分布** 文献からは真木溪谷から報告があるだけであるが、大館市長走の隧道でも観察されている。さらに多くの地点から確認されると予想されるが、調査不十分なため本種の生息状況についてはよく分かっていない。
- ◆**本種の概要** 前腕長40mm前後、体重7g前後の小型種。薄い褐色のふさふさした体毛で被われている。顔面には複雑な鼻葉が発達し、キクガシラコウモリに酷似している。しかし、サイズが一見して分かるほど小さい。
- ◆**本種の現状** 一般に洞窟性コウモリとされているので、海蝕洞や隧道を越冬・休息・繁殖に使用しているものと考えられる。しかし、秋田県の場合はこうした知見がない。また、採餌は森林内で行われるものと考えられる。秋田県における報告は1例しかないので絶滅危惧種ⅠB類に該当するが、全国的には普通種とされていることから、今後の調査の進展によってより多くの生息情報が得られると考えられる。従って、ランクを1つ下げて絶滅危惧種Ⅱ類と判断した。
- ◆**生存に対する脅威** 典型的な洞窟性コウモリなので、現在生息が確認されている洞窟の消失や改造、人が入ることによる攪乱は直接的脅威となる。また、本種が洞窟性であっても採餌は森林に依存していると考えられるので、森林面積の減少は間接的脅威となる。
- ◆**特記事項** 全国的には普通種としてあつかわれているが、秋田県では生息確認例が極端に少ない。保護対策上からも早急な分布調査が必要である。
- ◆**現在講じられている保護対策** 本種に関する法的保護制度はない。

(向山 満)

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

コウモリ目ヒナコウモリ科

絶滅危惧種Ⅱ類

## ニホンユビナガコウモリ

IUCN:LR (nt) (準絶滅危惧) 環境省:該当なし  
*Miniopterus schreibersi fuliginosus* (Hodgson,1835)

◆**国内外の分布** 日本固有亜種で本州から四国、九州まで広く分布しているが、北海道からは知られていない。

◆**県内の分布** 男鹿半島と森吉山の2地点から報告されているだけである。いずれも日中の休息、繁殖・冬眠などの記録で、飛行範囲などの生息範囲については不明である。

◆**本種の概要** 前腕長47mm前後、体重13g前後の小型種。黒っぽい焦げ茶色の体毛で被われている。狭くて長い翼を持っていて、長距離高速飛行に適した形態である。高速飛行タイプの本種は洞窟棲コウモリの中でも出入り口前方が開けた大きな洞窟を休息、繁殖、冬眠に利用している。しかし、採餌などには森林を狩り場としていると予想される。

◆**本種の現状** 男鹿半島門前の個体群は青森県西海岸地帯と往来していることが標識調査から確かめられている。また、冬眠の他に出産保育集団でもある。生息確認地点が2ヶ所しかないことから絶滅危惧種ⅠB類に該当するが、比較的個体数が多いこと、現状では利用洞窟が安定していること、全国的状況などから絶滅危惧種Ⅱ類と判定した。しかし、観光や釣り人などによる人的攪乱が多くなれば洞窟放棄につながりランクの変更を検討しなくてはならない。

◆**生存に対する脅威** 生息洞窟へ人が入ることによる攪乱は直接的脅威となる。特に、繁殖コロニーへの接近は影響が大きい。繁殖や休息に洞窟を利用しているが採餌などは森林に依存していると考えられるので、森林伐採は間接的脅威となる。

◆**特記事項** 本種は高速飛行タイプであることから、利用する洞窟はある程度広大でなければならないが、現存する利用可能な洞窟は少ない。青森県では本種の保護のために人工洞窟を掘る計画が進められている。本県でも本種との共生でこのような積極的な対応が望まれる。

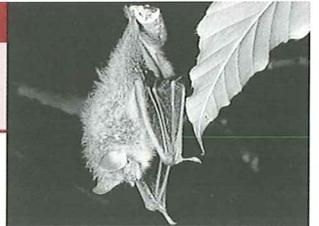
◆**現在講じられている保護対策** 男鹿市のコウモリの繁殖地は男鹿国定公園に含まれ、秋田県の天然記念物に指定されており、ある程度保全されている。

(向山 満)

コウモリ目ヒナコウモリ科

絶滅危惧種Ⅱ類

## ニホンコテングコウモリ

IUCN:LR (nt) (準絶滅危惧) 日本哺乳類学会:希少 環境省:絶滅危惧Ⅱ類  
*Murina silvatica* Yoshiyuki,1983

◆**国内外の分布** 日本固有種で北海道から本州、四国、九州まで広く分布するが、西日本ではたいへん珍しい。

◆**県内の分布** 白神山地、真木溪谷、田沢湖町から記録がある。調査が進むとさらに多くの地点から記録されるものと思われる。

◆**本種の概要** 前腕長30mm前後、体重5g前後の小型種。明るい茶色の長い毛が全身を被っている。腿間膜の上面と後縁にも長毛がある。鼻孔が長い管状になって両側に突き出ている。

◆**本種の現状** 秋田県における知見は乏しいが、全国的な記録をみると森林性コウモリとされているように、良好な自然林には広く分布しているものと考えられる。しかし、人里の近くから確認されることもあるので秋田県においても雑木林を含めて相当広く分布しているものと考えられる。3地点からしか記録がない希少種であって、現時点におけるIUCNの基準では絶滅危惧種ⅠB類に該当する。しかし、調査が不十分であること、人里近くからも確認されている種であることからランクを下げて絶滅危惧種Ⅱ類とした。

◆**生存に対する脅威** 全国的には樹皮の間や草本の枯れ葉の中、東屋のような人工物からも見つかるが、本来は樹洞を利用する森林性コウモリと見なされている。また、採餌場所としては森林が欠かせないので森林面積の減少は本種の生存にとって重大な脅威となる。

◆**特記事項** 森林以外の人里の人工物から見つかることもあるので、本種の保護対策としてバットボックス設置などの試行もこれから共生のために考える必要がある。

◆**現在講じられている保護対策** 森林性コウモリであることから、自然公園などによって生息地が保全されている可能性がある。

(向山 満)

コウモリ目ヒナコウモリ科

絶滅危惧種Ⅱ類

## ニホンテングコウモリ

日本哺乳類学会：希少 環境省：絶滅危惧Ⅱ類  
*Murina hilgendorfi* (Peters,1880)

◆**国内外の分布** 日本固有種で北海道、本州、四国、九州まで広く分布している。

◆**県内の分布** 白神山地からの報告が1例あるほかに、大館市長走の風穴で観察例がある。これは明らかに調査不十分で、さらに多くの地点から確認されるものと考えられる。

◆**本種の概要** 前腕長43mm前後、体重12g前後で小型種の中ではやや大きい。灰褐色の体毛で全身が被われていて、抜き出ている長い差し毛の先端が銀色に見えてたいへん美しい。腿間膜の上面と後縁にも体毛があるので毛深く見える。鼻孔が管状に突出しているがニホンコテングコウモリほど突出しない。

◆**本種の現状** 秋田県における知見は貧弱であるが、各地の森林に生息しているものと考えられる。また、日中の休息や冬眠には洞窟を利用している。生息確認地点が2ヶ所しかないことから絶滅危惧種ⅠB類に該当するが、明らかな調査不足と考えられ、また全国的な生息状況などから絶滅危惧種Ⅱ類と判定した。他県の知見によるとネズミ捕り用の墜落缶内に落ちて捕まった例がいくつかあるので、秋田県でも調査方法を変えることでさらに広範囲で見つかる可能性が高い。

◆**生存に対する脅威** 冬眠場所として洞窟を利用して見つかることが多いので、生息洞窟の改造、人の侵入による攪乱などが直接的脅威となる。また、本来は森林性コウモリと見られているので、休息に必要な樹洞確保、採餌場所として森林伐採は本種の生存に重大な脅威となる。

◆**特記事項** 夏期のかすみ網による採集や冬眠期の確認例があるが繁殖に関する知見は全国的にも少ない。秋田県においてはまず分布調査が必要であるが、同時に繁殖などの生態的知見についても集積を急がなければならない。

◆**現在講じられている保護対策** 良好な森林を住みかとしていることから、自然公園などでの森林保全が保護に役立っている可能性がある。

(向山 満)

ネズミ目リス科

絶滅危惧種Ⅱ類

## ホンドモモンガ

環境省：該当なし  
*Pteromys momonga* Temminck,1845

◆**国内外の分布** ホンドモモンガは日本固有種で、本州・四国・九州に分布する。

◆**県内の分布** 八幡平・森吉山・田沢湖町などで生息情報があるが、県内の分布はよく解らない。

◆**本種の概要** 尾を含む体長は24-34cm、体重150-220g。夜行性で樹上生活し、葉や果実、キノコなどを採食する。前足と後足の間に皮膜があり、これを広げて木から木へと滑空する。滑空距離は長いときには100m以上という。

◆**本種の現状** 森林地帯に分布するものと考えられる。秋田県において現在知られている生息地は10カ所程度であるが、詳細はよく解っていない。

◆**生存に対する脅威** 自然林の開発や人工針葉樹林化によって生息地がかなり失われてきている可能性がある。

◆**特記事項** 本種は環境省の希少種に評価されていたことがある。緊急に調査を行うとともに、絶滅危険度を再評価する必要がある。

◆**現在講じられている保護対策** 積極的な保護活動はない。鳥獣保護法では狩猟獣に指定されていない。自然公園や保安林などによって、ある程度生息地が保全されていると考えられる。

(揚妻直樹)

ネズミ目ヤマネ科

絶滅危惧種Ⅱ類

## ヤマネ

IUCN:EN (絶滅寸前) 日本哺乳類学会：危急 環境省：準絶滅危惧  
*Glirulus japonicus* (Schinz,1845)

◆**国内外の分布** ヤマネは1属1種の日本固有種で、本州・四国・九州の山地に分布する。分布域は分断している。

◆**県内の分布** 八幡平・森吉山・田沢湖高原・太平山などから生息の報告がある。

◆**本種の概要** 尾を含む体長は10-14cm、体重は季節的に大きく変化し14-40g、背中に1本の黒い線が入る。成熟した森林に生息し、夜行性で樹上生活し、果実や昆虫などを採食する。冬季には樹洞や落ち葉の中、時には雪中で体をボール状に丸めて冬眠する。

◆**本種の現状** 森林地帯に分布するものと考えられるが、生息密度は高くはなく、森林内の利用場所も流動的なようである。詳細は不明。

◆**生存に対する脅威** 本種には成熟した森林が必要であると考えられており、過去数十年間の自然林の伐採と人工針葉樹林化により、著しく生息地が減少していると推測される。各生息地の孤立・分断化傾向も著しい。

◆**特記事項** 遺伝子の地域的変異が大きく、各地域固有の個体群が成立していると考えられる。生息状況および遺伝解析についての調査研究を緊急に行う必要がある。

◆**現在講じられている保護対策** 積極的な保護活動はない。文化財保護法により国の天然記念物とされ、鳥獣保護法では狩猟獣に指定されていない。自然公園や保安林などによって、ある程度生息地が保全されていると考えられる。

(揚妻直樹)

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

ネズミ目ネズミ科

絶滅危惧種Ⅱ類

トウホクヤチネズミ *Eothenomys andersoni* (Thomas,1905)

日本哺乳類学会：保護すべき地域個体群 環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** トウホクヤチネズミは日本固有種で、本州中部以北と紀伊半島に分布する。
- ◆**県内の分布** 森吉山・八幡平・太平山など標高の高い地域から生息情報があるが、概要は不明である。
- ◆**本種の概要** 尾を含む体長12-19cm、体重11-40g。
- ◆**本種の現状** 北東北では低地・低山に分布していてもおかしくないが、秋田県では高標高の森林地帯からのみ報告がある。秋田県で現在知られている生息地は10カ所以下であり、実態はよく解っていない。
- ◆**生存に対する脅威** 過去数十年間の人工針葉樹林化や河川改修・ダム建設などにより、著しく生息地が減少したものと推測される。低山からの報告がないのは情報不足のためだけでなく、環境改変のためかもしれない。
- ◆**特記事項** 分類がまだ定まっておらず、東北地方のものを他とは別種にすることもある。緊急に調査を行うとともに絶滅危険度を再評価すべきである。
- ◆**現在講じられている保護対策** 積極的な保護活動はない。また、本種を保護する法制度はない。自然公園や保安林などによって、ある程度生息地が保全されていると考えられる。

(揚妻直樹)

ネコ目イタチ科

絶滅危惧種Ⅱ類

ホンドオコジョ *Mustela erminea nippon* Cabrera,1913

日本哺乳類学会：希少 環境省：準絶滅危惧



- ◆**国内外の分布** オコジョはユーラシア北部および北アメリカに分布する。亜種であるホンドオコジョは本州中部以北の山岳地帯に分布する。
- ◆**県内の分布** 白神山地、八幡平、森吉山、鳥海山などの山地から生息の情報がある。
- ◆**本種の概要** 尾を含む体長はオスで23-27cm、メスで19-23cm程度で性的二型があり、明らかにオスが大きい。夏毛は背面褐色、腹面白色だが、冬毛は黒い尾の先を除き全体が白色になる。山地に生息し、鳥・野ネズミ・虫類などを採食する。
- ◆**本種の現状** 生息数は多くなく、生息地面積も狭いと思われるが、詳細は不明。
- ◆**生存に対する脅威** 過去数十年間の自然林開発により生息地がかなり失われた可能性がある。トラバサミなどによる狩猟により本種が誤って捕獲されている危険性があり、本種の保護上の問題となっている。
- ◆**特記事項** 緊急に調査を行うとともに絶滅危険度を再評価すべきである。
- ◆**現在講じられている保護対策** 積極的な保護活動はない。鳥獣保護法では狩猟獣に指定されていない。自然公園や保安林などによって、ある程度生息地が保全されていると考えられる。

(揚妻直樹)

コウモリ目ヒナコウモリ科

準絶滅危惧種

モモジロコウモリ *Myotis macrodactylus* (Temminck,1840)

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** 日本国内では北海道から本州、四国、九州まで全国的に広く分布している。国外ではシベリア東部、サハリン南部から知られている。
- ◆**県内の分布** 白神山地、森吉山、真木溪谷の3地点から報告されている。これは調査不十分な結果によるものと考えられ、実際はもっと広く分布していることが予想される。
- ◆**本種の概要** 前腕長38mm前後、体重8g前後の小型種。黒みが強い褐色の体毛で被われている。耳珠が細長いのが特徴で、また、小さい体に対して足が大きく見える。日中の休息、冬眠・繁殖には隧道などを利用する洞窟性コウモリである。採餌は溪流の水面すれすれに飛翔しながら行う。
- ◆**本種の現状** 秋田県における確認が3地点しかないことから絶滅危惧種Ⅱ類に該当するが、全国的には普通種とされていること、調査が不十分であることから判断して、準絶滅危惧種にランクを下げた。
- ◆**生存に対する脅威** 溪流や池沼の水面上で採餌していることが多いので、年間を通して多様な水生昆虫の羽化を続けられるような水環境が大切である。したがって、水質汚濁による水生昆虫の多様性の減少は本種の生存に重大な脅威となる。また、冬眠には洞窟が必要で、洞窟の埋め戻しによる消失や人の侵入による攪乱も直接的脅威となる。
- ◆**特記事項** 県外においては用水トンネルのような人工洞窟における冬眠例が各地で報告されているので、保護のために新たなトンネル掘りなどの共生策を考える必要がある。また、青森県では橋に本種用の保護施設取り付けが実施されている。本県でも導入による保護が必要である。
- ◆**現在講じられている保護対策** 清冽な流れを保っている溪流が自然公園指定地内に多くあることによって採餌場所が保全されている可能性がある。

(向山 満)

ネズミ目リス科

準絶滅危惧種

## ニッコウムササビ

*Petaurista leucogenys nikkonis* Thomas, 1905

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** ニッコウムササビは日本固有種で、本州・四国・九州の低地から山地に分布する。

◆**県内の分布** 秋田県内に点在しているものと思われる。

◆**本種の概要** 尾を含む体長は55-90cm、体重700-1500g。夜行性で主に樹上で活動し、植物食で木の葉・果実などを採食する。前足と後足の間に皮膜があり、これを開いて木から木へと滑空する。最長で160m程の距離を飛ぶとされる。

◆**本種の現状** 本種は森林地帯に生息するが、寺社林などに住みつくこともあり、人口の多いところでも見られる。ただし、今のところ本種が本県で広く分布しているという証拠はない。

◆**生存に対する脅威** 自然林の人工針葉樹林化によって生息地がかなり減少したり、開発によって生息環境が悪化したものと思われる。本種は寺社林などに生息することもあり市街地近くでも見られるが、こうした個体同士が交流可能かどうか、また地域個体群を支えるのにどれほど貢献しているかは不明である。

◆**特記事項** できるだけ早く調査を行い、生息実態を把握する必要がある。

◆**現在講じられている保護対策** 積極的な保護活動はない。1994年以降、鳥獣保護法の狩猟獣からは除外された。それまでは年間数頭が狩猟されることがあった。自然公園や保安林、市街地においては寺社林によって、ある程度生息地が保全されていると考えられる。

(揚妻直樹)

モグラ目モグラ科

情報不足種 (\*注)

## ミズラモグラ

*Euroscaptor mizura* (Günther, 1880)

IUCN:VU (危急) 日本哺乳類学会：希少 環境省：準絶滅危惧

◆**国内外の分布** ミズラモグラは日本固有種で、本州に点々と分布する。

◆**県内の分布** 青森県・岩手県など隣県から生息が報告されており、秋田県でも生息している可能性が高いと指摘されている。ただし、生息が確認されたことはまだない。

◆**本種の概要** 尾を含む体長10-13cm、体重26-36g。虫類やミミズなどを採食する。生息数は少ない。

◆**本種の現状** 森林地帯に生息すると考えられるが、調査がほとんど行われておらず、生息状況は全く解らない。本種が秋田県に生息しているとして、その生息地面積はかなり狭く孤立化しており、生息個体数も少ないと推測される。

◆**生存に対する脅威** 人工針葉樹林化によって生息地がかなり減少したものと推測される。個体数も少なく、生息地も分断孤立化が著しいので、個体群としては不安定要素が多い。移動能力・分散能力が乏しく、今後、生息環境が整ったとしても、分布が広まるにはかなりの時間が必要と思われる。

◆**特記事項** 本県における本種の絶滅危険度は「絶滅危惧種ⅠA類」を適用するのが妥当と考えられる。本種が秋田県から報告されていないのは、単に調査が遅れているためである可能性が高い。従って、今回は暫定的に「情報不足種」としたが、県内での生息が確認された時点で「絶滅危惧種ⅠA類」にするものとする(\*注)。しかし、本種が秋田県内に生息しているにも関わらず人知れず絶滅してしまう危険性もあるため、現時点においても「絶滅危惧種ⅠA類」の動物として取り扱うのが適当である。さわめて緊急に実態把握を行い、保護対策を検討する必要がある。

◆**現在講じられている保護対策** 積極的な保護活動はなく、本種を保護する法制度もない。自然公園などにより生息地が保全されているかもしれない。

(揚妻直樹)

コウモリ目ヒナコウモリ科

情報不足種 (\*注)

## コヤマコウモリ

*Nyctalus fuvus* Imaizumi et Yoshiyuki, 1968

日本哺乳類学会：危急 環境省：絶滅危惧ⅠB類

◆**国内外の分布** 国外では中国・台湾に分布している。国内の分布記録は少ないが隣接している岩手県と青森県に採集記録がある。

◆**県内の分布** 青森県・岩手県などでは生息情報があるので、秋田県にも岩手県境などに生息している可能性が高い。秋田県での生息は文献以外に確認されていないが、これは調査が進んでいないことによるものと思われる。

◆**本種の概要** 前腕長50mm前後、体重20g前後の中型種。外部形態は体毛、耳介などヤマコウモリとよく似ているが、一見してサイズの違いが分かるほど小さい。

◆**本種の現状** 本種は森林性コウモリとしては良好な森林に限って見られる。県内においても広大な自然林が存在する地域であれば生息の可能性はある。全国的にも希少種とされていることから危険度は絶滅危惧種ⅠB類相当であるが、生息確認が完全ではないので情報不足種として取り扱う(\*注)。今後、緊急に調査を行い、本種の生息状況を明らかにした上で再評価が必要である。

◆**生存に対する脅威** 全国的な既知産地のいずれも広葉樹からなる良好な自然林であることから、樹洞を持つ大木を多く有する自然林の減少は直接的な脅威となる。典型的な森林性コウモリであるうえに、中型種であることから広大な面積の自然林でないと餌の昆虫の安定供給が難しいと考えられる。

◆**特記事項** 森吉山から「コヤマコウモリ」の捕獲記録がある。しかし、過去にヒナコウモリを「コヤマコウモリ」と呼ぶことがあったこと、このコウモリの形態計測値もコヤマコウモリよりもヒナコウモリに近いことなどから、森吉山で捕獲されたコウモリは現在のコヤマコウモリ (*Nyctalus fuvus*) とは考えにくい。

◆**現在講じられている保護対策** 良好な森林を住みかとしていることから、自然公園などでの森林保全が保護に役立っている可能性がある。

(向山 満)

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

コウモリ目キクガシラコウモリ科

留意種

## ニホンキクガシラコウモリ

IUCN:LR (nt) (準絶滅危惧) 環境省: 該当なし

*Rhinolophus ferrumequinum nippon* Temminck, 1835

◆**国内外の分布** 日本固有亜種で、北海道、本州、四国、九州にかけて広く分布する。

◆**県内の分布** 白神山地、森吉山、男鹿半島、真木溪谷、大館市長走風穴内から記録がある。男鹿市門前のコウモリ穴には数百頭のコロニーが観察されているが、他の地域では大きなコロニーが見つかっていない。

◆**本種の概要** 前腕長60mm前後、体重20g前後で本州産のコウモリとしてはヤマコウモリに次ぐ大型種である。こげ茶色の体毛で被われている。顔面には複雑な鼻葉が発達している。一般に洞窟性コウモリとされており、海蝕洞や隧道などを日中の休息場や出産保育の場所、または冬眠場所としている。洞窟性のコウモリとしてもっとも普通種であるが、夏期には民家の屋根裏などでも繁殖している。

◆**本種の現状** 本種は採餌場所として森林に依存しているが、その確認が難しいことから秋田県における森林内の分布は不明なことが多い。これまでの確認記録が4地点しかないことから評価すると、絶滅危惧種II類相当と考えられる。しかしながら、本種は全国的には普通種とされていることからすると、秋田県における確認情報の少なさは、調査不足によるものと判断してランクを下げた。生息洞窟への人による攪乱が進めば個体数の減少につながりランクを上げなければならない。

◆**生存に対する脅威** 生息洞窟の埋め戻しなどによる消失、人の侵入による攪乱などが直接的脅威となる。また、採餌場所として欠かせない森林の伐採は間接的脅威となる。特に、サバイバルゲームなどによる洞窟内への乱暴な侵入は洞窟放棄につながるの大きな脅威である。

◆**特記事項** 全国的には普通種とされているが、生息洞窟や周辺環境の悪化によって個体数の激減かコロニーの消滅が各地で報告されているので本県においても継続的な監視体制が必要である。

◆**現在講じられている保護対策** 男鹿市のコウモリの繁殖地は男鹿国立公園に含まれ、秋田県の天然記念物に指定されており、ある程度保全されている。

(向山 満)

ネズミ目リス科

留意種

## ニホンリス

環境省: 該当なし

*Sciurus lis* Temminck, 1845

◆**国内外の分布** ニホンリスは日本固有種で、本州・四国に分布する。ただし西日本には少ない。九州ではほぼ絶滅状態と考えられる。

◆**県内の分布** 秋田県北部を中心に分布する。

◆**本種の概要** 尾を含めた体長は30-39cm、体重210-310g。昼行性で、主に樹上で活動する。種子・果実・虫類・キノコなどを採食する。

◆**本種の現状** 秋田県の特に北部における生息個体数は少なくないと考えられる。ただし、これまでのところ全県的に広い生息面積を持っていることは示されていない。個体群としての詳細は不明。

◆**生存に対する脅威** 農耕地・二次林などでも見られるが、森林の消失に伴って減少したと推測されており、この数十年間の森林開発によって生息環境は悪化したと考えられる。また、近年も里山の開発等により、生息地は減少傾向にあると考えられる。

◆**特記事項** 全県的に把握されている生息面積は広くないので、現時点では留意種として、その生息実態に注意を払っておく必要がある。ただし、生息実態の把握が進めば、絶滅危惧ランクが引き下げられる可能性がある。

◆**現在講じられている保護対策** 積極的な保護活動はない。1994年以降、鳥獣保護法の狩猟獣から除外された。それまでは年間20頭程度が狩猟されることがあった。自然公園や保安林などによって、ある程度生息地が保全されていると考えられる。

(揚妻直樹)

ネコ目クマ科

留意種

## ニホンツキノワグマ

*Ursus thibetanus japonicus* (Schlegel, 1857)

IUCN: VU (危急) 環境省: 該当なし

◆**国内外の分布** ツキノワグマはアジアに広く分布する。日本には本州に分布するが、西日本では絶滅が危ぶまれている。九州で絶滅、四国でほぼ絶滅状態となっている。

◆**県内の分布** 秋田県に広く分布しているが、男鹿半島や県中南部にはやや少ないようである。

◆**本種の概要** 体長110-135cm、体重40-130kg、オスの方がやや大型である。全身黒色であるが、胸の部分に白い三日月模様がある。主に植物食で果実・種子・草などを食べるが、虫類や哺乳類も採食する。単独性で、年間の行動域は30-180km<sup>2</sup>と広い。3歳前後で性的に成熟する。冬季には樹洞や洞穴などで冬眠し、メスはこの間に1-2仔を出産する。

◆**本種の現状** 本種は農林被害を引き起こし、果樹・トウモロコシの食害や樹皮剥ぎなど、年間被害総額は900-2000万円にのぼっている。また、人身被害は毎年数件から十数件ある。被害者のほとんどは山菜採り中に襲われている。狩猟により概ね年間20-40頭が捕獲され、また有害駆除等により60-150頭が駆除されている。しかし、生息数と農林産物被害や人身被害との関連性は見出されていない。最近十数年間の推定生息数は1000-1700頭と安定している。

◆**生存に対する脅威** 過去数十年間の森林伐採や人工針葉樹林化、農耕地の拡大などにより、著しく生息地が攪乱されたと推測される。国際的に絶滅危険性が指摘されており、国内でも絶滅あるいは絶滅寸前にまで減少している地域がある。従って、十分な注意を払わないと、本種は容易に絶滅する可能性があるといえる。秋田県における生息数も絶滅を回避するのに十分な数であるとは現段階では判断できない。熊の胆が高値で取引引きされており、本種への狩猟圧（密猟も含む）が高まる可能性も指摘されている。

◆**特記事項** 本種の生息実態は準絶滅危惧種に相当するが、隣県に同一個体群が存在していること、継続的なモニタリングによって生息数が比較的安定していることが解っていることなどから、ランクを一つ下げ留意種とした。しかしながら、留意種とはいえ本種は準絶滅危惧種に近いと考えべきで、慎重な取り扱いが要求される。なお、環境省は下北半島・紀伊半島・中国・四国・九州のツキノワグマを「絶滅のおそれのある地域個体群」に指定している。秋田県では、生息数調査や個体群増加率を推定し狩猟数・有害駆除数を監視しているが、こうした推定には常に最新の調査結果や研究手法を取り入れて分析すべきである。本種は個体数が少ないので、遺伝的脆弱性についても研究が必要である。本種による人身被害の多くは市民啓発により回避できるものが多いと考えられるので、そうした観点からの対策も求められる。

◆**現在講じられている保護対策** 積極的保護策はない。自然公園や保安林などによってある程度生息地が保全されていると考えられるが、本種の行動域の広さを考慮すると不十分である。毎年、秋田県が生息地・生息数の推定を行っており、狩猟数・駆除数を監視している。従って、過剰な捕獲についてはある程度の歯止めをかけることが可能かもしれない。本種はワシントン条約 (CITES) の付属書Iに掲載され、本種の保護のために国際的な商取引が制限されている。

(揚妻直樹)

ネコ目イヌ科

留意種

## ホンドギツネ

*Vulpes vulpes japonica* Gray, 1868

環境省: 該当なし

◆**国内外の分布** キツネはユーラシアから北アメリカにわたり広く分布する。亜種であるホンドギツネは本州と九州に分布するが四国には少ない。

◆**県内の分布** 秋田県に広く分布している。

◆**本種の概要** 体重4-7kgで背面赤褐色、腹面は白色。メスは冬に発情、交尾し、春先に巣穴で3-6仔を出産する。初夏頃まで巣穴を利用して子育てをする。オスがこの子育てに参加することもある。秋になると子どもたちは親に追われるようになり、分散していく。主に野ネズミ・鳥類・虫類などを採食する。

◆**本種の現状** 本種は里山など人工的な自然環境にも生息でき、適応範囲が広いと考えられる。しかし以前、主に平野部において分布域が狭まり、個体数が減少したため、県南については1992年から1997年まで捕獲が禁止されたことがあった。現在はその分布を回復しつつあるようだ。鶏など家畜に対する被害が報告されている。

◆**生存に対する脅威** 宅地開発などにより、近年、里山を中心に生息可能な地域は減少傾向にあるといえる。年間50頭前後が狩猟されている。

◆**特記事項** 分布調査は断続的に行われているものの、個体群の遺伝的性質、存続可能性分析などは行われておらず、詳細な研究が必要である。本種は現在差し迫った危険はないが、過去に個体数が減った経緯があり、その原因を究明すると共に、今後とも注意深く見守る必要がある。

◆**現在講じられている保護対策** 積極的な保護活動はない。自然公園や保安林などによって、ある程度生息地が保全されていると考えられる。

(揚妻直樹)

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

## ニホンカモシカ

IUCN:LR (cd) (保全依存) 環境省:該当なし

*Capricornis crispus crispus* Temminck, 1845

◆**国内外の分布** ニホンカモシカは日本固有種で、本州・四国・九州に分布するが西日本には少ない。

◆**県内の分布** 秋田県に広く分布する。

◆**本種の概要** 体重30-45kg、肩の高さが70-75cm。木の葉や草などを採食する。オスメス共に角を持ち、性的二型が小さく、一見して性別を判断するには難しい。単独性で縄張りを持ち、同性個体を排除するが異性個体とは縄張りを重複させている。一夫一妻から一夫二妻制と考えられている。昭和初期に乱獲などにより絶滅が危惧されたことなどから国の特別天然記念物に指定されている。

◆**本種の現状** 二次林を含めた低標高から高標高までの山林に生息する。以前、本種は著しく減少したことがあるが、県内の分布域は概ね回復してきたと考えられる。ただし、人工針葉樹林化や里山などの開発により、生息可能な地域は減少しつつあるものと推定される。生息数は13000頭程度と推定されている。

◆**生存に対する脅威** 現在、本種は分布を回復してきており、生息面積も広く、差し迫った危険は少ないと考えられるが、本種は過去に絶滅の危機に瀕した経緯があり、常に個体群動態を監視しておく必要がある。さらに、本種は農林産物への被害を出しており、本種を取り巻く社会的環境は不安定である。

◆**特記事項** 生息数の推定などは行われているが、個体群の性質などはよく解っておらず、継続的な研究が必要である。

◆**現在講じられている保護対策** 文化財保護法により国の特別天然記念物に指定されている。また鳥獣保護法では狩猟獣には指定されていない。生息地に関しては既存の森林生態系保護地域保存地区や保安林・自然公園などが、ある程度の生息地を保全している。これらを統合して、カモシカ保護地域を設定しているが、ほとんどが高標高地にあり、彼らの本来の生息地をどの程度確保できているかはよくわからない。農林産物被害に対しては捕獲によらない対策がとられている。

(揚妻直樹)

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

## 哺乳類参考文献

- 阿部永, 1994. 日本の哺乳類. 東海大学出版会. 195pp.
- 阿部永・横畑泰志, 1998. 食虫類の自然史. 比婆科学教育振興会. 391pp.
- 揚妻直樹, 1998. 白神山地におけるニホンザルの生息状況. 京都大学霊長類研究所年報 28:103.
- 揚妻直樹, 1999. 白神山地におけるニホンザルの生息状況2. 京都大学霊長類研究所年報 29:107.
- 揚妻直樹, 1999. 秋田県におけるヤマネ生息調査報告書. 秋田県. 6pp.
- Agetsuma, N., 1999. Economic development and wildlife in Japan: Introduction for young students. *The Journal of Economics Department of Akita University of Economics and Law* 30:11-23.
- 揚妻直樹, 2000. 八森町におけるニホンザルの生息状況(抜粋). 「平成9年度～11年度 農業キーテクノロジー等導入促進事業 サル害対策実証事業報告及び八森町サル害対策構想提言」:24-47. 八森町役場農林水産課農業係. 八森町.
- 揚妻直樹, 2000. 秋田経法大キャンパスの自然と地域におけるその重要性. 地域研究11:47-51.
- 揚妻直樹, 2001. 秋田側白神山地地域におけるニホンザルの分布調査・2000年度報告書. 秋田県.
- 揚妻直樹, 2001. 白神山地山麓に生息するニホンザルの遊動: 個体レベルでの遊動パターンの解明. 京都大学霊長類研究所年報 31:137-138.
- 秋田土木事務所・株式会社復建コンサルタント, 1998. 平成10年度HF61-Y1道路環境調査業務委託(主)男鹿半島線(男鹿市戸賀地内)報告書.
- 秋田土建株式会社, 1999. (仮称)森吉ゴルフ場建設に伴う環境影響評価準備書.
- 秋田県, 1977. 秋田県史一巻. 加賀屋書店.
- 秋田県, 1982. 真木溪谷自然環境調査報告書.
- 秋田県, 1985. 粕毛川源流部自然環境調査報告書.
- 秋田県, 1986. 森吉山スキー場(仮称)建設計画に伴う環境影響調査報告書.
- 秋田県, 1988. 湯ノ岱立又峽線計画道路自然環境現地調査報告書.
- 秋田県, 1990. 自然環境保全地域等調査報告書田沢湖水上地域.
- 秋田県, 1991. 自然環境保全地域等調査報告書三途川溪谷.
- 秋田県, 1991. 都市計画道路(能代高速線、二ツ井高速線)環境影響評価書.
- 秋田県, 1992. 自然環境保全地域等調査報告書八塩山地域.
- 秋田県, 1993. 大館能代空港整備事業に係る環境影響評価準備書.
- 秋田県, 1995. 能代市地先公有水面における廃棄物等最終処分場設置に係る環境影響評価書.
- 秋田県, 1996. 都市計画道路(根下戸商人留線)環境影響評価書.
- 秋田県, 1996. 都市計画道路(本荘高速線)環境影響評価書.
- 秋田県, 1997. 都市計画道路1・3・1号内小友和合線(仮称)【大曲西道路】環境影響評価準備書.
- 秋田県, 1997. 都市計画道路六郷大曲神岡線環境影響評価書.
- 秋田県, 1999. 都市計画道路(仁賀保高速線、本荘南高速線)環境影響評価書.
- 秋田県・自然科学調査事務所, 1993. 河辺町岩見三内地区環境影響調査業務報告書.
- 秋田県秋田空港管理事務所・パシフィックコンサルタンツ株式会社, 1997. 秋田空港滑走路延長調査環境影響調査業務自然環境現地調査中間報告書.
- 秋田県土木部河川課, 1993. 真木ダム環境現況調査報告書.
- 秋田県土木部河川課, 1993. 平成5年度真木ダム環境調査業務報告書.
- 秋田県教育研究所, 1967. 秋田県郷土教育資料生物編. 秋田県教育研究所.
- 秋田県長木ダム建設事務所・株式会社アイ・エヌ・エー, 1998. 長木川総合開発事業自然環境調査業務報告書.
- 秋田県農政部, 1999. 平成10年度植物防疫年報. 秋田県農政部.
- 秋田県太田町・国際航業株式会社, 1989. 町道横沢バチ沢線(奥産道路)環境調査業務委託報告書.
- 秋田県林務部, 1983. 秋田のツキノワグマ. ツキノワグマ総合調査報告. 秋田県林務部.
- 秋田県林務部, 1998. 平成9年度版秋田県林業統計. 秋田県林務部.
- 秋田県師範学校・秋田県女子師範学校, 1983. 秋田県総合郷土研究. 東洋書院.
- 秋田市, 1989. 太平山リゾートパーク整備事業環境影響評価調査報告書.

- 青森県, 2000. 青森県の希少な野生生物 - 青森県レッドデータブッカー. 青森市. 283pp.
- 千葉徳爾, 1995. オオカミはなぜ消えたか. 新人物往来社.
- 遠藤公男, 1976. クロホオヒゲコウモリの妊娠例と飛翔. 哺乳動物学雑誌 6(5,6):259-260.
- 橋本光正, 1955. 男鹿半島門前に於ける"こうもりの窟"のこうもり棲息現状に就いて. 生物秋田 2:18-21.
- 平凡社, 1996. 日本動物大百科哺乳類I. 平凡社. 156pp.
- 平凡社, 1996. 日本動物大百科哺乳類II. 平凡社. 155pp.
- 樋口広芳, 1996. 保全生物学. 東京大学出版会. 253pp.
- 樋口輔三郎・柴田義春・藤岡浩・林知己夫, 1991. 秋田駒ヶ岳における哺乳類の生息環境解析. 森林野生動物研究会誌 18:26-31.
- 哺乳類分布調査科研グループ, 1979. カモシカ・シカ・ツキノワグマ・ニホンザル・イノシシの全国的生息分布ならびに被害分布. 生物科学 31:96-112.
- 藤岡浩, 1981. ノウサギ等の生息数予測に関する研究. 昭和56年度秋田県林業センター業務報告:137-159.
- 五十嵐和広, 1971. 八郎潟におけるネズミ類の動態. 秋田生物 15:4-6.
- 五十嵐和広, 1975. 秋田駒ヶ岳における小型哺乳類の調査結果(第1報). 生物秋田 19:7-9.
- IUCN, 1996. 1996 IUCN Red list of threatened animals. IUCN, Gland, 368pp.
- IUCN, Species Survival Commission, 1999. Draft Guidelines for the Application of IUCN Red List Criteria at National and Regional Levels. IUCN Home Page.
- 岩手県, 2001. 岩手県の希少な野生生物: いわてレッドデータブック. 岩手県.
- 株式会社コクド, 1994. 森吉・阿仁スキー場拡張計画環境影響調査報告書.
- 環境庁, 1993. 日本産野生生物目録-本邦産野生動植物の種の現状-脊椎動物編. 80pp.
- 環境庁, 1998. レッドリスト. 環境庁ホームページ.
- 河辺町, 1985. 河辺町史. 河辺町.
- 川本芳, 1997. ミトコンドリアDNA変異を利用したニホンザル地域個体群の遺伝的モニタリング. ワイルドライフ・フォーラム 3:31-38.
- 建設省東北地方建設局, 1986. 米代川水系阿仁川ダム建設事業環境影響評価書.
- 建設省東北地方建設局, 1997. 雄物川水系成瀬ダム建設事業環境影響評価準備書.
- 建設省東北地方建設局, 1999. 都市計画道路鷹巣大館高速線(仮称)環境影響評価方法書(事業者案).
- 建設省東北地方建設局・秋田工事事務所・株式会社福山コンサルタント, 1995. 平成6年度象潟岩城地区補足環境調査報告書.
- 小林恒明, 1981. 日本産アカネズミGroupの分類. 哺乳類科学 42:27-33.
- 国立公園協会, 1995. 平成6年度特定地域自然林総合調査報告書(白神山地自然環境保全地域総合調査報告書).
- 協和村郷土誌編纂委員会, 1968. 協和村郷土誌. 仙北郡協和村教育委員会.
- 前田喜四雄, 1984. 日本産翼手目の採集記録(I). 哺乳類科学 49:55-78.
- 松山確郎, 1935. 本県哺乳動物雑誌. 秋田県師範学校校友会誌 67:21-32.
- 宮城県, 2001. 宮城県の希少な野生動植物-宮城県レッドデータブッカー. 宮城県.
- 宮尾嶽雄, 1981. アカネズミ類・ヤチネズミ類の地理的変異. 哺乳類科学 42:35-49.
- 最上禄平, 1999. 阿仁・小又川流域森吉山の野鳥と動物マップ.
- 向山満, 2000. ヒナコウモリM13705の秋田市における回収報告. コウモリ通信 8, (2):3.
- 奈良修介・豊島昂, 1967. 秋田県の考古学. 吉川弘文館.
- 日本哺乳類学会, 1997. レッドデータ日本の哺乳類. 文一総合出版. 279pp.
- 日本自然保護協会, 1963. 鳥海山国定公園候補地学術調査報告.
- 日本野生生物研究センター, 1991. 秋田県カモシカ生息状況調査報告書.
- 小笠原暁, 1985. 秋田のけものたち. 秋田魁新報社.
- 男鹿市, 1964. 男鹿市史. 男鹿市.
- 男鹿市史編纂委員会, 1995. 男鹿市史. 上巻. 男鹿市.
- 太田雄治, 1997. マタギ, 消えゆく山人の記録. 慶友社.

- 長田雅彦, 1977. 最後の狩人たち－阿仁マタギと羽後鷹匠－. 無明舎出版.
- 式年遷座記念誌刊行会, 1997. 鳥海山－自然・歴史・文化－. 鳥海山大物忌神社.
- 新田沢湖町史編纂委員会, 1997. 新田沢湖町史. 田沢湖町.
- 森林野生生物研究会, 1997. 森林野生動物の調査－生息数推定法と環境解析－. 共立出版.
- Sugiyama, Y., Ohsawa, H., 1982. Population dynamics of Japanese monkeys with special reference to the effect of artificial feeding. *Folia Primatol* 39:238-262.
- 庄内昭男・石川恵美子, 1990. 秋田市新屋浜貝塚採集資料－野目久米蔵コレクションより－. 秋田県立博物館研究報告15:45-60.
- 昭和町誌編さん委員会, 1986. 昭和町誌. 昭和町.
- 田中政行, 2000. 田沢湖町小和瀬でニホンコテングコウモリを確認. 秋田自然史研究 40:47.
- 東北電力株式会社, 1990. 上の岱地熱発電所環境影響調査書.
- 東北ニホンザルの会・ニホンザル保護管理のためのワーキンググループ, 1997. ニホンザル保護管理のためのデータ・ベース. 東北地方のニホンザルステータスレポート(1996年版).
- Yoshiyuki, M., 1971. A new bat of the *Leuconoe* group in Genus *Myotis* from Honsyu, Japan. *Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo*, 14:177-184.
- Yoshiyuki, M., 1989. A Systematic Study of the Japanese Chiroptera. 242pp. National Science Museum. Tokyo.

# 鳥類 概説

秋田県は西側が日本海に面し、東側には奥羽山脈が南北に連なり、脊梁沿いにブナ林が残存している地域がある。青森県との県境には白神山地があり、その一部が世界遺産に登録されている。

また県内には米代川および雄物川という二大河川があり、米代川は能代市から北に、雄物川は秋田市から南に揚々と横たわっている。その沿線には広大な水田地帯が広がっている。

このように秋田県土は天然ブナ林に代表される良好な自然環境のほか、日本海沿岸、農耕地帯、二次林など極めて多様性に富んだ環境であり、300種を越える鳥類が生息している。

奥羽山脈沿いには北から八幡平、乳頭山、森吉山、和賀岳、栗駒山と標高1000mを越す山塊が連なり、亜高山から高山帯に生息するビンズイ、イワヒバリ、カヤクグリ、ホシガラス等が生息しており、ブナ林帯では極めて多くの鳥類が生息・繁殖している。なかでも比較的生息個体数の少ない鳥類はコマドリ、ルリビタキ、コルリ、クロジ、キバシリ、ブッポウソウ、アカショウビン等であるが、近年ブナ林帯の溪流でシノリガモの繁殖が栗駒山、田代岳、白神山地等で確認され、話題を呼んでいる。その詳細な生態の解明に向け調査が行われている。本種はこれまで殆どがシベリア方面から冬鳥として飛来し、沿岸の岩礁地帯で越冬すると云われていた。しかし、その生息数も少ないことから、冬鳥として飛来するのか、本州や北海道で繁殖したものが冬季沿岸で認められるのか判然としない。

沿岸部ではクロサギ、コアジサシ、オオジシギ、ホオアカ、コシアカツバメ等が生息個体数は少ないものの繁殖している。クロサギは暖帯性のサギの仲間であるが男鹿半島と象潟沿岸に少数ながら繁殖し、コアジサシも現在少数が雄物川の中州で繁殖している。以前には大潟村や秋田市から男鹿市に至る海浜で大きなコロニーで繁殖していたが、近年は大きなコロニーは観察されていない。オオジシギ、ホオアカなどは少数が県内の草原、湿地等で繁殖している貴重な鳥類である。

また冬鳥のコクガンも数少ないながら毎年男鹿半島および象潟沿岸に飛来するのも貴重である。

なかでも、日本全体でも一時幻の鳥と云われたオオセッカが大潟草原に多数が繁殖したことがあったが、現在そこには全く繁殖していない。この大潟草原は現在も鳥獣保護区特別保護地区となっており、オオセッカの再繁殖が望まれている。この大潟草原はオオセッカの他、オオジュリン、コジュリン、ホオアカ、コヨシキリ、オオヨシキリ、オオヨシゴイ等の草原性の鳥類の繁殖地として極めて貴重な存在である。更に本草原にはチュウヒという草原性の猛禽類が繁殖しているのも貴重である。

1978年には、森吉山ノロ川地区で、本州で初めてクマゲラの繁殖が記録され、現在もひとつがい毎年繁殖し続けているのは特筆に値する。本種は日本産キツツキ類では最も大型で、ハシボソガラス程の大きさであり、本州では白神山地を含め、奥羽山脈の標高約600mのブナ林で、大木がまとまって残存する林で繁殖している。本県では今のところ森吉山のみで繁殖が知られている。クマゲラは営巣木として、直立した下枝のないブナの木で地上約10~13mの所に大きな穴をあけて営巣する。

また、ここ十数年以前から大潟村を中心として、マガン、ヒシクイの仲間が、特に北帰行の折り、2月下旬から3月末に大集結し、雪が解けるに従い、能代市から北側の米代川沿いの水田地帯で落ち穂を拾っているのも見ごたえがある。

森林生態系の頂点に位置しているといわれる猛禽類、特にイヌワシ、クマタカがブナ帯から低山帯にかけて営巣、繁殖している。イヌワシは現在知られているのは9つがいである。

一方、クマタカは19つがいの営巣が確認されているものの、調査が進むにしたがって、もっと多くの営巣地が知られるようになるであろう。

イヌワシはブナ林帯の岩棚や天然スギの太い横枝に営巣し、その県内の分布は白神山地から奥羽山脈、鳥海山であるのに対し、クマタカは低山帯からブナ林帯下部の天然スギやキタゴヨウ等の大

木に営巣している。

更にその他の猛禽類であるオオタカは海岸砂防林からブナ林帯下部の森林で、多くはクロマツ、アカマツ、カラムツ等に営巣することが多い。その他、ハチクマ、ノスリ、サシバ、ミサゴ等多くの猛禽類が低山帯で繁殖している。なかでもミサゴが近年多く見受けられるようになった。沿岸の後背林や大河川付近、ダム湖周辺部で繁殖している。

これら大型猛禽類が多く生息し、繁殖するだけの餌動物の生息を可能にしている多様な自然環境が豊富であるからであろう。

(小笠原暁)

カモ目カモ科

絶滅危惧種 I A類

## シジュウカラガン

*Branta canadensis* (Linnaeus,1758)

環境省：絶滅危惧 I A類



◆**国内外の分布** シベリア北東部、コマンドル諸島、アリューシャン列島等で繁殖している。国内では冬季、北海道、本州に飛来する。

◆**県内の分布** 大湊村、能代市

◆**本種の概要** 冬鳥として、北海道、本州に飛来する。港湾や外海に面した海岸、浅瀬、湖沼、湿地などで小群で採餌行動する。

◆**本種の現状** 県内では、大湊村でマガンやヒシクイの群のなかに少数の個体が観察されている。

◆**生存に対する脅威** 個体数が少なく、繁殖地の環境悪化が懸念される。

◆**現在講じられている保護対策** 国内希少野生動物種。現在、仙台市八木山動物園とカムチャツカで増殖が計画されている。

(佐藤磯男)

カモ目カモ科

絶滅危惧種 I A類

## ハクガン

*Anser caerulescens* (Linnaeus,1758)

環境省：情報不足



◆**国内外の分布** シベリア北東部、北極海周辺などで繁殖し、冬季はアジア沿岸、北アメリカ北部にまで南下する。国内では冬季に北海道、本州に少数飛来する。

◆**県内の分布** 大湊村、能代市、長木川

◆**本種の概要** 冬鳥として国内に飛来し、11月下旬から3月頃まで留まるが数は少ない。マガンやヒシクイなどと共に行動することが多い。

◆**本種の現状** 冬季に大湊村や県北部の河川流域などに少数の個体が飛来している。

◆**生存に対する脅威** 個体数がきわめて少ない。

(佐藤磯男)

タカ目タカ科

絶滅危惧種 I A類

## イヌワシ

*Aquila chrysaetos* (Linnaeus,1758)

環境省：絶滅危惧 I B類



◆**国内外の分布** 北半球に広く分布する。国内では本州には広く分布する。北海道や九州ではごく少数の生息がみられる。

◆**県内の分布** 低山帯から高山帯にかけて少数が生息しており、主に崖や針葉樹の大木などに営巣する。

◆**本種の概要** 生態系の頂点に立つ種として重要な位置付けがされているが、全国的には生息地の調査が不十分で、正確な分布状況は把握されていない。

◆**本種の現状** 東北地方の繁殖状況は比較的環境が良好なためか一応安定しているようだが、関西などの自然林が少ない地域では繁殖率が低下しており、継続的に動向を調査していく必要がある。県内には秋田駒ヶ岳や鳥海山など以前から生息が確認されていた地域のほか、他の地域でも最近では少数が確認されている。

◆**生存に対する脅威** 林道、ダム、森林伐採など生息環境の破壊が起きると、餌不足や営巣地の放棄など生息に影響を与える場合があり、大規模な開発に際しては慎重な対応が必要である。

◆**現在講じられている保護対策** 国指定天然記念物、国内希少野生動物種。一部において鳥獣保護区の設定がされている。

(泉 祐一)

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

キツツキ目キツツキ科

絶滅危惧種 I A類

## クマゲラ

*Dryocopus martius* (Linnaeus, 1758)

環境省：絶滅危惧II類



◆**国内外の分布** ユーラシア大陸の寒帯、亜寒帯、温帯北部に広く生息する。国内では北海道、青森県、秋田県、岩手県で生息が確認されている。また不確実であるが他県でもみられたという情報がある。

◆**県内の分布** これまで確実に生息が確認されている地域は、森吉山、白神山地および八幡平などの原生林である。他の地域でも採餌跡やねぐら穴などは確認されているが、生息が直接確認された地域はまだない。

◆**本種の概要** 北海道では主にトドマツ林やブナ林などの原生林に生息し、本州ではブナ林で繁殖する。本州では昭和9年に八幡平で捕獲されているが、当時は北海道から飛来したものと考えられていた。昭和50年に森吉山において写真撮影により生息が確認され、さらに昭和53年には繁殖も確認された。その後白神山地でも生息が確認された。

◆**本種の現状** 生息が確認された森吉山と白神山地は保護対策がとられているが、他の地域では調査が不十分であり、今後は速やかに十分な生息確認調査を行う必要がある。

◆**生存に対する脅威** 近年はブナ林の過度な伐採が行われなくなったが、県内では大木が林立する緩斜面のブナ林はほとんど無くなってしまい、本種の生息環境は非常に狭められている。これ以上の原生林の破壊は、生物多様性の観点からも止めなければならない。

◆**現在講じられている保護対策** 国指定天然記念物。森吉山の繁殖地は、国設の鳥獣保護区特別保護地区となり、伐採が規制されている。また、白神山地では自然環境保全地域、世界遺産となり、こちらも保護されているが、周辺地域で生息が確認された場合、すみやかに保護対策を講ずる必要がある。他の地域でも今後確認される可能性があり、森林の保護対策が重要となる。

(泉 祐一)

スズメ目ウグイス科

絶滅危惧種 I A類

## オオセツカ

*Locustella pryeri* (Seeböhm, 1884)

環境省：絶滅危惧 I B類



◆**国内外の分布** ウスリー、中国東北部で繁殖、中国中部で越冬する。国内では青森、秋田、茨城、千葉で繁殖するが局地的である。ほかに、国内数ヶ所で確認記録が認められる。

◆**県内の分布** 大湊村、天王海岸

◆**本種の概要** 国内で唯一の繁殖地であった宮城県のヨシ原から姿を消して以来、幻の鳥として絶滅が懸念されていたが、青森県、次いで秋田県から繁殖の報告があり、注目された。

◆**本種の現状** 八郎潟干拓地である大湊村西部の繁殖地は、特定鳥獣生息地として国の鳥獣保護区特別保護地区に指定されている。しかし、指定後本種の個体数は減少し、現在では生息がほとんど確認されていない。生息環境の保全を含めて、動向を見守る必要がある。

◆**生存に対する脅威** 繁殖環境であるヨシなどの繁茂する低地湿性草原は、長期間同じ環境を維持することは極めて難しい上、人為的な整備や開発に伴って環境が容易に変化されやすい。

◆**特記事項** 指定地の環境保全と周辺環境の精査を実施するとともに、定期的な生息調査を重ねる必要がある。

◆**現在講じられている保護対策** 国内希少野生動物種、国設鳥獣保護区特別保護地区（大湊村特定鳥獣生息地）

(高橋一郎)

スズメ目ウグイス科

絶滅危惧種 I A類

## セツカ

*Cisticola juncidis* (Rafinesque, 1810)

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** ユーラシア、アフリカ、オーストラリアの各大陸の中緯度から赤道付近、および東南アジアなど広く分布する。国内では本州以南で繁殖、北方の個体は冬季南下する。

◆**県内の分布** 大湊村、秋田市小泉潟公園、雄物川河川敷

◆**本種の概要** 比較的温暖な草原に生息するが、高原や河川敷・海岸部などの草原にも認められる。単独またはつがいで行動することが多い。飛行時の特徴や鳴き声から確認されるが、繁殖に関する調査・研究は十分ではない。

◆**本種の現状** 分布域からすれば、絶滅を危惧すべきではないが、本県においては、極めて稀にしか観察されない。生息環境は、オオセツカと同様のヨシを中心とする湿性草原である。

◆**生存に対する脅威** ヨシなどによって構成される草原は、環境が変化しやすい上に、整備、開発の対象にされやすい。特定の環境でしか生息できない種であることから、環境保全とともに生息状況を見守る必要がある。

(高橋一郎)

コウノトリ目サギ科 絶滅危惧種 I B類  
**オオヨシゴイ** *Ixobrychus eurhythmus* (Swinhoe,1873)  
環境省：絶滅危惧 I B類



- ◆**国内外の分布** 中国やウスリー地方からボルネオ島やジャワ島など広範囲に生息している。国内では北海道、本州に夏鳥として生息している。
  - ◆**県内の分布** 大潟村、若美町
  - ◆**本種の概要** 北海道、本州では夏鳥として湿地の草原や湖畔、河畔などの草原に生息し、繁殖している。
  - ◆**本種の現状** 全国的にも減少傾向にあり、本県では大潟村、若美町などの限られた場所ではしか観察されていない。
  - ◆**生存に対する脅威** 繁殖環境である低地湿性草原は、長期的に同じ環境を維持することが困難である上に、人為的な土地整備や開発に伴って環境が容易に変化されやすい。
- (佐藤磯男)

コウノトリ目サギ科 絶滅危惧種 I B類  
**クオサギ** *Egretta sacra* (Gmelin,1789)  
環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** 韓国の済州島、台湾、フィリピン諸島、スンダ列島、マレーシア、オーストラリア北部など広範囲に生息している。国内では、本州以南の海岸に広く生息している。
  - ◆**県内の分布** 男鹿市、象潟町
  - ◆**本種の概要** 本州以南の海岸の岩礁地帯に生息し、樹木の上や岸壁の棚の上などで繁殖し、留鳥として生息している。
  - ◆**本種の現状** 象潟海岸、男鹿半島の岩礁地帯で周年生息し、男鹿半島では繁殖が確かめられているが、個体数は少ない。
  - ◆**生存に対する脅威** 比較的人家から離れた岩礁地帯に生息しているが、個体数が少ない。また、近年生息地に多くの釣り人が訪れることなどから、生息環境が変化している。このことから生息数が減少することが考えられる。
- (佐藤磯男)

カモ目カモ科 絶滅危惧種 I B類  
**コクガン** *Branta bernicla* (Linnaeus,1758)  
環境省：絶滅危惧 II類



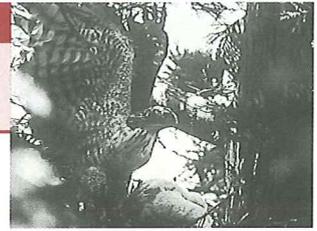
- ◆**国内外の分布** シベリアの北極海沿岸に分布し、冬季はアジアでは中国、朝鮮半島、日本などの沿岸に生息する。国内では冬季に北海道、本州、九州などで越冬している。
  - ◆**県内の分布** 男鹿市、象潟町
  - ◆**本種の概要** 本種は冬季に飛来し、本州、九州の海岸部で越冬する冬鳥である。海岸の浅瀬や磯浜でアマモ、アオサなどの海藻類を採餌する。
  - ◆**本種の現状** 本県では象潟海岸や男鹿半島南岸に毎年飛来しているが、多いときで10数羽と個体数は少ない。
  - ◆**生存に対する脅威** 生息場所が餌となるアマモやアオサなどの繁茂している地域であるが、近年、これらの海藻・海藻類が減少している。
  - ◆**現在講じられている保護対策** 国指定天然記念物
- (佐藤磯男)

タカ目タカ科

絶滅危惧種 I B 類

クマタカ *Spizaetus nipalensis* (Hodgson, 1836)

環境省：絶滅危惧 I B 類



◆**国内外の分布** 南アジアから日本にかけて生息する。国内では北海道から九州まで、森林地帯に広く生息する。

◆**県内の分布** 大館市、秋田市、田沢湖町、東成瀬村、烏海山などの森林に局地的に生息する。

◆**本種の概要** これまで、本種の生息状況については、調査が不十分であったが、各種アセスメント等による調査が進むにつれて、少しずつ判明しつつある。生息地が原生林に限られていないことから、本種は生息環境に適応する能力が幾分あるものと考えられる。

◆**本種の現状** 県内ではブナ、ミズナラ、キタゴヨウ、スギなどの大木に営巣する。小形の哺乳類、野鳥やヘビ類などを餌とすることから、生息環境として原生林や二次林などの森林が必要である。県内では各種の調査が進むにつれて本種の生息状況が明らかにされつつある。まだ確認地点は少ないが、イヌワシよりは個体数は多い。

◆**生存に対する脅威** 森林の伐採や林道建設などにより、餌となる野生動物が減少したり、営巣を放棄したりすることがあり、また営巣木が直接伐られた後、そこには生息しなくなったことがあるため、開発計画の前には十分な調査が必要である。

◆**特記事項** 親鳥は神経質なため、場所によっては繁殖期は立ち入り制限などの対策が必要となる。

◆**現在講じられている保護対策** 国内希少野生動植物種

(泉 祐一)

タカ目タカ科

絶滅危惧種 I B 類

チュウヒ *Circus spilonotus* Kaup, 1847

環境省：絶滅危惧 II 類



◆**国内外の分布** シベリア南部、サハリン、中国、日本で繁殖し、日本や東南アジアで越冬する。国内では北海道、東北北部、石川県などの広いヨシ原で繁殖する。

◆**県内の分布** 県内では大潟村のヨシ原で繁殖する。

◆**本種の概要** 本種の生息環境は広いヨシ原であり、ネズミなどを食べる。国内では干拓などによりその生息可能な面積が減少しつつある。

◆**本種の現状** 県内では広域にヨシ原が残されている地域は少なく、大潟村のヨシ原を保全することが重要である。

◆**生存に対する脅威** 人間にとっては未利用地であるヨシ原は、他の生物にとっては重要な生息地でもあり、チュウヒも含めて、その総合的な保全対策が必要である。

◆**現在講じられている保護対策** 国設鳥獣保護区特別保護地区（大潟村特定鳥獣生息地）

(泉 祐一)

キツキ目キツキ科

絶滅危惧種 I B 類

アリスイ *Jynx torquilla* Linnaeus, 1758

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** ユーラシアの温帯、亜寒帯に広く分布する。冬季はインド、アフリカ北部、東南アジアにて越冬する。国内では北海道と本州北部で繁殖し、冬鳥として本州以南の各地へ漂行する。

◆**県内の分布** 県内では大潟村、天王町で繁殖したことがある。

◆**本種の概要** ヨーロッパでは減少しているというが、北海道ではよく見られるようである。東北北部ではまだ現状を正確に把握できてはいない。

◆**本種の現状** 小形で体色が樹皮の色と酷似しているため、非常に見つけにくい。個体数も少なく、主な餌となるアリ類も含めて早期に生態解明の調査が必要である。

◆**生存に対する脅威** 生態にまだ未解明な部分が多いために、不明である。

(泉 祐一)

カモ目カモ科

絶滅危惧種Ⅱ類

# トモエガモ

*Anas formosa* Georgi, 1775

環境省：絶滅危惧Ⅱ類



◆**国内外の分布** 東部シベリアに分布し、冬季は中国、朝鮮半島、日本などで越冬する。国内では北海道、本州、四国、九州などに生息している。

◆**県内の分布** 大潟村

◆**本種の概要** 冬鳥として飛来し、湖沼や河川、湿地などで生息するが、個体数は少ない。

◆**本種の現状** 冬鳥として、大潟村などに生息しているが、個体数は少ない。

◆**生存に対する脅威** 個体数が少ない。

(佐藤磯男)

鳥類

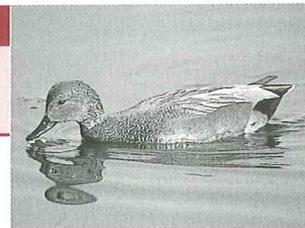
カモ目カモ科

絶滅危惧種Ⅱ類

# オカヨシガモ

*Anas strepera* Linnaeus, 1758

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** ユーラシアや北アメリカなどに生息している。国内では北海道、本州、四国、九州に生息している。

◆**県内の分布** 大曲市、男鹿市、天王町、大潟村

◆**本種の概要** 北海道では繁殖しているが、本州以南では冬鳥として飛来し、河川や沼沢地、湿地などに生息する。

◆**本種の現状** 大曲市の雄物川や船越水道で冬季に観察されているが個体数は少ない。

◆**生存に対する脅威** 個体数が少ない。

(佐藤磯男)

カモ目カモ科

絶滅危惧種Ⅱ類

# ビロードキンクロ

*Melanitta fusca* (Linnaeus, 1758)

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** シベリア、カムチャツカ半島、北千島等に生息し繁殖している。冬季は朝鮮半島、中国、日本などに南下する。国内では北海道以南に冬鳥として生息している。

◆**県内の分布** 男鹿市入道崎、八森町真瀬、由利海岸

◆**本種の概要** 冬鳥として飛来し、港湾や外洋に面した海岸近くの海上に生息している。

◆**本種の現状** 県内では冬季に八森町や男鹿市の磯浜で少数観察されている。

◆**生存に対する脅威** 個体数が少ない上に、餌となる小動物が減少する傾向にある。

(佐藤磯男)

- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD
- LP
- N

タカ目タカ科

絶滅危惧種Ⅱ類

ハチクマ *Pernis apivorus* (Linnaeus, 1758)

環境省：準絶滅危惧



◆**国内外の分布** ヨーロッパからアジアの温帯で繁殖し、冬季は熱帯へ移動して越冬する。国内では北海道と本州で繁殖する。

◆**県内の分布** 象潟町や能代市などで繁殖が確認されている。

◆**本種の概要** 北海道では希少種としてレッドデータブックに載せられている。青森県ではスズメバチが増えたことから一部では個体数が増加したとも言われているが、全国的にはその動向は不明である。

◆**本種の現状** 山地の森林地帯の樹木にかけられたノスリやオオタカの古巣を利用して営巣することがあるが、毎年同じ営巣木として利用するとは限らないことから継続的な調査は困難である。餌となるハチ類や小動物も未解明であるため、これらと併せて本種の生態について今後十分な調査が待たれる。

◆**生存に対する脅威** 生息地域が比較的低標高地にもあることから、伐採や林地開発により営巣地が奪われることがある。

(泉 祐一)

タカ目タカ科

絶滅危惧種Ⅱ類

オジロワシ *Haliaeetus albicilla* (Linnaeus, 1758)

環境省：絶滅危惧ⅠB類



◆**国内外の分布** ユーラシア北部に広く分布する。国内では北海道北部および東部で少数繁殖するほか、冬鳥として渡来する。記録は全国からあるが、特に北部日本に多い。

◆**県内の分布** 大館市、八郎潟、米代川、雄物川、玉川ダム

◆**本種の概要** 海岸、湖沼、河川など水辺の林に降り、獲物を狙う。北海道では、岩壁の多い海岸の原生林で観察される。

◆**本種の現状** 冬季間、冬鳥として渡来し、主に氷結した八郎潟の承水路や調整池（残存湖）で休息、採餌の行動が見られる。時に内陸部に移行する。個体数は少ない。主に魚食である。

◆**生存に対する脅威** 氷結した湖面は、野犬やカラス類などの餌場ともなり、共通する餌を奪い合うなどの競合がある。

◆**現在講じられている保護対策** 国指定天然記念物、国内希少野生動植物種

(高橋一郎)

タカ目タカ科

絶滅危惧種Ⅱ類

オオワシ *Haliaeetus pelagicus* (Pallas, 1811)

環境省：絶滅危惧Ⅱ類



◆**国内外の分布** アムール川下流域、オホーツク海沿岸、カムチャツカ、サハリン北部で繁殖し、ウスリー、朝鮮半島で越冬する。国内では冬鳥として北海道東部、東南部に渡来するほか、東北地方、中部地方の日本海側にも少数渡来する。

◆**県内の分布** 八郎潟、秋田市小泉潟公園、米代川、雄物川

◆**本種の概要** 海岸、湖沼、大きな河川などに現れ、近くの林や地上、流水の氷塊上等にとまっている。オジロワシと行動がよく似ており、ゆるやかな動きをしながら、カラス類やカモ類などを威圧するが、争う様子は少ない。主に魚食である。

◆**本種の現状** オジロワシと同様に八郎潟の氷結した水域で観察されるほか、大きな河川や八郎潟周辺でもわずかに確認される。オジロワシより個体数は少ない。

◆**生存に対する脅威** 個体数が少ない上に、繁殖地における環境の悪化が論評されている現状から、越冬地においても保護、環境保全の方策を探る必要がある。

◆**現在講じられている保護対策** 国指定天然記念物、国内希少野生動植物種

(高橋一郎)

タカ目タカ科 絶滅危惧種Ⅱ類  
ツ 三 環境省：該当なし  
*Accipiter gularis* (Temminck et Schlegel, 1844)



- ◆**国内外の分布** シベリア南部、東部、サハリン、千島南部、中国東部、朝鮮などで繁殖する。国内では全国で繁殖し、冬季は南下するが、日本に残るものもいる。
- ◆**県内の分布** 冬季に見られる程度で、詳しい繁殖生態は不明である。
- ◆**本種の概要** 国内最小のタカであり、市街地の公園から森林にかけて繁殖するが、詳しい生態はよく分かっていない。
- ◆**本種の現状** 冬季には大湊村などの平地で見られるが、小形であることや個体数が少ないことから繁殖期の観察事例があまりなく、今後の推移を注目したい。
- ◆**生存に対する脅威** 市街地やその近くの森で生息している個体は、住宅開発や森林の伐採などにより生息地を奪われる可能性がある。今後の詳しい生態調査が待たれる。

(泉 祐一)

タカ目タカ科 絶滅危惧種Ⅱ類  
ハ イ タ カ 環境省：準絶滅危惧  
*Accipiter nisus* (Linnaeus, 1758)



- ◆**国内外の分布** ユーラシア大陸と北アフリカに生息し、冬季はアフリカ、中東、インド等で越冬するものもいる。国内では北海道と本州で繁殖し、ほとんどは南日本で越冬する。
- ◆**県内の分布** 山林で繁殖する。冬季は平地でも見られる。
- ◆**本種の概要** 一部の地域では繁殖が確認されているが、全国的にはその実態は把握されていない。
- ◆**本種の現状** 過去にはトビやノスリほどいると言われていたが、近年は観察例が少ない。
- ◆**生存に対する脅威** 一時は農薬の影響により卵の殻が薄くなり繁殖成功率が低下したが、近年は回復しているようである。しかし個体数の増加は必ずしも顕著でなく、今後の動向を見極める必要がある。

(泉 祐一)

タカ目ハヤブサ科 絶滅危惧種Ⅱ類  
ハ ヤ ブ サ 環境省：絶滅危惧Ⅱ類  
*Falco peregrinus* Tunstall, 1771



- ◆**国内外の分布** 極地を除くほぼ世界中に生息する。国内では切り立った崖地があれば、海岸から山地まで繁殖する。
- ◆**県内の分布** 八森町、男鹿市、本荘市、象潟町、大曲市など各地で繁殖する。
- ◆**本種の概要** 全国的には主に海岸にある崖壁の繁殖地が多く確認されている。
- ◆**本種の現状** 人為的な影響のない崖地が営巣地となるが、そのような好適な環境は局地的にしか存在しないため、個体数が少ないと考えられる。
- ◆**生存に対する脅威** 観光開発、道路建設、岩石採取、写真撮影、密猟などによりその生息環境が脅かされる。また、餌を介して体内に農薬が過剰に蓄積するなど、その生息を危うくする要因が多い。
- ◆**現在講じられている保護対策** 国内希少野生動物種

(泉 祐一)

- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD
- LP
- N

タカ目ハヤブサ科

絶滅危惧種Ⅱ類

# チゴハヤブサ *Falco subbuteo* Linnaeus, 1758

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** ユーラシア大陸で広く繁殖する。国内では北海道と東北地方の農耕地に隣接した林や小さな森などで繁殖する。

◆**県内の分布** 県内各地の疎林や社寺林のスギやクロマツなどにカラスやカケスなどの古巣を利用して繁殖することが多い。

◆**本種の概要** 全国的には北日本に限り繁殖している個体数の少ない種である。

◆**本種の現状** 県内では局地的に繁殖していることが確認されているが、詳細な調査は不十分のままである。今後は生息環境の調査を含めて、その動向を把握しなければならない。

◆**生存に対する脅威** 人里に近い林では未調査のまま小規模な伐採や道路建設が行われることにより、餌の小動物や営巣木の減少、消滅が起こり、生息が脅かされることがある。

(泉 祐一)

タカ目ハヤブサ科

絶滅危惧種Ⅱ類

# コチョウゲンボウ *Falco columbarius* Linnaeus, 1758

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** ユーラシア、北アメリカ北部で繁殖し、アフリカ北部、インド、中国東部、アメリカ南部、西インド諸島で越冬する。国内では冬鳥として全国に渡来する。

◆**県内の分布** 大湊村、雄物川中・下流域

◆**本種の概要** 農耕地、草地、裸地、アシ原などに生息する。

◆**本種の現状** 冬季、大湊村では電柱や防災林などの頂に留まり、獲物を狙っている様子が認められる。個体数は少ない。

◆**生存に対する脅威** 生息する個体数が少ない。

(高橋一郎)

チドリ目カモメ科

絶滅危惧種Ⅱ類

# ミツユビカモメ *Rissa tridactyla* (Linnaeus, 1758)

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** シベリア東部、カムチャツカ半島、アリューシャン列島、アラスカなどで繁殖し冬季は中国沿岸や北アメリカなどで生息している。国内では冬鳥として北海道、本州、四国などに飛来する。

◆**県内の分布** 男鹿市、金浦町、天王町、横手市

◆**本種の概要** 北海道以南に冬季に飛来し、海岸や海上の岩礁、砂浜、河口などに生息する。希に暴風後に内陸部に飛来することもある。

◆**本種の現状** 本県では、男鹿市の南磯、天王町海岸などの他に横手市でも観察されているが、個体数は少ない。

◆**生存に対する脅威** 生息する個体数が少ない。

(佐藤磯男)

チドリ目カモメ科

絶滅危惧種Ⅱ類

# コアジサシ

*Sterna albifrons* Pallas, 1764

環境省：絶滅危惧Ⅱ類



◆**国内外の分布** ヨーロッパ、ロシア西部、中東、インド、東アジア、東南アジア、オーストラリア、アフリカ、北アメリカ中部、南アメリカ北部で繁殖し、北方のものは南方に渡って越冬する。国内では本州以南に夏鳥として渡来し、秋には大群をつくって南下してゆく。

◆**県内の分布** 大館市、能代市、秋田市、八郎潟、浅内沼、皆瀬川、皆瀬ダム、神宮寺岳、天王町天王海岸、秋田市小泉潟公園

◆**本種の概要** 海岸の砂礫地、砂浜、川原の砂礫地や砂地などに集団で営巣する。

◆**本種の現状** 海岸線から河岸までの砂地や小さな礫が敷き詰められた場所で繁殖する。岸近い海上や河川、湖でホバーリングしながら小魚を狙い、急降下して採捕する。繁殖地におけるなわばり意識は強く、近づいた人間や犬などを攻撃する。繁殖地となりうる地域は整備、開発の対象になりやすく、秋田県においても繁殖地は一定していない。

◆**生存に対する脅威** 繁殖のための砂礫地は、砂丘地や河川敷の整備、開発により、近年かなり減少している。また、これらの地域は人畜の侵入を受けやすいうえに、隣接地が整備、開発の対象になった場合、大型車の出入りが激しさを増すことになる。大地に直接産卵するためこれらの影響による生存率の低下は否めないことから、生存に対する脅威は他の鳥類に比べ、甚大である。

◆**現在講じられている保護対策** 国際希少野生動物種

(高橋一郎)

スズメ目サンショウクイ科

絶滅危惧種Ⅱ類

# サンショウクイ

*Pericrocotus divaricatus* (Raffles, 1822)

環境省：絶滅危惧Ⅱ類



◆**国内外の分布** ウスリー、朝鮮半島で繁殖し、冬季は中国南部から東南アジアに渡る。国内では本州、四国で夏鳥として渡来、繁殖する。

◆**県内の分布** 大館市、栗駒山、森吉山、太平山、西仙北町、神室山、秋田市仁別

◆**本種の概要** 低山から山地の広葉樹林内などに生息する。林縁部や林内の空地、大木の周辺などで観察される。

◆**本種の現状** 県内各地の山地や低山の落葉広葉樹林内において繁殖しているが、個体数は少ない。

◆**生存に対する脅威** 個体数が少ない上に、落葉広葉樹の伐採による生息環境の悪化が進んでおり、種の存続が危惧される。

(高橋一郎)

スズメ目モズ科

絶滅危惧種Ⅱ類

# チゴモズ

*Lanius tigrinus* Drapiez, 1828

環境省：絶滅危惧Ⅱ類



◆**国内外の分布** ウスリー、中国北東部、朝鮮半島で繁殖し、冬季は中国南部からマレー半島、インドネシアに渡る。国内では夏鳥として本州中部以北に渡来するが、局地的である。

◆**県内の分布** 大館市、横手市、乳頭山、男鹿市寒風山、秋田市小泉潟公園、千秋公園、高清水公園

◆**本種の概要** 夏鳥として飛来し、平地から山地までの落葉広葉樹林や針葉樹との混交林内に生息する。

◆**本種の現状** 県内各地での目撃例や繁殖例はあるが、個体数は少ない。夏鳥として局地的に渡来し、繁殖する。

◆**生存に対する脅威** 生息は局地的であり、個体数が少ないことから生息および繁殖環境を保全する必要がある。

(高橋一郎)

鳥類

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

スズメ目モズ科

絶滅危惧種Ⅱ類

# アカモズ

*Lanius cristatus* Linnaeus, 1758

環境省：準絶滅危惧



- ◆**国内外の分布** アジア大陸東部で繁殖し、冬季中国南部、インド、東南アジアで越冬する。国内では北海道から九州まで、夏鳥として繁殖するが、分布は局地的である。
- ◆**県内の分布** 大館市、森吉山、秋田市小泉瀧公園
- ◆**本種の概要** 夏鳥として飛来するが、局地的で繁殖例は少ない。
- ◆**本種の現状** 海岸砂防林から山地の落葉広葉樹林まで広い範囲で目撃されているが、個体数は少ない。
- ◆**生存に対する脅威** 生息は局地的であり、個体数が少ないことから生息および繁殖環境を保全する必要がある。

(高橋一郎)

スズメ目レンジャク科

絶滅危惧種Ⅱ類

# ヒレンジャク

*Bombycilla japonica* (Siebold, 1824)

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** シベリア東部から中国東北部、アムール、ウスリーに分布する。国内では冬鳥として各地に飛来する。
- ◆**県内の分布** 市街地から山地まで広く飛来するが個体数は少ない。
- ◆**本種の概要** 全国的に秋季、各地に飛来する。小さな群で行動し、時にはキレンジャクの群とも合流する。ブナ林などのヤドリギの実を好み、他にはノブドウ、ニシキギなどの実を食す。
- ◆**本種の現状** 確認できる個体数が少なく、全体の個体数の増減がつかめない。
- ◆**生存に対する脅威** 本来の生息環境であるブナ林の伐採。

(泉 祐一)

スズメ目キバシリ科

絶滅危惧種Ⅱ類

# キバシリ

*Certhia familiaris* Linnaeus, 1758

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** 北半球の温帯から亜寒帯まで分布する。国内では九州、四国から北海道にかけての森林に生息する。
- ◆**県内の分布** 森吉山、太平山、栗駒山などのブナなどの自然林に生息する。
- ◆**本種の概要** 南日本では亜高山の針葉樹林、北日本ではブナやオオシラビソなどの森、北海道ではコメツガなどの針葉樹林に主に生息するが、動きが早いことと、個体数が少ないことから、確認情報も非常に少ない。
- ◆**本種の現状** 本来個体数が少ないものかどうか、その生態と併せて不明である。ブナやオオシラビソなどの自然植生の森林に依存しているとすれば、近年伐採されてしまった全県の大面積の森林に生息していたものが生息地を奪われ、個体数が激減した可能性がある。
- ◆**生存に対する脅威** 自然植生の森の破壊。

(泉 祐一)

鳥類

EX  
EW  
CR  
EN  
VU  
NT  
DD  
LP  
N

スズメ目ホオジロ科

絶滅危惧種Ⅱ類

# ユキホオジロ

*Plectrophenax nivalis* (Linnaeus,1758)

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** 北極圏で繁殖し、冬季にシベリア東部、サハリン、中国、朝鮮半島などに生息する。国内では冬鳥として北海道、本州、九州に少数飛来する。

◆**県内の分布** 男鹿市、秋田市、大潟村、大館市

◆**本種の概要** 冬鳥として北海道、本州、九州に飛来する。小群で移動し地上で植物の種子を採餌することが多い。

◆**本種の現状** 県内では、男鹿市、秋田市、大潟村、大館市などで観察されているが、個体数は少ない。男鹿市入道崎では毎年のように飛来している。

◆**生存に対する脅威** 個体数が少ないことが問題である。また、男鹿市では入道崎の未舗装の駐車場や芝生などでヨモギ、メヒシバなどの種子を採餌しているが、このようなところは人為的な環境変化を受けやすい。

(佐藤磯男)

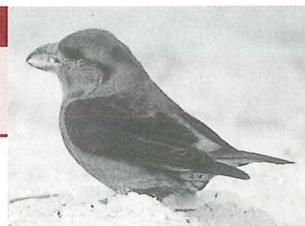
スズメ目アトリ科

絶滅危惧種Ⅱ類

# イスカ

*Loxia curvirostra* Linnaeus,1758

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** 北半球の亜寒帯針葉樹林、温帯の亜高山帯針葉樹林に広く分布する。国内では冬鳥であるが、北海道から本州中部にかけて少数が繁殖する。

◆**県内の分布** ごく稀に秋田市のマツ林などで確認する程度で、個体数は少なく、繁殖も未確認。

◆**本種の概要** 主に針葉樹のトウヒ、マツ、スギなどの種子を食べるために、くちばしが上下に交差しているのが特徴。その年の種子のなり具合によって繁殖率や冬季の移動が大きく左右される。

◆**本種の現状** 群で行動するので見つけやすいはずであるが、個体数が極端に少ないせいか確認がほとんどされていない。

◆**生存に対する脅威** マツ林の減少。

(泉 祐一)

カイツブリ目カイツブリ科

準絶滅危惧種

# ハジロカイツブリ

*Podiceps nigricollis* Brehm,1831

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** ユーラシア全域に生息している。国内では北海道、本州、四国、九州で生息している。

◆**県内の分布** 男鹿市、十和田湖、大潟村、小泉潟公園

◆**本種の概要** 北海道では繁殖しているが、本州以南では冬鳥である。

◆**本種の現状** 県内では男鹿市の波の比較的穏やかな南磯海岸や小泉潟、十和田湖などに冬季生息しているが、年によって個体数にばらつきがある。

◆**生存に対する脅威** 個体数が少ない。内陸の湖沼に生息するものは水質変化などの影響を受けやすい。

(佐藤磯男)

鳥類

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

カイツブリ目カイツブリ科

準絶滅危惧種

# ミミカイツブリ

*Podiceps auritus* (Linnaeus,1758)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** ユーラシアから北アメリカ大陸に分布している。国内では北海道以南に冬鳥として冬季に飛来する。
- ◆**県内の分布** 男鹿市、十和田湖、能代市、大潟村、小泉潟公園
- ◆**本種の概要** 国内では、冬季に飛来し内湾や湖沼で生息している。
- ◆**本種の現状** 県内では、男鹿市の波の静かな内湾や十和田湖、八郎潟残存湖などの湖沼で越冬しているが個体数は少ない。
- ◆**生存に対する脅威** 個体数が少ない。内陸の湖沼に生息するものは水質変化などの影響を受けやすい。

(佐藤磯男)

カイツブリ目カイツブリ科

準絶滅危惧種

# カンムリカイツブリ

*Podiceps cristatus* (Linnaeus,1758)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** ユーラシアから北アフリカにかけて広く分布している。国内では北海道、本州、九州に生息している。
- ◆**県内の分布** 小泉潟公園、八郎湖、船越水道などの湖沼や河口に冬鳥として飛来する。
- ◆**本種の概要** 北海道と本州北部では繁殖しているが、それ以外では冬鳥である。
- ◆**本種の現状** 県内では小泉潟公園や八郎湖などに冬季に生息しているが個体数は少ない。
- ◆**生存に対する脅威** 個体数が少ない上に、内陸の池沼に生息することから水質変化の影響を受けやすい。

(佐藤磯男)

ペリカン目ウ科

準絶滅危惧種

# ヒメウ

*Phalacrocorax pelagicus* Pallas,1811

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** カムチャツカ半島、北千島、アリューシャン列島、北アメリカ沿岸などで繁殖し冬季は南下する。国内では北海道で繁殖し、冬季は本州、九州に生息している。
- ◆**県内の分布** 男鹿市、八森町、天王町、象潟町
- ◆**本種の概要** 北海道の天売島や焼尻島、本州北部などで繁殖しているが、それより南では冬鳥である。
- ◆**本種の現状** 男鹿市、八森町、天王町などの海岸で冬季に生息している。特に男鹿市や八森町では断崖の岩棚をねぐらとしている。近年、個体数が減少傾向にある。
- ◆**生存に対する脅威** 冬季にねぐらとする場所が限定されているため、その場所の環境変化の影響を受けやすい。

(佐藤磯男)

コウノトリ目サギ科 準絶滅危惧種  
環境省：該当なし  
**ヨ シ ゴ イ** *Ixobrychus sinensis* (Gmelin,1789)

- ◆**国内外の分布** 中国東北部からインド、ビルマ、マレー半島、フィリピン諸島、ニューブリテン島などの広範囲にわたって生息している。国内では夏鳥として北海道、本州、佐渡、四国、九州などで繁殖しているが、本州中部以南では一部越冬している個体もある。
  - ◆**県内の分布** 能代市、大潟村、西仙北町、小泉潟公園
  - ◆**本種の概要** 水辺にあるヨシやマコモの草原などの背の高い草の中に生息し、繁殖もこれらの草原中で行われる。
  - ◆**本種の現状** 本県では、夏鳥として浅内沼、大潟村などの水辺の草地に生息し繁殖しているが、夜行性であり、日中はあまり活動しないことから観察例は少ない。
  - ◆**生存に対する脅威** 生息環境が水辺の草原であるので、長期にわたって同じ環境を維持することは困難である。また、人為的な整備や開発に伴って環境が容易に変化しやすい。
- (佐藤磯男)

コウノトリ目サギ科 準絶滅危惧種  
環境省：準絶滅危惧  
**ミ ゾ ゴ イ** *Gorsachius goisagi* (Temminck,1835)

- ◆**国内外の分布** 中国、台湾、パラオ諸島などに生息し、冬季はフィリピン諸島に渡来している。国内では本州以南の各地に夏鳥として生息している。
  - ◆**県内の分布** 田代岳、八幡平大沼、秋田市、大潟村、本荘市
  - ◆**本種の概要** 国内では夏鳥として飛来し、山地のスギ、ヒノキなどの針葉樹やクリ、ナラなどの落葉樹の混んだ林に生息し、薄暗い林間で生息することが多い。
  - ◆**本種の現状** 田代岳や八幡平などの山地や大潟村、高清水公園などの平地で観察されているが、個体数は少ない。近年、秋田市手形山で繁殖した例が知られている。
  - ◆**生存に対する脅威** 針葉樹や落葉樹の混んだ林内で生息しているが、近年、そのような森林が減少していることから個体数の減少が予想される。
- (佐藤磯男)

コウノトリ目サギ科 準絶滅危惧種  
環境省：該当なし  
**サ サ ゴ イ** *Butorides striatus* (Linnaeus,1758)

- ◆**国内外の分布** ウスリー地方、中国北部、朝鮮半島に生息している。国内では九州以北に夏鳥として生息し、繁殖もしている。九州以南の島嶼には冬季に生息している。
  - ◆**県内の分布** 西仙北町、大潟村、小泉潟公園、秋田市
  - ◆**本種の概要** 夏鳥として飛来し、水田、湖沼畔、河原などに生息し、それらの近くの雑木林やマツ林などで繁殖している。
  - ◆**本種の現状** 小泉潟、大潟村および秋田市向浜のクロマツ林で繁殖したが、観察例が少ない。
  - ◆**生存に対する脅威** 生息場所が水辺であるので、長期的に環境を維持することが困難である。また、人為的な開発や整備等により環境が容易に変化することが考えられる。
- (佐藤磯男)

- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD
- LP
- N

カモ目カモ科

準絶滅危惧種

# マガン *Anser albifrons* (Scopoli,1769)

環境省：準絶滅危惧

◆**国内外の分布** ユーラシアや北アメリカの北極圏に生息し、繁殖している。冬季は地中海沿岸、中国沿岸、メキシコなどまで南下する。国内では冬季に本州以南の積雪の少ない地方で越冬している。

◆**県内の分布** 大潟村、能代市

◆**本種の概要** 冬季に飛来し、水田、畑、湖沼、湿地などに大群で生活することが多い。宮城県の伊豆沼が本種の集団越冬地として良く知られている。

◆**本種の現状** 県内では冬季に大潟村周辺、能代市周辺などに飛来し集団で生活しているが、積雪のため採餌ができなくなると伊豆沼などに南下する。3月の渡りの頃になると再び同じ場所に大群で現れる。

◆**生存に対する脅威** 個体数はある程度維持されているので急激な変化はないと思われるが、採餌場所が主として水田などの農耕地であるので、転作などによる環境変化が考えられる。

◆**現在講じられている保護対策** 国指定天然記念物

(佐藤磯男)

カモ目カモ科

準絶滅危惧種

# オオヒシクイ *Anser fabalis middendorffii* Severtzov,1873

環境省：準絶滅危惧

◆**国内外の分布** シベリアで生息し、繁殖している。冬季は朝鮮半島や中国などで越冬する。国内では冬季に飛来し、積雪の少ない地方で越冬する。

◆**県内の分布** 大潟村、能代市

◆**本種の概要** 冬鳥として北海道以南に飛来し、マガンやヒシクイなどと共に水田、河川、湖沼、湿地などで生息している。

◆**本種の現状** マガンと同様に大潟村や能代市で冬季に飛来し、マガンやヒシクイなどと共に行動している。マガン、ヒシクイに比べ個体数は多い。積雪のため採餌ができなくなると伊豆沼などに南下する。3月の北帰行の頃に再び同じところに戻る。

◆**生存に対する脅威** 個体数は急激な変化はないと思われるが、採餌場所が水田などの農耕地であるので、転作などによる環境変化が考えられる。

(佐藤磯男)

カモ目カモ科

準絶滅危惧種

# ヒシクイ *Anser fabalis serrirostris* Swinhoe,1871

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

◆**国内外の分布** シベリア北部一帯で繁殖し、冬季は中国や台湾などまで南下する。

◆**県内の分布** 大潟村、能代市、小泉潟公園

◆**本種の概要** 冬鳥として北海道以南に飛来し、マガンなどと共に水田、河川、湖沼、湿地などで生息している。

◆**本種の現状** マガンと同様に、大潟村や能代市で冬季に飛来しマガンなどと共に行動している。積雪のため採餌ができなくなると伊豆沼などに南下する。3月の渡りの頃に再び同じところに戻る。

◆**生存に対する脅威** 個体数はある程度維持されているので急激な変化はないと思われるが、採餌場所が主として水田などの農耕地であるので、転作などによる環境変化が考えられる。

◆**現在講じられている保護対策** 国指定天然記念物

(佐藤磯男)

カモ目カモ科 準絶滅危惧種  
**ハシビロガモ** *Anas clypeata* Linnaeus,1758 環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** ユーラシアから北アメリカまで広範囲に生息している。国内では冬季に北海道以南の各地に生息する。
  - ◆**県内の分布** 大潟村、男鹿市、小泉潟公園
  - ◆**本種の概要** 冬季に北海道以南の各地に飛来し、海岸、河川、湿地、湖沼、干潟などに生息している。
  - ◆**本種の現状** 初冬の頃本県に飛来するが、個体数はあまり多くない。大部分は積雪期には南下し、越冬する個体はさらに少なくなる。
  - ◆**生存に対する脅威** 本種の生息場所の環境が、人為的な影響を受けて変化しやすい。
- (佐藤磯男)

カモ目カモ科 準絶滅危惧種  
**オオホシハジロ** *Aythya valisineria* (Wilson,1814) 環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 北アメリカ北部で繁殖し、冬季は中部から南部にかけて生息している。国内では冬季、希に飛来するが個体数はきわめて少ない。
  - ◆**県内の分布** 秋田市、羽後町
  - ◆**本種の概要** 北アメリカ大陸で繁殖し越冬している種であるが、まれに我が国に飛来している。
  - ◆**本種の現状** 県内では秋田運河と羽後町の足田堤で観察されているが、個体数は極めて少ない。
  - ◆**生存に対する脅威** 個体数が少ない。
- (佐藤磯男)

カモ目カモ科 準絶滅危惧種  
**クマガモ** *Melanitta nigra* (Linnaeus,1758) 環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** アジア北部、北アメリカ北部などで繁殖し、冬季は中国沿岸や北アメリカ中部まで南下する。
  - ◆**県内の分布** 本荘市、仁賀保町、金浦町、象潟町、男鹿市、八森町、大潟村、天王町、若美町、八竜町
  - ◆**本種の概要** 北海道では繁殖しているが、本州以南では冬鳥である。
  - ◆**本種の現状** 県内では冬季に海岸部と八郎潟残存湖などで生息が確認されている。
  - ◆**生存に対する脅威** 潜水性カモ類で魚網による捕獲が心配される。個体数がそれ程少なくはないので急激な変化はないと思われるが、生息場所の環境変化を受けやすいことが考えられる。
  - ◆**特記事項** 今後、生息状況を継続的に調査する必要がある。
- (佐藤磯男)

- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD
- LP
- N

タカ目タカ科

準絶滅危惧種

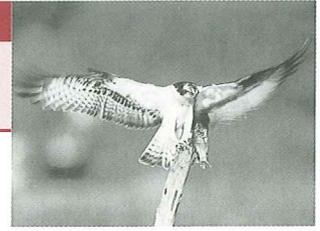
ミ

サ

ゴ

環境省：準絶滅危惧

*Pandion haliaetus* (Linnaeus,1758)



◆**国内外の分布** 北半球とオーストラリアの海岸、湖や河川に分布する。国内では全国に分布する。

◆**県内の分布** 県内では局地的に繁殖している。海岸の崖の上や山地の稜線の大木の樹頂に営巣する。

◆**本種の概要** 餌は魚類という変った猛禽類であり、水辺と深い繋がりがあるが、営巣地は水辺から数十キロも離れた山奥に作る場合もある。

◆**本種の現状** 過去には本種を見ることが少なかった。近年は魚への農薬汚染の減少により、いくらか個体数が増えたようにも見えるが、絶対数はやはり少ない。

◆**生存に対する脅威** 餌となる魚の農薬汚染と営巣木周辺の伐採や各種開発による改変。

(泉 祐一)

タカ目タカ科

準絶滅危惧種

オ

オ

タ

カ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

*Accipiter gentilis* (Linnaeus,1758)

◆**国内外の分布** 北半球に広く分布する。国内では本州以北で繁殖し、冬季は南下するものもいる。

◆**県内の分布** 県内各地で繁殖が確認されており、海岸のクロマツ防風林から雑木林のアカマツなどに営巣する。

◆**本種の概要** 全国的には少ない猛禽類と言われているが、鳥類から哺乳類まで幅広く餌とし、環境の変化への適応能力は比較的高いと考えられる。

◆**本種の現状** 近年の秋田県内では森林や農地など多様な環境を併せ持つ地域では、比較的生息個体数の多い種である。

◆**生存に対する脅威** 営巣木周辺の伐採や各種開発による改変。

◆**現在講じられている保護対策** 国内希少野生動物種

(泉 祐一)

タカ目タカ科

準絶滅危惧種

サ

シ

バ

*Butastur indicus* (Gmelin,1788)

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** 中国東北部と朝鮮に分布する。国内では九州から本州にかけて夏鳥として飛来する。

◆**県内の分布** 東北地方には、もともと飛来数が少ないためか、局地的にしか繁殖の確認がない。

◆**本種の概要** 水田と里山が一体となった環境を好み、主にカエルを餌とし、時にはヘビや昆虫なども食べる。水田のそばの林内に営巣する。

◆**本種の現状** 生息の確認が少ないことから、もともと飛来数が少ないと思われる。生息環境は、県内に広く残っていると考えられる。

◆**生存に対する脅威** 以前の水田には土のあぜがあり、このため餌のカエルはふんだんにいたが、近年は水路がコンクリートの三面張りとなり、餌となる動物の生息環境が極端に悪化している。

(泉 祐一)

# チョウゲンボウ *Falco tinnunculus* Linnaeus, 1758

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** ヨーロッパ、アジア、アフリカに分布する。国内では北海道と本州で繁殖し、冬季は国内で南下する。
- ◆**県内の分布** 各地の橋やビルなどの人工的な構造物で少数確認されている。本来は土の崖地の穴を利用して営巣する。
- ◆**本種の概要** 空中にて停止飛行しながらネズミなどを捕らえる猛禽類である。
- ◆**本種の現状** 都市部のビルの屋上や換気口、橋の透き間などにも営巣することから、人間の生活環境への適応力は強いと考えられる。また、本来の崖地が少ないことも生態を変えた理由と思われる。
- ◆**生存に対する脅威** 現在の営巣地は人為的な構造物が主であり、必ずしも安定した生息環境とは言えない。

(泉 祐一)

# ヒクイナ *Porzana fusca* (Linnaeus, 1766)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** インドから東南アジア、中国北部、東部、朝鮮、台湾にかけて分布している。国内では夏鳥として全国で確認されている。
- ◆**県内の分布** 大館市、本荘市、男鹿市、天王町、昭和町
- ◆**本種の概要** 水田や湿地または水辺に近い草原で繁殖している。しかし姿を見つけることは困難で、わずかに鳴き声で判断される。
- ◆**本種の現状** 以前は普通に観察される種類であったが、近年の確認数は減少している。
- ◆**生存に対する脅威** 水田の排水路やあぜのコンクリート化や湿地の減少に伴い観察例が少なくなったので、生息環境の保全を図る必要がある。

(高橋一郎)

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

# タマシギ *Rostratula benghalensis* (Linnaeus, 1758)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** アフリカ、アジアからオーストラリアまで広く分布する。国内では本州以南で繁殖する留鳥である。
- ◆**県内の分布** 男鹿市、天王町、昭和町、秋田市小泉潟公園
- ◆**本種の概要** からだを低くして前かがみに湿地内を歩き回ることから、目撃されることが少ない。わずかに鳴き声などから生息が確認される。
- ◆**本種の現状** 天王町の休耕田で繁殖していたことが報じられているが、全県的には観察例が少ない。
- ◆**生存に対する脅威** 生息地が湿地などであるため、開発、整備に伴う環境の変化が懸念される。

(高橋一郎)

チドリ目チドリ科

準絶滅危惧種

# イカルチドリ

*Charadrius placidus* J.E. et G.R.Gray,1863

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** ロシアウスリー地方、中国北部、東北部、朝鮮で繁殖し、中国南部からインド北部で越冬する。国内での記録は北海道から南西諸島までであるが、繁殖は本州、四国のみである。多くは留鳥であるが、北日本では夏鳥、南西諸島では冬鳥である。

◆**県内の分布** 横手市、大曲市、秋田市

◆**本種の概要** 川原の砂礫地や草地、小川や湖沼畔の砂地、水田などに生息し、繁殖する。

◆**本種の現状** 河川の中流域の川原で繁殖し、川岸などで越冬する。

◆**生存に対する脅威** 小石の混じる川原の消滅。砂利採取。

(高橋一郎)

チドリ目チドリ科

準絶滅危惧種

# シロチドリ

*Charadrius alexandrinus* Linnaeus,1758

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** 北半球の温帯および南アメリカ西海岸で繁殖し、北方のものは南に渡って越冬する。国内では北海道から南西諸島まで留鳥として繁殖するが、北日本では夏鳥、冬季は暖地に渡るものが多い。

◆**県内の分布** 八森町、能代市、本荘市、秋田市、八郎潟、男鹿市南磯、天王町天王海岸

◆**本種の概要** 河口の三角州、干潟、海岸の砂浜、川原の砂礫地、草地などに生息し、海上の岩礁にも群れることがある。夏季は河川の中流以下の川原や海岸の砂地で繁殖するが、概して下流や海岸に多い。コアジサシのコロニー内で繁殖することもある。

◆**本種の現状** 海岸部で繁殖する夏鳥であるが、越冬するものもある。個体数は減少傾向にある。

◆**生存に対する脅威** 小石の混じる川原の消滅。砂利採取。

(高橋一郎)

チドリ目シギ科

準絶滅危惧種

# ヤマシギ

*Scolopax rusticola* Linnaeus,1758

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** ユーラシア大陸北部、中部で繁殖し、冬季は南方に渡るものもいる。国内では北海道から本州中部、伊豆諸島で繁殖し、東北部から四国、九州、沖縄で越冬する。

◆**県内の分布** 大館市

◆**本種の概要** 山地の広葉樹林の根元や林内の草地で繁殖する。非繁殖期は村落の林、谷あいなどに棲み、畑や水田に出て採餌する。

◆**本種の現状** 夏は山地の湿地に生息し繁殖すると思われるが、営巣の確認は無い。平地では冬鳥である。しばしば人家の庭や公園などにも現れる。

◆**生存に対する脅威** 繁殖環境を保全する必要がある。

(高橋一郎)

鳥類

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

チドリ目シギ科

準絶滅危惧種

環境省：準絶滅危惧

# オオジシギ

*Gallinago hardwickii* (Gray,1831)

◆**国内外の分布** サハリン南部、ロシア極東部、千島列島南部で繁殖し、オーストラリア東部で越冬する。国内では北海道、本州、九州で繁殖する。

◆**県内の分布** 大館市、大潟村、能代市落合、男鹿市寒風山、仁賀保高原

◆**本種の概要** 北海道や東北地方では平地の草原や農耕地、湿地などで繁殖し、本州中部以南では高原の草原で繁殖する。渡り時は、他のシギ類同様に湿地や水田などで見られる。

◆**本種の現状** 繁殖期の独特な急降下やその時の羽音で繁殖の事実を確認できるが、営巣状況の確認は少ない。大潟村においては、街路樹の下草部分を利用した繁殖を確認した。また仁賀保高原においても多数繁殖している。

◆**生存に対する脅威** 平地および山麓部の草原は、かつての草刈場が利用されないまま放置されるなど、年々繁殖環境が変化している。

(高橋一郎)

チドリ目カモメ科

準絶滅危惧種

環境省：該当なし

# ワシカモメ

*Larus glaucescens* Naumann,1840

◆**国内外の分布** シベリア北部、ベーリング海諸島、アリューシャン列島、アラスカなどに分布している。冬季は中国南部やアメリカのカリフォルニア州などまで南下する。国内では冬季に北海道や本州北部に生息する。

◆**県内の分布** 男鹿市

◆**本種の概要** シベリア北部から北アメリカにかけて生息し、繁殖している。冬季に北海道や本州北部に飛来し越冬しているが個体数は少ない。

◆**本種の現状** 県内では、男鹿市の南磯でウミネコやオオセグロカモメなどの群れの中に数羽混じっているのが観察されている。

◆**生存に対する脅威** 本県が主たる越冬地ではないが、海岸の環境変化の影響を受けやすいと思われる。

(佐藤磯男)

チドリ目カモメ科

準絶滅危惧種

環境省：該当なし

# シロカモメ

*Larus hyperboreus* Gunnerus,1767

◆**国内外の分布** シベリア東部からカナダ北部にかけて生息し、冬季にはアメリカ合衆国の中部や中国沿岸まで南下する。国内では冬季に北海道、本州、四国などに生息する。

◆**県内の分布** 男鹿市、象潟町、十字町

◆**本種の概要** 冬鳥として北海道や本州、四国などで越冬している。北海道では比較的個体数が多いが、本州以南では少ない。

◆**本種の現状** 男鹿市、象潟町などの海岸にウミネコやオオセグロカモメなどと共に越冬しているが、中には内陸まで漂行する個体もある。本県では幼鳥と亜成鳥が多い。

◆**生存に対する脅威** 本県が主たる越冬地ではないが、生息地の環境変化の影響を受けやすいと思われる。

(佐藤磯男)

鳥類

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

フクロウ目フクロウ科

準絶滅危惧種

## ト ラ フ ズ ク

*Asio otus* (Linnaeus,1758)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** ユーラシア大陸と北アメリカに分布する。国内では本州中部以北で繁殖する。
- ◆**県内の分布** 大潟村、秋田市、平鹿郡の林内で少数が繁殖する。
- ◆**本種の概要** 餌として主にネズミを食べ、他に小鳥を食べる。営巣はスギなどの樹洞やカラス、タカ、リスなどの古巣を利用して作る。
- ◆**本種の現状** 繁殖地が必ずしも安定していないのは、借り物の巣を利用することも一因である。また、人里近くの大木の減少も同じく繁殖に影響する。
- ◆**生存に対する脅威** 社寺林、屋敷林、樹洞のある大木の減少等。

(泉 祐一)

フクロウ目フクロウ科

準絶滅危惧種

## コ ノ ハ ズ ク

*Otus scops* (Linnaeus,1758)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** シベリア東部、朝鮮、中国、東南アジア、ヒマラヤに広く分布する。国内では夏鳥として北海道から九州までの平地から山地の森林に生息する。
- ◆**県内の分布** 森吉山、藤里町などのブナ林に生息する。
- ◆**本種の概要** 落葉広葉樹の大木の樹洞に営巣する。夜行性であり、かつ枯れ葉や枯れ枝そっくりの体色のために目立たず、発見しにくい。餌は主に夜に飛ぶ昆虫を食す。全国的には大木の自然林が減少しているために、本種の生息環境が狭められていると考えられる。
- ◆**本種の現状** 県内ではブナ林で繁殖しているが、これまでに相当の面積が伐採されており、その個体数は大きく減少していると考えられる。
- ◆**生存に対する脅威** ブナ林などの自然林の伐採。
- ◆**特記事項** 渡りの時期にはよくビルのガラス窓に衝突死することがあり、透明なガラス窓から不透明なものに変えるなどビル建設の際の対策が必要である。

(泉 祐一)

フクロウ目フクロウ科

準絶滅危惧種

## オ オ コ ノ ハ ズ ク

*Otus lempiji* (Horsfield,1821)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 中国、台湾、朝鮮、東南アジアに広く分布する。国内では留鳥として全国的に分布するが、北日本のものは冬季、暖地に南下するものもいる。
- ◆**県内の分布** コノハズク以上に情報が少ない。鳥海山麓の百宅集落付近で繁殖例が知られている。
- ◆**本種の概要** コノハズクより一回りほど大きく、足指が羽毛で被われている。大木の樹洞に営巣する。全国的にも平地林や社寺林などの大木が減少しており、繁殖地が狭められていると考えられる。
- ◆**本種の現状** 営巣木の減少と併せて、広域にわたる広葉樹から針葉樹であるスギへの樹種転換により餌となる昆虫が減少して、その生息に大きく影響していると考えられる。
- ◆**生存に対する脅威** 大木の伐採と消滅。針葉樹の造林。

(泉 祐一)

フクロウ目フクロウ科

準絶滅危惧種

環境省：該当なし

# アオバズク

*Ninox scutulata* (Raffles,1822)

- ◆**国内外の分布** 朝鮮、中国東部、東南アジア、インドなどに分布する。国内では全国に夏鳥として飛来する。
- ◆**県内の分布** 秋田市の都市公園や丘陵地の大木のある森などで少数が繁殖する。
- ◆**本種の概要** 夜行性で、昆虫から小鳥まで食す。全国的にも営巣できる樹洞のある大木の減少により、本種も個体数が減少している。
- ◆**本種の現状** 神社やお寺、公園などに残るケヤキなどの大木の樹洞に営巣することがある。
- ◆**生存に対する脅威** 社寺林や広葉樹の減少。大木の老齢化による危険防止のための伐採。

(泉 祐一)

ブッポウソウ目カワセミ科

準絶滅危惧種

環境省：該当なし

# ヤマセミ

*Ceryle lugubris* (Temminck,1834)

- ◆**国内外の分布** アフガニスタン北東部からヒマラヤ、タイ北西部、ビルマ、ベトナム中部、中国南部に分布している。国内では九州以北に留鳥として分布している。
- ◆**県内の分布** 大館市、森吉山、能代八森、秋田市仁別、太平山、森吉山、八森真瀬、鳥海山、栗駒、薬師岳、露熊山、乳頭山、龍馬山、田代岳、抱返り、鹿角市大湯、藤里町素波里、二ツ井町、皆瀬ダム、粕毛川、能代市常磐、河辺町番鳥森、河辺町筑紫森、大内町芋川
- ◆**本種の概要** 平地から山地の溪流や河川、湖沼、ダム湖などに広く分布しているが個体数は少ない。
- ◆**本種の現状** 県内全域の山地の水辺を中心に広く分布しており、繁殖行動が確認されているが、個体数は少ない。
- ◆**生存に対する脅威** 生息環境の悪化が個体数減少に大きく影響を与えている。
- ◆**現在講じられている保護対策** 河川改修における配慮は以前より好転しているが、なお一層、採餌できる環境の保全に配慮を要する。

(高橋一郎)

ブッポウソウ目カワセミ科

準絶滅危惧種

環境省：該当なし

# アカショウビン

*Halcyon coromanda* (Latham,1790)

- ◆**国内外の分布** インド北東部、ネパール、ブータン、バングラデシュ、ビルマ北部、マレー半島、大スンダ列島、中国北東部および南西部、台湾、朝鮮半島南部に分布する。国内では夏鳥として全国に飛来する。
- ◆**県内の分布** 大館市、能代八森、秋田市仁別、森吉山、八森真瀬、鳥海山、皆瀬ダム、粕毛川、田代岳、石黒沢、河辺町番鳥森、由利町小菅野、河辺町筑紫森、男鹿市本山、雄勝町神室山麓
- ◆**本種の概要** 平地や山地の溪流や湖沼に沿った林内に生息し、樹洞等で繁殖する。
- ◆**本種の現状** 深山の溪流周辺の林内で確認される。姿や鳴き声に特徴があることから、生息報告は県内各地に及んでいるが、個体数は少ない。
- ◆**生存に対する脅威** 森林の伐採。

(高橋一郎)

鳥類

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

ブッポウソウ目ブッポウソウ科

準絶滅危惧種

# ブッポウソウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

*Eurystomus orientalis* (Linnaeus,1766)

- ◆**国内外の分布** シベリア東部、朝鮮、中国南部、東南アジアなどに広く分布する。国内では夏鳥として本州から九州にかけて飛来する。
- ◆**県内の分布** 白神山地、森吉山、鳥海山、皆瀬などで繁殖記録がある。
- ◆**本種の概要** 大木のある広葉樹の森から発生する大形の昆虫を餌とするために、森とは密接な関係がある。また、キツツキなどが開けた穴を利用して営巣する。全国的にも減少傾向にある種である。
- ◆**本種の現状** 県内では局地的に繁殖が確認されているが、個体数は少ない。広葉樹の森が減少したことが影響していると考えられる。
- ◆**生存に対する脅威** ブナ林などの自然林の伐採。

(泉 祐一)

スズメ目ツバメ科

準絶滅危惧種

# コシアカツバメ

環境省：該当なし

*Hirundo daurica* Linnaeus,1771

- ◆**国内外の分布** 中国中部・北部、朝鮮半島に生息し、冬季は中国南部、ビルマ周辺まで南下する。国内では夏鳥として本州、四国、九州に生息し、繁殖している。
- ◆**県内の分布** 八森町、秋田市、男鹿市、小泉瀧公園、仁賀保町、象瀧町
- ◆**本種の概要** 夏鳥として飛来し、平地の家屋や神社、寺院などの軒や天井、橋げたの下などに営巣する。小集団で隣り合って営巣することが多い。
- ◆**本種の現状** 本県では、積雪量の少ない海岸部に夏鳥として飛来し、民家やビルディングなどの軒下に営巣している。近年、やや減少傾向にある。
- ◆**生存に対する脅威** 本種が生息する人家周辺の環境が、餌となる小昆虫の生息に不適な状況になっていることが考えられる。

(佐藤磯男)

スズメ目セキレイ科

準絶滅危惧種

# ビンズイ

環境省：該当なし

*Anthus hodgsoni* Richmond,1907

- ◆**国内外の分布** ユーラシア東部、ヒマラヤの針葉樹林に分布する。国内では北海道から四国にかけて分布する。
- ◆**県内の分布** 八幡平や鳥海山などの針葉樹やブナ林などで繁殖する。
- ◆**本種の概要** セキレイの仲間で、枝先に止まってさえずるために雄は目立ちやすい。昆虫や種子を食べる。
- ◆**本種の現状** 亜高山帯の開けた針葉樹林や草原などの生息地は、伐採や開発があまり進まないために、ある程度は安定した生息環境が維持されていると言えるが、ブナ林などの広葉樹林の生息地は伐採が極端に行われてしまい、生息環境は悪化していると考えられる。
- ◆**生存に対する脅威** 森林の伐採。山地の道路建設や観光開発等。

(泉 祐一)

スズメ目レンジャク科 準絶滅危惧種  
環境省：該当なし  
**キレンジャク** *Bombycilla garrulus* (Linnaeus,1758)

- ◆**国内外の分布** スウェーデンからシベリア東部、カムチャツカ半島、アラスカに分布する。国内では冬鳥として飛来する。
  - ◆**県内の分布** 全県的に飛来するが、少数の群れが時折見られ、年によって変動する。
  - ◆**本種の概要** ヒレンジャクよりは個体数が幾分多い。少数が群れで行動し、ヤドリギなどの木の実を好んで食べる。
  - ◆**本種の現状** 飛来数は年により変動が大きい。生態に関する情報が少なく、全国的視野からの長期にわたる変動は正確にはつかめていない。
  - ◆**生存に対する脅威** 本来の飛来地であるブナ林の伐採。
- (泉 祐一)

スズメ目イフヒバリ科 準絶滅危惧種  
環境省：該当なし  
**イフヒバリ** *Prunella collaris* (Scopoli,1769)

- ◆**国内外の分布** アフリカ北部、東アジアからヨーロッパまでの高山に広く分布する。国内では主に森林限界より上の岩場に生息する。
  - ◆**県内の分布** 八幡平、駒ヶ岳、鳥海山などの亜高山帯の岩場に生息する。
  - ◆**本種の概要** 全国的には高山帯から亜高山帯までの岩場に住み、局地的な分布となるために、個体数は元来少ない。
  - ◆**本種の現状** 県内の亜高山帯での環境変化は今ところ顕著な所は少なく、ある程度は安定していると思われる。
  - ◆**生存に対する脅威** 山頂付近の観光開発や植生の破壊。近年は登山者による山頂付近でのゴミの投棄に依存することもあり、その生態に影響することが懸念される。
- (泉 祐一)

スズメ目イフヒバリ科 準絶滅危惧種  
環境省：該当なし  
**カヤクグリ** *Prunella rubida* (Temminck et Schlegel,1848)

- ◆**国内外の分布** 南千島、北海道、本州、四国の亜高山および高山で繁殖する。冬季は低地や西日本に移動する。
  - ◆**県内の分布** 八幡平、鳥海山、栗駒、二ツ井町、栗駒山、薬師岳、秋田市千秋公園、高清水公園
  - ◆**本種の概要** 亜高山帯から高山帯にかけてのハイマツ帯や岩場で繁殖し、越冬期は平地から低山の灌木林や沢沿いの藪などに移行する。
  - ◆**本種の現状** 奥羽山脈を形成する亜高山帯で繁殖している。さえずりも顕著であることからよく目立つ鳥である。冬季間の行動については不明であるが、低山帯の落葉広葉樹林内で観察されることもある。
  - ◆**生存に対する脅威** 繁殖地である亜高山帯から高山帯の植生を保全する必要がある。
- (高橋一郎)

- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT**
- DD
- LP
- N

コマドリ目ツグミ科

準絶滅危惧種

コマドリ

*Erithacus akahige* (Temminck, 1835)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** サハリンに分布する。国内では北海道から九州まで夏鳥として飛来する。
- ◆**県内の分布** 自然林としてのブナ林やオオシラビソなど針葉樹のややうっそうとした森に好んで生息する。県内では局地的に生息しており、特に角館町の堀内沢に多い。
- ◆**本種の概要** 森の中の倒木や朽ち木の上でさえずり、森の外へはほとんど出ないために姿の確認はしにくい。特有のさえずりで生息の確認ができる。全国的には深い森が減少してきており、生息地も狭まっていると考えられる。
- ◆**本種の現状** 県内ではブナ林の消滅により、本種の生息地が極端に失われた。これ以上の自然林の伐採は避けなければならない。
- ◆**生存に対する脅威** ブナ林などの自然林の伐採。林道開発。

(泉 祐一)

スズメ目ツグミ科

準絶滅危惧種

コルリ

*Luscinia cyane* (Pallas, 1776)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** シベリア南部からアムール、サハリン、中国北東部、朝鮮半島で繁殖し、インドのアッサムや東南アジアで越冬する。国内では主に北海道から本州中部に渡来し、繁殖するが、四国、九州からの繁殖報告もわずかにある。
- ◆**県内の分布** 大館市、八幡平、十和田、森吉山、栗駒、薬師岳、八幡平、乳頭山、太平山、粕毛川、田代岳、栗駒山、石黒沢、大森町里城、河辺町番鳥森、薬師岳、神室山、秋田市仁別
- ◆**本種の概要** 山地から亜高山帯の針葉樹林内や落葉広葉樹林内に生息し、繁殖する。
- ◆**本種の現状** 県内のほとんどの山地から亜高山帯にかけての森林、ブナ林等の下層において確認されるが、個体数は多くはない。
- ◆**生存に対する脅威** ブナ林等の伐採。

(高橋一郎)

スズメ目ツグミ科

準絶滅危惧種

ルリビタキ

*Tarsiger cyanurus* (Pallas, 1773)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** フィンランドからウラル山脈以東のシベリア南部、カムチャッカ、コマンドル諸島、サハリン、千島、中国中部、ヒマラヤからアフガニスタンで繁殖し、冬季、北方のものはインド西部、中国南部、インドシナに渡る。国内では北海道、本州、四国で繁殖し、本州中部以南で越冬する。
- ◆**県内の分布** 八幡平、男鹿市本山真山、森吉山、十和田湖、粕毛川、栗駒山、薬師岳、秋田市千秋公園、高清水公園
- ◆**本種の概要** 平地から高山の原生林や針葉樹と広葉樹が混交する林内に生息する。
- ◆**本種の現状** 山地の落葉広葉樹林内で確認されるが、個体数は多いわけではない。亜高山帯の森林、ブナ林内等で繁殖し、冬季は山麓部へ漂行する。
- ◆**生存に対する脅威** 森林の伐採。

(高橋一郎)

スズメ目ツグミ科 準絶滅危惧種  
**トラツグミ** *Zoothera dauma* (Latham,1790) 環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** ユーラシア東部、サハリン、朝鮮、ヒマラヤ、インド、東南アジア、ニューギニア、オーストラリアで繁殖し、北方のものは冬季、中国南部や東南アジアに渡る。国内では九州以北、奄美大島、西表島で繁殖し、北方や高地のものは、冬季、暖地に移動する。
  - ◆**県内の分布** 大館市、横手市、十和田、秋田市仁別、森吉山、薬師岳、保呂羽山、抱返り、鹿角市大湯、藤里町素波里、能代市後谷地、八幡平、粕毛川、田代岳、能代市常磐、栗駒山、大森町里城、河辺町番鳥森、西目町、由利町小菅野、雄勝町神室山、秋田市小泉湯公園
  - ◆**本種の概要** 低山から亜高山帯のよく茂った広葉樹林や針葉樹と広葉樹が混交する林、林縁の芝生、公園などで観察される。
  - ◆**本種の現状** 繁殖期は特有のさえずりにより県内各地で観察されているが、繁殖状況の報告例は少ない。冬季は、公園などの植え込みで採餌する様子が観察される。
  - ◆**生存に対する脅威** ブナ林等の伐採。
- (高橋一郎)

スズメ目ツグミ科 準絶滅危惧種  
**マミジ** *Turdus sibiricus* Pallas,1776 環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 中国北東部からロシア極東南部、サハリンにかけて繁殖し、冬季は中国南部、東南アジアに渡る。国内では夏鳥として本州中部以北に渡来するが局地的である。
  - ◆**県内の分布** 森吉山、薬師岳、十和田湖、太平山、粕毛川、白神山地
  - ◆**本種の概要** 低山から亜高山帯にかけての林内に生息する。
  - ◆**本種の現状** 落葉広葉樹林、落葉広葉樹と針葉樹が混交する林、谷沿いの暗い林などで確認されるが、局地的で個体数も少ない。
  - ◆**生存に対する脅威** ブナ林等の伐採。
- (高橋一郎)

スズメ目ヒタキ科 準絶滅危惧種  
**コサメビタキ** *Muscicapa dauurica* Pallas,1811 環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** インド、ヒマラヤ、バイカル湖周辺からアムール、ウスリー、中国北東部、サハリンで繁殖し、インドから中国南部、東南アジアで越冬する。国内では夏鳥として九州以北に渡来する。
  - ◆**県内の分布** 八幡平、横手市、森吉山、男鹿市本山真山、秋田市千秋公園、高清水公園、栗駒山、乳頭山、太平山、藤里町素波里、能代市後谷地、二ツ井町、石倉山、西目町、男鹿市寒風山、秋田市小泉湯公園、秋田市仁別
  - ◆**本種の概要** 平地から山地の落葉広葉樹林内で生息、繁殖する。春秋の渡り時は市街地の公園などにも現れる。
  - ◆**本種の現状** 平地から山地の林内において観察されるが、個体数は多くない。近年、特に減少傾向にある。
  - ◆**生存に対する脅威** 森林の伐採。
- (高橋一郎)

- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD
- LP
- N

スズメ目カササギヒタキ科

準絶滅危惧種

# サンコウチョウ

*Terpsiphone atrocaudata* (Eyton,1839)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 朝鮮、台湾、フィリピンで繁殖し、冬季は中国南部、インドシナ、マレー半島、スマトラへ渡る。国内では夏鳥として本州以南に渡来する。
- ◆**県内の分布** 大館市、男鹿市本山真山、森吉山、能代市後谷地、五城目町、本荘市水林、西目町、由利町小菅野、秋田市小泉湯公園
- ◆**本種の概要** 平地から低山の針葉樹と広葉樹が混交する林内において観察される。暗い林内を好む。
- ◆**本種の現状** さえずりと雄の優雅な体の特徴から各地で確認されやすいが、個体数は少ない。能代市後谷地の海岸砂防林（通称「風の松原」）では、スギが優占する広葉樹との混交林内においての繁殖報告がある。
- ◆**生存に対する脅威** 針広混交林の伐採。生息環境の保全が必要である。

(高橋一郎)

スズメ目ホオジロ科

準絶滅危惧種

# コジュリン

*Emberiza yessoensis* (Swinhoe,1874)

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

- ◆**国内外の分布** 中国北東部、ウスリー、南千島で繁殖する。北方のものは冬季南方に渡り、朝鮮南部、中国南東部で越冬する。国内では本州中部以北および九州で繁殖するが、局地的である。本州中部以南の沿岸で越冬する。
- ◆**県内の分布** 大潟村、西仙北町、能代市浅内地区
- ◆**本種の概要** 平地から山地のヨシの草原や灌木の散在する草原、農耕地近くの草原などに生息する。
- ◆**本種の現状** 大潟村においては、夏季にヨシが繁茂する草原や水田などで観察される。
- ◆**生存に対する脅威** 草原の消失。生息環境の保全が必要である。

(高橋一郎)

スズメ目ホオジロ科

準絶滅危惧種

# ノジコ

*Emberiza sulphurata* Temminck et Schlegel,1848

環境省：準絶滅危惧

- ◆**国内外の分布** 繁殖地としては日本のみが知られており、朝鮮、台湾、中国南部、フィリピンで越冬している。国内では夏鳥として本州（青森から兵庫まで）に渡来し、局地的に繁殖している。本州西部以南では冬季の記録もある。
- ◆**県内の分布** 大館市、鹿角市大湯、鳥海町、藤里町
- ◆**本種の概要** 低山から山地の落葉広葉樹林内、針葉樹林内や草原などに生息し、明るい林を好む。
- ◆**本種の現状** 山地の灌木や落葉広葉樹林に生息するが、局地的で個体数は少ない。
- ◆**生存に対する脅威** 森林の伐採。個体数が少ないうえに、生息環境が減少傾向にある。

(高橋一郎)

スズメ目ホオジロ科 準絶滅危惧種  
**オオジュリン** *Emberiza schoeniclus* (Linnaeus,1758) 環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** アムール、カムチャッカ、サハリン、千島で繁殖し、北方のものは冬季アフリカ北部、西南アジア、中国南部などに渡る。国内では東北以北で繁殖し、冬季南方や暖地へ移動するほか、全国に冬鳥として渡来する。
  - ◆**県内の分布** 大湊村、能代市浅内地区
  - ◆**本種の概要** 繁殖期は平地の湿原、非繁殖期はヨシの草原に生息する。
  - ◆**本種の現状** 県内での確認例は少ないが、大湊村の湿性草原で繁殖している。水田などの農耕地で昆虫などを採餌している様子が観察される。
  - ◆**生存に対する脅威** 草原の消失。生息環境を保全する必要がある。
- (高橋一郎)

スズメ目アトリ科 準絶滅危惧種  
**ベニヒワ** *Carduelis flammea* (Linnaeus,1758) 環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** ヨーロッパアルプス、スカンジナビア半島、シベリア北部、アラスカ、カナダなどに広く分布する。国内では主に北海道に冬鳥として飛来するが、少数は本州にも飛来する。
  - ◆**県内の分布** 各地の明るい林や草原などで少数が見られる。
  - ◆**本種の概要** ミヤマハンノキ、ダケカンバ、カラマツなどや枯れ草の種子などを食べる。餌となる種子のなり具合で生息に影響を受ける。少数の群れで行動する。
  - ◆**本種の現状** 平地では時折草地で少数が見られるが、山地では観察例が少なく、現状は不明である。
  - ◆**生存に対する脅威** 亜高山帯の森の減少。
- (泉 祐一)

スズメ目アトリ科 準絶滅危惧種  
**ハギマシコ** *Leucosticte arctoa* (Pallas,1811) 環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** シベリア東北部、アリューシャン列島、アラスカに分布する。国内では冬鳥として北海道から本州中部にかけて飛来する。
  - ◆**県内の分布** 男鹿半島の沿岸などで少数が見られる。
  - ◆**本種の概要** 崖地や疎林、草地などに群れる。ヌマガヤ、アカザ、オオバコ、ハギ類などの種子を食べる。
  - ◆**本種の現状** 少数の群れや数百羽の群れなど飛来する個体数の変動が大きい。
  - ◆**生存に対する脅威** 落葉広葉樹の疎林の減少。
- (泉 祐一)

## イ カ ル

*Eophona personata* (Temminck et Schlegel,1848)

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** ロシアのアムール、中国東北部で繁殖し、大陸のものは冬季中国南部に渡る。国内では九州以北で繁殖し、北のものは冬季に暖地に移動する。

◆**県内の分布** 大館市、秋田市浜田、秋田市千秋公園、森吉山、能代市落合、十和田湖、鳥海山、抱返り、鹿角市大湯、本荘市水林、二ツ井町、粕毛川、雄和町高尾山、大森町里城、石倉山、由利町小菅野、西仙北町三条川原、男鹿市寒風山、秋田市小泉瀧公園、秋田市仁別、秋田市下浜

◆**本種の概要** 平地から山地の林内で繁殖し、冬季は市街地の公園や墓地などにも現れる。

◆**本種の現状** 県内各地の平地や山地、山麓部で確認される。繁殖時の報告は少なく、局地的である。群れて移動する様子が報告されている。

◆**生存に対する脅威** 森林の伐採。生息環境を保全する必要がある。

(高橋一郎)

## ア

## ビ

*Gavia stellata* (Pontoppidan,1763)

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** ユーラシア北部から北アメリカにかけて分布し、繁殖している。冬季は越冬のために南下する。国内では越冬のために飛来する冬鳥である。

◆**県内の分布** 県内の海岸から沖合

◆**本種の概要** 本州では越冬のため飛来してくる。瀬戸内海では個体数が多い。

◆**本種の現状** 県内でははっきりとした調査記録が少ない。個体数が少ないことが予想されるが、個体数や生態等については、情報不十分である。

◆**生存に対する脅威** 魚介類の減少。

(佐藤磯男)

## オ オ ハ ム

*Gavia arctica* (Linnaeus,1758)

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** シベリア北東部、カムチャツカ沿岸、ベーリング海、アラスカなどで繁殖し、冬季に南下する。国内では冬季に北海道以南に生息する。

◆**県内の分布** 県内の海岸から沖合

◆**本種の概要** 冬季に外洋や港湾内に生息する冬鳥である。

◆**本種の現状** 県内での調査記録が少ないことから、個体数が少ないことが予想されるが、個体数や生態等については情報が不十分である。

◆**生存に対する脅威** 魚介類の減少。

(佐藤磯男)

アビ目アビ科 情報不足種  
 シロエリオオハム *Gavia pacifica* (Lawrence,1858) 環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** アラスカ、北アメリカ東部と西部、北千島、サハリンなどで繁殖し、冬季は南下する。国内では冬季に北海道以南の海岸や海上に生息する。
  - ◆**県内の分布** 県内の海岸から沖合
  - ◆**本種の概要** 冬季に外洋や港湾内で、単独または小群で越冬する。
  - ◆**本種の現状** これまでの調査記録が少ないことから、本県での生息数はきわめて少ないことが予想されるが、個体数、生態等は情報不十分である。
  - ◆**生存に対する脅威** 魚介類の減少。
- (佐藤磯男)

カイツブリ目カイツブリ科 情報不足種  
 アカエリカイツブリ *Podiceps grisegena* (Boddaert,1783) 環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** アジア北東部、アラスカ、北アメリカなどで繁殖し、冬季は南下する。国内では夏季は北海道で生息し、冬季は本州以南で越冬するものが多い。
  - ◆**県内の分布** 男鹿市、大潟村
  - ◆**本種の概要** 夏季には北海道の湖沼や山地の湿地で繁殖し、冬季は本州以南の港湾や波の静かな海上、湖沼などに生息している。
  - ◆**本種の現状** 冬季に男鹿市南磯や八郎潟残存湖で越冬しているが、個体数は少ない。
  - ◆**生存に対する脅威** 餌となる魚類、水生昆虫などの減少。
- (佐藤磯男)

ペリカン目ウ科 情報不足種  
 カ      フ      ウ *Phalacrocorax carbo* (Linnaeus,1758) 環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** サハリン、南千島、朝鮮半島などに分布している。国内では北海道以南で各地に生息している。
  - ◆**県内の分布** 大館市、大潟村、男鹿市
  - ◆**本種の概要** 日本各地の港湾や湖沼に集団で生息し、夏季に集団でコサギやアオサギなどと同じ場所で繁殖することが多い。
  - ◆**本種の現状** 県内では冬鳥として男鹿市の海岸や八郎潟残存湖などに少数生息しているが、詳細については不明である。
  - ◆**生存に対する脅威** 魚類の減少。
- (佐藤磯男)

コウノトリ目サギ科

情報不足種

## サンカノゴイ

*Botaurus stellaris* (Linnaeus,1758)

環境省：絶滅危惧ⅠB類

◆**国内外の分布** ユーラシア中部、北アフリカ、南アフリカで繁殖し、北方のものは冬季アフリカ、南アジア、東南アジアに渡る。国内では北海道、茨城、千葉、滋賀で繁殖しており、他の地域では冬鳥として渡来する。北海道では主に夏鳥である。

◆**県内の分布** 大潟村

◆**本種の概要** 湖沼や河川の周辺の広大なアシ原や水田等に生息する。

◆**本種の現状** 県内での目撃例は極度に少ないが、大潟村において稀に観察される。同地では夏にも観察されたことがあり、繁殖の可能性も考えられるが、なお情報を収集する必要がある。

◆**生存に対する脅威** 生息環境の草原、湿地、餌となる魚類、水生昆虫などの減少。個体数が少ない。

(高橋一郎)

コウノトリ目サギ科

情報不足種

## アマサギ

*Bubulcus ibis* (Linnaeus,1758)

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** 中国南部、台湾、タイ、ビルマ、フィリピン諸島、スンダ列島などをはじめアジアからオセアニアにかけて広範囲に生息している。国内では北海道以南に生息し北海道、本州、九州などで繁殖している。

◆**県内の分布** 大潟村、二ツ井町、能代市、秋田市

◆**本種の概要** 夏季には関西地方より南では比較的多数生息し繁殖もしているが、関東以北での繁殖例は少ない。営巣はゴイサギ、チュウサギ、コサギ、アオサギなどと集団で行われる。

◆**本種の現状** 本県では、春、秋の渡りの時期に観察されることが多い。近年、能代市や二ツ井町で繁殖したとの記録がある。

◆**生存に対する脅威** 餌となる水生動物の減少。

(佐藤磯男)

コウノトリ目サギ科

情報不足種

## ダイサギ

*Egretta alba* (Linnaeus,1758)

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** アジア西北部からシベリア南東部モンゴルから中国東北部、朝鮮半島、インド、フィリピン諸島などに生息している。国内では本州と九州で繁殖している。

◆**県内の分布** 大曲市、小友沼、西仙北町、大潟村、天王町、小泉潟公園、二ツ井町

◆**本種の概要** 夏鳥であるが、越冬する個体も多い。本州や九州の海岸、干潟、水田、湿地などを採餌場として生息している。平地の雑木林などにゴイサギやチュウサギなどと集団で繁殖することが多い。

◆**本種の現状** 県内では大潟村や小泉潟公園の他数カ所で観察されている。また、二ツ井町では繁殖の記録がある。

◆**生存に対する脅威** 餌となる小動物の減少。

(佐藤磯男)

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

# チュウサギ

*Egretta intermedia* (Wagler,1829)

環境省：準絶滅危惧

- ◆**国内外の分布** 中国、朝鮮半島、台湾、インド、マレー半島、フィリピン諸島などに広く分布している。国内では本州、九州に夏鳥として飛来し、繁殖している。
- ◆**県内の分布** 大曲市、能代市で繁殖していたとの情報がある。
- ◆**本種の概要** 本州、九州に夏鳥として飛来し、水田、沼沢、海岸の浅瀬、干潟などで採食する。竹林、マツ林、雑木林などで営巣している。
- ◆**本種の現状** 大曲市、能代市の両市で繁殖していたとの情報があるが、県内での生息ははっきりしていない。
- ◆**生存に対する脅威** 餌となる小動物の減少。

(佐藤磯男)

# コサギ

*Egretta garzetta* (Linnaeus,1766)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** ヨーロッパ、アジア、アフリカなど広範囲に分布している。国内では北海道、本州、四国、九州の全域に生息している。
- ◆**県内の分布** 大館市、大潟村、天王町、小泉潟公園、大曲市、琴丘町、能代市
- ◆**本種の概要** 本州では留鳥として周年生息し、水田や河川、干潟、入江などで採食している。平地にある竹林や雑木林などに集団で営巣し繁殖している。
- ◆**本種の現状** 県内では、近年繁殖の報告があるが、多くはない。
- ◆**生存に対する脅威** 餌となる小動物の減少。

(佐藤磯男)

# シノリガモ

*Histrionicus histrionicus* (Linnaeus,1758)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** シベリア東部、カムチャツカ半島、北千島、アラスカなどで繁殖するものが多く、冬季に日本周辺、朝鮮半島などに南下しているものと思われる。国内では北海道と本州北部では一部留鳥として周年生息し、繁殖も確かめられている。
- ◆**県内の分布** 男鹿市、由利海岸、本荘市、八森町、象潟町、粕毛川、天王町、森吉町、河辺町、田代町
- ◆**本種の概要** 本種は主に冬鳥として飛来し、外洋に面した岩礁地帯で生息している。北海道では従来から繁殖していたが、近年本州北部でも繁殖が確かめられている。
- ◆**本種の現状** 県内の日本海沿岸で冬鳥として少数生息していた。近年、田代町や河辺町の河川上流などで繁殖が確かめられているが、観察例は少ない。
- ◆**生存に対する脅威** 溪流のダム開発。森林の伐採。

(佐藤磯男)

タカ目タカ科

情報不足種

# ケアシノスリ *Buteo lagopus* (Pontoppidan,1763)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** ユーラシアおよび北アメリカの北部で繁殖し、冬季はユーラシアおよび北アメリカの温帯域へ渡る。国内では冬鳥として主に北日本に渡来するが、個体数は少ない。
- ◆**県内の分布** 大潟村、平鹿町
- ◆**本種の概要** 平地の草地、干拓地、裸地、農耕地などに渡来、生息する。
- ◆**本種の現状** 大潟村の草原や耕地で観察されることがあるが、きわめて個体数は少ない。類似する環境においては認められる可能性もあるので情報を収集する必要がある。
- ◆**生存に対する脅威** 餌となるネズミ類の減少。

(高橋一郎)

タカ目タカ科

情報不足種

# ハイロチュウヒ *Circus cyaneus* (Linnaeus,1766)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** ヨーロッパ、アジア北部、北アメリカ北部で繁殖し、冬季は南方へ渡る。国内では冬鳥として全国に渡来するが、個体数は少ない。
- ◆**県内の分布** 大潟村、能代市浅内地区
- ◆**本種の概要** 平地から山地の農耕地、ヨシの草原、裸地、干拓地などで観察されるが、個体数は少ない。
- ◆**本種の現状** 大潟村において冬季のみの観察例はあるが、個体数が少なく、全県的には情報不足である。
- ◆**生存に対する脅威** 餌となるネズミ類や小鳥の減少。個体数が少ない。

(高橋一郎)

ツル目クイナ科

情報不足種

# ク イ ナ *Rallus aquaticus* Linnaeus,1758

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** ユーラシア大陸の温帯域で繁殖する。北方のものは冬季に南下する。中国南部、東南アジアでは冬鳥である。国内では北海道と東北部で夏鳥として繁殖し、本州、四国、九州、南西諸島では冬鳥である。
- ◆**県内の分布** 西仙北町、大潟村、鷹巣町、能代市、若美町、天王町、横手市、平鹿町
- ◆**本種の概要** 湖沼畔、沼沢、河畔などの水辺の草原、ヨシの草原、水田等に生息する。
- ◆**本種の現状** 湿地草原内を隠れるように移動する習性上、観察が困難であることから、報告例が少なく、情報として十分ではない。大潟村で繁殖したとの報告がある。
- ◆**生存に対する脅威** 餌となる小動物の減少。草原や沼沢などの減少。生息および繁殖環境の保全が必要である。

(高橋一郎)

鳥類

EX  
EW  
CR  
EN  
VU  
NT  
DD  
LP  
N

## ヒメクイナ

*Porzana pusilla* (Pallas,1776)

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** ユーラシア大陸の温帯域で繁殖し、インドから東南アジアやアフリカ北部に渡って越冬する。アフリカ南部、マダガスカル、オーストラリア、ニュージーランド、ニューギニアに分布するものは留鳥である。国内では本州中部以北では夏鳥、他の地域では渡りの途中に通過する旅鳥、本州と九州では越冬するものもいる。

◆**県内の分布** 秋田市小泉湯公園、鷹巣町

◆**本種の概要** 平地の湿地、水田、湖沼、河畔で生息している。山地の沼沢からの報告もある。

◆**本種の現状** 確認例が少なく、情報が不足している。

◆**生存に対する脅威** 餌となる昆虫や貝類の減少。湿地、沼沢などの減少。生息環境の保全が必要である。

(高橋一郎)

## アオシギ

*Gallinago solitaria* Hodgson,1831

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** シベリア東部および中部、ヒマラヤ北部、サハリンで繁殖し、中国南部、インド、パキスタン北部で越冬する。国内では冬鳥として北海道から沖縄まで記録がある。本州中部以南では少ない。

◆**県内の分布** 男鹿市

◆**本種の概要** 山地の溪流および水田で観察されることがある。

◆**本種の現状** 県内における生息状況ははっきりせず、わずかに男鹿市において斃死体が発見されたに過ぎない。個体数が少ないこともあるが、情報不足である。

◆**生存に対する脅威** 餌となる小動物の減少。

(高橋一郎)

## アオバト

*Sphenurus sieboldii* (Temminck,1835)

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** 台湾、中国南部、インドシナ北部に分布する。国内では九州から北海道まで夏鳥として飛来分布する。

◆**県内の分布** 白神山地、八幡平、森吉山などの主にブナ林に生息する。

◆**本種の概要** 大木のあるブナ林に生息し、ミズナラ、ブナ、ヤマザクラ、ミズキなどの木の実を食す。体色が緑色のため森林の中では見つけにくく、巢の発見も稀で個体数も少ない。全国的に自然林が減少していることから、生息数も減少していると考えられる。

◆**本種の現状** 県内では局地的に鳴き声の確認はあるが、繁殖は未確認。

◆**生存に対する脅威** 自然林の伐採。

(泉 祐一)

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

## オ オ マ シ コ

*Carpodacus roseus* (Pallas,1776)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 中央シベリア、東シベリア、サハリンに分布する。国内では本州中部以北で冬季稀に飛来する。
- ◆**県内の分布** 五城目町や秋田市などで少数確認されているが、ほとんど稀。
- ◆**本種の概要** アワ、ヒエ、ツバキ、マツなどの種子を食べる。
- ◆**本種の現状** 確認された件数が非常に少ない。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(泉 祐一)

## オ ナ ガ

*Cyanopica cyana* (Pallas,1776)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** イベリア半島、モンゴル北部、アムール、ウスリー、中国北東部および中部、朝鮮半島に分布する。国内では留鳥として中部以北の本州に分布する。
- ◆**県内の分布** 大館市、太平山、六郷町、増田町、横手市、天王町、秋田市、能代市、鷹巣町、大潟村
- ◆**本種の概要** 平地から低山の集落付近の雑木林や社寺林、河川敷の林、市街地の公園で確認されている。分布域は拡大の傾向にある。
- ◆**本種の現状** 県内においては、近年、確認報告が増えつつあるが、情報としては多くはない。なお、六郷町での繁殖報告があるほか、他地域からの繁殖確認がある。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。
- ◆**特記事項** 分布域拡大であるかどうかは、可能性としては高いものの、今後の報告を待ちたい。

(高橋一郎)

## 鳥類参考文献

- 秋田県, 1971-1997. 秋田県鳥類分布調査 (1)-(27). 秋田県.
- 日高敏隆, 1996. 日本動物大百科 第3巻. 平凡社.
- 日高敏隆, 1996. 日本動物大百科 第4巻. 平凡社.
- 五百沢日丸解説, 2000. 日本の鳥 550 山野の鳥. 文一総合出版.
- 桐原政志解説, 2000. 日本の鳥 550 水辺の鳥. 文一総合出版.
- 清棲幸保, 1966. 野鳥の事典. 東京堂出版.
- 清棲幸保, 1978. 増補改訂版日本鳥類大図鑑 全4巻. 講談社.
- 小林桂助, 1956. 原色日本鳥類図鑑. 保育社.
- 黒田長久, 1986. 動物大百科 第7巻. 平凡社.
- 中村登流, 1986. 検索入門 野鳥の図鑑 陸の鳥 ①・②. 保育社.
- 中村登流, 1986. 検索入門 野鳥の図鑑 水の鳥 ①・②. 保育社.
- 日本鳥学会目録編集委員会, 2000. 日本鳥類目録 改訂第6版. 日本鳥学会.
- 小笠原暁ほか, 1973. あきたの野鳥. 秋田県環境保健部自然保護課.
- 小笠原暁・泉祐一, 1985. 鳥類調査. 粕毛川源流部自然環境調査報告書:91-115. 秋田県.
- 小笠原暁・高橋一郎・泉祐一, 1973. 男鹿半島鳥類調査報告. 男鹿半島自然公園学術調査報告:56-79. 日本自然保護協会.
- 佐藤武視, 1985. 天王海岸の鳥類相について. 秋田県立博物館研究報告 10:77-86.
- 佐藤武視, 1986. 小泉瀉公園周辺の鳥類-1976年以降の記録から. 秋田県立博物館研究報告 11:77-86.
- 高橋一郎, 1988. 八郎瀉調整池北部の鳥類とその生態. 秋田県立博物館研究報告, 13:1-12.
- 高橋一郎, 1989. 神室山の鳥類相. 秋田県立博物館研究報告 14:13-20.
- 高橋一郎, 1990. 寒風山の草原性鳥類. 秋田県立博物館研究報告 15:27-34.
- 高橋一郎, 2001. 太平山山麓落葉広葉樹二次林における鳥類相. 秋田県立博物館研究報告 26:1-8.
- 竹下信雄, 1989. 日本の野鳥. 小学館.

# 爬虫類 概説

秋田県内に野生している爬虫類はカメ目のイシガメ科2種、トカゲ目のトカゲ科1種、カナヘビ科1種、ヘビ科7種、クサリヘビ科1種の計2目5科12種である。

環境省が動植物の分布調査結果をまとめるときに使用している「5倍地域メッシュ」では、秋田県全域が548区画に分けられる。本郷(2000)はこれによって爬虫類各種の観察記録をまとめ、次の数値を得た。(数字は記録のある区画数)

イシガメ科(クサガメ1、イシガメ1)、トカゲ科(トカゲ18、カナヘビ67)、ヘビ科(タカチホヘビ4、シマヘビ86、ジムグリ28、アオダイショウ65、シロマダラ2、ヒバカリ7、ヤマカガシ61)、クサリヘビ科(マムシ47)。

このうち、イシガメ科の2種(クサガメ、イシガメ)は人為分布である。秋田市高清水の空素沼ではクサガメの日光浴をごく楽に観察できるが、幼体や卵が観察されておらず、放したりしたのが長年生存を続けているものようである。これとは別に、南秋田郡の畑の一角で発見された8個の卵のうち4個からクサガメらしい子亀が孵化したとの情報もあるが、野外で繁殖が毎年行われているとする記録は県内にない。

またほかにペットのアカミミガメや食用種のスッポンを野外で見た、釣れた等の情報もあるがそれらには後続の記録がなく、野生種として扱わない。

ヤモリ科ヤモリも秋田県の爬虫類相に加えない。山形県酒田市では野外で越冬することも知られており、1965年に象潟町で採集されてから秋田市で少なくとも2度(1980、1996)発見されているが、いずれも搬送された荷物といっしょに持ち込まれたのがほとんど見つかったもので、自然繁殖の記録はない。

以下、各種の生息状況等を概説する。

トカゲおよびカナヘビは日当たりのよい草地、荒地に生息している。県内ではカナヘビの個体数をはるかに多く、トカゲの生息地はずっと少ない。

タカチホヘビとシロマダラは記録地が少なく、生息地が局限されており生息密度も低く希少であると判断して、情報不足種に選定した。水辺の動物を主な餌にしているヒバカリも水田の整備によって影響を受け、それら2種に次いで記録が少ないが、環境調査で発見される割合が高い。

シマヘビ、ジムグリ、アオダイショウ、ヤマカガシとマムシの5種はいずれも県内各地から記録されている。このうちジムグリは物陰に隠れ地中に潜る習性をもつので発見の機会が少ない傾向がある。

爬虫類には忌み嫌う人、無視する人が多く、じっくり観察する人、種を判定できる人が少ない。そのため情報が不足している。都市部では環境の整備によって小動物が減少し、これを捕食していた爬虫類が激減した。しかし爬虫類はすべて南方系で、ぎりぎりの北地で生息している種もある。タカチホヘビ、シロマダラ、ヒバカリとヤマカガシ、それにクサガメ、イシガメは北海道へ進出していない種である。拒絶せず、関心を高めるようにしたいものである。シマヘビ、アオダイショウなどは幼体の形態的特徴が成体と著しく異なるため、しばしば種名を間違えられる。また、マムシは毒蛇だし、ヤマカガシにも深く咬まれたときには毒液を注入される。一般向けの適切な資料の作成と頒布が望まれる。

(本郷敏夫)

## タカチホヘビ

*Achalinus spinalis* Peters, 1869

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** 青森県を北限とし、本州・四国・九州の各地に分布し、中国本土からも知られる。列島周辺に散在する離島からの記録はない。

◆**県内の分布** 秋田市太平山金山滝付近、横手市横手公園資料館、象潟町小砂川県境付近、東成瀬村大深沢等で捕獲され、山地のほか平地にもすむことが裏付けられている。その多くは森林に接した場所で、石や朽木の下に潜んでいる。

◆**本種の概要** 大きくなっても全長50cmほどの小さな蛇である。①体表の鱗が重ならず、タイルのように敷き詰められている、②背面中央に1本の細い黒条が走っている、③尾の腹面の鱗が対の2枚に分かれず、一枚ずつ並ぶ、などの特徴がある。体色は赤褐色だが、幼蛇は青色を帯びることも多く、背面中央の黒条も目立たない。成長すると黄色が強まり、ホルマリン液に保存すると黄色い液が浸出する。ミミズ類を食し、夜行性で昼は石や朽木の下に潜んでいるので発見例が少なく、珍しいとされる。だが地域、場所によっては、意外に個体数が多いと言う研究者もいる。

◆**本種の現状** 本県内で発見し記録された地点は少ない。環境省分布調査で使用している「5倍地域メッシュ」では秋田県全域が548区画に分けられる。その内、本種が記録されたのは本郷（2000）によると4区画で、その後1区画が追加されている。

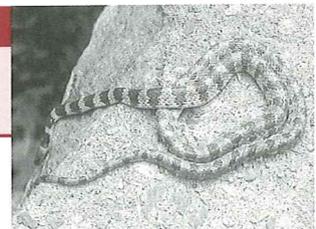
◆**生存に対する脅威** 現在知るかぎりでは、生息地が局限されている上、生息密度が低く希少である。本種の実見は、偶然によるもののほかは開発を目途とした事前調査によるものである。一般人から寄せられる情報が不足なうえ調査不足で、分布の詳しい状況が解明されていない以上、開発、特に林地の開発には留意が必要で、本種への認識を高めつつ情報の収集に努めなければならない。

(本郷敏夫)

## シロマダラ

*Dinodon orientalis* (Hilgendorf, 1880)

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** 本州、四国、九州の各地のほか奥尻から大隅までの島々に分布する。わが国の固有種である。

◆**県内の分布** 県内で発見されている男鹿市北浦真山神社付近と八森町真瀬川三十釜紅葉橋付近はいずれも森林をかかえた低山地である。路上で無傷の死体が拾得された秋田市小泉瀧公園は砂丘間低地に位置している。

◆**本種の概要** 全長30～70cm。①背面は桃色を帯びた灰色で、これに幅広い黒褐色の横斑が規則的に並び横縞模様になっている（アオダイショウの幼蛇がこの模様似るため、しばしば誤認される。）、②日中、目の瞳孔が縦長になっている、③上顎の歯が前、中、後の3部に分かれ、それらの間に隙間がある、などの特徴がある。もともと個体数があまり多くない上、夜行性で人目に触れる機会が少ないと言われる本種だが、八森町三十釜と秋田市小泉公園では日中に発見されている。また男鹿市真山では数年続けて飼猫が捕らえてきたという。

◆**本種の現状** 本県内で発見し記録された地点は少ない。環境省分布調査の「5倍地域メッシュ」では秋田県全域が548区画に分けられるが、その内、本郷（2000）に記録されているのは2区画であり、その後1区画が追加された。

◆**生存に対する脅威** 現在知るかぎりでは、生息地が局限されている上、生息密度が低く希少である。しかも偶然の機会に発見されたもので、分布の詳しい状況が解明されていない以上、開発、特に林地を開発する際には留意が必要である。それまでは啓蒙と情報の収集に努めなければならない。

(本郷敏夫)

## 爬虫類参考文献

- 千葉克巳, 1997. イチローの置土産. コミュニケーション・ミニ 31:4. 秋田市大森山動物園.
- 本郷敏夫, 1990. シロマダラが男鹿で採集される. 秋田自然史研究 26:22. 秋田自然史研究会.
- 本郷敏夫, 1992. シロマダラ. 秋田の自然 24:3. 秋田県自然保護協会.
- 本郷敏夫, 1993. 横手公園でタカチホヘビが採集された. 秋田自然史研究 29:40. 秋田自然史研究会.
- 本郷敏夫, 2000. 秋田県両生類爬虫類分布図:1-69. 秋田県環境と文化のむら協会.
- 松山忠, 1965. タカチホヘビ. 生物秋田 9:19. 秋田生物学会.
- 中村健児・上野俊一, 1963. シロマダラ. 原色日本両生爬虫類図鑑:159-160. 保育社.
- 中村健児・上野俊一, 1963. タカチホヘビ. 原色日本両生爬虫類図鑑:142-144. 保育社.
- 大野正男, 1978. 日本産主要動物の種別文献目録 (3) シロマダラ. 東洋大学紀要教養課程編 (自然科学) 21:79-92.
- 大野正男, 1978. 日本産主要動物の種別文献目録 (4) タカチホヘビとアマミタカチホヘビ. 東洋大学紀要教養課程編 (自然科学) 21:93-104.
- 酒田東高校生物クラブ, 1966. ヤモリの分布と生態. 日本学生科学選集 I :100-103. 共立出版.
- 千石正一, 1988. ヘビ亜目. 動植物分布調査報告書 (第3回) 両生類・爬虫類:182-186. 環境庁.

# 両生類 概説

県内に野生する両生類は、サンショウウオ目サンショウウオ科3種、イモリ科1種、カエル目ヒキガエル科1種、アマガエル科1種、アカガエル科6種、アオガエル科3種の計2目6科15種である。

環境省が動植物の分布調査結果をまとめるときに使用している「5倍地域メッシュ」では、秋田県全域が548区画に分けられる。本郷(2000)はこれによって両生類各種の記録を集計し、次の数値を得た。(数字は記録のある区画数)。

サンショウウオ科(トウホクサンショウウオ197、クロサンショウウオ97、ハコネサンショウウオ88)、イモリ科(イモリ75)、ヒキガエル科(アズマヒキガエル92)、アマガエル科(アマガエル96)、アカガエル科(タゴガエル75、ニホンアカガエル34、ヤマアカガエル138、トノサマガエル79、ウシガエル20、ツチガエル73)、アオガエル科(シュレーゲルアオガエル68、モリアオガエル133、カジカガエル71)。

両生類の産卵と幼生の発育には水環境が重要で、種によってそれが止水だったり流水だったりする。一方、成体はイモリなどを除けば繁殖期以外は陸上で生活する。ただし両生類は肺のつくりが悪く(ハコネサンショウウオは肺がない)、呼吸の大半は濡れた皮膚で行われるから、水辺で生活するか、水辺を離れたとしても湿潤な森林、草叢が必要である。両生類は水からの制約を大きく受ける動物群である。

乳白色のアケビの実の形をしたぶよぶよ寒天質の卵囊を産むクロサンショウウオと無色でしわのあるバナナ形寒天質の卵囊を産むトウホクサンショウウオは、共に早春の丘陵から低山、高山までの止水域を産卵場に行っている。その違いを特徴的に示すと、前者は魚類の棲まぬ池の中央部水底、後者は泉や雪解けのたまり水縁辺部であり、より止水性の強いのが前者、微流水性とも言えるのが後者である。夏に干上がるような水溜りは、トウホクサンショウウオ幼生には天敵の少ない場所であり、これが生息地の多い一因になっている。餌の不足は共食いによって解決している。幼生の行動は省エネで、水底に静止していることが多く、その様子からサンショウカジカ(方言)と呼ばれている。

ハコネサンショウウオも低山から高山まで分布が広いが、源流域のしぶきのかかる巨岩の隙間などに産卵しており、卵囊の発見はむずかしい。孵化した幼生の体は細長く、指に黒い爪があり、溪流の流れの弱い岸の石の間で生活している。

以上3種のサンショウウオについては、1976年に環境庁が実施した緑の国勢調査で主要野生動物に選定し、生息状況と分布を調査している。1983年には絶滅の恐れのある、または学術上重要と思われる両生類・爬虫類34種(亜種も含む)の一つに選定して調査を継続し、1987年に貴重な両生類に指定している。そのような情勢から生息地点の県内記録は多数蓄積した。一方その後の環境改変による生息地消失も、絶滅を危惧するほどには進行させていない。これは大規模な改変がそれほど多く行われていないことのほかに、行動範囲の狭い小動物ゆえの特質もからんでいる。森林の伐採、道路の敷設、圃場整備などが与える直接的影響は大きいですが、開発地の隣に新たに生息地を確保するなどの例もあり、冷静な観察が要請される。

赤腹のイモリは、平地では水田や住宅環境の整備、農薬や洗剤使用の影響等により壊滅的に減少したが、山間部や山地の池沼では大きな変化が認められない。

平地から高山まで分布するアズマヒキガエルと低山までのアマガエルも、調査がゆきわたっていないが、全体的には絶滅を危惧するような変化はない。

習性や生活史が特異なタゴガエルは、秋田県内では注目されたのが遅かったため情報が極端に不足だったが、1978年の環境庁緑の国勢調査に並行して県が分布調査対象種に取り上げたことにより調査が進み、県内の低山地一帯に広く生息することが予想できるようになった。

早春に産卵するアカガエル類のうちニホンアカガエルは平地性で、農耕地や住宅環境の整備によって生息場所、産卵場所を失い、著しく減少した。これによりヤマアカガエルと山麓部で競合している例が目立つようになったが、近年は少しずつ各地からの生息情報が集まっており、絶滅の心配はやや薄れている。ただしもともと県北部での記録のない種で生息地が少なく、今回準絶滅危惧種に指定した。青森県に生息しないとすれば日本海側における分布の北限地はどこか詳細は不明であり、その解明が期待される。ヤマアカガエルは産卵が高山の池沼まで見られ、分布が広く個体数も多い。

トノサマガエルは稲作と密接な関係をもって分布を広げてきたが、その農業の近代化によって減少した種である。かつては密度の高い大集団を形成して広大な水田地帯を優勢に占拠していたが、圃場の区画整備と乾田化によって生息地が分断され、小型化し点在化した。また農薬使用の影響も大きかった。ツチガエルもこれにほぼ準ずる。

ウシガエル（食用蛙）は、昭和初期（1927～1933）に養殖を目的として県内広く61以上の農家に約1万5千個体の幼生を配布したが繁殖させることができず、寒冷多雪の秋田では生息できないだろうと考えられていた種である。ところが1975年に南秋田郡の山間に民間人によって半ば戯れに放されたものが、管理の甘い農業灌漑用溜池と干拓された八郎潟の残存調整池、残存承水路を拠点にして増えつづけ、分布を広げた。その分布拡大は今も続いている上、近年はさらに二次的な人為搬入とみられる遠隔地での繁殖も起こっている。

シュレーゲルアオガエルの生活史は山村の稲作に適応している。成体は夏中は林中にあって、春、山際の水田が耕起され、水が張られると畦にあるネズミ穴等に産卵する。近ごろは畦にポリシートを貼って水漏れを防ぐ作業が行われたり、過疎な山間地での農薬使用が相変わらずまとめて過剰に行われたりの影響を受けているが、今のところ絶滅が危惧されるほど問題が進行していない。

モリアオガエルは吸盤が発達していて森にすみ、初夏池の水面に張り出した枝に白い泡状の卵塊を産みつける。雄4～6cm、雌6～8cm。体が大きいため生息するには外周りが藪で内部に風が入りこまないような湿った森林を必要とする。生息するには制限要因の多い本種だが、冬の大量の降雪と夏はフェーンの高温によって森林の発達のよい本県では、サンショウウオ3種とともに1976年以降連続して分布調査の対象にされたこともあって、広く各地で記録されている。近ごろは里山の雑木林の管理が粗放にされがちで、これが本種の生息に有利にはたらいっているようにも見える。

カジカガエルは晩春に河川上流の瀬の大きな石の下に産卵する。幼生は大きな吸盤で石に吸い付いて体を保っている。産卵期以降の成体は水辺を離れて森林内に生息する。本種は1978年の緑の国勢調査において県が主要野生動物に追加して調査を進め、各河川の上流部に広く生息していることがわかった。一時は河川の砂防ダムの建設が過剰気味に行なわれて生息環境の悪化が心配されたが、これの納まった今は安定を取り戻している。

以上、爬虫類両生類を通じて言えることは、人間の生活環境に接して生息する種のみならず人里から離れた場所で野生の生活をしていると思われる種も決して人間と没交渉ではない、ということである。かつて人間とかすかに接触しながら生息圏を広げたと見られる事例は多々ある。たとえば高度経済成長期以前の林道の脇には、山の斜面から地下水がしみだして所々滞水している素掘りの浅い溝があった。現在も路傍のその溝にトウホクサンショウウオやヤマアカガエルやアズマヒキガエル、モリアオガエルなどが産卵しているが、ほかにめばしい場所はない。これらの動物はおそらく人間の刻んだ排水溝を基地としてさらに奥地へ分布を広げたとされる。かつては人間の自然利用が穏やかで、それに小動物うまく適応していた。自然の豊かさはそのようにして維持されてきた。振り返って現在の合理性経済性追求の三面舗装の排水溝では小動物はさすがにすがるよすがもない。今後期待されるのは小動物に思いがおよぶ開発である。

（本郷敏夫）

カエル目アカガエル科

準絶滅危惧種

環境省：該当なし

## ニホンアカガエル *Rana japonica* Günther, 1858



◆**国内外の分布** 青森県と岩手県の一部を除く本州、四国、九州、屋久島、種子島に分布する。八丈島には人為移入。日本国外では中国の中部、南部に分布する。青森県での記録は1960年代の文献にあるが確実な標本がなく、現在は青森県内に野生しないとの見方が一般的である。このことは、東日本や西南日本ではニホンアカガエルが平地に生息しヤマアカガエルは山地に生息するが、東北日本ではヤマアカガエルが平地にも生息するとの見解とからめて理解されている。いずれにせよ秋田県のニホンアカガエルは、日本海側における分布の北限地であることに注目したい。

◆**県内の分布** 県内の初記録は、大曲市花館で採集されたとする岡田の総説（1930）である。本種はその後「平地に生息するありふれたアカガエル」との認識のまま経過し、1960年代までは分布を考察するに足る記録がない。しかし籠屋（1970）は鹿角地方に産するカエル類に本種を挙げなかったし、その後収集された記録も、県央・県南部に限られた。現在生息が記録されている最北の地は1979年の能代市仁井田小友沼であり、近年の記録としては大潟村（1995）である。

◆**本種の概要** 早春、山際の水田等に産卵するアカガエル類としては本種のほかヤマアカガエルがいる。ニホンアカガエルの卵塊は弾力があり、ヤマアカガエルの卵塊は粘着性があると言われるが区別しにくい場合もある。また前者の幼生の背部には1対の黒斑が現れるが後者のそれは全体が黒色であるとの違いも指摘されているが、これも常時すべてに判然、とは言えない。成体の特徴として確実なのは、①ニホンアカガエルでは背面体側を走る隆条が鼓膜の後背側でほとんど曲がらないのに対して、ヤマアカガエルでは鼓膜の後背側で外側へ曲がる、②ニホンアカガエルの口先は長く尖るのに対して、ヤマアカガエルは口先が丸い、③ニホンアカガエルの腹面には黒色の斑紋はないが、ヤマアカガエルの多くは下顎の縁に、あるいは腹面に黒斑が見られる、などでありこれらによって区別できる。秋田県のニホンアカガエルは上に述べた北限地としての存在価値のほか、もう一つ注目すべき問題を抱えている。住田等の研究によって、わが国のニホンアカガエルは東部（一関）と西部（広島）の2種族に分けられているが、秋田個体群の酵素と血液蛋白はそれら2種族とも異なるということが判明している。

◆**本種の現状** 調査はなお不十分であるが、①個体数が減少している、②生息条件が悪化している、の2点により準絶滅危惧種と判定した。環境省分布調査で使用している「5倍地域メッシュ」では秋田県全域が548区画に分けられる。その内、本種が記録されたのは34区画（本郷2000）で、その後2区画が追加され36区画となっている。ただし初期の記録にはすでに絶滅したと思われるものや、ヤマアカガエルと完全に区別することがむずかしいと言われる卵塊だけで記録し成体が観察されていないものも含まれており、その区画数は19を数える。絶滅したと考えられる地点としては大曲市花館や秋田市保戸野、秋田市千秋中島町などで、その原因は宅地化などの環境変化が挙げられる。現在は、例えば秋田市豊岩石田坂のようにヤマアカガエルの生息密度の希薄な山間草地荒地に進出したものが生存を続けている。一方、干拓前は湖底であった大潟村でも本種が観察されている。

◆**生存に対する脅威** 1960年頃から水田が大型農機に適するよう整理される一方、宅地化と住宅環境の整備が進んで、成体の棲む草叢と産卵に適する水たまりの両方がそろった場所が激減し、壊滅的に減少した。

◆**特記事項** 近年は農業の減反政策の進行によって、耕作を放棄した水田が多くなったうえ、農薬使用量の減少などの影響も出始めたように思われる。成り行きを見極めたい。

(本郷敏夫)

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

## 両生類参考文献

- 広瀬文男・富岡克寛, 1974. ニホンアカガエルとヤマアカガエルの卵塊の比較. 遺伝 28-3:108-111. 裳華房.
- 本郷敏夫, 1970. 秋田県産有尾両生類とそのすみわけ. 生物秋田 14:4-6. 秋田生物学会.
- 本郷敏夫, 1975. シュレーゲルアオガエルとモリアオガエルについて. 生物秋田 19:3-6. 秋田生物学会.
- 本郷敏夫, 1974. タゴガエルの記録. 秋田自然史研究 2:1. 秋田自然史研究会.
- 本郷敏夫, 1982. タゴガエルの秋田県内生息地. 秋田自然史研究 15:17. 秋田自然史研究会.
- 本郷敏夫, 1982. 両生類爬虫類. 真木溪谷自然環境調査報告書:107-128. 秋田県.
- 本郷敏夫, 1988. 秋田県へのウシガエルの移入と定着. 秋田自然史研究 23:1-2. 秋田自然史研究会.
- 本郷敏夫・中川信行, 1991. ニホンアカガエルの秋田県内分布, 特に秋田市石田坂における生息状況について. 秋田自然史研究 27:4-6. 秋田自然史研究会.
- 本郷敏夫・沖田貞敏, 1996. 秋田県におけるヒノビウス属2種の分布. 生物秋田 38:20-22. 秋田生物学会.
- 本郷敏夫, 1999. 秋田県の両生類相と分布状態解明の状況. 両生類誌 3:21-27. 新潟両生類研究会.
- 本郷敏夫, 2000. 秋田県におけるニホンアカガエルとウシガエルの生息状況. 千葉中央博自然史研究報告特別号 3:17-21.
- 本郷敏夫, 2000. 秋田県両生類爬虫類分布図:1-69. 秋田県環境と文化のむら協会.
- 井出嘉雄, 1939. 動物. 秋田県総合郷土研究:54-71. 秋田県師範学校・秋田女子師範学校.
- 籠屋留太郎, 1970. 生物学習に利用できる材料の減少. かたかご 8:1-2. 秋田県立花輪高等学校生物クラブ.
- 前田憲男・松井正文, 1989. 日本カエル図鑑:44-47. 文一総合出版.
- 松井正文, 1988. 琉球諸島以外のカエル目. 動植物分布調査報告書(第3回)両生類・爬虫類:168-171. 環境庁.
- 向山満, 1990. 青森県産カエル類の分布に関する疑問. 採集と飼育 52-5:228.
- 奈良典明, 2000. 爬虫類・両生類. 青森県の希少な野生生物:161-167. 青森県.
- 西岡みどり, 1975. カエル. 遺伝 29-3:52-58. 裳華房.
- 岡田彌一郎, 1930. 日本産蛙総説:91-96. 岩波書店.
- 岡田彌一郎, 1937. 北日本, 東北地方の両生類について. 斎藤報恩会博物館研究報告 12:192. (英文)
- 住田正幸・西岡みどり, 1994. 酵素と血液蛋白の電気泳動解析によって明らかにされたニホンアカガエルの遺伝的分化. 広島大両生研報告 13:137-171. (英文)

# 淡水魚類 概説

## 1. 秋田県の淡水魚類相

秋田県の淡水魚類は、汽水魚や偶発的に出現する海水魚を含め、現在までに約120種類が知られている。この種数は、日本海側の隣県や秋田県と同緯度に位置する太平洋側の各県と比較しても豊富であると言える。これは、秋田県が本州北部日本海に面しているという地理的位置、氷河期等の地史的な変遷、多様な生息場所の存在、人為的な分布などを反映したものである。

秋田県を特徴づけている魚種は、北限の魚種（アカヒレタビラ、ゼニタナゴ、シナイモツゴ、ホトケドジョウ、アカザ）、北方系遺存魚種（エゾウグイ、トミヨ・淡水型、ハナカジカ）、雄物川水系の固有魚種（クニマス、イバラトミヨ雄物型）などであり、そこに、海と河川を行き来する多くの「通し回遊魚」（マルタ、イトヨ、クロヨシノボリ、チチブ、スミウキゴリ、ピリング、ミミズハゼ、シロウオ、カマキリ、カンキョウカジカなど）が加わる。

一方、これらの在来種のほか、本来、分布していなかったが最近になって生息するようになった外来種が多く認められている。外国産としてブラウントラウト、ニジマス、オオクチバス、ブルーギル、カムルチー、タイリクバラタナゴなど、国内産としてオイカワ、カワムツB型、カマツカ、タモロコ、モツゴ、ビワヒガイ、ゲンゴロウブナ、アブラボテ、ヒメマス、ギギなどである。

## 2. 希少淡水魚類に対する影響要因

今回のレッドデータブックに記載した希少淡水魚類は、その多くが前述の秋田県を特徴づけている魚種に含まれる。すなわち、秋田県に本来生息していた在来魚の多くが、現在は希少淡水魚となっているのが現状なのである。普通に生息していた魚種が希少になってしまったところに、問題の所在がある。

このような状況に陥った原因は、魚種により様々である。クニマスのように、結果が予想されていたにもかかわらず、生息場所に酸性水が導入され絶滅した例もあるが、多くの場合は、「いつの間にか、見えなくなった」のである。

その原因として、河川改修、ため池の改修、大規模圃場整備事業などによる生息環境の悪化が第一にあげられるだろう。この問題は単純ではなく、産卵場、稚魚の生育場、避難場、餌料の生産場所、摂餌場など様々な機能を持つ「場」そのものの消失につながっており、その影響の程度は魚種により異なる。次いで、オオクチバスの食害、モツゴの移入によるシナイモツゴとの雑種形成や競合など外来魚による影響がある。その他、排水の流入、観賞魚販売業者による採捕、産卵基質となる二枚貝の減少なども大きな影響を与えている。

いずれにせよ、現状ではこれらの要因はさらに加速されており、このままの状態が続けば、絶滅危惧種は絶滅種へ、準絶滅種は絶滅危惧種へとさらにその位置づけが変化するのは確実であろう。

## 3. 希少淡水魚の保全

このような危機的な状況の中で、最近になっていくつかの変化も出てきている。国、県による河川水辺の国勢調査の実施、河川法の中に治水および利水に加えて環境が入ったこと、農業農村整備事業に係る生態系保全対策検討協議会の設立などである。また、本書のようなレッドデータブックの作成なども各地方自治体レベルで行われるようになってきており、これらの動きは総体としては評価されることであるが、逆に、希少種だけに目を向けさせる結果になっている面があることも否定できない。前述のとおり、普通種が希少種になっていった経緯を見れば、「普通種」を含む生物多様性そのものに留意しなければならないことは当然のことである。

さらに、最近、国内の淡水魚類を対象としてアロザイム分析やDNAレベルでの分析が行われ、種間の類縁関係や種内の変異性に関し多くの報告が出されるとともに、起源や種分化についても検討さ

れるようになってきた。いくつかの例をあげてみよう。

- ①トミヨ属魚類の分類形質とされてきた鱗板の連続性の有無は、遺伝学的には表現型の差異と判断され、従来、イバラトミヨとされてきたものは汽水型、雄物型、淡水型に分けられ、トミヨは淡水型と共にトミヨ・淡水型と呼ばれる1集団を形成する。秋田県には、イバラトミヨ雄物型とトミヨ・淡水型が分布している。
- ②国内のメダカは遺伝的に離れた4集団からなり、秋田県のもは青森県の東部から日本海沿いに丹後半島の東側まで分布する「北日本集団」に属する。
- ③スナヤツメは形態学的には識別できないが、遺伝的には北方グループと南方グループに分けられ、両者には生殖隔離が認められている。秋田県には南方グループが分布する。
- ④本州に生息するハナカジカと北海道に生息する本種との遺伝的距離は、後者とエゾハナカジカとのそれより大きい。

これらの研究は、従来1種とされたきたものが複数の種から成り立っていることを明らかにしているとともに、遺伝的にまとまりのある集団としての地域個体群の保全の重要性を強く示唆している。

#### 4. 淡水魚の保全

本県に生息する淡水魚類は、米代川、雄物川および子吉川の一級河川をはじめ、流呈が短く瀬の状態では海に入る小河川、十和田湖、八郎湖などの大型の湖沼、大小3000箇所を超える灌漑用ため池、仙北平野に広がる湧水地帯など多様な環境の中で生存している。

そして、淡水魚とは、環境との対応の中で生きることが許容されている存在なのである。この観点から、淡水魚の保全のために考慮すべき事項について述べる。

##### ①種ごとの生活の実態把握

対象とする魚が、何を食べ、いつ、どこで産卵し、どのような生活をし、成長はどの程度か。これらについて、季節ごとの変化や発育段階による相違などが把握できなければ、効果的な保護はできない。また、これらのことが環境とどのように対応しているかを把握する必要がある。

##### ②生活場所の構造的把握と保全

河川には、瀬と淵を基本に、平瀬、早瀬、淵と連続する構造があり、そこにはワンドと呼ばれる湾入部や中州も存在している。これらの要素は、水深、流速、底質などの組み合わせにより、生息魚類にとってさらに複雑で多様な機能を提供し、各魚種はこのような構造に対応して生活している。このような生活場所の量的・質的把握とともに、その保全が必要となる。

##### ③水系のネットワークと連続性の確保

河川であれば、本川、支川、さらにそれに連なる水路などが同じ水系として存在している。また、上流、中流、下流、河口、海面と連続した水域でもある。湖沼やため池においては、湛水域と流入河川、流出河川は一体のものとしてある。湧泉とそこから流出する水路も同様である。各魚種は、産卵、稚魚期、摂餌などのさまざまな生活をこのようなネットワークと連続性の中で完結している。ダム、頭首工、落差工、三面張りなどによるこのような関係性の断絶は致命的な影響を与えることから、水系のネットワークと連続性の確保が必要である。

##### ④陸域と水域との関係の維持

陸域と水域とは異なった生態系として別のものであると考えられがちであるが、最近、その接点（エコトーン）が持つ機能が注目されている。溪畔林や河畔林、河畔植生と呼ばれるものがそれであり、餌料の供給、待避場の提供、産卵場の形成、土砂の流失防止、水温上昇の抑制などの機能が明らかとなってきた。このような陸域と水域との接点の重要性に対する認識とその両者

の関係の維持を計ることが必要である。

⑤継続的なモニタリングの実施

淡水魚の保全を計るための基本は現況の把握である。対象とする魚類がどのような状況に置かれているかを、継続してリアルタイムで把握し、状況に応じて迅速に対応しなければならない。このためのモニタリング体制の構築と調査の実施が必須である。

(杉山秀樹)

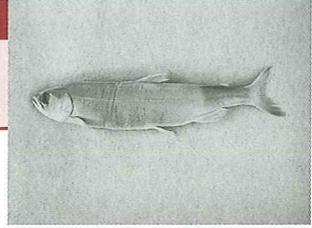
サケ目サケ科

絶滅種

## クニマス

*Oncorhynchus nerka kawamurae* (Jordan et McGregor, 1925)

環境省：絶滅



◆国内外の分布 秋田県田沢湖。

◆県内の分布 秋田県田沢湖（絶滅）。

◆本種の概要 ヒメマスの亜種と推察されているが、田沢湖は現在のヒメマスの天然分布範囲よりさらに南に位置する。鰓耙は細かく、プランクトンフィーダーであったと考えられる。日本最深の湖である田沢湖に生息していた。現在の田沢湖は、低pHであること、これに起因して餌料生物が不足していることなどから、本種の生息は不可能である。

◆本種の現状 絶滅したと考えられる。本種の絶滅時期は特定できないが、田沢湖に玉川から導水したのが1940年1月であることから、この時期であろう。

◆特記事項 形態的にはヒメマスとよく似ており、ヒメマスと同一種とする意見もある。しかし、原記載では体表および鱗には黒点がない（no dark spot）としている。また、生態的には産卵盛期が2月であることなど、両種は明らかに相違していると考えられる。発眼卵を西湖に移出した記録があるが、そこで再生産している可能性はほとんどない。田沢湖町で賞金をかけてクニマス探しを行ったが、持ち込まれたものは、ヒメマス、ギンザケ、ウグイなどに同定されるものだけであった。

(杉山秀樹)

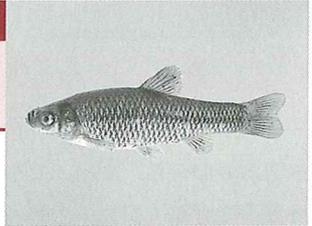
コイ目コイ科

絶滅危惧種 I A 類

## シナイモツゴ

*Pseudorasbora pumila pumila* Miyadi, 1930

環境省：絶滅危惧 I B 類



◆国内外の分布 関東から東北地方（青森県を除く）が自然分布であるが、関東地方では絶滅。日本海側で現在確実に生息しているのは、新潟県、山形県、秋田県だけで、各県ともきわめて限定された池沼である。秋田県が分布の北限であるとともに、国内で最大の生息地である。

◆県内の分布 県内には3000以上のため池があるが、本種の生息が確認されているのは、峰浜村（2地点）、能代市（1地点）、大館市（1地点）、横手市（1地点）、秋田市（3地点）、森吉町（1地点）、象潟町（2地点）などきわめて限定されている。

◆本種の概要 古くからある池沼に生息する。基本的には池沼に生息するが、ここから水路に出たものが採捕されることもある。小泉潟（秋田市）、鳥獣保護センター内の沼（五城目）、西沼（横手市）などは、最近になって絶滅した。昭和町、大館市などでは、モツゴとの天然交雑個体が確認されている。

◆本種の現状 現在、モツゴが八郎湖、3大河川をはじめ県内に広く生息するようになっており、シナイモツゴの存立基盤はきわめて脆弱である。近縁種であるモツゴとの天然交雑、競合などにより絶滅する例が多い。池沼の改修により、絶滅した例も認められる。最近、オオクチバスが分布を拡大しており、これの食害による影響が懸念される。

◆生存に対する脅威 ため池の埋立・改修、オオクチバスの放流、モツゴとの交雑。

◆特記事項 池沼に隔離されて生息しているため、それぞれの生息場所で遺伝的に分化している可能性がある。それぞれの個体群を保護する必要がある。

(杉山秀樹)

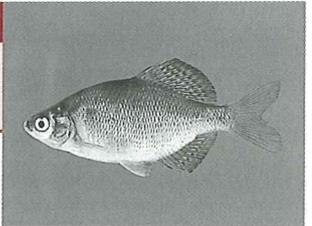
コイ目コイ科

絶滅危惧種 I A 類

## ゼニタナゴ

*Acheilognathus typus* (Bleeker, 1863)

環境省：絶滅危惧 I B 類



◆国内外の分布 神奈川県、新潟県以北の本州（青森県を除く）。秋田県が分布の北限。

◆県内の分布 秋田市千秋公園内のお濠、横手市の沼。

◆本種の概要 主としてため池に生息する。二枚貝に産卵するため、干出などにより貝がへい死すると、再生産ができなくなる。八郎潟の干拓前には生息していたが、干拓後、昭和40年代には絶滅したと推察される。横手市の西沼で1984年に生息を確認したが、公園の整備事業にともない池を干出させたことにより絶滅した。仙南村の灌漑用ため池で1980年代末に確認し、その後数回の調査を行ったが採捕できなかった。横手市内で、1985年に中学校の理科の研究グループが生息を確認した沼があったが、その場所は埋め立てられて、現存していない。新潟県では絶滅したと考えられており、山形県では過去10年間において確実な生息記録がない。

◆本種の現状 県内で生息しているのは数ヶ所であるが、生息環境は非常に厳しい。千秋公園では、ニシキゴイ、タイリクバラタナゴ等とともに生息しているが、この濠にはアメリカザリガニも多く生息している。横手市周辺は、最近、オオクチバスが広く生息するようになってきており、本種の存続が懸念される。

◆生存に対する脅威 ため池の埋立・改修、オオクチバスの放流、観賞魚業者の採捕。

◆特記事項 状況に応じて、確実な場所で飼育により種の存続を図る必要がある。横手市には既に東京の観賞魚業者が採集に入っている。

(杉山秀樹)

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

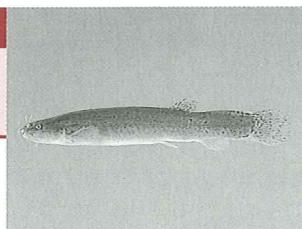
コイ目ドジョウ科

絶滅危惧種 I A 類

## ホトケドジョウ

*Leufa echigonia* Jordan et Richardson, 1907

環境省：絶滅危惧 I B 類



◆**国内外の分布** 東北地方（青森県、岩手県を除く）から三重県、京都府、兵庫県までの本州。秋田県が分布の北限。

◆**県内の分布** 金浦町、象潟町、仁賀保町、西目町、大内町、河辺町に採捕記録はあるが、採捕地点は各町とも1ないし2ヶ所である。

◆**本種の概要** 西目川が本種の分布の北限と考えられていたが、最近、河辺町の湧水と水路でも確認された。生息場所が、主として山際の水田の細流であるため、生息適地が非常に少ない。

◆**本種の現状** 生息場所が水田の細流に限定されるため、圃場整備などによる影響をうけやすい。県内における生息地点が孤立しているとともに、各地点における生息個体数もきわめて少ない。河辺町における生息個体数は非常に少ない。

◆**生存に対する脅威** 圃場整備等による生息環境の改変。

◆**特記事項** 四国東部、兵庫県などには近縁のナガレホトケドジョウが生息する。ホトケドジョウは、背鰭の位置、模様などに大きな地理的変異があることが知られている。

(杉山秀樹)

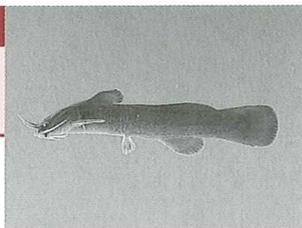
ナマズ目アカザ科

絶滅危惧種 I A 類

## アカザ

*Liobagrus reini* Hilgendorf, 1878

環境省：絶滅危惧 II 類



◆**国内外の分布** 本州（太平洋側は宮城県・日本海側は秋田県雄物川以南）、四国、九州。

◆**県内の分布** 雄物川水系（雄勝町、羽後町、西木村桧内川、協和町淀川など）、子吉川水系（石沢川、芋川、笹子川）。

◆**本種の概要** 雄物川が本種の分布の北限である。県内では雄物川水系と子吉川水系のみに分布している。夏期は、比較的水量のある礫底の場所に生息する。

◆**本種の現状** 生息場所が限定されているとともに、生息個体数はきわめて少ない。礫底に生息するため、河川改修の影響を受けやすい。産卵生態を含め、不明の点が多い。

◆**生存に対する脅威** 河川改修、水量の減少。

◆**特記事項** 雄物川では激減している。子吉川では生息実態が十分に把握できていないが、生息数はきわめて少ない。

(杉山秀樹)

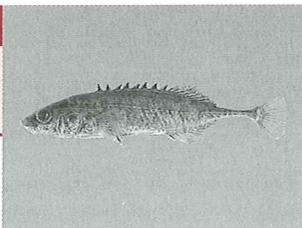
トゲウオ目トゲウオ科

絶滅危惧種 I A 類

## イバラトミヨ雄物型

*Pungitius* sp.

環境省：絶滅危惧 I A 類



◆**国内外の分布** 雄物川水系の湧水地帯からのみ知られていたが、最近、山形県大富、天童地域に生息する個体群も本種と遺伝的に同一であるとの報告がある。

◆**県内の分布** 田沢湖町、角館町、平鹿町、六郷町、千畑村、太田町、中仙町、横手市、雄勝町。

◆**本種の概要** 田沢湖町、角館町に生息している個体群は鱗板が連続する。その他の地区に生息するものは、鱗板が不連続である。平鹿町では、トミヨ・淡水型と本種が同所的に生息している。田沢湖町、角館町、雄勝町などでは、河川内に生息しているものも認められる。それ以外は、湧水と直接的な関係を持って生息している。

◆**本種の現状** 仙北、雄勝地方では大規模な圃場整備事業が実施されており、湧水が枯渇したり、水路が改修され本種に大きな影響を及ぼしている例が少なくない。

◆**生存に対する脅威** 湧水の枯渇、圃場整備等による生息環境の悪化。

◆**特記事項** 本州北部に生息するトミヨ属魚類は、トミヨとイバラトミヨが知られていたが、遺伝学的手法によりイバラトミヨには淡水型、汽水型（北海道東部のみに生息）、雄物型の3型が存在し、淡水型はトミヨと同種であることが判明した。すなわち、秋田県に生息しているものは「イバラトミヨ雄物型」と「トミヨ・淡水型」の2種である。前者の背鰭鱗膜は黒色であるが、後者は透明である。県内の各地区に生息しているものは形態に変異を有しており、保護に当たっては遺伝的な多様性に配慮する必要がある。トミヨ属に関しては、分類学的な調査が遅れている。

◆**現在講じられている保護対策** 平鹿町の生息地3ヶ所が秋田県の天然記念物に指定されている（平成10年3月20日付け）。

(杉山秀樹)

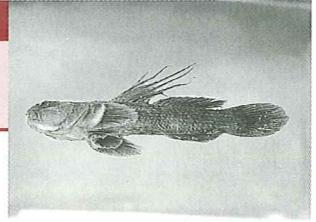
スズキ目ハゼ科

絶滅危惧種 I B 類

## チ チ ブ

*Tridentiger obscurus* (Temminck et Schlegel, 1845)

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** 本州および九州。国外では朝鮮半島。

◆**県内の分布** 君ヶ野川（岩城町）、衣川（本荘市）、水沢川（峰浜村）など。

◆**本種の概要** 県北部および県南部の独立河川の河口近くでわずかながら確認されている。1地点で本種が多く出現することとはなく、大型の個体が1～2尾採捕される程度であり、生息個体数は少ないと推察される。小河川では、河口域から数百mまでの範囲に出現する。

◆**本種の現状** 生息が確認された河川は少なく、その確認尾数も少ない。特に、小河川の河口部が改変されたり、下流部に床固めや落差工ができると、個体群が絶滅するおそれがある。

◆**生存に対する脅威** 河川改修。

◆**特記事項** 同属のヌマチチブと形態的によく似ているため、過去の記録を含め精査する必要がある。

(杉山秀樹)

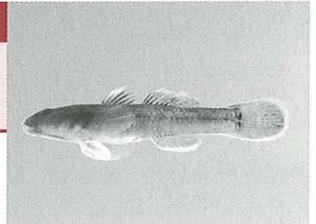
スズキ目ハゼ科

絶滅危惧種 I B 類

## クロヨシノボリ

*Rhinogobius* sp. DA

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** 本州（秋田県・千葉県以南）、四国、九州、南西諸島。

◆**県内の分布** 男鹿半島の小河川。

◆**本種の概要** 秋田県では、1998年に男鹿半島の海に滝状に注いでいる小河川で確認され、その後2001年に近隣の別水系でも確認された。塩分耐性を持ち、ふ化後降海し、2cm程度になると河川に遡上する。最近、山形県で生息が確認された。

◆**本種の現状** 生息場所が限定されているので、河川工事などにより壊滅的な打撃を受ける可能性がある。男鹿半島の他の小河川にも生息している可能性がある。

◆**生存に対する脅威** 河川改修。

◆**特記事項** 本種が確認された箇所は2地点に限定されている。生息個体数はきわめて少ない。現在のところ、男鹿半島が本種の北限の分布記録となる。

(杉山秀樹)

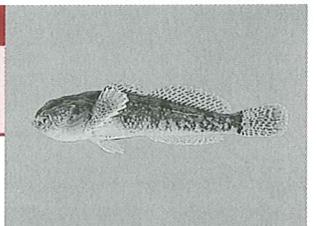
カサゴ目カジカ科

絶滅危惧種 I B 類

## ハナカジカ

*Cottus nozawae* Snyder, 1911

環境省：絶滅のおそれのある地域個体群



◆**国内外の分布** 北海道、本州（青森県、秋田県、岩手県、山形県、新潟県）。

◆**県内の分布** 雄物川水系（斎内川、院内川、入見内川などの小支川）、米代川水系（長木川水系、阿仁川水系などの小支川）。

◆**本種の概要** 県内での分布は、雄物川水系と米代川水系に限定される。塩分耐性を持たないことから、本種の秋田県における分布は、氷河期の遺存と考えられている。県内における分布は、エゾウグイと似る。雄物川水系では、湧水のある地点に出現することが多い。米代川水系では、支川にはカジカが分布し、その最上流に本種が生息していることが多い。

◆**本種の現状** 生息範囲がきわめて限定された狭い範囲なので、河川工事などにより壊滅的な打撃を受ける可能性がある。

◆**生存に対する脅威** 河川改修、土砂の流入。

◆**特記事項** 最近の研究によれば、北海道に生息するものと本州に生息するものとは、遺伝的に大きく相違していることが明らかとなった。

(杉山秀樹)

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

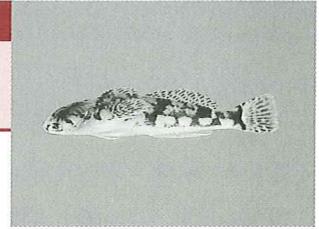
N

カサゴ目カジカ科

絶滅危惧種ⅠB類

カジカ中卵型 *Cottus* sp.

環境省：絶滅危惧Ⅱ類



- ◆**国内外の分布** 北海道南部、本州、四国、九州北西部。
- ◆**県内の分布** 水沢川（峰浜村）、県南部の小河川、米代川・子吉川河口。
- ◆**本種の概要** 県内での分布は、河口が礫底の清澄な水域を持つ場所や大河川の河口部に限定される。塩分耐性を持ち、ふ化後降海し、2cm程度になると河川に遡上する。
- ◆**本種の現状** 生息場所が限定されているので、河川工事などにより壊滅的な打撃を受ける可能性がある。生息個体数がきわめて少なく、生態的に不明な点が多い。
- ◆**生存に対する脅威** 河川改修。
- ◆**特記事項** 本種が出現する河川は限定されており、ある程度の母川回帰性が推察される。

(杉山秀樹)

コイ目コイ科

絶滅危惧種Ⅱ類

マルタ *Tribolodon brandti* (Dybowski, 1872)

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** 東京湾、富山湾以北の本州、北海道。国外ではサハリン、アムール川、朝鮮半島東岸などに分布する。
- ◆**県内の分布** 米代川（能代市）、雄物川（秋田市）、二古川（岩城町）、子吉川（本荘市）、西目川（西目町）など。
- ◆**本種の概要** 3大河川および県南部の独立河川の河口近くでわずかながら確認されている。雄物川では、河口から約100km上流の羽後町で4月下旬から5月上旬に40cmを超える大型の産卵個体が採捕されるが、年に数尾程度であり、それ以外の時期は成魚は確認されていない。また、稚魚は本川に連なる沼で確認されたことがある。小河川では、河口から数百mまでの範囲に未成魚が出現する。
- ◆**本種の現状** 産卵親魚は雄物川で年に数尾が確認されているだけで、その確認範囲も狭い。小河川の河口部に出現するのは、その出現河川で産卵している可能性は低い。
- ◆**生存に対する脅威** 河川改修。
- ◆**特記事項** ウグイ属の稚魚、未成魚については、誤同定の可能性があることから留意する必要がある。

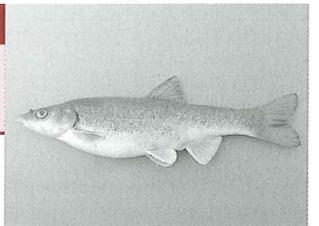
(杉山秀樹)

コイ目コイ科

絶滅危惧種Ⅱ類

エゾウグイ *Tribolodon ezoe* Okada et Ikeda, 1937

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** 北海道、本州（青森県、秋田県、岩手県、山形県、福島県）。
- ◆**県内の分布** 雄物川水系（成瀬川、斎内川、院内川、皆瀬川、横手川など）、米代川水系（長木川、小阿仁川など）。
- ◆**本種の概要** 県内での分布は、雄物川水系と米代川水系に限定される。塩分耐性を持たないことから、本種の秋田県における分布は、氷河期の遺存と考えられている。流れの緩い場所や、岸よりのえぐれた場所を好む。
- ◆**本種の現状** 生息範囲が限定されているので、河川工事などにより壊滅的な打撃を受ける可能性がある。
- ◆**生存に対する脅威** 河川改修。
- ◆**特記事項** 県内に生息する本種については、産卵場を含め、生態的に未解明の点が多い。

(杉山秀樹)

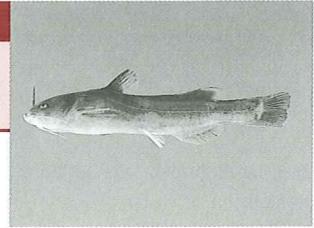
ナマズ目ギギ科

絶滅危惧種Ⅱ類

# ギバチ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

*Pseudobagrus tokiensis* Döderlein, 1887



- ◆**国内外の分布** 本州（神奈川県、富山県以北の関東地方、東北地方）
- ◆**県内の分布** 米代川水系、雄物川水系、子吉川水系、県内池沼など。
- ◆**本種の概要** 米代川水系は、本流を含めて比較的多く生息している。雄物川水系は、本流では少ない。子吉川水系では、1995年に初めて確認された。河川では、流れの緩やかな礫底の場所やヨシの根元を好む。
- ◆**本種の現状** 河川に生活しているものは河川改修の影響を受けやすい。地域的に、大きく減少している。
- ◆**生存に対する脅威** 河川改修。
- ◆**特記事項** 池沼に生息しているものの生態については、不明な点が多い。

(杉山秀樹)

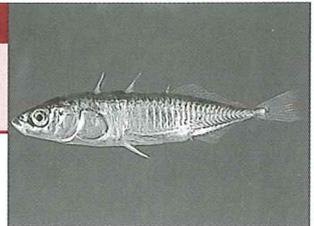
トゲウオ目トゲウオ科

絶滅危惧種Ⅱ類

# イトヨ降海型

環境省：該当なし

*Gasterosteus aculeatus aculeatus* (Linnaeus, 1758)



- ◆**国内外の分布** 日本海側では山口県、太平洋側では利根川以北の本州と北海道。
- ◆**県内の分布** 雄物川（雄和町）、米代川（能代市）、八郎湖、西目川（西目町）など。
- ◆**本種の概要** 県内の大河川の河口域を中心に普通に認められ、釣りの対象にもなっていたが、近年はいちじるしく個体数が減少している。4月上旬から河川に遡上し、4月中旬から5月中旬にかけて産卵する。その際、オスは流れの緩やかな砂泥底に営巣し、メスを呼び込み産卵させる。5月下旬から6月に3cm前後の稚魚が降海する。河口から1km程度までの範囲に出現することが多いが、まれに、大河川では20km以上も遡上することがある。営巣は、水深が浅く比較的清澈な砂泥域で行われることが多い。
- ◆**本種の現状** 大部分の河川で、生息数がいちじるしく減少している。特に、営巣は河川内ではなく、ワンドや流入する支川や水路で行われることが多いことから、河川改修によりこれらとの交流が遮断されると大きな影響を受ける。また、遡上力が弱いことから、下流部に床固めや落差工ができると個体群が絶滅するおそれがある。
- ◆**生存に対する脅威** 河川改修、水質悪化。
- ◆**特記事項** 十和田湖にも陸封型が生息するが、自然分布ではなく、青森県相坂からの移殖であると言われている。

(杉山秀樹)

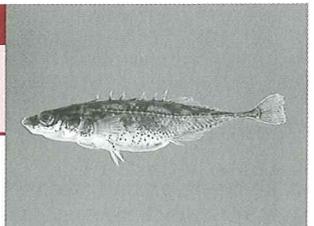
トゲウオ目トゲウオ科

絶滅危惧種Ⅱ類

# トミヨ・淡水型

環境省：該当なし

*Pungitius sinensis* (Guichenot, 1869)



- ◆**国内外の分布** 北海道、青森県（日本海側および太平洋側）、秋田県、山形県、新潟県、富山県、石川県、ロシア（オホーツク海側）、中国。
- ◆**県内の分布** 十和田湖、雄物川水系、米代川水系、水沢川、増川、百川など、八郎湖。
- ◆**本種の概要** 秋田市以南の沿海市町村には分布していない。鹿角市、比内町などでは、鱗板が連続するものと不連続なものと同所的に出現する。平鹿町では、イバラトミヨ雄物型とトミヨ・淡水型が同所的に生息している。雄物川および米代川では本川内に、比較的広く生息している。雄物川では、河川内の湧水と密接なかかわりを持って生息している。
- ◆**本種の現状** 河川改修により、河川敷内の湧水が枯渇し本種に大きな影響を及ぼしている例が少なくない。
- ◆**生存に対する脅威** 河川改修、圃場整備など。
- ◆**特記事項** 県内の各地区ごとで形態に変異があり、保護に当たっては遺伝的な多様性に配慮する必要がある。従来、鱗板の配列から、連続しているものをトミヨ、不連続のものをイバラトミヨと分類していたが、最近の遺伝学的研究により、「イバラトミヨ雄物型」、「イバラトミヨ汽水型」、「トミヨ・淡水型」の3種に分類されることが明らかとなった。
- ◆**現在講じられている保護対策** 平鹿町の生息地は県の、鹿角市の生息地は市の天然記念物指定を受けている。

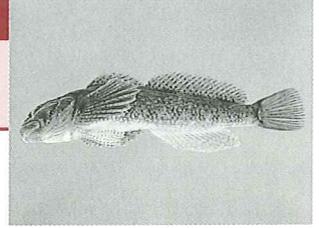
(杉山秀樹)

カサゴ目カジカ科

絶滅危惧種Ⅱ類

# カンキョウカジカ

環境省：該当なし

*Cottus hangiongensis* Mori, 1930

◆**国内外の分布** 北海道、本州（青森県、秋田県、山形県、岩手県、富山県）、朝鮮半島、沿海州。

◆**県内の分布** 川袋川（象潟町）、水沢川（峰浜村）、真瀬川（八森町）など。

◆**本種の概要** 県内での分布は、河口が礫底の清澄な水域を持つ場所に限定される。このため、小川川でのみ認められる。塩分耐性を持ち、ふ化後降海し、2 cm程度になると河川に遡上する。河口が礫底であることが必須である。

◆**本種の現状** 生息場所が限定されているので、河川工事などにより壊滅的な打撃を受ける可能性がある。

◆**生存に対する脅威** 河川改修、土砂の流入。

◆**特記事項** 本種が出現する河川は限定されており、ある程度の母川回帰性が推察される。

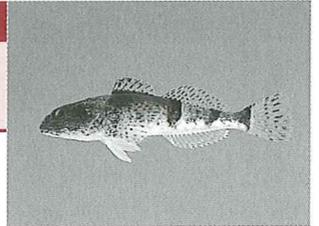
(杉山秀樹)

カサゴ目カジカ科

絶滅危惧種Ⅱ類

# アユカケ(カマキリ)

環境省：該当なし

*Cottus kazika* Jordan et Starks, 1904

◆**国内外の分布** 本州（茨城県、秋田県以南）、四国、九州。

◆**県内の分布** 真瀬川、米代川、雄物川、子吉川、男鹿半島の小川川、県南部の小川川など。

◆**本種の概要** 県内では比較的広く分布しているが、生息個体数は少ない。11～12月に親魚は降海し、1～2月に沿岸で産卵する。2 cm程度になると河川に遡上するが、遡上能力は弱い。未成魚、成魚は比較的水量があり、礫底の清澄な水域に生息する。

◆**本種の現状** 生息場所が限定されているので、河川工事などにより壊滅的な打撃を受ける可能性がある。

◆**生存に対する脅威** 河口域の改変、河川改修。

◆**特記事項** 米代川では1尾が採捕された記録がある。雄物川では遡上尾数の年変動が大きいようである。

(杉山秀樹)

ヤツメウナギ目ヤツメウナギ科

準絶滅危惧種

# スナヤツメ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

*Lethenteron reissneri* (Dybowski, 1869)

◆**国内外の分布** 北海道、本州、四国、九州（鹿児島県、宮崎県を除く）、沿海州、中国北部、朝鮮半島。

◆**県内の分布** 雄物川水系、米代川水系、子吉川水系、西目川、馬場目川、川袋川など。

◆**本種の概要** 一生を淡水域で過ごし、塩分耐性を持たない。湧水など比較的清潔な場所を好み、幼体は泥底の暗い場所を好み、成体は産卵期には砂底質に出現する。

◆**本種の現状** 小川川においては生息個体数が少ない。雄物川では減少傾向が認められる。本種は、河川改修などによる影響を受けやすく、地域的に個体群が絶滅する可能性がある。

◆**生存に対する脅威** 河川改修。

◆**特記事項** 最近の研究によれば、本種は遺伝的に北方グループと南方グループに分けられ、秋田県に分布するものは後者に属することが明らかとなった。

(杉山秀樹)

コイ目コイ科

準絶滅危惧種

## ヤリタナゴ

*Tanakia lanceolata* (Temminck et Schlegel,1846)

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** 本州および九州の一部。国外では朝鮮半島に分布。

◆**県内の分布** 米代川水系（能代市、鷹巣町、田代町など）、雄物川水系（秋田市、雄和町、大曲市、雄物川町など）、八郎湖水系（大潟村、昭和町、八竜町、五城目町など）、子吉川水系（本荘市）など。

◆**本種の概要** 県内では、平野部を中心にまだ比較的多くの河川、湖沼に出現するが個体数は漸減しており、認められなくなった箇所も少なくない。アカヒレタビラと混生している地点は少ない。湖沼より河川に出現する場合が多く、成魚は大河川の下流域の岸よりに、稚魚は比較的浅い泥底の場所に出現することが多い。

◆**本種の現状** 生息箇所の多くは河川を含めオオクチバスが生息するようになっているほか、産卵基質となる二枚貝が激減しているなど、生息環境は悪化している。

◆**生存に対する脅威** 河川改修、オオクチバスの放流。

(杉山秀樹)

コイ目コイ科

準絶滅危惧種

## アカヒレタビラ

*Acheilognathus tabira* subsp. R

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** 太平洋側では利根川以北、日本海側では石川県以北とされていたが、最近、山陰地方でも確認されている。秋田県が分布の北限である。

◆**県内の分布** 主として平野のため池に生息する。

◆**本種の概要** シナイモツゴ、ゼニタナゴなどと分布が重複している場合が多い。二枚貝を産卵基質とするため、イシガイ、マツカサガイなどが生息できる環境の維持が重要である。

◆**本種の現状** ため池の埋立や改修により、生息地点が減少している。

◆**生存に対する脅威** ため池の埋立・改修、オオクチバスの放流。

(杉山秀樹)

メダカ目メダカ科

準絶滅危惧種

## メダカ

*Oryzias latipes* (Temminck et Schlegel,1846)

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

◆**国内外の分布** 本州以南、琉球列島まで、朝鮮半島、中国、台湾。

◆**県内の分布** 米代川水系、雄物川水系、子吉川水系で確認されている。八郎湖、小泉潟などのほか、県内の池沼、細流に生息している。

◆**本種の概要** 八森町、岩城町、金浦町など沿岸のいくつかの町村の河川では、分布が確認されていない。大河川での生息地点はきわめて少ない。池沼、細流など、流れがほとんどない止水的な場所を好む。

◆**本種の現状** 県内では平野部のため池とそこに連なる水路に出現することが多い。

◆**生存に対する脅威** ため池・水路の改修。

◆**特記事項** 国内のメダカの遺伝的研究から、北陸から青森県までの日本海側および青森県東部までに分布する“北日本集団”とそれ以外の“南日本集団”とに分けられることが明らかになった。

(杉山秀樹)

スズキ目ハゼ科

準絶滅危惧種

# ビリンゴ

*Chaenogobius castaneus* (O'Shaughnessy,1875)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 北海道、本州、四国、九州。国外ではサハリン、朝鮮半島に分布。
- ◆**県内の分布** 子吉川（本荘市）、雄物川（秋田市）、米代川（能代市）、西目川（西目町）。
- ◆**本種の概要** 大河川の河口を中心に生息しているが、個体数は少なく、また、その年変動が大きい。雄物川、米代川では、最近の確認されていない。西目川では1尾が採捕されただけである。大河川では、河口域の抽水植物が生育している砂泥域に生息するが、そのような環境が安定していないと個体数はいちじるしく少ない。また、河口域の水質環境も重要である。
- ◆**本種の現状** 既存の生息確認河川では、最近はほとんど認められていない。砂泥質の河口域が安定していないと個体数が激減する。
- ◆**生存に対する脅威** 河川改修、水質悪化。

(杉山秀樹)

スズキ目ハゼ科

準絶滅危惧種

# スミウキゴリ

*Chaenogobius* sp.

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 北海道日高地方から九州の屋久島まで。国外では朝鮮半島から記録がある。
- ◆**県内の分布** 子吉川（本荘市）、雄物川（雄和町）、真瀬川（八森町）、水沢川（峰浜村）、川袋川（象潟町）など。
- ◆**本種の概要** 大河川ではきわめて少なく、県北部、県南部および男鹿半島の小さな独立河川の河口近くでわずかながら認められている。ふ化後降海し、夏季に2cm前後の稚魚が河川に遡上してくる。その後、河川の流れの緩やかな岸边などで生息し、10cm程度まで成長する。小河川では、河口域から1km程度までの範囲に出現することが多い。ごくまれに、大河川の中流域で確認されることがある。
- ◆**本種の現状** 大部分の河川で、生息数が大きく減少している。特に、小河川の河口部が改変されたり、下流部に床固めや落差工ができると、個体群が絶滅するおそれがある。
- ◆**生存に対する脅威** 河川改修。

(杉山秀樹)

スズキ目ハゼ科

準絶滅危惧種

# シロウオ

*Leucopsarion petersii* Hilgendorf,1880

環境省：準絶滅危惧

- ◆**国内外の分布** 北海道南部から鹿児島までの各地、朝鮮半島。
- ◆**県内の分布** 米代川、雄物川、八郎湖、衣川、西目川など。
- ◆**本種の概要** 男鹿半島や県北部の小独立河川における分布は不明である。春に産卵のため遡上してくる。
- ◆**本種の現状** 米代川河口では、四つ手網により漁獲されているが、年により豊凶が激しく、最近では激減している。雄物川河口では、4月になると市民が採っているのを見かけたが、最近ではほとんど見かけない。西目川、衣川では地元で採捕しているが、最近では激減している。
- ◆**生存に対する脅威** 河川改修、土砂の堆積。
- ◆**特記事項** 遡上量には、年により大きな変動があるが、全体的に大きく減少している。

(杉山秀樹)

スズキ目ハゼ科

準絶滅危惧種

環境省：該当なし

# ミミズハゼ

*Luciogobius guttatus* Gill,1859

- ◆**国内外の分布** 北海道から沖縄まで。国外では朝鮮半島と中国に分布。
- ◆**県内の分布** 子吉川（本荘市）、船越水道、真瀬川（八森町）、水沢川（峰浜村）、泊川（峰浜村）、増川（男鹿市）、西目川（西目町）など。
- ◆**本種の概要** 県北部、県南部および男鹿半島の小さな独立河川の河口近くの礫の下でわずかながら認められている。米代川では河口の礫の下で確認された。河川では、河口域から数百m程度までの範囲に出現することが多い。まれに、淡水域の緩やかな瀬の礫の下で認められることがある。
- ◆**本種の現状** 大部分の河川で、生息数が大きく減少している。特に、小河川の河口部が改変されたり、下流部に床固めや落差工ができると、個体群が絶滅するおそれがある。
- ◆**生存に対する脅威** 河川改修。

(杉山秀樹)

コイ目コイ科

情報不足種

環境省：絶滅危惧 I B 類

# ウケクチウグイ

*Tribolodon nakamurai* Doi et Shinzawa,2000

- ◆**国内外の分布** 新潟県・福島県（阿賀野川、信濃川水系）、山形県（最上川、赤川）、秋田県（子吉川）。
- ◆**県内の分布** 子吉川水系芋川で1尾が確認されただけである。1991年1月20日に全長461mm、体重1840gの個体が採捕された。
- ◆**本種の概要** 信濃川の河口で未成魚が採捕された記録があり、塩分耐性を有している可能性が強い。子吉川水系の採捕個体も最上川から降海した個体が遡上した可能性がある。生育地は、芋川では堰堤の下で、ウグイを採るための投網で混獲された。最上川では、産卵期がウグイより早くモモが咲く頃で、産卵水深はウグイより深く、流速が速い地点である。
- ◆**本種の現状** 県内での確認個体は1尾であり、再生産は不明である。この採捕個体が、本種の北限の記録である。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。
- ◆**特記事項** 子吉川における本種の確認記録は、本種の生態や移動能力を反映していると推察され貴重である。

(杉山秀樹)

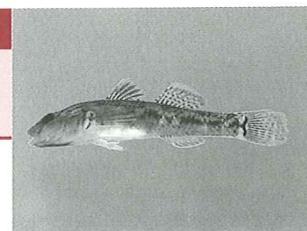
スズキ目ハゼ科

地域個体群

環境省：該当なし

# シマヨシノボリ陸封型

*Rhinogobius* sp. CB ; land-locked form



- ◆**国内外の分布** シマヨシノボリ降海型は、本州および九州、国外では朝鮮半島、台湾島に分布する。
- ◆**県内の分布** 一ノ目潟（男鹿市）。
- ◆**本種の概要** シマヨシノボリは、県北部、男鹿半島および県南部の独立河川で確認されているが、いずれも降海型であり、陸封されたものは一ノ目潟に生息する個体群だけである。本個体群は、胸鰭基部に沿った斑紋、尾鰭の点列、体側の横斑（不明瞭な個体も存在する）、頬のミミズ状の斑紋（不鮮明な個体も存在する）などの本種の特徴を保有している。国内では、池沼、ダム湖などに陸封型が生息している例もわずかに認められているが、地史的な要因により陸封された個体群は知られていない。一ノ目潟においては、岸よりの砂底質の場所に生息している。産卵期などの生態的知見は得られていない。
- ◆**本種の現状** 一ノ目潟にはオオクチバスが生息、繁殖しており、その影響が懸念される。
- ◆**生存に対する脅威** オオクチバスの繁殖。

◆**特記事項** 男鹿半島の目潟群において、一ノ目潟にはシマヨシノボリ、二ノ目潟にはトウヨシノボリ、三ノ目潟にはルリヨシノボリがそれぞれ陸封されており、進化生態学的観点からきわめて興味深い。

(杉山秀樹)

淡水魚類

EX

EW

CR

EN

VU

NT

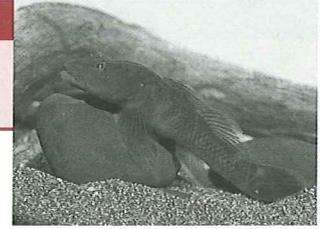
DD

LP

N

## ルリヨシノボリ陸封型

環境省：該当なし

*Rhinogobius* sp. CO ; land-locked form

◆**国内外の分布** ルリヨシノボリ降海型は、本州（千葉県、新潟県以南）、四国、九州、南西諸島に分布する。

◆**県内の分布** 陸封型は、三ノ目潟（男鹿市）に限られる。男鹿半島南岸の小河川、水沢川には両側回遊型が生息する。

◆**本種の概要** 三ノ目潟における個体群は、陸封型である。両側回遊型は塩分耐性を持ち、ふ化後降海し、1 cm程度になると河川に遡上する。県内における分布は、河口域が瀬で海に流入する河川に多いが、限定される。三ノ目潟は、孤立した砂底の小湖である。本個体群は、ほほにルリ色の小斑点を有するほか、尾鰭基部に太い黒色斑があり、本種の特徴が明瞭である。国内では地史的な要因により陸封された個体群は知られていない。

◆**本種の現状** 生息場所が限定されているので、工事などにより壊滅的な打撃を受ける可能性がある。

◆**生存に対する脅威** 近隣の池沼にオオクチバスが生息している。

◆**特記事項** 陸封型の存在は、全国的にも稀である。陸封型の個体群は、小型で成熟する。

(杉山秀樹)

## 淡水魚類参考文献

- 青森県, 2000. 青森県の希少な野生生物 —青森県レッドデータブック—. 青森県環境生活部自然保護課.
- 北海道, 2001. 北海道の希少野生生物 北海道レッドデータブック 2001. 北海道.
- 岩手県, 2001. いわてレッドデータブック ～岩手県の希少な野生生物～. 岩手県生活環境部自然保護課.
- 環境庁, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物 —レッドデータブック—, 脊椎動物編. 自然環境研究センター.
- 川那部浩哉・水野信彦, 1989. 日本の淡水魚. 山と溪谷社.
- 宮地伝三郎・川那部浩哉・水野信彦, 1963. 原色日本淡水魚類図鑑. 保育社.
- 中坊徹次(編), 1993. 日本産魚類検索—全種の同定—. 東海大学出版会.
- 中村守純, 1969. 日本のコイ科魚類. 資源科学シリーズ4. 緑書房.
- 新潟県, 2001. レッドデータブックにいがた. 新潟県環境生活環境企画課.
- 岡崎登志夫・小林敬典, 1992. カジカの遺伝的分化—一種分化の様式をめぐって—. 1992年度日本魚類学会講演要旨 42.
- 長田芳和・細谷和海, 1997. 日本の希少淡水魚の現状と系統保存—よみがえれ日本産淡水魚—. 緑書房.
- 酒井治己・桂和彦・小野沢茂好, 1991. 山形県最上川から得られたウケクチウグイ. 魚類学雑誌 37(4):424-426.
- 杉山秀樹, 1981. 秋田県における淡水魚類相の研究 I, 八郎潟の干拓に伴う魚類相の変遷について. 日本水産学会東北支部会報 31:18-22.
- 杉山秀樹, 1981. 秋田県における淡水魚類相の研究 II, 秋田県に生息する淡水性カジカ属4種の分布について. 日本水産学会東北支部会報 31:22-26.
- 杉山秀樹, 1984. 秋田県における淡水魚類相とその特徴. 日本水産学会東北支部会報 34:93-97.
- 杉山秀樹, 1985. 秋田の淡水魚. 秋田魁新報社.
- 杉山秀樹, 1997. 淡水魚あきた読本. 無明舎.
- 杉山秀樹, 1998. 秋田県米代川水系で採捕されたカラフトマス. 日本水産学会東北支部会報 49:32-33.
- 杉山秀樹, 1999. 秋田県雄物川水系におけるアブラボテの繁殖. 秋田自然史研究 39:10-14.
- 杉山秀樹, 2000. 秋田県男鹿半島におけるクロヨシノボリの分布. 秋田自然史研究 40:38-41.
- 杉山秀樹, 2000. 田沢湖まぼろしの魚 クニマス百科. 秋田魁新報社.
- 杉山秀樹, 2000. 魚類. 能代市史 特別編 自然, pp378-428. 能代市.
- 水産庁, 1998. 日本の希少な野生水生生物に関するレッドデータブック(水産庁編). 日本水産資源保護協会.
- 高村 明・杉山秀樹・河又邦彦, 2000. 平鹿町におけるトゲウオ類の生息環境の現状と保全. 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要 22:107-113.
- 竹内 基・松宮隆志・佐原雄二・小川 隆・太田 隆, 1985. 青森県の淡水魚類相について. 淡水魚 11:117-133.

# 昆虫類 概説

## 【トンボ目】

秋田県からは84種の蜻蛉類が記録されている。そのうち2種は暖地からの飛来種で越冬できないと思われる。カラカネイトトンボ、ルリイトトンボ、メガネサナエは、未確認であり、あるいは誤同定であるかもしれない。したがって、秋田県に確実に分布するのは79種である。

トンボ類の生息地は、もちろん水系であるが、流水と止水に大まかに分けられる。流水域には、カワトンボ、サナエトンボ類やヤンマ類の一部が生息する。一方、止水域にはイトトンボ、アオイイトトンボやエゾトンボ、トンボ類、ヤンマ類の大多数が見られる。

流水域でも最上流から下流まで次第に生息する種類が変わっていく。最上流ではムカシトンボのほか種類は少ないが、やや下ってクロサナエ、ヒメサナエ、さらに中流域の上部にかけてダビドサナエ、ミヤマカワトンボ、ヒガシカワトンボなどが生息する。沖積平野に入ると流れはずいぶん穏やかになるので止水性のイトトンボなども見られるようになる。農業用水路もこのような水域に含まれる。トンボ類の生息域として農業用水路が重要であった。現在は耕地整備のため、これらの水路はほとんどがU字溝に変わり、トンボ類に限らず多くの水生動物の生息地が奪われた。絶滅危惧種に指定した多くの種はこのような環境に生息していた種である。ホンサナエ、カトリヤンマ、コシボソヤンマ、ひいてはオジロサナエなども河川改修の犠牲になったといえる。河川改修は汚濁とともに水生動物に与える影響が大きい。最近は、このような改修の見直しが行われ、河川敷を広く取り、その中で水流を蛇行させ、淵、瀬など多様な環境を作ろうとする試みがなされている。水生動物にとっては非常に意味のあることであろう。

止水域は、大小の湖沼から溜池、小さな水溜りまで年間を通して水があればトンボ類は生息が可能である。大型の湖沼では、オオキトンボ、マダラヤンマ、オオセスジイトトンボなど国内の他の地域では絶滅した種が比較的温存されている。八郎瀉がトンボ類の調査がほとんどなされないまま干拓・淡水化されたのは残念であるが、小友沼などその他の湖沼の環境は良好である。このような水域では他県からの採集者による乱獲が著しい。

いわゆる湿原には独特のトンボ類が見られるが、高層湿原—秋田県では低標高地にも見られる—や、低層湿原など環境によってトンボ類が異なる。高地の高層湿原ではカオジロトンボ、ムツアカネが代表種である。カラカネトンボなどは低標高でも各地の池沼に見られ、生息域が広い。高地の高層湿原は手厚く保護されているのが通例で絶滅の心配はない。危惧されるのはモートンイトトンボ、ハッチョウトンボ、ヒメアカネ、エゾトンボなどが生息している低地の湿原である。特にモートンイトトンボの生息する水域は池沼などの岸辺にある狭い草丈の低い湿地で、各地で埋め立てによる絶滅が見られる。なお、これらのトンボ類は休耕田にも多く生息するが水田が再開されれば絶滅する運命にある。またマダラナニワトンボの生息地も多くは低地に見られる高層湿原あるいは中間湿原である。

このようにトンボ類の保護にあたっては、流水にあっては、河川や用水など生物の生息を考慮し、止水域では埋め立て時の十分な調査が必要である。

(高橋雅彌)

## 【コウチュウ目・カメムシ目 (タガメのみ)】

秋田県は、地形的には南北に長い長方形をしており、日本海には男鹿半島が突き出ている。三方を1000m前後の山に囲まれており、降った雨は殆ど県外に流出しない。山地帯はブナ林を基本とし、低地の土地利用形態としては水田が圧倒的に多い。また、隣接する青森県、山形県では水田に続く丘陵地部分がリングやサクランボ、ブドウ等の果樹園として広く利用されているのに対し、秋田県ではこの部分の多くがスギ植林や二次林になっており、薪炭林、水田の涵養林としての機能が重視

されてきた点が特徴である。このような特徴から以下の4点に整理してコウチュウ相の概要を述べることにする。なお、カメムシ目については、本県ではタガメ以外は蓄積データがほとんどなく、これを含んだ形でコウチュウ目相の概要を述べることにする。

第一は、水生コウチュウのゲンゴロウ科と湿地帯に生息域を持つ種である。前述の土地利用形態の特徴によりこれらの種類が温存されていることが本県のコウチュウ相の特色であり、水田の用水確保を目的に作られ手入れが続けられてきた堤等の水域には、タガメ、マルコガタノゲンゴロウ、ゲンゴロウが場所によっては少なくない。また、鳥海山周辺の湧水地では、ホンシュウオオイチモンジシマゲンゴロウが見られる。一方、低地の湿地帯を主な生息域とするオサムシ類であるマークオサムシが見ついている。これらのような環境省レッドリストに掲載され全国的にも稀少な種のほかに、秋田県レッドデータブックにとりあげたチンメルマンセスジゲンゴロウ、ニセルイスツブゲンゴロウのゲンゴロウ類、クマガイクロアオゴミムシ、アオバネホソクビゴミムシ、キアシネクイハムシ、アカガネオサムシ等の低地の湿地帯を生息域とするオサムシ類やハムシが生息している。

近年、低地の湿地帯は全国的に開発等による衰退が著しく、生息する動植物が大きな影響を受けている。この点で秋田県も例外ではなく、既になんらかの手だてが必要となっている種もいる。このことから開発、改変等の行為については事前に十分な調査を行い、発見された場合にはこれらの種に配慮を示すことが求められる。

第二は、低地の草地に準ずる環境に依存する種である。カワラゴミムシ、ホソハンミョウ、カワラハンミョウ、ダイコクコガネなどいずれも人為的管理によって存続する環境に依存する種であり、近年、草地等の管理が不十分なことによりその存続が危ぶまれている。草地管理の継続は畜産と関連があり、難しい点も多い。

第三は、ブナ帯に依存する種である。ブナ帯の植生に依存する種とブナ帯の環境に依存する種に分けられるが、前者としてはオオクワガタ、オオチャイロハナムグリ、数種類のカミキリムシ、サメハダチョッキリがあり、後者としてアイヌハンミョウ、ホソヒメクロオサムシ、フトクチヒゲヒラタゴミムシ、クロツヤシモフリコメツキ、ベニカメノコハムシ、トウホクミヤマヒサゴコメツキ等がある。これらはブナ帯の環境改変により影響を受けるが、今後とも林道工事などで無計画な伐採が進行しないように注意してゆく必要がある。

第四は、高山およびそれに準ずる環境に依存する種である。ハヤチネヌレチゴミムシ、カラフトマルトゲムシの2種をあげているが、これらはいずれも国立公園内で確認されており、開発・改変等からある程度保護されており危機的状況には陥りにくいと思われる。

(佐藤福男)

### 【カワゲラ目、トビケラ目】

秋田県に生息する水生昆虫の中で絶滅に瀕する種として、カワゲラ目1種とトビケラ目4種を本書に掲載した。掲載された5種はいずれもその分布域が特定の環境下に局限される種である。掲載理由としてはそれらが棲む湧水流がある小川や泉の湧水量の減少や、河川中流域における河床改修など生息場所の物理環境の悪化があげられる。

秋田県には奥羽山脈西部や鳥海山麓などにいくつかの湧水群がある。特に仙北、平鹿、雄勝三郡を中心とした雄物川上・中流域の扇状地には、扇中央部・扇端部に位置する帯状の湧水群があり、雄物川流域の伏流水による湧水も点在している。仙北地方では、古来荒地であった扇状地一帯が半世紀ほど前に田沢疎水が引かれ開墾されたころから、これら湧水群にある湧水では湧水量も豊富になり、周期的な水位変動が起こるようになったといわれている。この湧水流は河川や池沼と異なり、季節的な水温変化が小さく（湧水量の多少にもよるが、年間を通して8～15℃程度で推移）、夏冷

たく、冬暖かい。また、pHも5.4~6.2程度と弱酸性を呈しており、水源が地下水ということもあって湧泉付近では溶存酸素飽和度も70~80%程度に過ぎない。このように、河川や池沼と比較し、特異な環境下にある湧水域には、そこにしか棲まない固有種が生息する。植物では、藍藻類のアシツキ、蘚苔植物蘚綱のノコギリカワゴケなどが生育し、また、昆虫以外にも甲殻類のオオエゾヨコエビ属の一種や三岐腸類のイズミオオウズムシなどの動物が標徴種となっている。

秋田県では、クロモンエグリトビケラ、ババホタルトビケラ、ハンエンカクツツトビケラの3種は、河川の緩流域なども含め湧水以外の池沼などに広く生息するウルマートビイロトビケラやエグリトビケラ、ウスバキトビケラなどとは異なり、湧水域にしか生息しない湧水固有の種である。特に、クロモンエグリトビケラの幼虫の生息場所は現在まで2ヶ所のみ確認されているに過ぎず、うち1ヶ所は、湧水の枯渇により現在は草地になっており、その周辺におけるこの種の生息はその後確認されていない。また、他の1ヶ所についても、今後生息する湧水池に一定の水量が安定供給されないと絶滅の恐れがある。

さらに、比較的生息密度が高いババホタルトビケラやハンエンカクツツトビケラについても、湧水の環境に依存した生活様式をもっていることや、生息場所が特定の湧水に限定されていることから、今後の湧水池などの減少傾向に歯止めがかからない限り生息範囲が一層狭められていくものと推察される。

扇状地などにおける湧水量の変動は、水田に満たされる水量と密接な関係があることから、湧水の水源となる地下水は水田や用水路から地中に浸透する水であると考えられる。しかし、三面張りU字溝等の出現によって水田地帯からの水の浸透量が減るとともに、河川上流域の水量の人為的な管理などによって湧水への水の安定供給が難しい状況になってきている。したがって、今後水田の圃場整備等の開発が進む中、ここに示す絶滅に瀕する種を守るためには、単に湧水のみを残すだけでは不十分であり、恒久的な保護は困難であると考えられる。開発の際、特定の湧水池を残すためには、少なくともそれをとり囲む水田地帯一帯の保全を視野に入れた計画等が不可欠となると推察される。

一方、米代川、雄物川、子吉川をはじめとする大きな河川においては、最上流域の人の往来の少ない場所では中部山岳地帯に局限されるといわれるカワゲラ目数種が比較的容易に発見されるものの、中・下流域では河床が整備され、礫層が少なく砂泥の量も増加していることから、もともと普通に見られたカワゲラ目やトビケラ目もなかなか発見しにくい現状にある。シノビアミメカワゲラもそのうちの1種であり、今後このような底生動物の生息状況にも配慮した河川改修方法等の改善が望まれる。また、幼虫の生態が不詳のツマグロトビケラについても河川中流域の伏流地帯などで灯火に集まる個体が年に数回発見されているに過ぎず、今後広範囲にわたる継続調査が必要であると考えられる。

(青谷晃吉)

## 【チョウ目】

日本のチョウ目の種数はおよそ5,500種が知られている。このうちの半数以上の種が秋田県に生息しているものとみられるが、小蛾類の一部の調査が遅れていることもあって、現在県内で生息が確認されているチョウ目の総種数は2,500種余りとなっている。

高山性の種としては、唯一ベニヒカゲが和賀山塊一帯に産し、本州最北の生息地である。山地帯上部から亜高山帯にはエルタテハ、キベリタテハ、アルプスギンウワバ、クモマウスグロヤガなどを産し、奥羽山脈一帯のほか一部の種は白神山地、太平山地、鳥海山にも分布する。本県の面積の過半を占める山地帯は、ブナに代表される冷温帯林によって占められる。従って本県の代表的な種

群といえばブナ林に住む種といえるのかも知れない。しかしフジミドリシジミやゴマシオキシタバなどブナの固有種は10数種が知られているのみで、広食性の種やチシマザサなど林床植物依存の種を加えても、ブナ林のチョウ目相は必ずしも多様とは言い難く、分布上注目すべき種といえるものも多くない。種の多様性の面からみると、むしろ河川などによって攪乱された溪畔や河畔林のほうが勝っている。ここにはシロヤナギ、ドロノキ、ウダイカンバ、ハルニレ、オニグルミなど多様な植物が出現し、それらに依存するチョウ目の昆虫も極めて多様となる。由利地方の海岸部にはタブノキ、ヤブツバキ、アカメガシワなど暖温帯林の北端部が届いていて、アオスジアゲハ、ヘリスジナミシヤク、クロテンキリガなど暖温帯系種の北限の生息地となっている。

しかし本県チョウ目の分布の上で注目すべきは、山地草原とそれに介在する湿地帯（仁賀保町冬師や田沢湖町高野など）と、海岸砂丘とその後背湿地（雄物川河口や天王町細谷など）に生息する種群であろう。この中には全国的にみても貴重なものが数多く含まれている。しかしこのような地域は、山岳地帯に比べて人間による破壊や汚染が進みやすい場所でもある。

分布上特記すべき種としては、次のものがあげられる。

チビウスキオオメイガ（雄物川河口付近）、ヒメナミガタアオシヤク（田沢湖町高野ほか）、チョウカイシロコブガ（仁賀保町冬師）の3種は、現状では秋田県の特産種である。マエグロヤガは天王町での1♂が日本唯一の記録となっている。この種は沿海州や朝鮮半島北部に分布しているが飛来する可能性は少なく、砂丘に定着しているのかも知れない。山地草原と介在する湿地由来の種としては、ウスキミズメイガ、ウスジロドクガ、ダイセンセダカモクメ、ヨスジカバイロアツバなど10数種が確認されている。これらの中には隔離分布種や分布の南限となる種も含まれ注目すべきである。一方、海岸砂丘からはハマヤガ、アオモンギンセダカモクメなど特異な種が発見されている。南限の記録となるキタヨトウ、クシロモクメヨトウ、ホクトギンウワバも砂丘後背湿地に由来しているものと考えられる。

人間中心の開発行為や生活様式の変化による里山環境の劣化、ススキ草原やシバ草原の衰退や消滅、湿地の埋め立てやコンクリートによる護岸整備などは、そこに住む昆虫の生息に大きな脅威をもたらしたものと推察できる。本県ではここ数10年の間に、チョウ目だけですでに3種が絶滅しているが、これらは全て人間の生活圏の周辺に住んでいた種であった。

レッドデータブックは、人間がこれまで行ってきた環境汚染や各種の開発行為など生息環境の悪化によって、絶滅したり個体数や生息地が減少した（または今後その可能性が極めて高い）と考えられる種の名簿である。したがって、自然公園など法規制により保護されている地域や、短時間で破壊される可能性の少ない高山帯～山岳地域に住む種よりも、結果的に人間の活動圏の周辺に生息する種が中心となっている。また、個体密度の薄いいわゆる希少種や、分布の北限（南限）の種などは、そのことだけでこのリストに登載することは避けている。

いま絶滅の危機に晒されている種のほとんどが、私たちのすぐ隣に住み、そこでしか生きていけない種である。昆虫の場合、種の存続には広大な地域の保全を必要とするものもある一方で、ごく小さな環境に依存している種も少なくない。数時間で埋められてしまいそうな湿地や、人間にとって今はあまり役に立たなくなってしまう半自然草原、一見不毛に見える海岸砂丘や河川敷などに、今は追い詰められている虫たちが住んでいることをぜひ知って欲しいし、これから行政や事業を執行するにあたって、このことに配慮する英知と勇気を持っていただくことを望みたい。一度失われた種は復元できないものだからである。

（佐々木明夫）

チョウ目セセリチョウ科

絶滅種

# チャマダラセセリ

*Pyrgus maculatus* (Bremer et Grey, 1852)

環境省：絶滅危惧Ⅰ類

- ◆**国内外の分布** 北海道（東部）、本州（中部以北）、四国、ビルマ、中国大陸、モンゴル、アムール、ウスリー、朝鮮半島。
  - ◆**県内の分布** 鹿角市、大館市、鷹巣町、森吉町など県北内陸部。
  - ◆**本種の概要** 幼虫の食草ミツバツチグリ、キジムシロが自生する山間、山麓など的人為的な草地に生息する。
  - ◆**本種の現状** 1960～1970年代に県北内陸部で少数確認されたが、1971年に鷹巣町で採集された以降、生息は確認されていない。草丈の低い草原を好むことからこれらの維持管理が放棄されたため、生息環境の荒廃で衰退したと推定される。
- (成田 弘)

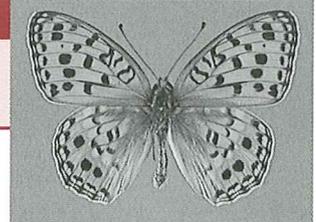
チョウ目タテハチョウ科

絶滅種

# オオウラギンヒョウモン

*Fabriciana nerippe* (C. et Felder, 1862)

環境省：絶滅危惧Ⅰ類



- ◆**国内外の分布** 本州、四国、九州、チベット、中国大陸、ウスリー、朝鮮半島。
  - ◆**県内の分布** 森吉町、田沢湖町、秋田市、仁賀保町、皆瀬村など。生息個体数も少ない。
  - ◆**本種の概要** 食草のスミレが自生する日当たりのよい乾燥した草地に生息する。
  - ◆**本種の現状** 1950～1960年代に単発的な採集記録はあったが、1971年に仁賀保町で採集された以降、生息は確認されていない。近年、森林、草地などの維持管理が放棄されたため、生息環境が荒廃し、食草のスミレが衰退したためと推定されている。全国的に生息地、生息個体数とも減少傾向にあり、絶滅した地域もある。
- (成田 弘)

チョウ目シャクガ科エダシャク亜科

絶滅種

# カバシタムクゲエダシャク

*Sebastosema bubonaria* Warrn, 1896

環境省：絶滅危惧Ⅰ類

- ◆**国内外の分布** 本州（秋田県1♂、新潟県4♂、栃木県1♂、♀、群馬県♀、東京都♀、埼玉県浦和♀）、中国。
  - ◆**県内の分布** 秋田市太平山に記録がある。明確に産地を特定できない。
  - ◆**本種の概要** 全国的に極めて稀。海岸、河川敷等に生息する。
  - ◆**本種の現状** 1950年代に採集されて以来記録が無い。
- (高橋雅彌)

昆虫類

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

トンボ目サナエトンボ科

絶滅危惧種 I A類

環境省：該当なし

# ホソサナエ *Gomphus postocularis* Selys, 1869



◆**国内外の分布** 日本特産種。北海道～熊本県に分布。

◆**県内の分布** かつては個体数は少ないが、広く県内に分布した。太平山麓、横手市に記録があり、鷹巣町、秋田市等の標本を確認した。

◆**本種の概要** 日本特産種。中小河川の中流、用水路等から発生する。安養寺川は礫を含む砂泥底。

◆**本種の現状** 1970年代までは個体数は少なかったが、広く県内に分布した。最近では雄和町安養寺川でのみ確認できた。河川の中流域に分布するため、開発のダメージが大きい。

◆**生存に対する脅威** 水田の用水路、小河川の改修。コンクリートのU字溝の使用、河川の直線化、通年の流水停止等による生息環境の悪化。

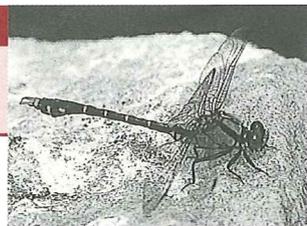
(高橋雅彌)

トンボ目サナエトンボ科

絶滅危惧種 I A類

環境省：該当なし

# アオサナエ *Nihonogomphus viridis* Oguma, 1926



◆**国内外の分布** 日本特産種。秋田県～鹿児島県に分布。

◆**県内の分布** 既知の産地は横手川のみであったが、最近、協和町および西仙北町で産地が見いだされた。協和町淀川が分布の北限。

◆**本種の概要** 秋田県が分布の北限。河川の中流域。砂礫底を好む。清流に分布。

◆**本種の現状** 横手川では最近確認されず、絶滅したと考えられていたが、1992年に山内村で生息が確認され、1998年に横手市内でも再発見された。淀川支流小黒沢は、最も安定した生息地である。個体数は少ないが、毎年見られる。西仙北町では1個体確認されたのみ。

◆**生存に対する脅威** 生息環境の悪化。河川改修、汚濁。

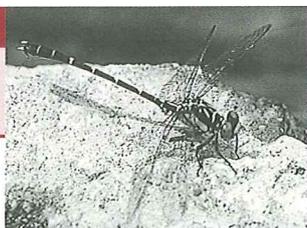
(高橋雅彌)

トンボ目サナエトンボ科

絶滅危惧種 I A類

環境省：該当なし

# ヒメサナエ *Sinogomphus flavolimbatus* (Oguma, 1926)



◆**国内外の分布** 日本特産種。青森県～鹿児島県に分布。

◆**県内の分布** 大館市、秋田市、横手市などに古い記録がある。秋田市、大館市の分布が再確認され、さらに、田代町、協和町の分布が追加されている。

◆**本種の概要** 青森県が分布の北限。山地溪流に発生する。滝壺に成熟雄が“なわばり”を形成する。

◆**本種の現状** 1960年代までは個体数は少ないながら、秋田市太平の八田川金山滝では必ず見られたが、最近では見られないうことの方が多い。新産地は見いだされたが、個体数はいずれの地でも極めて少ない。

◆**生存に対する脅威** 森林伐採による流量の変動。湯水・鉄砲水による河川の破壊による生息環境の悪化。

(高橋雅彌)

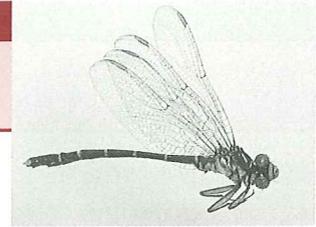
トンボ目サナエトンボ科

絶滅危惧種 I A類

環境省：該当なし

# オジロサナエ

*Stylogomphus suzukii* (Oguma, 1926)



- ◆**国内外の分布** 日本特産種。秋田・岩手以南、鹿児島まで。
- ◆**県内の分布** 大館市、田代町、鷹巣町、羽後町。
- ◆**本種の概要** 北限の種、東北地方では稀。小河川の中流域、砂泥底を好む。
- ◆**本種の現状** 最近鷹巣町の米代川で幼虫が採集されている。田代町では生活廃水のため、鷹巣町七日町では用水路の改修のため絶滅したと考えられる。羽後町の原因は不明。
- ◆**生存に対する脅威** 河川の改修。水質の汚濁。

(高橋雅彌)

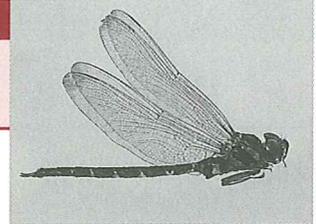
トンボ目ヤンマ科

絶滅危惧種 I A類

環境省：該当なし

# コシボソヤンマ

*Boyeria maclachlani* (Selys, 1883)



- ◆**国内外の分布** 日本特産種。青森県～鹿児島県屋久島に分布。
- ◆**県内の分布** 少ないながら全県下に分布していた。大館市、太平山麓、横手市、神岡町。
- ◆**本種の概要** 河川中流域や用水の木陰の多い清流から発生する。河川改修、低地の森林の伐採等に弱い。
- ◆**本種の現状** 1970年代に神岡町からの記録を最後に県内では長期間採集されていなかった。ただし、十和田地方から目撃例はあった。最近、角館町、秋田市から各1♂が採集された。
- ◆**生存に対する脅威** 中流上部、小河川の環境悪化。河川改修。低地の森林の伐採。

(高橋雅彌)

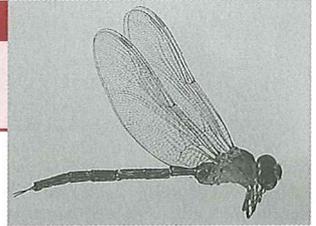
トンボ目ヤンマ科

絶滅危惧種 I A類

環境省：該当なし

# カトリヤンマ

*Gynacantha japonica* Bartenef, 1909



- ◆**国内外の分布** 中国、朝鮮半島、台湾に分布。日本では北海道南部～沖縄に分布。
- ◆**県内の分布** 全県下に分布していると思われる。最近では、西仙北町高屋敷、協和町古種沢で目撃した。
- ◆**本種の概要** 水田やその用水が主発生地のため、農地の整備によるダメージが大きい。湖沼、水田、中流域や用水の樹陰の多い緩やかな流れから発生する。
- ◆**本種の現状** 1970年代までは、県内各地に多産し、夕刻に各家々の庭先で群飛した。現在では、ほとんど見られず、山里でわずかに見られる。
- ◆**生存に対する脅威** 生息環境の悪化。水田の用水路、河川の改修。

(高橋雅彌)

昆虫類

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

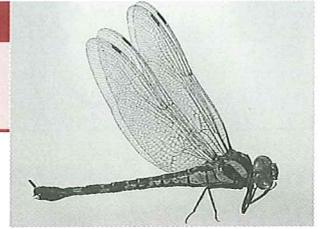
トンボ目ヤンマ科

絶滅危惧種 I A類

# ヤブヤンマ

*Polycanthagyna melanictera* (Selys,1883)

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** 中国中部に分布。日本では青森県～沖縄に分布。
- ◆**県内の分布** 秋田市、西仙北町に知られる。東成瀬村にも生息するというが未確認。
- ◆**本種の概要** 樹陰の多い水たまりや池沼から発生する。
- ◆**本種の現状** 1970年代までは、秋田市千秋公園では個体数多く、羽化個体を観察することもできたが、最近では未確認。近年は、秋田市手形および小泉瀧、西仙北町など少数の個体を確認したのみ。
- ◆**生存に対する脅威** 生息環境の悪化。沼沢地、公園の整備。

(高橋雅彌)

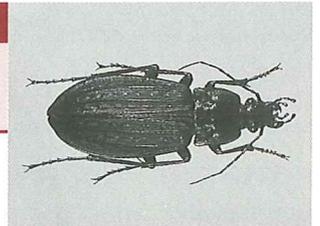
コウチュウ目オサムシ科オサムシ亜科

絶滅危惧種 I A類

# マークオサムシ

*Apotomopterus maacki aquatilis* (Bates,1883)

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** 基亜種は、シベリア東部、朝鮮半島北部、中国東北部に産し、本亜種は東北地方に産する。
- ◆**県内の分布** 現在の所、雄物川中流域の湿地帯に限って生息している。西仙北町刈和野の周辺のヨシ原で1♀が得られているが、その後まったく得られていないことからこの地では絶滅した可能性が高い。1950年代に新屋海岸でも採集された記録があるが、洪水で海まで運搬されたものであろう。また、県立博物館に河辺町式田で採集された標本が現存するが、その後の調査では確認されていない。最近、玉川と雄物川の合流点付近で採集され、現在この場所が県内唯一の生息地となる。
- ◆**本種の概要** 日本では東北地方特産種である。低地の湿地帯に限って生息する。ヨシ原と水辺が接するような環境を好むようで、河原などの乾燥した環境では見られない。
- ◆**本種の現状** 最近発見された1ヶ所を除けば、現在まで記録のあった場所では全て絶滅したと考えられる。現在この場所以外では発見されず、個体数も極めて少ない。
- ◆**生存に対する脅威** 湿地帯の開発、河川の大規模改修。

(佐藤福男)

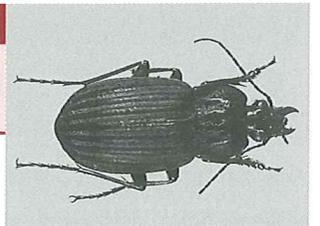
コウチュウ目オサムシ科アオゴミムシ亜科

絶滅危惧種 I A類

# クマガイクロアオゴミムシ

*Chlaenius gebleri* Ganglbauer,1892

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** 北海道、本州（関東以北）、シベリア。
- ◆**県内の分布** 県内では秋田市小泉瀧で灯火に飛来した個体が現在まで少数採集されているが、産地としては県内唯一の場所でもある。
- ◆**本種の概要** 本州では秋田県（小泉瀧）、最近青森にも生息しているという報告があるが、再確認はされていないようである。本州の他の産地は最近では全く記録がなく、絶滅が憂慮されている。したがって、現在の所、秋田県が本州では唯一の生息地となる。低地の湿地帯に生息する。マークオサムシが生息するような環境に出現するが、確認された個体は全て夏期灯火に飛来したものである。
- ◆**本種の現状** かつては千葉県まで分布していたらしいが、本州の産地は秋田県と青森県を除いて全て消滅したようである。北海道にも分布しているが、広大な湿地帯で稀に得られる種らしい。本県でも今まで得られた個体数は10個体に満たない。極めて貴重な種である。
- ◆**生存に対する脅威** 宅地化等による環境改変。
- ◆**現在講じられている保護対策** 小泉瀧の女瀧は秋田県指定天然記念物。

(佐藤福男)

コウチュウ目ホソクビゴミムシ科

絶滅危惧種 I A類

## アオバネホソクビゴミムシ

*Brachinus aeneicostis* Bates, 1883

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** 本州、九州、朝鮮半島、シベリア東部。
- ◆**県内の分布** 秋田市金足小泉湯（女湯）。
- ◆**本種の概要** 最近青森からも記録が報告されたが、本県では小泉湯が唯一の分布地である。低地の沼沢地、湿地を生息域とする。
- ◆**本種の現状** 小泉湯以外では採集されていない。生息地周辺に住宅地、道路、公園などが作られており、水質は極度に悪化しており、湿地の規模も縮小がみであることから本種の生息が懸念されている。
- ◆**生存に対する脅威** 生息地周辺の道路等の影響。
- ◆**現在講じられている保護対策** 女湯は秋田県指定天然記念物。

(佐藤福男)

コウチュウ目ゲンゴロウ科

絶滅危惧種 I A類

## テラニシセスジゲンゴロウ

*Copelatus teranishii* Kamiya, 1938

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** 東北（秋田県、山形、福島のみ）、関西（岐阜、大阪、福井、愛知、兵庫）、九州（福岡、長崎、大分）、沖縄県。
- ◆**県内の分布** 仁賀保町冬師（現在県内ではここ1ヶ所のみ）
- ◆**本種の概要** 国内外の分布欄に示した如く、極めて特異な分布様式を持つ種である。県内では仁賀保町の1ヶ所以外では記録がない。東北では3県に分布するが、関東、中部、中国、四国に分布の空白域があり、関西、九州に分布域があるという極めて特異的な分布様式を持っている。現在唯一の生息地である仁賀保町冬師は、ハンノキに囲まれた農道脇の極めて小規模な水たまりで（面積20㎡程度）深さは30cm程度、水底に枯れ葉が堆積しており、水草はない。現在の所ここが唯一の生息場所であるが水域は不安定で、渇水期には消滅し、本種も姿を消すが、水域が復活するとまた姿を現す。
- ◆**本種の現状** 分布、生息環境に記したように極めて特殊な分布様式と生態を持っている種である。県内では冬師に似た環境が他に見あたらないが、保全地域として保護されているので当面は問題がないと思われる。
- ◆**生存に対する脅威** 生息地は農道脇の貧弱な水域であり、改修等で消滅のおそれ大きい。
- ◆**現在講じられている保護対策** 生息地は冬師自然環境保全地域に指定されている。

(佐藤福男)

コウチュウ目カミキリムシ科フトカミキリ亜科

絶滅危惧種 I A類

## ミチノクケマダラカミキリ

*Agapanthia daurika sakaii* Hayashi, 1982

環境省：準絶滅危惧

- ◆**国内外の分布** 基亜種は北海道、極東一帯に産する。本亜種は本州中部以北に産し、岩手県早池峰山系平津戸を基産地としている。亜種の分布地としては、青森、岩手、秋田、群馬、新潟が知られるが現在でも確実に得られるのは岩手のみである。
- ◆**県内の分布** 鹿角市湯瀬で飛行中の個体1個体のみの記録（1979年7月2日）。
- ◆**本種の概要** カミキリムシの殆どの種は木本を食草としているが、本種は、食草が草本である関係で、特殊な環境を必要とする。本県を含め、草原性の環境は日本から激減しており、本種のみならずこのような環境に依存している昆虫は赤信号が灯っている場合が多い。食草のハンゴンソウがある草原的環境に生息する。
- ◆**本種の現状** 湯瀬にはその後再確認のため数度にわたり調査を行っているが、確認はされていない。本県ではすでに絶滅に近い。
- ◆**生存に対する脅威** 道路建設、河川改修。
- ◆**特記事項** 岩手県の北上山系では現在でも少数生息している。

(佐藤福男)

トビケラ目エグリトビケラ科

絶滅危惧種 I A 類

## クロモンエグリトビケラ

*Hydatophylax nigrovittatus* (McLachlan, 1872)

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** ヨーロッパ、ロシア（マガダン、カムチャツカ、アムール、ハパロフスク、シベリア南東部）、朝鮮、モンゴル、中国北部、日本に分布する北方系種。日本では、本州の山地渓流域に分布が局限されるとされている。

◆**県内の分布** 過去に、奥羽山脈西部の湧水群のうちの中仙町豊川の民家敷地内から幼虫と成虫を（1988年）、また、田沢湖町卒田の民家敷地内から幼虫と蛹を（2001年）採集した記録がある。その後、中仙町豊川の湧水池は枯渇し水源は回復せず、本種の生息が確認されていない。現在完全な草地になっており、回復する見込みはない。田沢湖町卒田の湧水池も、しばしば枯渇するなど水量は安定しない。また、雄物川水系の他の湧水、米代川水系、雄物川水系、子吉川水系からは発見されていない。

◆**本種の概要** 本県の主な山地渓流域からは、幼虫・成虫とも採集記録がなく、本県においては、湧水池の特産種と考えられる。幼虫は大型で、砂粒でできた円筒型の巣を持ち、湧水量が多い湧水池の湧泉付近にのみ生息する。発見された湧水池の生息密度は極めて小さかった。中仙町豊川では5月上旬ごろ羽化した。成虫は翅に特異な模様があり、他のトビケラと容易に区別できる。

◆**本種の現状** 生息が確認された2地点以外にも、県内の湧水池に生息している可能性があるが、水田の圃場整備による湧水の埋没と水田化による湧水池の減少、用水路へのU字溝の設置、農業用水の人的管理などに影響されると考えられる水量の不安定要因や湧水の枯渇で、生息域の減少は避けられないと考えられる。

◆**生存に対する脅威** 湧水の枯渇等。

（青谷晃吉）

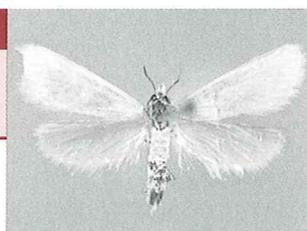
チョウ目メイガ科オオメイガ亜科

絶滅危惧種 I A 類

## チビウスキオオメイガ

*Scirpophaga micraurea* Sasaki, 1994

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** 秋田県雄物川河口付近（右岸）から採集された2♂3♀に基づき新種として記載された。現状では上記模式産地が唯一の生息地である。

◆**県内の分布** 上述のとおり。

◆**本種の概要** 生息地は、おそらく県内最大規模の海岸砂丘である。前線部はハマニガナ、カワラヨモギ、シロヨモギ、ハマボウフウなどの砂丘植物が生じ、後背部にはヨシなどが生える湿地を配する。周辺ではクロマツなどの海岸防風林の造成は行われていない。

◆**本種の現状** 原記載以降、同地で十数回の調査をしているが、追加の採集はされていない。*Scirpophaga* 属の多くの種は、湿地に生える草本の茎に潜ることが知られている。雄物川河口部にもヨシなどを生ずるやや湿った窪地があって、本種もここを発生源としている可能性が高い。しかしこの湿地は次第に乾燥化の傾向にあるように見える。加えて最近、この周辺に風力発電用の風車が設置され、これに伴う土地の改変や車両の乗り入れによる砂丘の踏みつけなどが懸念される。

◆**生存に対する脅威** 生息環境の悪化や消滅。

（佐々木明夫）

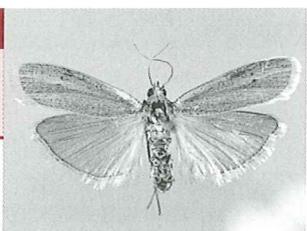
チョウ目メイガ科マダラメイガ亜科

絶滅危惧種 I A 類

## ギンスジマダラメイガ

*Selagia argyrella* (Denis et Schiffmüller, 1775)

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** ヨーロッパ～シベリア～朝鮮半島から日本に分布するユーラシア種。日本では岩手県盛岡市の記録があるだけであったが、近年青森県東通村で1♀、秋田県仁賀保町冬師で1♀が採集された。

◆**県内の分布** 上記の冬師の事例のみである。

◆**本種の概要** ヨーロッパでは乾燥したヒースや砂地などに棲むという。幼虫の食草はキジムシロ属が知られている。

◆**本種の現状** 確認個体は上記1♀のみである。追加の生息確認が望まれる。

◆**生存に対する脅威** 草原の衰退。

◆**特記事項** 本種と同様に草原に棲み、キジムシロ属に依存しているチャマダラセセリが、全国的に衰退が著しい（本県では絶滅した）ことを考えあわせる必要がある。

（佐々木明夫）

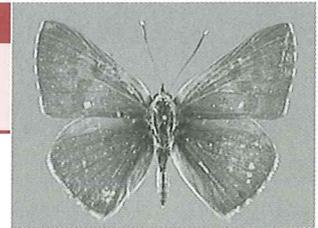
チョウ目シジミチョウ科

絶滅危惧種 I A類

# クロシジミ

*Niphanda fusca* (Bremer et Grey, 1852)

環境省：絶滅危惧 I 類



◆**国内外の分布** 本州、四国、九州、中国大陸、朝鮮半島。

◆**県内の分布** 仁賀保町、象潟町、田沢湖町の一部。

◆**本種の概要** 1950～1960年代に秋田市、河辺町、雄勝町などで記録されていたが、これらの産地では絶滅した。シバ、ススキなどが自生する明るい疎林や草地で、共棲するアブラムシ類とクロオオアリが生息する特殊な環境に生息する。

◆**本種の現状** 1998年に県内の3市町で生息が確認されただけで、その他では確認されていない。里山、草地などの管理放棄により生息環境が荒廃したことが原因と推定される。

◆**生存に対する脅威** 人為的な生息環境の改変。

(成田 弘)

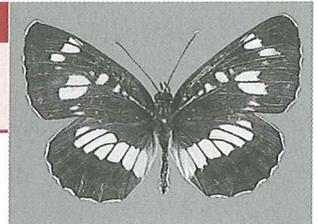
チョウ目タテハチョウ科

絶滅危惧種 I A類

# フタスジチョウ

*Neptis rivularis shirozui* Okano, 1954

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** 東北、北海道、中部、奥只見、ヨーロッパ、中央アジア、中国大陸、モンゴル、朝鮮半島、サハリン（東北以外は別亜種）。

◆**県内の分布** 鹿角市（1地点）、田沢湖町（1地点）の2地点に限られ、生息個体数も少ない。

◆**本種の概要** 鹿角市では渓谷崖地に自生するアイズシモツケと人家周辺のユキヤナギで少数の生息が知られただけで、詳細は明らかでない。

◆**本種の現状** 鹿角市では1960年代に初めて確認されたが、1989年以降は確認されていない。田沢湖町では1975年に1♀が確認されただけで、その後は確認されていない。

◆**生存に対する脅威** 不明。

(成田 弘)

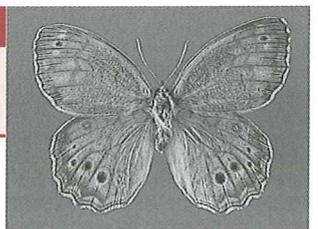
チョウ目ジャノメチョウ科

絶滅危惧種 I A類

# キマダラモドキ

*Kirinia epaminondas* (Staudinger, 1887)

環境省：準絶滅危惧



◆**国内外の分布** 北海道（南部）、本州、四国、九州（東部）、ウスリー、アムール、中国東北部、朝鮮半島。

◆**県内の分布** 田沢湖町の1地区のみ。生息個体数も少ない希少種。

◆**本種の概要** カシワ混生林の明るい環境に生息する。

◆**本種の現状** 近年の観光開発や植林などで生息環境は著しくせまくなっている。

◆**生存に対する脅威** 人為的な生息環境の改変。

(成田 弘)

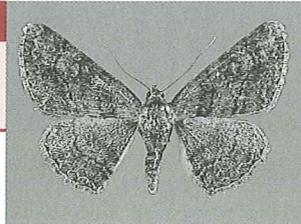
チョウ目シャクガ科エダシャク亜科

絶滅危惧種 I A類

## キタルリモンエダシャク

*Cleora cinctaria superfumata* Inoue,1972

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** 北海道東部、秋田県、長野県菅平、旧北区。
- ◆**県内の分布** 仁賀保町冬師湿原のみに知られる。
- ◆**本種の概要** 寒冷地に隔離分布。陽性林（陽樹林）に生息すると思われるが、詳細は不明である。ただし、生息環境の範囲が狭いと思われる。
- ◆**本種の現状** 冬師のみに見出されている。個体数は少ない。
- ◆**生存に対する脅威** 個体群の脆弱性。

(高橋雅彌)

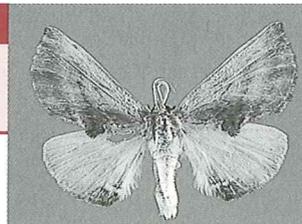
チョウ目シャチホコガ科

絶滅危惧種 I A類

## クワヤマエグリシャチホコ

*Ptilodon kuwayamae* (Matsumura,1919)

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** 北海道、本州中部、四国、九州。
- ◆**県内の分布** 鹿角市湯瀬非瀬沢。
- ◆**本種の概要** 幼虫は草原のヤマハギを食べるといふ。
- ◆**本種の現状** 1977年に1個体が採集されたのみ。産地付近はムラサキなどの植物の生育も知られる半自然草原であったが、放置され植生は変わっている。
- ◆**生存に対する脅威** 半自然草原の放置による植生の変化。

(梅津一史)

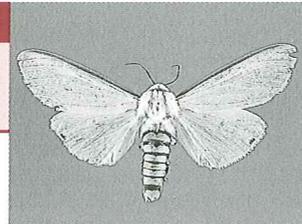
チョウ目ヒトリガ科ヒトリガ亜科

絶滅危惧種 I A類

## マエアカヒトリ

*Aloa lactinea* (Cramer,1777)

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** インド～マレーの広域分布種。秋田県以南。
- ◆**県内の分布** 秋田市仁別、秋田市平和公園。
- ◆**本種の概要** 人里周辺に住むものと考えられる。
- ◆**本種の現状** 関東以西ではかつては人里に見られる種であったようだが、全国的に激減し最近の採集例は少ない。県内では1970年代に秋田市内の2ヶ所で各1個体が採集されたのみで、それ以降は全く採集例がない。
- ◆**生存に対する脅威** 宅地化、開発事業による土地の改変。

(梅津一史)

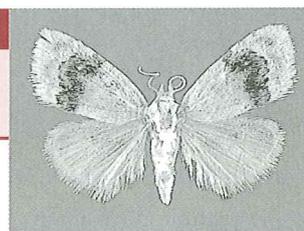
チョウ目コブガ科

絶滅危惧種 I A類

# チョウカイシロコブガ

*Nola umetsui* Sasaki, 1993

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** 秋田県仁賀保町冬師。

◆**県内の分布** 仁賀保町冬師。

◆**本種の概要** 仁賀保町冬師で得られた標本を基に記載された種で、基産地以外の産地は知られていない。ススキ草原と低層湿原・ハンノキ林が混交する環境に生息する。幼生期などについては全く不明。

◆**本種の現状** 1992年に初めて採集された。その後年間1～数個体採集されており、同地では安定して発生しているものと思われる。

◆**生存に対する脅威** 半自然草原の放置による植生の変化、または湿性環境の減少・悪化。

(梅津一史)

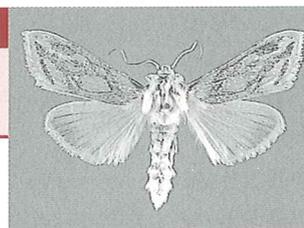
チョウ目ヤガ科セダカモクメ亜科

絶滅危惧種 I A類

# アオモンギンセダカモクメ

*Cucullia argentea* (Hufnagel, 1766)

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** ユーラシア。日本海側（秋田県、新潟県、富山県、福井県）と瀬戸内沿岸（兵庫県、岡山県、香川県、愛媛県）、対馬、岐阜、石川。

◆**県内の分布** 秋田市雄物川河口。

◆**本種の概要** 国内での産出はきわめて稀で、それぞれ1～2個体が採集されているだけ。継続して採集されているのは秋田市の産地のみ。植生の豊かでない地域で見出されるという。秋田市の産地は砂浜海岸の草本群落。幼虫はカワラヨモギを食べる。

◆**本種の現状** 1992年に初めて採集されて以来、同じ場所で年間1～数個体が採集されている。産地の範囲はごく狭い。元々残土の投棄など人為的な攪乱の激しい場所であったが、近年産地に風力発電施設が建設された。

◆**生存に対する脅威** 開発事業による土地の改変。ゴミ投棄。車両の乗り入れによる植生の破壊。

(梅津一史)

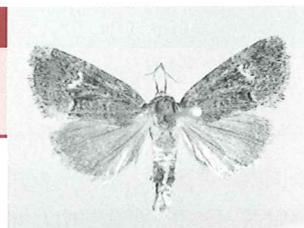
チョウ目ヤガ科カラスヨトウ亜科

絶滅危惧種 I A類

# シロミミチビヨトウ

*Oligia leuconephra* Hampson, 1908

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** 沿海州。北海道（釧路、十勝、小清水町）、青森県、秋田県、岩手県、宮城県、福島県。

◆**県内の分布** 鹿角市八幡平金右衛門沼。

◆**本種の概要** 草地に生息するものと思われる。幼生期の知見はないが、この属は単子葉植物に結びついているものと思われる。

◆**本種の現状** 1975年に1個体が採集されているだけ。その後同じ場所で採集が試みられているが見つからない。

◆**生存に対する脅威** 半自然草原の放置による植生の変化。

(梅津一史)

昆虫類

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

チョウ目ヤガ科カラスヨトウ亜科

絶滅危惧種 I A類

# クシロモクメヨトウ *Xylomoia graminea* (Graeser,1889)

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** 沿海州。北海道（標茶、大樹、静狩、札幌、厚真）、秋田県。
- ◆**県内の分布** 秋田市平和公園。
- ◆**本種の概要** 本州唯一の記録。低湿地に生息する。
- ◆**本種の現状** 1978年に1個体採集されたことがあるだけで、その後全く得られていない。産地周辺は宅地化などで大きく環境が変わった。
- ◆**生存に対する脅威** 宅地化、開発事業による土地の改変。

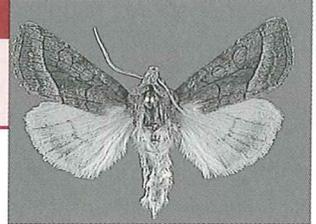
(梅津一史)

チョウ目ヤガ科カラスヨトウ亜科

絶滅危惧種 I A類

# キタヨトウ *Hydraecia ultima* Holst,1965

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** ヨーロッパ北部、スカンジナビア。北海道（十勝地方）、秋田県。
- ◆**県内の分布** 天王町長沼、秋田市平和公園。
- ◆**本種の概要** 本州ではこの2産地のみ。幼生期は不明。同属の他種は草本の茎に食入する。
- ◆**本種の現状** 1970年代に秋田市と天王町で各1個体が採集されたが、その後全く採集例がない。産地周辺は宅地化などで大きく環境が変わった。
- ◆**生存に対する脅威** 宅地化、開発事業による土地の改変。

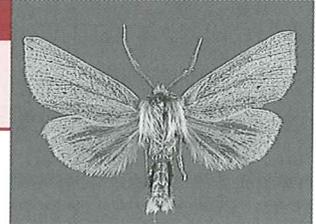
(梅津一史)

チョウ目ヤガ科カラスヨトウ亜科

絶滅危惧種 I A類

# テンモントガリヨトウ *Sedina buettneri moltrechti* (Bang-Haas,1927)

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** ユーラシア。北海道東部、秋田県。
- ◆**県内の分布** 仁賀保町冬師。
- ◆**本種の概要** 本州唯一の記録。低湿地に生息する。日本では幼生期の知見はないが、ヨーロッパではスゲ属の地下部に食入するという。
- ◆**本種の現状** 1992年に1個体採集されたのみ。その後全く採集されていない。
- ◆**生存に対する脅威** 低湿地が減少・悪化している。
- ◆**現在講じられている保護対策** 生息地の一部は冬師自然環境保全地域に指定されている。

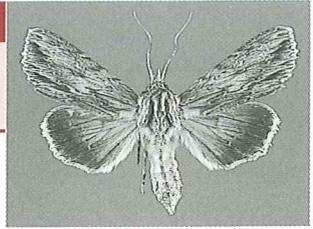
(梅津一史)

チョウ目ヤガ科カラスヨトウ亜科

絶滅危惧種 I A類

# セプトモクメヨトウ *Auchmis saga* (Butler,1878)

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** 北海道南部を北限とし、本土域と三宅島。かなり局地的。
- ◆**県内の分布** 秋田市平和公園。
- ◆**本種の概要** 幼生期の知見はないが、本属の蛾はメギ属を食草とするという。
- ◆**本種の現状** 1977～1978年にかけて同一地点で複数が採集されたが、その後全く見つかっていない。産地周辺は宅地化などで大きく環境が変わった。
- ◆**生存に対する脅威** 宅地化、開発事業による土地の改変。

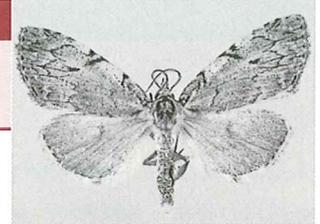
(梅津一史)

チョウ目ヤガ科カラスヨトウ亜科

絶滅危惧種 I A類

# ナナメヒメヨトウ *Balsa leodura* (Staudinger,1887)

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** アムール。北海道、東北から本州中部。
- ◆**県内の分布** 田沢湖町高野。
- ◆**本種の概要** 東北では岩手と宮城に各1例があるのみ。幼虫はズミのほか、栽培リンゴから見出された例がある。
- ◆**本種の現状** 1993年に1個体採集されたのみ。同地では何度も調査が行われているが、ほかに採集例はない。リゾート開発により周辺の環境は変化が激しい。
- ◆**生存に対する脅威** 開発事業による土地の改変。

(梅津一史)

チョウ目ヤガ科キンウフバ亜科

絶滅危惧種 I A類

# ホクトギンウフバ *Syngrapha interrogationis* (Linnaeus,1758)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 北海道（大雪山、猿払村浅茅野、霧多布湿原琵琶瀬、釧路湿原）、秋田県。
- ◆**県内の分布** 天王町長沼。
- ◆**本種の概要** 本州唯一の記録。高層湿原に生息する。幼虫はツルコケモモ、ガンコウラン、イソツツジを食べた例が知られている。
- ◆**本種の現状** 1983年に1個体採集されたのみ。産地周辺は宅地化などで大きく環境が変わった。近隣にあった低標高地としては貴重な高層湿原も乾燥化している。
- ◆**生存に対する脅威** 宅地化、開発事業による土地の改変。

(梅津一史)

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

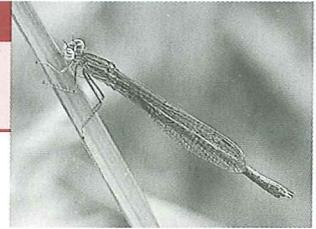
トンボ目アオイトトンボ科

絶滅危惧種 I B 類

# オツネントンボ

*Sympecma paedisca* (Eversmann, 1836)

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** ユーラシア種。北海道～九州北部に分布。

◆**県内の分布** かつては全県下に多産した。現在は、一部の地域のみ分布する。

◆**本種の概要** 小池沼、水田（苗代）、用水路等に発生する。

◆**本種の現状** 1970年代までは各地に見られたが、現在は、東成瀬村、東由利原、峰浜村、西仙北町など一部の池沼のみに発生する。かつては水田（苗代）を主な発生源としていたが、現在はほとんど苗代を使用しないため、耕作法の変化により大きなダメージを受けたと思われる。

◆**生存に対する脅威** 水田、用水路の改修。

(高橋雅彌)

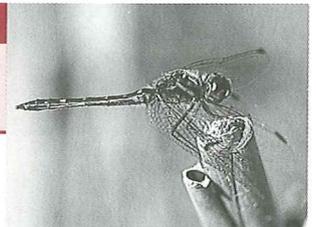
トンボ目トンボ科

絶滅危惧種 I B 類

# マダラナニフトンボ

*Sympetrum maculatum* Oguma, 1915

環境省：絶滅危惧 I 類



◆**国内外の分布** 日本特産種。秋田県～鳥取県に分布。

◆**県内の分布** 五城目町、天王町、河辺町、横手市、大内町、仁賀保町の6ヶ所が既知産地。

◆**本種の概要** 日本海側、中部地方の内陸部、瀬戸内海沿岸に偏って分布する。秋田県では、ミズゴケを伴う樹林に囲まれた池沼から発生する。

◆**本種の現状** 1991年に仁賀保町上坂から再発見された。大内町にも知られたが、個体数は極めて少ない。仁賀保町上坂の再発見された箇所が、秋田県唯一の安定した生息地である。その他の産地では、ほぼ絶滅した。

◆**生存に対する脅威** 湿原の乾燥化。発生源の汚濁。湿原周辺の宅地化による乾燥、汚濁。個体群の規模が小さい。

(高橋雅彌)

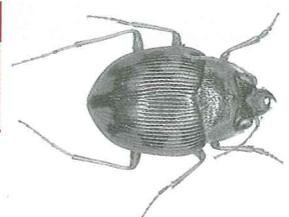
コウチュウ目カワラゴミムシ科

絶滅危惧種 I B 類

# カワラゴミムシ

*Omophron aequalis* Morawitz, 1863

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** 北海道、本州、四国、九州、朝鮮半島、沿海州、中国。

◆**県内の分布** 秋田市追分、秋田市仁井田。

◆**本種の概要** 海岸に近い、砂質の湿地帯を生息域とする。

◆**本種の現状** 秋田県では秋田市金足小泉瀧、仁井田の2ヶ所のみ知られている。いずれも灯火に飛来した個体が得られたものであるが、90年代に入ってから記録がない。両産地とも周囲の改変が著しく、再確認される可能性は少ない。

◆**生存に対する脅威** 公園化等による環境改変。

(佐藤福男)

# ホソハンミョウ

*Cicindela gracilis* Pallas, 1777

環境省：該当なし

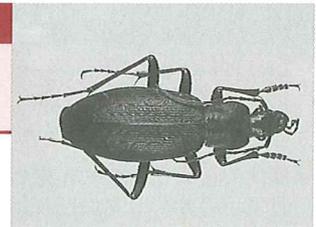
- ◆**国内外の分布** 本州、四国、九州、朝鮮半島、中国北部、シベリア。
- ◆**県内の分布** 秋田市太平山スキー場（1980年代）、二ツ井町富根大台野（1980年代）、左記2ヶ所のみ。
- ◆**本種の概要** 低地～丘陵地のやや乾燥した草地の周辺の側溝に落下した個体が採集された。草地としての管理を中止した段階で姿を消した。このことから、手入れの行き届いた草地や下草の少ない疎林が生息環境と見なされるが、最近はこのような環境が殆どなくなった。
- ◆**本種の現状** 県内における2ヶ所の分布地ともに、草地として管理がなされている内は生息できたが、放棄された段階以降は生息が確認されていない。
- ◆**生存に対する脅威** 草地の維持管理放棄。

（佐藤福男）

# クロナガオサムシ

*Leptocarabus procerulus procerulus* (Chaudoir, 1862)

環境省：該当なし



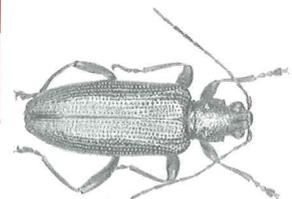
- ◆**国内外の分布** 本州（関東以北）、四国、九州（四国、九州は別亜種）。
- ◆**県内の分布** 鹿角市、東成瀬村。
- ◆**本種の概要** 本県では岩手県安代町に接した鹿角市湯瀬、宮城県花山村に接した東成瀬村の一部に生息地がある。本種は太平洋岸では少ないながら広く分布しているが、本県には太平洋側から侵入したと思われる上記2ヶ所以外に知られていない。鹿角市の生息地は二次林的環境、東成瀬村ではブナ帯で得られており、生息環境は特定できない。
- ◆**本種の現状** 2ヶ所の生息地ともに個体数は非常に少ない。近似の別種が同所的に生息しているが、生態的にこの種と競合している可能性がある。
- ◆**生存に対する脅威** 道路建設による改変。

（佐藤福男）

# キアシネクイハムシ

*Donacia bicoloricornis* Chen, 1941

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** 本州（秋田、青森、千葉、茨城の4県のみ）、中国、台湾、朝鮮半島。
- ◆**県内の分布** 秋田市追分小泉瀧、田沢湖町玉川戸瀧、協和町の3ヶ所。
- ◆**本種の概要** 本県の太平洋側の数県の低地湿原で生息が知られていた。本県の記録は日本海側では初めてであり、しかも山間地の産地（田沢湖町）としては日本で初めての場所である。低地ではヒメガマ、ミクリ類の生ずる小規模な湿地帯に局地的に見られる。田沢湖の産地はヒメミクリ主体の環境で、他のネクイハムシとともに見られるが本種の個体数は少ない。
- ◆**本種の現状** 秋田市の環境は公園脇の排水路にわずかに生えているヒメガマに見られた。水路の整備により消滅寸前である。田沢湖町の産地は付近に大きな駐車場ができ、消滅する可能性が高い。協和町の産地は埋め立てにより消滅した。
- ◆**生存に対する脅威** 生息域の湿地の改変。

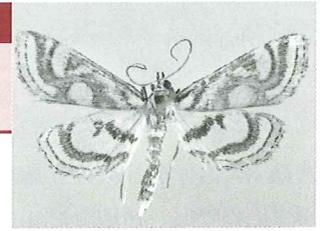
（佐藤福男）

チョウ目メイガ科ミズメイガ亜科

絶滅危惧種 I B 類

## ソトシロスジミズメイガ *Nymphula distinctalis* (Ragonot, 1894)

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** 模式産地はアムール地方。これまでウスリー地方、中国、北海道函館から *N. stagnata* として記録されているものは本種であるとして、青森県の産地とともに報告されている。最近、秋田県からも発見された。

◆**県内の分布** 西仙北町の沼沢地から発見されている。

◆**本種の概要** 低湿地の蛾と考えられる。生活史は不明であるが、ヨーロッパに分布する近縁種 *N. stagnata* は、コウホネ属、ミクリ属などに寄生するという。

◆**本種の現状** 県内の産地は現状では1ヶ所であるが、個体数は多いという。

◆**生存に対する脅威** 水の汚染等による生息環境の悪化。

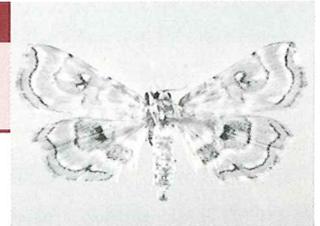
(佐々木明夫)

チョウ目メイガ科シダメイガ亜科

絶滅危惧種 I B 類

## ウスキミズメイガ *Musotima colonialis* (Bremer, 1864)

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** 模式産地はシベリア南東部。ネパール、中国、台湾、アムール分布が知られているが、台湾の記録は疑問としている。日本では北海道東部と同静狩湿原、本州では秋田県からのみ採集されている。

◆**県内の分布** 横手市の水田予察灯に飛来した1♀と、仁賀保町冬師で1996年に1♂3♀が採集されているだけである。

◆**本種の概要** 生活史は不明であるが、産地の状況や近縁種の食性などから湿地または湿潤な環境に強く結びついている種と考えられる。

◆**本種の現状** 横手市の産地ではその後の調査は行われていない。冬師では採集された年の前後数年間に延べ数十回の調査が行われているが、上記の発見例のみである。発生が局地的でかつ希少な種と推定される。

◆**生存に対する脅威** 生息環境の悪化。

◆**現在講じられている保護対策** 冬師の生息地の一部は自然環境保全地域に指定されている。

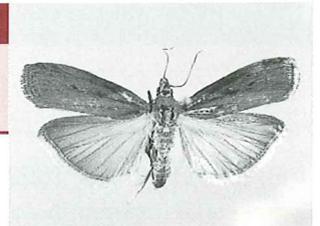
(佐々木明夫)

チョウ目メイガ科マダラメイガ亜科

絶滅危惧種 I B 類

## フタクロテンマダラメイガ *Selagia spadicella* (Hübner, 1796)

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** 旧北区（ヨーロッパ～シベリア東部）に広く分布する。日本では北海道にのみ分布が知られていたが、近年、秋田県仁賀保町冬師から発見され、本州唯一の産地となっている。

◆**県内の分布** 上記のとおり。

◆**本種の概要** 冬師の個体は全て前翅が一様に赤銅色をしており、ヨーロッパ～北海道の標本とは一定の違いが認められる。ヨーロッパでは明るい乾いた丘陵地や牧場に棲むという。幼虫の食草はニガクサなど。

◆**本種の現状** 冬師では毎年生息が確認され、個体数も少なくない。

◆**生存に対する脅威** 草原の衰退。

(佐々木明夫)

チョウ目シャクガ科アオシャク亜科 絶滅危惧種 I B 類  
環境省：該当なし

**ヒメナミガタアオシャク** *Jodis placida* Inoue, 1986

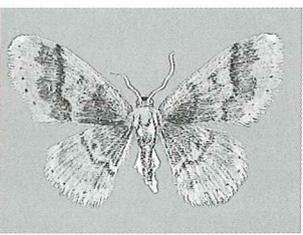


- ◆**国内外の分布** 秋田県の特産種。
- ◆**県内の分布** 田沢湖町高野および刺巻のハンノキ林でのみ知られる。
- ◆**本種の概要** ハンノキ林に生息する。他のハンノキ林には現状では未発見。種の生息環境が極めて限定されると推測される。
- ◆**本種の現状** ハンノキ林は開発の対象になりやすく、2ヶ所のみでの生息地が失われる危険性がある。
- ◆**生存に対する脅威** 生息環境が限定されると推定される。

(高橋雅彌)

チョウ目シャクガ科ヒメシャク亜科 絶滅危惧種 I B 類  
環境省：該当なし

**シタベニヒメシャク** *Idaea roseomarginaria* (Inoue, 1958)

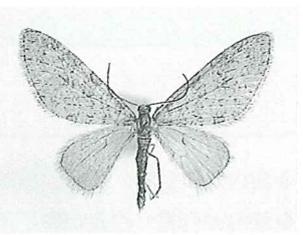


- ◆**国内外の分布** 本州（秋田県、千葉県以西）、四国、九州。
- ◆**県内の分布** 和賀山塊の堀内沢から見いだされた。現在唯一の産地。
- ◆**本種の概要** 全国的に割合少ない。生息地は極めてかけ離れた産地である。千葉県と秋田県の間には産地が知られていない。県内の生息地は堀内沢流域の森林内に人為的に造られた草地である。Idaea属は一般に草地から発生するが、なぜここにだけ分布するのか明らかでない。
- ◆**本種の現状** 1999年に多数の個体が得られ、その後の調査はないが、安定して発生が継続していると思われる。
- ◆**生存に対する脅威** 産地の孤立。

(高橋雅彌)

チョウ目シャクガ科ナミシャク亜科 絶滅危惧種 I B 類  
環境省：該当なし

**ヒメシタコバナナミシャク** *Trichopteryx microloba* Inoue, 1943



- ◆**国内外の分布** 本州（秋田県、関東～中部の山地）、四国山地。
- ◆**県内の分布** 鹿角市安久谷川の小又沢合流点付近で多数得られた。
- ◆**本種の概要** イヌブナで飼育された例があるが他の樹木も食すると思われる。しかし、分布が局限され、種の生息環境が極めて限定されていると推測される。
- ◆**本種の現状** 安久谷川流域の小又沢合流点付近で多数の個体が得られているが、最近の調査では確認できなかった。森林の伐採が影響したものと思われる。
- ◆**生存に対する脅威** 森林の伐採。

(高橋雅彌)

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

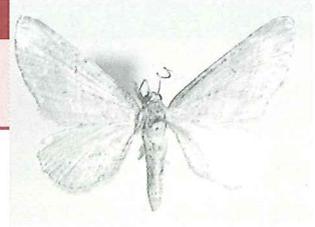
チョウ目シャクガ科ナミシャク亜科

絶滅危惧種 I B 類

環境省：該当なし

## シロマダラカバナミシャク

*Eupithecia extensaria leuca* Dietze, 1913



- ◆**国内外の分布** 青森県、秋田県、岩手県、旧北区。
- ◆**県内の分布** 仁賀保町冬師湿原一帯および雄物川下流河川敷に知られる。
- ◆**本種の概要** 東北地方特産。草原あるいは河川敷に生息する。
- ◆**本種の現状** 冬師、雄物川河川敷で採集されている。個体数は少ない。生息環境が狭い範囲に限定される可能性がある。
- ◆**生存に対する脅威** 火入れの中止による植物群落の遷移、草原、河川敷の開発。生息環境が草原に限定される。

(高橋雅彌)

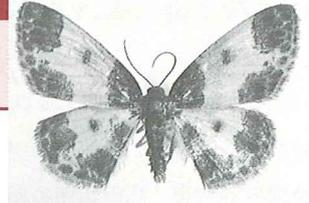
チョウ目シャクガ科エダシャク亜科

絶滅危惧種 I B 類

環境省：該当なし

## キブサヒメエダシャク

*Ligdia ciliaria* Leech, 1897



- ◆**国内外の分布** 本州（宮城県、秋田県、関東以西）、四国、九州。
- ◆**県内の分布** 田沢湖町夏瀬。
- ◆**本種の概要** 産地が限られ、まれである。秋田県が北限。秋田県の産地は、河畔林に近い林地である。
- ◆**本種の現状** 2000年にまとまった個体数が得られた。
- ◆**生存に対する脅威** 森林の伐採。
- ◆**特記事項** 北限ないしは北限に近くなると個体数が漸減するのが一般の傾向であるが、飛び離れた産地でまとまった個体数が得られれば、生息地が何らかの環境に限定されていることを意味する。生息地の環境が伐採等によって失われれば壊滅の危険性がある。

(高橋雅彌)

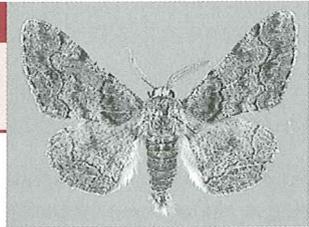
チョウ目シャクガ科エダシャク亜科

絶滅危惧種 I B 類

環境省：該当なし

## フタオレウスグロエダシャク

*Biston thoracicaria* (Oberthür, 1884)



- ◆**国内外の分布** 朝鮮、シベリア南東部、中国、日本（東北地方では岩手県、秋田県）。
- ◆**県内の分布** 仁賀保町冬師湿原一帯のみに知られる。
- ◆**本種の概要** 局所的に分布。陽生林（陽樹林）に生息すると思われる。多食性であるが、本県では冬師の草地～疎林に知られる。生息環境が極めて限定されると推測される。
- ◆**本種の現状** 冬師のみに見出されている。個体数は比較的少ない。
- ◆**生存に対する脅威** 生息環境が狭い範囲にあると推定される。

(高橋雅彌)

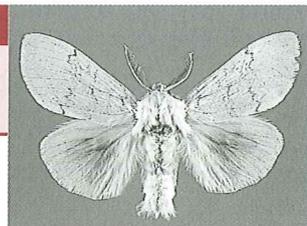
チョウ目ドクガ科

絶滅危惧種 I B 類

# ウスジロドクガ

*Calliteara virginea* (Oberthür, 1879)

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** 朝鮮、シベリア南東部、中国。本州、四国。
- ◆**県内の分布** 仁賀保町冬師。
- ◆**本種の概要** 秋田県の産地はススキ草原であるが、このような環境に限定されるものであるかは明らかでない。幼虫はヤマハギから見つかった。全国的にも産出はかなりまれ。
- ◆**本種の現状** 県内では1992年に初めて採集され、その後4年ほどはむしろ増加傾向にあった。その後は調査されていない。
- ◆**生存に対する脅威** 半自然草原の放置による植生の変化。

(梅津一史)

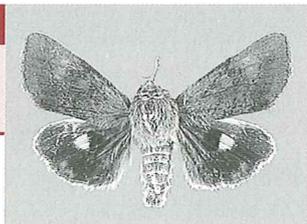
チョウ目ヤガ科タバコガ亜科

絶滅危惧種 I B 類

# ニセタバコガ

*Heliocheilus fervens* (Butler, 1881)

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** 沿海州。北海道、秋田県、新潟県、東京都、群馬県、山梨県、長野県、兵庫県、岡山県、香川県。
- ◆**県内の分布** 鹿角市八幡平金右衛門沼、仁賀保町冬師。
- ◆**本種の概要** 草地に生息するものと思われる。全国的にも産出は局地的。
- ◆**本種の現状** 鹿角市の産地ではその後全く見つからない。仁賀保町の産地では1992年から数年続けて採集された。
- ◆**生存に対する脅威** 半自然草原の放置による植生の変化。

(梅津一史)

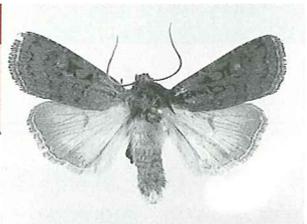
チョウ目ヤガ科モンヤガ亜科

絶滅危惧種 I B 類

# ク ロ ヤ ガ

*Euxoa nigrata* Matsumura, 1926

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** 日本特産。北海道、東北北部、宮城県、中部の高原。
- ◆**県内の分布** 鹿角市八幡平大深温泉、鹿角市八幡平金右衛門沼。
- ◆**本種の概要** 山地の草原に生息するものと考えられる。幼生期の知見はないが、同属は草本を広く食べる。
- ◆**本種の現状** 大深温泉では1個体採集されたのみであるが、金右衛門沼では1975～1976の2年にわたり合計9個体が採集されている。その後は全く見出されていない。
- ◆**生存に対する脅威** 半自然草原の放置による植生の変化。

(梅津一史)

昆虫類

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

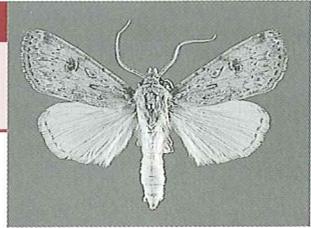
チョウ目ヤガ科モンヤガ亜科

絶滅危惧種 I B 類

# ハマヤガ

*Agrotis ripae albovenosa* Tschetverikow, 1925

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** ユーラシア内陸。、秋田県（秋田市、能代市）、新潟県（新潟市、柿崎町、中条町、紫雲寺町）。

◆**県内の分布** 秋田市雄物川河口、能代市。

◆**本種の概要** 国内では新潟県と秋田県だけで見出されている。砂浜海岸に生息する。幼虫はカワラヨモギなど砂浜の広葉草本を食べるものと思われる。

◆**本種の現状** 1992年に初めて採集された。それ以後同じ場所で毎年多数が観察されている。発生地は砂浜の植物群落内に限られているようである。元々残土の投棄など人為的な攪乱の激しい場所であったが、近年産地に風力発電施設が建設された。

◆**生存に対する脅威** 開発事業による土地の改変。ゴミ投棄。砂浜への車両の乗り入れによる植生の破壊。

(梅津一史)

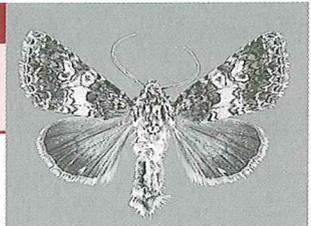
チョウ目ヤガ科ヨトウガ亜科

絶滅危惧種 I B 類

# シロオビヨトウ

*Hadena compta* (Denis et Schiffmüller, 1775)

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** ユーラシア。北海道、青森県、秋田県、岩手県、浅間山や八ヶ岳の周辺の高原地帯、糸魚川。

◆**県内の分布** 天王町長沼、西目町出戸、男鹿市戸賀。

◆**本種の概要** 中部では高原に生息するが、北日本では海岸に限られる傾向がある。幼虫はナデシコ属を食べるものと推定される。海岸のカワラナデシコに依存している可能性がある。

◆**本種の現状** 県内では上記産地で散発的に記録されているのみ。海岸の昆虫相調査が十分でないため不明な点が多い。

◆**生存に対する脅威** 護岸工事などによる植生の破壊。

(梅津一史)

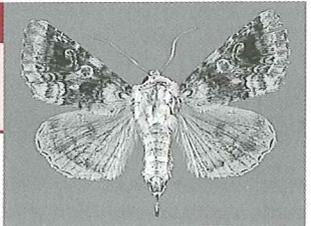
チョウ目ヤガ科ヨトウガ亜科

絶滅危惧種 I B 類

# コハイイロヨトウ

*Hadena aberrans* (Eversmann, 1856)

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** 沿海州、朝鮮。北海道から九州までの本土域と対馬。

◆**県内の分布** 鹿角市赤川岱、鹿角市（＝八幡平村）、秋田市豊岩、仁賀保町冬師。

◆**本種の概要** 幼虫はナデシコ属を食べるものと推定される。草地のカワラナデシコに依存している可能性がある。

◆**本種の現状** 産出はきわめて散発的で、現状を把握しがたい。

◆**生存に対する脅威** 半自然草原の放置による植生の変化。

(梅津一史)

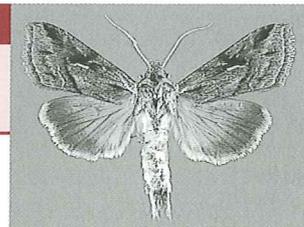
チョウ目ヤガ科セダカモクメ亜科

絶滅危惧種 I B 類

## ダイセンセダカモクメ

*Cucullia mandshuriae* Oberthür, 1884

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** 東北アジア特産。秋田県、伊豆半島大室山、静岡県御殿場、鳥取県大山、福岡県英彦山。

◆**県内の分布** 仁賀保町冬師。

◆**本種の概要** 火山山麓の草原との結びつきが推定される。幼虫は静岡県でノコンギクおよびユウガギクから見出されている。

◆**本種の現状** 年次変動はあるが、毎年継続して発生している。産地のススキ草原は刈り取りや火入れの頻度が少なくなり、低木が侵入しつつある。

◆**生存に対する脅威** 半自然草原の放置による植生の変化。

(梅津一史)

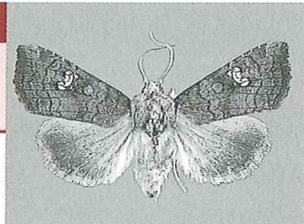
チョウ目ヤガ科カラスヨトウ亜科

絶滅危惧種 I B 類

## ミヤマショウブヨトウ

*Amphipoea burrowsi* (Chapman, 1912)

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** 沿海州、朝鮮。北海道、東北北部（青森県、秋田県、岩手県）、長野県、群馬県、山梨県など内陸の高地草原。

◆**県内の分布** 仁賀保町冬師。

◆**本種の概要** 中部地方では内陸の高地草原に産する。幼虫は弘前と盛岡でハナショウブに見出された例がある。

◆**本種の現状** 年次変動はあるが、毎年継続して発生している。産地のススキ草原は刈り取りや火入れの頻度が少なくなり、低木が侵入しつつある。

◆**生存に対する脅威** 半自然草原の放置による植生の変化。

◆**現在講じられている保護対策** 生息地の一部は冬師自然環境保全地域に指定されている。

(梅津一史)

チョウ目ヤガ科カラスヨトウ亜科

絶滅危惧種 I B 類

## ギンモンアカヨトウ

*Plusilla rosalia* Staudinger, 1892

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** 沿海州。北海道から九州までの本土域。

◆**県内の分布** 鷹巣町平崎上岱、大潟村。

◆**本種の概要** 低湿地に生息する。幼虫はヤナギタデを食べるという。産出は局地的。

◆**本種の現状** 2ヶ所の発見例があるのみで、同所でもその後の報告はない。

◆**生存に対する脅威** 低湿地が減少・悪化している。

(梅津一史)

昆虫類

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

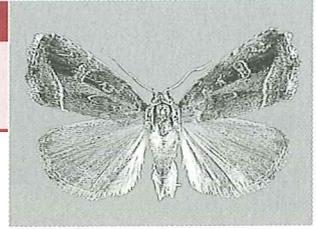
チョウ目ヤガ科コヤガ亜科

絶滅危惧種 I B 類

## マガリスジコヤガ

*Protodeltote wiscotti* (Staudinger, 1888)

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** アムール。北海道東部、秋田県、新潟県、群馬県板倉町、埼玉県、神奈川県箱根仙石原。
- ◆**県内の分布** 秋田市四ツ小屋芝野、仁賀保町冬師。
- ◆**本種の概要** 沼沢地に生息する。幼生期の知見はないが、近縁属はイネ科を食べる種が多い。
- ◆**本種の現状** 1990年代前半に低湿地と河川敷で相次いで採集されたが、その後発見例がない。
- ◆**生存に対する脅威** 低湿地が減少・悪化している。河川敷では河川改修による環境の改変。
- ◆**現在講じられている保護対策** 冬師の生息地の一部は自然環境保全地域に指定されている。

(梅津一史)

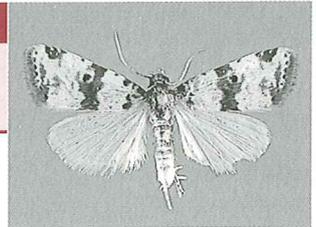
チョウ目ヤガ科コヤガ科

絶滅危惧種 I B 類

## シラユキコヤガ

*Eulocastra sasakii* Sugi, 1985

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** 秋田県、愛知県、岐阜県。
- ◆**県内の分布** 河辺町上ノ台、西仙北町小方角沢。
- ◆**本種の概要** 秋田県産の標本をもとに記載された種で、秋田、愛知、岐阜の3県から見出されているのみ。丘陵地の滲出水によって形成された湿地に生息する。幼虫はヌマガヤを食べていたのが愛知県で確認されている。
- ◆**本種の現状** 小方角沢ではその後も採集され、同地では個体数は少なくない。産地はきわめて狭い。
- ◆**生存に対する脅威** 湿地の乾燥化。開発事業による土地の改変。
- ◆**現在講じられている保護対策** 小方角沢は自然環境保全地域に指定されている。

(梅津一史)

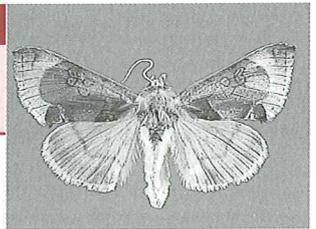
チョウ目ヤガ科キンウワバ亜科

絶滅危惧種 I B 類

## シロスジキンウワバ

*Diachrysia zosimi* (Hübner, 1822)

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** ユーラシア、沿海州、朝鮮。北海道、東北地方から関東、中部地方。
- ◆**県内の分布** 鹿角市、大館市獅子ヶ森、増田町真人山、大浦沼。
- ◆**本種の概要** 食草としてワレモコウ、ナガボノシロワレモコウ、ホザキシモツケが知られる。湿性の草地に住むものらしい。産出はやや局地的。
- ◆**本種の現状** 産出はきわめて散発的で、現状を把握しがたい。
- ◆**生存に対する脅威** 湿地の乾燥化。開発事業による土地の改変。

(梅津一史)

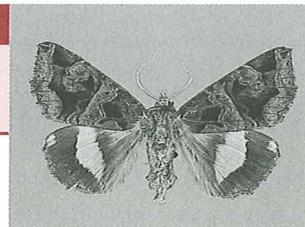
チョウ目ヤガ科クチバ亜科

絶滅危惧種 I B 類

# ウンモンキシタバ

*Chrysorithrum flavomaculatum* (Bremer, 1861)

環境省：該当なし



- ◆国内外の分布 沿海州、朝鮮、中国。北海道、東北地方、関東中部の山地。局地的。
- ◆県内の分布 秋田市豊岩、秋田市四ツ小屋芝野。
- ◆本種の概要 内陸草原と結びつくものと推定される。幼虫はクサフジを食べるといふ。
- ◆本種の現状 秋田の産地はいずれも河川敷に関連している。継続して発生しているかどうかは不明。
- ◆生存に対する脅威 河川改修による環境の改変。

(梅津一史)

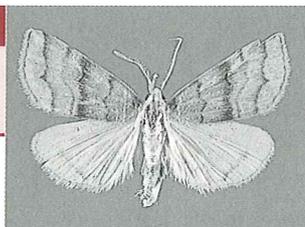
チョウ目ヤガ科クルマアツバ亜科

絶滅危惧種 I B 類

# ヨスジカバイロアツバ

*Herminia robiginosa* Staudinger, 1888

環境省：該当なし



- ◆国内外の分布 アムール、朝鮮、南千島。北海道、青森県、秋田県。
- ◆県内の分布 仁賀保町冬師。
- ◆本種の概要 北海道以外では青森県屏風山と秋田県冬師のみで、南限の産地となる。湿原に生息する。幼生期の知見はない。
- ◆本種の現状 年次変動はあるが、毎年継続して発生している。
- ◆生存に対する脅威 低湿地が減少・悪化している。
- ◆現在講じられている保護対策 生息地の一部は冬師自然環境保全地域に指定されている。

(梅津一史)

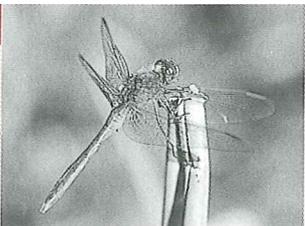
トンボ目トンボ科

絶滅危惧種 II 類

# オオキトンボ

*Sympetrum uniforme* Selys, 1883

環境省：絶滅危惧 II 類



- ◆国内外の分布 中国北部～東北部、朝鮮半島、日本では、青森県～四国および九州の北部まで分布。
- ◆県内の分布 能代市小友沼、秋田市小泉潟には比較的多い。他には秋田市仁別、天王町などに記録があるが、これらの地域では、現在ほとんど見られない。
- ◆本種の概要 日本各地で激減している。開けた、挺水植物の多い、やや大きな湖沼から発生する。
- ◆本種の現状 秋田市小泉潟は1977年から知られた産地。その後、1990年には能代市小友沼にも生息することが知られた。両産地とも個体数は安定しているが、最近、小泉潟では、県外からの蒐集者による乱獲が目立つ。秋田市仁別の採集個体は若く、移動して来たものと考えられる。
- ◆生存に対する脅威 環境悪化による生息地の分断。過度の採集。

(高橋雅彌)

昆虫類

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

カメムシ目コオイムシ科

絶滅危惧種Ⅱ類

# タガメ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

*Lethocerus deyrollei* Vuillefroy, 1864



◆**国内外の分布** 北海道、本州、四国、九州、沖縄に産す。

◆**県内の分布** 河辺町（岩見三内）、二ツ井町（天神）、秋田市（小泉潟、新屋）、大曲市（中山）以上5ヶ所のみであるが、河辺町、二ツ井の場合は灯火に飛来したものであり、いずれも1個体のみの記録である。他の3ヶ所は生息地（池）での確認であるが、いずれの産地も個体数は極めて少ない。

◆**本種の概要** 水生の半翅目では我が国で最大の種である。水草と、エサとなる小魚やカエル等が豊富な低地の水域を生息域とするが、近年その姿をみることは極めてまれになった。農業には極めて弱いようで、農業の影響がありそうな環境ではみつからない。ゲンゴロウトともに見られる場合が多いが、個体数が少ない。

◆**本種の現状** 県単位で既に絶滅が報告されている都道府県は全国の1/4におよんでいる。

◆**生存に対する脅威** 農業等による汚染。餌の減少。生息好適水域の著しい減少。

(佐藤福男)

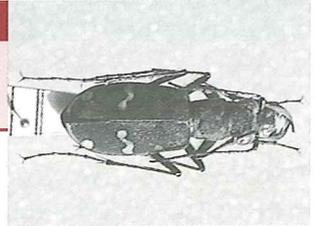
コウチュウ目ハンミョウ科ハンミョウ亜科

絶滅危惧種Ⅱ類

# アイヌハンミョウ

環境省：該当なし

*Cicindela gemmata* Faldermann, 1835



◆**国内外の分布** 北海道、本州、四国、九州、対馬、朝鮮半島、中国、シベリア東部。

◆**県内の分布** 秋田市添川（絶滅）、田沢湖町玉川鳩の湯。

◆**本種の概要** 河川の改修には極めて弱い種であり、玉川の産地で少数得られたが、その後再度の調査にも関わらず再確認されていない。砂礫が多く、比較的開けた川原に生息する。河川の中～上流域に見られる。

◆**本種の現状** 秋田県では秋田市郊外の添川地区の旭川河川敷で古い記録がある。近年では玉川上流域（戸瀬）で数頭が採集されているが、その生息数は近縁のニワハンミョウに比して極めて少ない。現在、添川の産地はダムや頭首工などで消滅した。

◆**生存に対する脅威** 不明。

(佐藤福男)

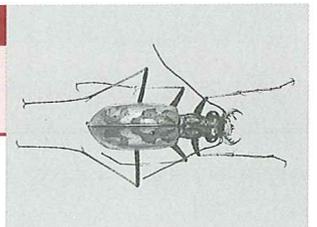
コウチュウ目ハンミョウ科ハンミョウ亜科

絶滅危惧種Ⅱ類

# カワラハンミョウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

*Cicindela laetescripta* Motschulsky, 1860



◆**国内外の分布** 北海道、本州、四国、九州、朝鮮半島、済州島、中国、サハリン、シベリア南東部、モンゴル。

◆**県内の分布** 雄物川河口付近で灯火に飛来した3個体のみ知られている。以前記録があった秋田市添川の河原では現在はいま一つ見られない。

◆**本種の概要** 海岸砂丘地帯およびそれに順ずる環境に特有な種である。県内の砂からなる波打ち際の大半は何らかの人工的な手が加えられており、そのような海岸では本種はみられない。人手の加わらない海岸砂丘が殆どない状態では本種の新たな生息地が発見される可能性は低い。

◆**本種の現状** 秋田市新屋の雄物川河口付近が現在県内唯一の生息地である。灯火に飛来した個体がわずかに得られているが、それも数年に1個体程度である。

◆**生存に対する脅威** 人工海岸の増加。

(佐藤福男)

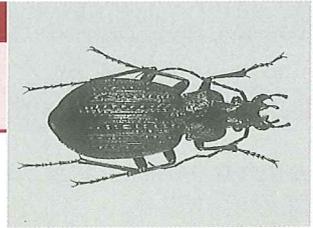
コウチュウ目オサムシ科オサムシ亜科

絶滅危惧種Ⅱ類

## アカガネオサムシ

*Carabus granulatus telluris* Bates, 1882

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** ユーラシア大陸に広く分布し、日本には北海道に1亜種、本州（太平洋側では箱根以東、日本海側では新潟以北）に本亜種を産する。

◆**県内の分布** 本県では雄物川中流域の刈和野周辺に2産地のみ知られている。

◆**本種の概要** 大河川や沼などのヨシの優占する湿地帯を生息域とする。本県では刈和野近くの雄物川河川敷でヨシがかなりの面積で残存する環境にのみ見られる。

◆**本種の現状** 本県唯一とも言える上記生息地は現在大規模な洪水防止用の堤防が建設されており、早晚、ヨシ原は乾燥が進むものと考えられる。したがって近い将来、本種はこの地から姿を消すものと考えられる。他の産地が発見されない場合は本県の昆虫リストから消えることになる。

◆**生存に対する脅威** 河川改修による生息地の改変。

(佐藤福男)

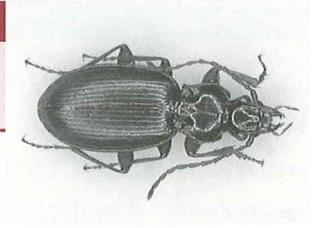
コウチュウ目オサムシ科ヌレチゴミムシ亜科

絶滅危惧種Ⅱ類

## ハヤチネヌレチゴミムシ

*Apatrobus hayachinensis* (Nakane, 1968)

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** 早池峰山（岩手県）を基準産地とする種である。近似の別種は北海道、新潟県、中部山岳地帯などから知られている。

◆**県内の分布** 現在のところ、八幡平の頂上付近でしか得られていない。

◆**本種の概要** 岩手県、秋田県の特産種であり、青森県からは知られていない。秋田県を北限とする種である。高山帯の湿った地表面で見られる。岩手、秋田県ともに生息域は国立公園の特別保護地区に指定されているが、道路の建設以来側溝に落ち込む個体数が増え、道路周辺の個体数の減少が進んでいる。

◆**本種の現状** 八幡平では以前有料道路脇の側溝に落下した多数の個体が見られたが、近年は殆どみかけない。道路建設に伴う側溝は歩行性甲虫にとっては大きな移動障害になり得る。

◆**生存に対する脅威** 道路脇の側溝（歩行性甲虫が這い上がることが出来ない構造）。

◆**現在講じられている保護対策** 生息域が国立公園特別保護地区に指定されている。

(佐藤福男)

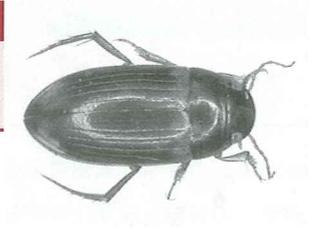
コウチュウ目ゲンゴロウ科

絶滅危惧種Ⅱ類

## チソメルマンセスジゲンゴロウ

*Copelatus zimmermanni* Gschwendtner, 1934

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** 本州（秋田県のみ）、九州（長崎県、熊本県、鹿児島県）、沖縄県（トカラ中ノ島、沖永良部島、久米島）。国外では中国南部。

◆**県内の分布** 象潟町（田の神、赤沼、エビ潟、石名坂、向山）、秋田市雄物川河口。

◆**本種の概要** 種の分布欄に示した如く、極めて特異な分布様式を持つ種である。県内では最近まで象潟町の一部にしか産しないと思われていた。未発表であるが、最近梅津一史氏により秋田市内の雄物川河口で灯火に飛来した1個体が採集されたが本種の分布を解明する上で興味深い記録である。低地～丘陵地の水草の多い小さな水域に産する。産地の特徴としては岸辺にミズゴケ等の繁茂するような沼に生息が限定され、開放水域では得られない。成虫は植物体の腐朽したような部分から得られる。このような環境を具備する水域は限定されており、発見も容易でないことから既確認産地の現状維持が必要である。

◆**本種の現状** 環境省レッドリストにこそエントリーされていないが、全国的にみても極めて希少性の高い種である。秋田県は本種の生息に関しては希にみる多産県とも言える現状で、他県に誇るべき事に値すると考える。しかし、生息水域が上記のごとく人里に近い場所であることから将来的には水域環境の保護を含めた広範な保護が必要になる可能性が大きい。

◆**生存に対する脅威** 生息水域の乾燥化。道路工事等の環境悪化。

(佐藤福男)

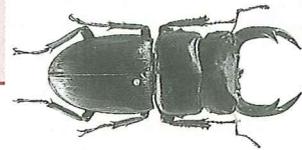
コウチュウ目クワガタムシ科クワガタムシ亜科

絶滅危惧種Ⅱ類

# オオクワガタ

*Dorcus hopei* (E.Saunders, 1854)

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** 北海道、本州、四国、九州、対馬、朝鮮半島、中国（北海道では最近では得られていない）。

◆**県内の分布** 近年の記録は田沢湖町に集中しており、他に八幡平、皆瀬村などで少数個体が得られている。

◆**本種の概要** 青森県が実質的な北限であるが、記録は極めて少ない。本県では記録された個体数は合計で10個体程度であり、青森県同様分布北限に近いことで個体数は極めて少ない種である。記録された地点は全て奥羽山脈に添った山地帯に限られている。西南暖地では里山の二次林を生息地としているが、本県ではブナ、ミズナラ帯で得られる。幼虫は朽ちた木に潜入することから、朽ち木が適当に存在する環境を必要とする。

◆**本種の現状** 採集された地点は殆どが保護の網がかかっていない。伐採による環境改変で、容易に姿を消す可能性が高い。

◆**生存に対する脅威** 生息地域の森林伐採。

(佐藤福男)

トビケラ目エグリトビケラ科

絶滅危惧種Ⅱ類

# ババホタルトビケラ

*Nothopsyche longicornis* Nakahara, 1914

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** 本州日本海側の秋田、山形、新潟の一部の湧水池。

◆**県内の分布** 奥羽山脈西部の湧水群のうちの六郷町沼清水と周辺の湧水流、および中仙町清水のU字溝から発見されているのみ。ただし、中仙町の生息地は、現在湧水の枯渇により1年のほとんどが水のない状態で、秋に水路がセリに覆いつくされるなど、草地になりつつある。他の湧水、米代川水系、雄物川水系、子吉川水系からは発見されていない。

◆**本種の概要** 全国的にも見ても同属のホタルトビケラ *N. ruficollis* と異なり、河川には生息しない。また、太平洋側の水系からは、発見されていない。幼虫は、湧水にのみ生息。しかも、分布は細流のある場所に局限される。夏に休眠し、晩秋に羽化する年1世代である。若齢幼虫は珪藻や柔らかい落ち葉を摂食するが、高齢幼虫はこのほか動物や糸状藻類を摂食していることが報告されている。

◆**本種の現状** 六郷町沼清水付近の2つの小細流における生息密度は高いが、今のところ、六郷町、中仙町以外では生息が確認されていない。水田の圃場整備工事による湧水の埋没と水田化による湧水池の減少、用水路へのU字溝の設置、農業用水の人的管理などに影響されると考えられる水量の不安定要因や湧水の枯渇で、今後生息域が減少するものと推察される。

◆**生存に対する脅威** 湧水の枯渇。

(青谷晃吉)

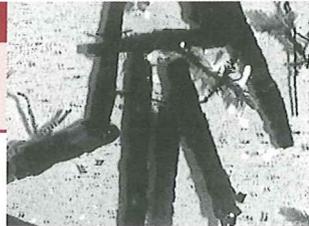
トビケラ目カクツツトビケラ科

絶滅危惧種Ⅱ類

# ハンエンカクツツトビケラ

*Goerodes semicircularis* Ito, 1994

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** 本州日本海側の青森、秋田、新潟の一部の湧水池。

◆**県内の分布** 奥羽山脈西部の湧水群のうちの六郷町、中仙町の数ヶ所から発見されたのみ。他の湧水、米代川水系、雄物川水系、子吉川水系からは発見されていない。

◆**本種の概要** カクツツトビケラ科は、河川などにも多く分布し、現在5属35種が記録されているが、この種は、*Goerodes* 属の *naraensis* グループに属し、近縁種との幼虫による区別点は見つかっていない。幼虫と成虫の関係について、Ito (1994) がはじめて明らかにした。全国的に見ても本種の分布は局限されている。幼虫は、湧水に生息し、葉片で四角柱状の筒巣を作る。落葉食。

◆**本種の現状** 水田の圃場整備の補修工事による湧水の埋没と水田化による湧水池の減少、用水路へのU字溝の設置、農業用水の人的管理などに影響されると考えられる水量の不安定要因や湧水の枯渇で、生息域は減少していくものと考えられる。

◆**生存に対する脅威** 湧水の枯渇。

(青谷晃吉)

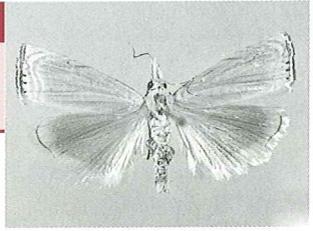
チョウ目メイガ科ツトガ亜科

絶滅危惧種Ⅱ類

# モリオカツトガ

*Chrysoteuchia moriokensis* (Okano,1958)

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** 日本特産種。岩手県盛岡市から記載された種で、その後北海道サロベツ原野、同静狩湿原、青森県、秋田県から発見されたほか、岩手県内でも数ヶ所から見つかっている。

◆**県内の分布** 1980年代に田沢湖町高野で多数の個体が確認された。他に鳥海山北麓（冬師、上坂、南由利原）から少数の個体が発見されている。

◆**本種の概要** 生息環境は、高原のヨシなどが生える冷涼な湿原と考えられる。

◆**本種の現状** 田沢湖町高野の多産地は、その後別荘地として埋め立てられ、一部はスギが植林されて、ヨシ湿原が消滅または衰退している。最近の調査では本種の確認はできなかったが、付近に小規模ながら湿原が残存しているので、生息の可能性はある。鳥海山北麓の産地では、生息が持続されているものと思われる。

◆**生存に対する脅威** 生息環境の悪化。

◆**現在講じられている保護対策** 冬師の生息地の一部は自然環境保全地域に指定されている。

(佐々木明夫)

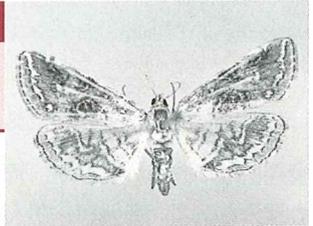
チョウ目メイガ科ミスメイガ亜科

絶滅危惧種Ⅱ類

# ウスマダラミスメイガ

*Elophila orientalis* (Filipjev,1933)

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** 模式産地はウスリー地方。日本では北海道釧路地方、同勇払平野と青森、秋田、宮城、愛知、岐阜、三重、京都、和歌山の各府県から記録されている。

◆**県内の分布** “秋田県の湿地帯”とした記録があったが、その後、天王町細谷、秋田市女湯から多くの個体が採集されている。

◆**本種の概要** ヒルムシロでの幼虫飼育例があったが、のちに野外でコナギ（ミズアオイ科）に付くことが知られている。沼沢地や湿地と強く結びついている種と考えられる。

◆**本種の現状** 天王町細谷の産地は、周辺部の一部が埋め立てられている。秋田市女湯は県立小泉湯公園内にあり、将来にわたって保全されると考えられるが、周辺からの汚水の流入や植生遷移などによる衰退が懸念される。

◆**生存に対する脅威** 埋め立て、水の汚染。

◆**現在講じられている保護対策** 女湯は秋田県指定天然記念物。

(佐々木明夫)

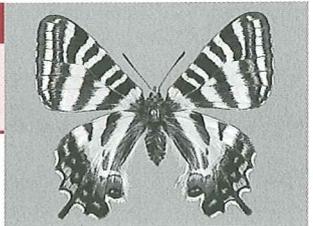
チョウ目アゲハチョウ科

絶滅危惧種Ⅱ類

# ギフチョウ

*Luehdorfria japonica* Leech,1889

環境省：絶滅危惧Ⅱ類



◆**国内外の分布** 日本特産種で本州だけに分布。県内の象潟町、矢島町鳥海山麓が北限地。

◆**県内の分布** 本荘市、仁賀保町、象潟町、矢島町など、鳥海山西部山麓～北部中腹。

◆**本種の概要** 東北地方では幼虫の食草はコシノカンアオイであるが、鳥海山個体群はオクエゾサイシン、象潟町個体群では同属のヒメギフチョウの食草であるウスバサイシンであることが確認されている。雑木林、若いスギ林、ブナ林などで地表に日光が到達する明るい環境に生息する。鳥海山麓が北限地である。

◆**本種の現状** 矢島町では1993年以降、生息個体数が減少している。象潟町では雑木林の維持管理放棄やスギ植林の成長により地表に日光が到達しなくなり、食草が衰退したことが個体数減少の一因と推定されている。また同好者の採集圧の影響も無視できない。

◆**生存に対する脅威** 人為的な生息環境改変と採集圧。

(成田 弘)

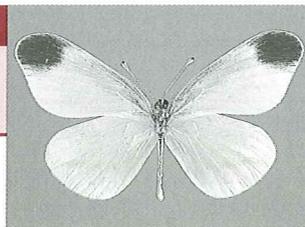
チョウ目シロチョウ科

絶滅危惧種Ⅱ類

# ヒメシロチョウ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

*Leptidea amurensis* (Ménétrières, 1858)



◆**国内外の分布** 北海道南部、本州（中部以北）、広島県、九州（内陸北部）、シベリア、中国大陸、朝鮮半島。

◆**県内の分布** 鹿角市、比内町、大館市、鷹巣町の県北内陸部。峰浜村、能代市の海岸部。角館町、中仙町、大曲市、横手市、皆瀬村の県南内陸部。

◆**本種の概要** 県北地方の沿岸部と内陸部、県南地方の雄物川中流部および支流の玉川、皆瀬川流域に分布。河川の堤防、水田の畦、畑地周辺など幼虫の食草クサフジが自生する明るい草地に生息する。生息地は局所的で、生息個体数は減少傾向にある。

◆**本種の現状** かつては分布域に普通にみられたが、近年、各地とも個体数の減少が目立つ。田畑、草地、堤防などの改修工事で適切な生息環境が減少していることが主な原因と推定される。

◆**生存に対する脅威** 人為的な生息環境の改変。

(成田 弘)

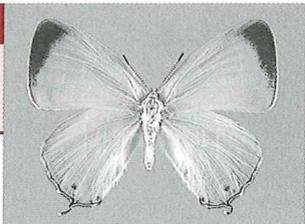
チョウ目シジミチョウ科

絶滅危惧種Ⅱ類

# キタアカシジミ

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

*Japonica onoi* (Murayama, 1953)



◆**国内外の分布** 北海道、青森県、岩手県、福島県。広島県では別亜種が生息している。

◆**県内の分布** 峰浜村、田沢湖町の2地区。

◆**本種の概要** 生息地は日本海沿岸に集中しているカシワ林の北部地域（峰浜村）と内陸部カシワの混生した二次林（田沢湖町）の2地区に限られる。

◆**本種の現状** 田沢湖町では観光開発、植林などで、生息環境は著しくせまくなっている。峰浜村では生息個体数は少ないもののカシワ林が多く、種の生息環境に何ら影響を及ぼす要因は少ない。

◆**生存に対する脅威** 人為的な生息環境の改変。

(成田 弘)

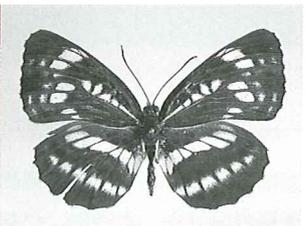
チョウ目タテハチョウ科

絶滅危惧種Ⅱ類

# ホシミスジ北上高地亜種

環境省：該当なし

*Neptis pryrei kitakamiensis* Fukuda, Minnotani et Iwano, 2000



◆**国内外の分布** 本州（青森県南部、秋田県北東部、岩手県、宮城県北部）。別亜種は秋田県由利地方以南の本州、四国、九州、シベリア東部、中国大陸、朝鮮半島、台湾。

◆**県内の分布** 鹿角市、大館市、田沢湖町。

◆**本種の概要** 本県北東内陸部に生息する個体群は、青森、岩手、宮城県に分布する個体群とともに表記の亜種として記載された。秋田市以南の海岸部には、より大型の亜種*N. p. iwasei* Fujiokaが分布する。幼虫は、人家周辺などに植栽されたユキヤナギ、シモツケなどについていることが確認されているが、本来は周辺地域に自生するアイズシモツケなどに依存していたものと考えられる。

◆**本種の現状** 生息個体数は少ない。

◆**生存に対する脅威** 不明。

(成田 弘)

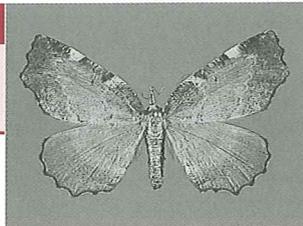
チョウ目シャクガ科エダシャク亜科

絶滅危惧種Ⅱ類

環境省：該当なし

# フタテンエダシャク

*Seleniopsis evanescens* (Butler, 1881)



- ◆国内外の分布 全国、東北地方では岩手県和賀岳、秋田県。
- ◆県内の分布 和賀山塊朝日岳および秋田駒ヶ岳。
- ◆本種の概要 比較的高標高地に分布。針葉樹食のため亜高山性と思われる。食樹はトウヒ (*Picea*) であるが、秋田県にはなく、マツ属 (*Pinus*) の可能性もある。
- ◆本種の現状 亜高山性と思われる。県内では4、5個体が得られたのみ。隔離された個体群である。
- ◆生存に対する脅威 不明。

(高橋雅彌)

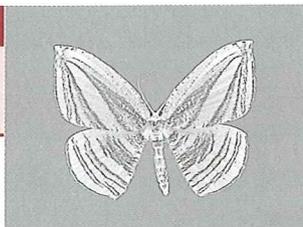
チョウ目ツバメガ科ギンツバメガ亜科

絶滅危惧種Ⅱ類

環境省：該当なし

# ギンツバメガ

*Acropteris iphiata* (Guenée, 1857)



- ◆国内外の分布 朝鮮、中国。北海道、本州、四国、九州。
- ◆県内の分布 河辺町田尻、秋田市平和公園、秋田市豊岩。
- ◆本種の概要 幼虫はガガイモの葉を食べる。
- ◆本種の現状 秋田市周辺の人里近くで採集された例があるが、産出は散発的。
- ◆生存に対する脅威 里山の放置による植生変化。

(梅津一史)

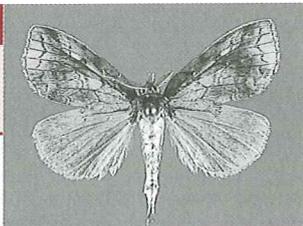
チョウ目シャチホコガ科

絶滅危惧種Ⅱ類

環境省：該当なし

# ギンボシシャチホコ

*Rosama cinnamomea* Leech, 1888



- ◆国内外の分布 朝鮮。北海道から九州に至る本土域と対馬、屋久島。
- ◆県内の分布 鹿角市菩提野、森吉町湯ノ岱、田沢湖町茶立ての清水。
- ◆本種の概要 幼虫はヌスビトハギに見られるという。
- ◆本種の現状 産出はきわめて散発的。
- ◆生存に対する脅威 里山の放置による植生変化。

(梅津一史)

昆虫類

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

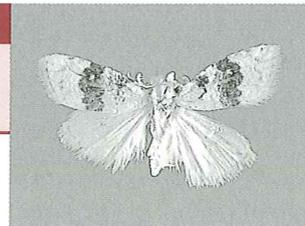
チョウ目コブガ科

絶滅危惧種Ⅱ類

# クロスジシロコブガ

*Nola taeniata* Snellen, 1874

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** 台湾、朝鮮、中国からインド。秋田県以南の本州、四国、九州、対馬、屋久島、沖縄本島、石垣島、西表島。

◆**県内の分布** 八幡平、秋田市長田、秋田市雄物川河口、秋田市千秋城下町、仁賀保町冬師。

◆**本種の概要** 幼生期の知見はない。

◆**本種の現状** 産出はきわめて散発的。

◆**生存に対する脅威** 里山の放置による植生変化。

(梅津一史)

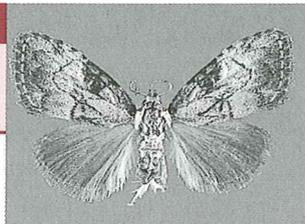
チョウ目コブガ科

絶滅危惧種Ⅱ類

# ミカボコブガ

*Rhynchopalpus mikabo* (Inoue, 1970)

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** 北海道南西部、青森県、秋田県、群馬県、大分県。

◆**県内の分布** 八森町チコギ崎、峰浜村蝦夷倉、峰浜村母谷山。

◆**本種の概要** 幼虫がカシワを食べるため、カシワ林に限定されるものと思われる。

◆**本種の現状** 県北部の沿岸部のカシワ林がある場所に産出が限定されている。採集例は多くないが、同時に複数採集されることもある。

◆**生存に対する脅威** 里山の放置による植生変化。

(梅津一史)

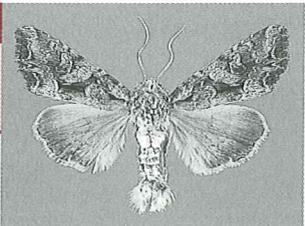
チョウ目ヤガ科ヨトウガ亜科

絶滅危惧種Ⅱ類

# ムラサキヨトウ

*Lacanobia configua* (Denis et Schiffermüller, 1775)

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** ユーラシア。北海道、岩手県、秋田県、本州中部山地。

◆**県内の分布** 鹿角市北野、鹿角市熊取平、鹿角市湯瀬、田沢湖町五十曲。

◆**本種の概要** 山地の草原に生息するものと思われる。

◆**本種の現状** 鹿角から田沢湖町北部に産地が限定されている。産地でも採集例は多くない。

◆**生存に対する脅威** 半自然草原の放置による植生の変化。

(梅津一史)

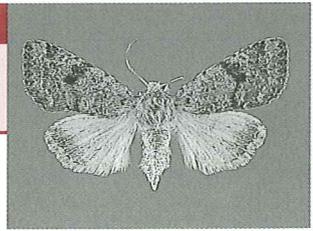
チョウ目ヤガ科ヨトウガ亜科

絶滅危惧種Ⅱ類

# アトジロキリガ

*Dioszeghyana mirabilis* (Sugi,1955)

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** 朝鮮、沿海州。十勝西南部、青森県、秋田県、岩手県、関東から東海。
- ◆**県内の分布** 鹿角市小田代川出合、本荘市新山公園。
- ◆**本種の概要** 低山地などに生息するものようだが、産出は普遍的でない。幼虫はカシ、サクラなどで飼育されている。
- ◆**本種の現状** 産地はきわめて限られている。記録のある場所でもその後はあまり採集されていない。
- ◆**生存に対する脅威** 里山の放置による植生変化。

(梅津一史)

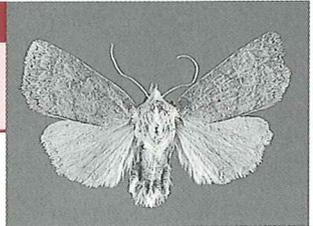
チョウ目ヤガ科セダカモクメ亜科

絶滅危惧種Ⅱ類

# ミスジキリガ

*Jodia sericea* Butler,1878

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** 沿海州南部。北海道斜里郡、本州、四国（瀬戸内沿岸）、北九州。
- ◆**県内の分布** 鹿角市北野、峰浜村蝦夷倉。
- ◆**本種の概要** 関東以西ではクヌギ林、青森ではカシワ林に多く見られる。幼虫は兵庫県下でクヌギから見出された例がある。
- ◆**本種の現状** 鹿角市では1個体、峰浜村で3個体採集されたのみ。採集例がきわめて少なく、現状について判断しがたい。
- ◆**生存に対する脅威** 伐採、農地化などによる植生の破壊。

(梅津一史)

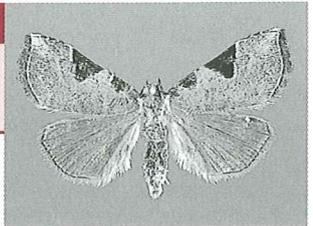
チョウ目ヤガ科コヤガ亜科

絶滅危惧種Ⅱ類

# ウスチャマエモンコヤガ

*Neustrotia costimacula* (Oberthür,1880)

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** 沿海州。北海道、東北地方および関東中部山地。
- ◆**県内の分布** 秋田市平和公園、秋田市豊岩、仁賀保町冬師、田沢湖町高野。
- ◆**本種の概要** 幼虫がズミを食べることが知られており、やや湿性の植生に関係すると思われる。
- ◆**本種の現状** 産地は互いに飛び離れており、仁賀保町の産地以外では採集された個体数も少ない。
- ◆**生存に対する脅威** 里山の放置による植生変化。

(梅津一史)

昆虫類

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

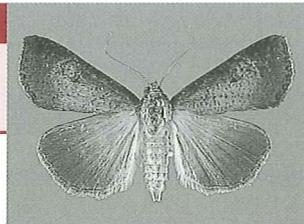
N

チョウ目ヤガ科クチバ亜科

絶滅危惧種Ⅱ類

# スミレクビグロクチバ *Lygephila nigricostata* (Graeser, 1890)

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** 北海道、青森県、秋田県、山形県、本州中部の高原地帯、九州（九重山塊、阿蘇山塊）。
- ◆**県内の分布** 男鹿市戸賀塩浜。
- ◆**本種の概要** 幼虫はクサフジから見出されている。
- ◆**本種の現状** 県内では最近になって見出された種で、増減の傾向は不明。産地は岩礁海岸に面した狭い範囲。
- ◆**生存に対する脅威** 開発などによる植生の破壊。
- ◆**現在講じられている保護対策** 産地は男鹿国定公園の特別保護地区およびその隣接地。

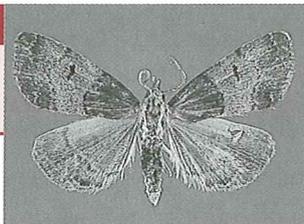
(梅津一史)

チョウ目ヤガ科クルマアツバ亜科

絶滅危惧種Ⅱ類

# ネグロアツバ *Sinarella punctalis* (Herz, 1905)

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** 朝鮮、アムール。北海道、本州。
- ◆**県内の分布** 秋田市豊岩、雄和町向野、雄和町種沢、西仙北町強首橋、大曲市大川原、大曲市上大戸、夏瀬温泉。
- ◆**本種の概要** 湿性の環境で見出される。秋田県ではほとんどの産地が河川敷。
- ◆**本種の現状** 最近になって多くの産地が見つかったもので、増減の傾向は不明。河川敷の産地では河川改修が行われている箇所もある。
- ◆**生存に対する脅威** 低湿地が減少・悪化している。河川敷では河川改修による環境の改変。

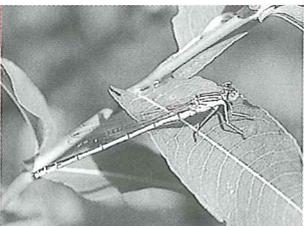
(梅津一史)

トンボ目イトトンボ科

準絶滅危惧種

# オオセスジイトトンボ *Cercion plagiosum* (Needham, 1930)

環境省：絶滅危惧Ⅰ類



- ◆**国内外の分布** 中国中北部に分布。日本では、青森県、秋田県、新潟県、宮城県、関東地方の大河の沖積地に分布。
- ◆**県内の分布** 米代川、雄物川の中下流域に分布。雄物川流域では、神岡町長沼が最上流の生息地。大浦沼にも分布するというのが不詳。
- ◆**本種の概要** 日本では、東北、関東地方の特産種。植生の豊かな、やや広めの河跡湖などに見られる。
- ◆**本種の現状** 生息地には個体数が多い。秋田市千秋公園の外堀では水の循環・浄水を行ったためか見られなくなった。
- ◆**生存に対する脅威** 池沼の埋立て、公園化。

(高橋雅彌)

## モートンイトトンボ *Mortonagrion selenion* (Ris,1916)

- ◆**国内外の分布** 東アジア種。北海道南端～九州南部に分布。
- ◆**県内の分布** かつて全県に分布したと思われる。現在は鷹巣町、秋田市、横手市、山内村、雄和町、西仙北町、能代市、協和町等。
- ◆**本種の概要** 比較的草丈の低い、池沼周辺の低湿地に発生する。最近は休耕田に多く見られる。
- ◆**本種の現状** 低地の湿原に局所的に分布。休耕田の増加によって、一時的に、生息地、個体数ともに増加した。しかし、本来の生息環境である、池沼周辺の低湿地が埋め立てなどのため失われつつある。休耕田も再開発される運命にあり、この環境に依存することはできない。秋田市の2産地、貝ノ沢、四ツ小屋では、耕作再開、埋め立てにより絶滅した。
- ◆**生存に対する脅威** 好適な低湿地の減少（植物群落の遷移を含む）。低湿地の埋立て。休耕田の再耕地化。

(高橋雅彌)

## ホソミオツネトンボ *Indolestes peregrinus* (Ris,1916)

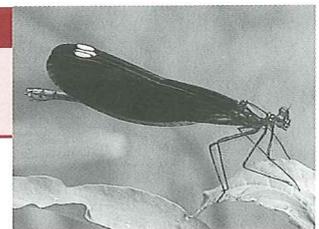
- ◆**国内外の分布** 中国中部、朝鮮半島。日本では青森県～奄美大島に分布。
- ◆**県内の分布** 最初、象潟町川袋で見いだされた。その後、秋田市小泉湯、東由利原、東成瀬村から報告された。協和町にも産地がある。
- ◆**本種の概要** 秋田県は日本海側の北限。小池沼等に発生する。
- ◆**本種の現状** 1990年に見いだされた種。協和町、象潟町工ビ潟以外は単一個体の採集例である。全県的には極めて稀。
- ◆**生存に対する脅威** 個体群自体が小さい。小池沼に生息しており、開発によっては簡単に絶滅する。

(高橋雅彌)

## アオハダトンボ *Calopteryx japonica* Selys,1869

- ◆**国内外の分布** 東アジア。青森県～鹿児島県まで分布。
- ◆**県内の分布** 山内村の横手川流域にのみ分布が知られる。
- ◆**本種の概要** 河川の中流域。清流に分布。
- ◆**本種の現状** 横手川では1992年に生息が確認された。個体数は比較的多い。他の河川ではまったく知られていない。
- ◆**生存に対する脅威** 個体群の分布域が小さい。河川改修。
- ◆**特記事項** 生息地域は、横手川流域にのみ知られており、河川改修によっては絶滅の危険性が高い。

(高橋雅彌)



トンボ目ムカシトンボ科

準絶滅危惧種

# ムカシトンボ *Epiophlebia superstes* (Selys,1889)

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** 日本特産種。北海道～九州に分布。

◆**県内の分布** 全県の山地に局所的に分布。大館市、太平山麓に古い記録がある。その後、河辺町岩見三内、秋田市仁別、真木溪谷、白神山地、稲川町、東成瀬村、鳥海山、上小阿仁村でも報告された。県内には、上記のほか、峰浜村で知られ、八幡平、田沢湖町、湯沢市などに環境アセスメントの調査で見いだされている。

◆**本種の概要** 主として、蘚類などが付着した良好な河床の山地溪流の最上流部に分布する。

◆**本種の現状** 森林の伐採、砂防ダム建設による重機使用などで河川床が荒れ、見られなくなることが多い。個体数は多いものではない。

◆**生存に対する脅威** 森林伐採による河川荒廃。

(高橋雅彌)

トンボ目サナエトンボ科

準絶滅危惧種

# ミヤマサナエ *Anisogomphus maacki* (Selys,1872)

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** 東アジア。日本では青森県～鹿児島県に分布。

◆**県内の分布** 大館市、太平山麓に古い記録がある。近年では、神岡町、鳥海山から記録がある。山内村、稲川町、八幡平、和賀山塊で確認されている。

◆**本種の概要** 中流域の砂泥底から発生する。

◆**本種の現状** 少ないながら全県に分布していると思われる。ただし、いずれの地域でも個体数は極めて少ない。鳥海山では、若い個体が尾根に集まることが知られていた。最近を確認していない。

◆**生存に対する脅威** 河川改修。

(高橋雅彌)

トンボ目サナエトンボ科

準絶滅危惧種

# ヤマサナエ *Asiagomphus melaenops* (Selys,1854)

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** 日本特産種。青森県（分布の北限）以南～鹿児島県まで分布。

◆**県内の分布** かつては、大館市、横手市、太平山麓などで知られ、個体数も多かった。現在は、雄和町、協和町のほか、河辺町にも知られる。

◆**本種の概要** 中小河川の泥底～礫底に生息する。

◆**本種の現状** 秋田市郊外などに多いものであったが、現在はかなり人里から後退し、山里の小流でないと見られない。

◆**生存に対する脅威** 生息環境の悪化。河川改修。

(高橋雅彌)

## マダラヤンマ

*Aeshna mixta* Latreille, 1805

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** ユーラシア種。北海道南西部～石川県、南限は長野県。
- ◆**県内の分布** かつては、男鹿市、河辺町などで知られ、1970年代には、山本町、秋田市、次いで、天王町、能代市から記録されている。他には飯田川町に記録がある。
- ◆**本種の概要** 明るい、植生の豊かな大小の湖沼から発生する。
- ◆**本種の現状** 海岸沿いに多くの産地が知られている。個体数は安定して多い。ただし、秋田市小泉湯では、県外の蒐集者による乱獲が多くなっている。
- ◆**生存に対する脅威** 池沼の埋立て。
- ◆**特記事項** 全国的に安定した生息地は皆無といわれている。秋田県では、海岸沿いを中心に中小の湖沼に多い。ただし、開発によって生息地が失われる可能性が高い。

(高橋雅彌)

## オオトラフトンボ

*Epitheca bimaculata sibirica* Selys, 1887

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** ユーラシア東部。北海道～中部山地に分布。
- ◆**県内の分布** 古くは秋田市に記録がある。近年の採集例としては、仁賀保町冬師、湯沢市および大曲市の標本を確認した。鷹巣町に目撃記録がある。
- ◆**本種の概要** 本州では日本海側に多い。比較的明るい、周囲に樹林のある池沼から発生する。
- ◆**本種の現状** 各地から知られるが、上記のように個体数が極めて少ない。
- ◆**生存に対する脅威** 個体数が少ない。中小の池沼の開発や改修。

(高橋雅彌)

## エゾトンボ

*Somatochlora viridiaenea* (Uhler, 1858)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** サハリン～日本の大分県まで、日本列島に分布。
- ◆**県内の分布** 秋田市、西仙北町、大曲市、協和町に記録がある。
- ◆**本種の概要** 低湿地あるいは休耕田に発生する。
- ◆**本種の現状** 全県の湿原に広く分布すると思われるが、方角沢を除いて、個体数は少ない。
- ◆**生存に対する脅威** 低湿地の減少、悪化。
- ◆**特記事項** 本種を、エゾトンボ、オオエゾトンボの2亜種に分けるが、無意味である。湿原が開発されやすく、保存には留意が必要。

(高橋雅彌)

# ハッチョウトンボ *Nannophya pygmaea* Rambur, 1842

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 東南アジア。日本では青森県以南に分布。
- ◆**県内の分布** 大館市、秋田市、横手市、鳥海山猿穴、東成瀬村、増田町、森吉町、西仙北町、鷹巣町、仁賀保町、山内村、皆瀬村、雄和町、西木村、協和町、象潟町など全県に分布。
- ◆**本種の概要** 明るい、草丈の低い湿原に発生する。方角沢、苔沼、秋田市手形山など自然の湿原のほか、各地の休耕田に出現する。高標高地には分布しない。
- ◆**本種の現状** 方角沢、苔沼などは安定した生息地。休耕田の秋田市貝ノ沢では再耕作のため、横手市碓では草丈が高くなり絶滅している。少ないものではないが、環境の変化に敏感な種である。
- ◆**生存に対する脅威** 休耕田、低湿地の再耕作・埋立て。植物群落の遷移の進行。
- ◆**現在講じられている保護対策** 湯ノ台・小方角沢自然環境保全地域指定昆虫類。

(高橋雅彌)

# コノシメトンボ *Sympetrum baccha matutinum* Ris, 1911

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 東アジア。日本の亜種は東アジアの東北部、朝鮮半島と日本に分布。日本では、北海道～種子島に分布。
- ◆**県内の分布** 大館市、太平山麓に古い記録がある。1970年代では、鹿角市、河辺町、最近では鹿角市、能代市、田代町、象潟町、大館市で知られる。
- ◆**本種の概要** 比較的明るい、周囲に樹林のある池沼、水田から発生する。
- ◆**本種の現状** 現在、県北部と鳥海山麓で確認。秋田市では見られない。
- ◆**生存に対する脅威** 生息環境の悪化。低地の浅い池沼が減少している。

(高橋雅彌)

# ヒメアカネ *Sympetrum parvulum* (Bartenev, 1912)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 東アジアに分布。日本では青森県～九州本島に分布。
- ◆**県内の分布** 大館市、秋田市、由利原、岩見三内などに知られたが、現在は、森吉町および秋田市、雄和町、協和町で知られる。
- ◆**本種の概要** 低湿地あるいは休耕田に発生する。
- ◆**本種の現状** 最近生息が確認されたのは、すべて休耕田であり、本来の生息域である低湿地では未発見である。自然状態の低湿地の生息地を探索する必要がある。
- ◆**生存に対する脅威** 本来の生息地で確認されていない。休耕田の再耕地化。
- ◆**現在講じられている保護対策** 湯ノ台・小方角沢自然環境保全地域指定昆虫類。

(高橋雅彌)

## ホソヒメクロオサムシ

*Leptocarabus harmandi adatarasanus* (Ishikawa, 1966)

◆**国内外の分布** 日本特産種であり、両白山地以东の本州に産する。これまで10亜種が記載されている。本県に分布するのは奥羽山系に *yudanus* (ミチノクアルマンオサムシ)、と鳥海山などに *adatarasanus* (アダタラヒメクロオサムシ) を産するが、両者の境界は判然としていない。

◆**県内の分布** 県内では17ヶ所で得られている。垂直分布は八幡平や駒ヶ岳の頂上(1500m以上)から鳥海町丁岳登山口、田沢湖町堀内沢入り口(200m)のような低標高地でも得られている。しかし、米代川より北では確認されていないことから現在のところ本県を北限とする種でもある。

◆**本種の概要** 本州特産種、秋田県を北限とする種である。冷涼な環境を好む。高山の頂上付近にも産するが、むしろブナ帯の渓谷地帯のような環境を主な生息地としている。なかでも急峻で下草が少ない北斜面を好む傾向がある。

◆**本種の現状** 生息環境から見て、森林の伐採が本種の生息に最も大きな影響を与える要因と言える。高山地帯の生息地は各種の保護により将来的にも保全されていく可能性があるが、ブナ・ミズナラ帯の谷などは伐採される可能性が高く、個体数が他のオサムシに比して少ない本種にとって脅威となる。

◆**生存に対する脅威** 森林の伐採。

(佐藤福男)

## フトクチヒゲヒラタゴミムシ

*Parabrosicus crassipalpis* (Bates, 1873)

◆**国内外の分布** 北海道(南部)、本州、四国、九州。日本固有種。

◆**県内の分布** 秋田市郊外で戦前に得られた標本が国立科学博物館に存在することを笠原(1985)が報じた。最近、由利沿岸部、太平山山麓で生息が確認された。県内の低山地に広く分布するものと思われるが、個体数は極めて少ない。

◆**本種の概要** 低山地帯の二次林林床を生息域にしている。

◆**本種の現状** 生息域が低山帯ではあるが、ゴミムシとしては中型でその特異な形態から、他種との混同はない。個体数も少ないことから採集された場合は発表される種である。しかし、他県でも記録はほとんどみあたらない。そのため、本種の現状はどこでも把握できていないと思われる。

◆**生存に対する脅威** 里山的二次林の減少。

(佐藤福男)

## トウホクナガケシゲンゴロウ

*Hydroporus tokui* M.Satô, 1985

◆**国内外の分布** 世界中でも東北以外には産しない。原産地は宮城県北泉ヶ岳で、原産地以外では青森、岩手に数ヶ所産地が知られているだけである。

◆**県内の分布** 田沢湖町玉川戸瀬(現在の所ここ1ヶ所のみ)。

◆**本種の概要** 玉川の産地は玉川左岸の鳩の湯付近で、付近はハルニシを交えたブナ、ミズナラからなる林が川に沿った低地部に帯状に分布しており、周囲の山から供給された水によって成立している小規模な水たまりが生息環境である。八幡平の岩手側にも産地が知られているが、ここは標高が1,000mを越しており、エゾゲンゴロウモドキ、メススジゲンゴロウとともに得られている。本県の場合は岩手県の産地よりはるかに標高は低いが、上記2種も共に得られている。

◆**本種の現状** 現在の所上記の場所以外では得られていない。玉川ダム上流部・鳩の湯付近の河川はいわゆる河川改修がほとんど行われていないが、将来とも現状のままである保証はなく、大規模な改変が行われた場合は生息環境に何らかの影響が生ずるおそれはある。

◆**生存に対する脅威** 生息地に隣接して作業道路が建設中。道路法面から土砂の流入。

(佐藤福男)

カノシマチビゲンゴロウ *Oreodytes kanoi* (Kamiya,1938)

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** 北海道と本州に中部に分布している。東北では福島県に産するが、尾瀬に接する地域であることから関東地域とも言える。その意味で東北では秋田県特産と言ってもよい種である。

◆**県内の分布** 田沢湖町玉川戸瀬（現在の所ここ1ヶ所のみ）

◆**本種の概要** 玉川の産地は玉川の鳩の湯付近で、付近はハルニレを交えたブナ、ミズナラからなる林が川に沿った低地に帯状に分布している。本種が得られたのは玉川本流であり、記録された当時（1989年7月）は上流部の酸性中和施設がまだ運転していない時で、本流は酸性水のままであった。本種は本流部で得られたが、酸性水の影響がない周辺の森林中の止水域からはエゾゲンゴロウモドキ、メススジゲンゴロウが得られている。

◆**本種の現状** 現在の所上記の場所以外では得られていない。玉川ダム上流部・鳩の湯付近の河川はいわゆる河川改修がほとんど行われていないが、将来とも現状のままである保証はなく、大規模な改変が行われた場合は生息環境に何らかの影響が生ずるおそれはある。

◆**生存に対する脅威** 生息地の上流に酸性水中和施設が建設。川底に沈殿物が堆積中。

（佐藤福男）

ニセルイスツブゲンゴロウ *Laccophilus lewisoides* Brancucci,1983

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** 日本では1994年に佐藤により秋田県で初めて発見された。その後、鳥取、福島、宮城県から各一ヶ所の報告があるが、国内における分布は極めて限られている。国外では中国の沿岸部（天津）、韓国（釜山）、ウズリー（ロシア）などに分布が知られており、日本海を取り囲む形で分布している。

◆**県内の分布** 秋田県中央部沿岸地帯のため池、堤など、秋田市金足小泉瀧、飯田川町鹿崎堤、天王町天神沼。

◆**本種の概要** 産地の報告があった他県の事例で共通することは、本種が低地の水域に産すること、宮城県では水質が極めて劣化した環境でも得られたことなど本県の例と共通することが多いようである。県内分布は現在の所、上記3市町に限られる。生息環境は、いずれも沿岸部で、水草の多い水田用のため池や低湿地である。飯田川の環境は水田灌漑用のため池、秋田市小泉瀧、天王町天神沼は湿地帯および住宅地に近い小規模な沼である。

◆**本種の現状** 小泉瀧は周囲の生活排水の影響で水質の悪化が顕著であり、個体数も極めて少ない。天王町は住宅地の近辺であり、規模も小さいことから同様なことが懸念される。飯田川町の産地は日本で初めて本種の生息が確認された場所であるが、現在、日本海沿岸高速道の工事のため、改修が行われており、本種に与える影響が懸念されている。

◆**生存に対する脅威** 水田減少によるため池管理の粗放化。

（佐藤福男）

マルコガタノゲンゴロウ *Cybister lewisianus* Sharp,1873

環境省：絶滅危惧Ⅰ類

◆**国内外の分布** 本州、東北では（青森、秋田、山形、宮城）、九州、国外では中国、インドシナ半島。

◆**県内の分布** 男鹿市寒風山お玉ヶ池、大館市白沢釈迦池、雄和町長者屋敷池、協和町下淀川、仁賀保町冬師、本荘市琵琶堤。

◆**本種の概要** 低地～丘陵地の水草の多い比較的大きな解放水域に産する。産地の水域としては急に深くなるような場所には生息せず、棚が有ってから深くなるような沼を好む。ゲンゴロウと共に採集されることが多いが本種の個体数ははるかに少ない。

◆**本種の現状** 秋田県は本種の生息に関しては希にみる多産県とも言える現状で、他県から採集者が訪れる程である。しかし、生息水域が上記のごとく人里に近い場所であることから将来的には水域環境の保護を含めた広範な保護が必要になる可能性が大きい。現に雄和町の産地は、その後、水域に隣接して住宅団地が造成され、ブラックバスも放流された。以後確認できないでいる。

◆**生存に対する脅威** 過度の採集、ブラックバス等の外来魚種の放流。

◆**現在講じられている保護対策** 冬師の生息地の一部は自然環境保全地域に指定されている。

（佐藤福男）

ホンシュウオオイチモンジマゲンゴロウ

*Hydaticus pacificus conspersus* Régimbart, 1899

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

◆**国内外の分布** 東北（秋田、山形、宮城県）、関東地方に産する。亜種リュウキュウオオイチモンジマゲンゴロウ *sakishimanus* は沖縄に分布する。

◆**県内の分布** 象潟町（川袋、赤沼、田の神、大須郷）、仁賀保町（冬師）、本荘市。

◆**本種の概要** 県内の分布欄に示した如く、県内では鳥海山周辺で記録がある。東北では3県に分布するが、中部、中国、四国、九州に分布の空白域があり、はるかに遠く離れて、別亜種が沖縄に分布するという極めて特異的な分布様式を持っている。この種と類似した分布状態を示すゲンゴロウ類は他になく、その理由は現在まで全く説明できていない。低山帯の湧水をとまなう浅い水域に生息する。鳥海山周辺ではこのような水域が広く分布しており、本種の生息を可能にしている。このような場所は夏は低温であるが、冬でも凍結することがなく、年間を通じて本種の活動が見られる。

◆**本種の現状** 分布が特異であること、個体数がどの地域でも少ないこと、生息環境が人為的な改変を受けやすい低地の池沼であること、ゲンゴロウとしては比較的大型で美麗であることから採集圧がかかりやすいことなどで、国内における産地ではいずれの地でも永続的な産地の存続が危ぶまれている種である。秋田県は本種の北限の産地に該当するが、事情は同様である。しかし、調査密度が希薄であることから現状の把握を急ぎ、適切な対応を講ずる必要がある。

◆**生存に対する脅威** 過度の採集。

◆**特記事項** 秋田県の由利地方沿岸部を北限としている。低地の湧水をとまなう池沼を生息地としている関係で開発等の影響を受けやすく、開発、改変の際には充分な考慮が必要である。

◆**現在講じられている保護対策** 冬師の生息地の一部は自然環境保全地域に指定されている。

(佐藤福男)

エンマハバビロガムシ

*Sphaeridium scarabaeoides* (Linnaeus, 1758)

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** 北海道、本州（北部）、シベリア、ヨーロッパ、北アメリカ。

◆**県内の分布** 県内陸部の2地点（鹿角市、西木村）で生息を確認している。

◆**本種の概要** 本州では青森、岩手から記録があり、本県が南限である。山間部の牧場の牛糞に集まる習性がある。

◆**本種の現状** 本県での記録地は鹿角市（大清水）、西木村（大覚野牧場）の2ヶ所のみであり、個体数も少ない。山間地の牧場が消滅すれば本種も姿を消すと思われる。

◆**生存に対する脅威** 牧場閉鎖による生息地消滅。

(佐藤福男)

オオチャイロハナムグリ

*Osmoderma opicum* Lewis, 1887

環境省：準絶滅危惧

◆**国内外の分布** 本州、四国、九州、屋久島。

◆**県内の分布** 矢島町（鳥海山）、田沢湖町（玉川ダム）、鳥海町（丁岳）、二ツ井町（七座山）、鹿角市（八幡平）。

◆**本種の概要** 幼虫が樹洞中の腐葉土に依存する習性があるため、樹洞が生ずるような大径木が存在する環境を必要とする。そのため、二次林は生息域と成り得ず、ミズナラ、トチ、ブナなどの巨木が原生林の状態が存在する環境を必須とする。このような条件が揃えば樹種は選ばないようで、ブナ、スギ、クロベ、トチノキを発生木として確認している。

◆**本種の現状** 森林がなんらかの形で保護されている場合を除き、洞のある木は伐採の対象になりやすく、一度伐採されると生息地として回復は不可能である。木材工場の積まれた洞のある伐採木から本種の幼虫が発見されることがよくあるが、そのような場合、その生息地は破壊されたと判断できる。

◆**生存に対する脅威** 森林の伐採。

(佐藤福男)

クロツヤシモフリコメツキ *Actenicerus athoides* (Kishii,1955)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 東北地方、新潟県苗場山、長野県白馬村。
- ◆**県内の分布** 田沢湖町ブナ森牧場、千畑町女神山。
- ◆**本種の概要** 高層湿原に特有な種であり、この属としては最も古い形質を持っている。一般に山地性で、生息場所も湿地帯に特有で、個体数も多くない。
- ◆**本種の現状** 田沢湖町の産地はベニカメノコハムシの生息地内であり、牧場内の湿地であることから安定した産地とは言えない場所である。
- ◆**生存に対する脅威** 湿地の乾燥化の危険性増大。

(佐藤福男)

イガブチヒゲハナカミキリ *Corymbia igai* (Tamanuki,1942)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 本州、四国、九州。
- ◆**県内の分布** 鹿角市（八幡平大沼）、上小阿仁村（萩形）。
- ◆**本種の概要** 東北地方では稀な種である。針葉樹（クロベ、アオモリトドマツ）の枯れ木に産卵するため、ブナ帯上部で訪花個体が稀に採集される。
- ◆**本種の現状** 本種は幼虫が針葉樹につくことが知られている。アオモリトドマツ林地域に分布している個体群は危機的状況ではない。上小阿仁村の場合は稜線の岩礫地帯に生育するクロベを産卵木としてしまうと考えられる個体群は伐採などにより個体数に影響が及ぶ可能性が高い。
- ◆**生存に対する脅威** 森林伐採。
- ◆**現在講じられている保護対策** 鹿角市の生息地は国立公園に指定されている。

(佐藤福男)

コボトケヒゲナガコバネカミキリ *Glaphyra kobotokensis* (Ohbayashi,1963)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 北海道（南部）、本州。
- ◆**県内の分布** 秋田市大滝山。
- ◆**本種の概要** 19都道府県から知られている。分布は局地的であるが、産地での個体数は少なくない。東北では青森、秋田、岩手、福島から知られている。定期的に伐採が行われる二次林中に生ずる太いミツバウツギの枯木に依存している。ミツバウツギは県内では普通に見られるが、本種が見られる太い木は少なく、付近にカエデなどの訪花植物が生えていることが必要である。
- ◆**本種の現状** 本県で確認された食樹はミツバウツギである。ミツバウツギは二次林中に生ずる灌木で刈り込みには強いが、付近のコナラなどが成長することにより、衰退することが多い。大滝山は公園として管理されており、定期的な伐採が行われなくなり、ミツバウツギの衰退が始まっており、秋田県唯一の産地は消滅しようとしている。
- ◆**生存に対する脅威** 定期的伐採の停止。

(佐藤福男)

## ヨコヤマヒゲナガカミキリ

*Dolichoprosopus yokoyamai* (Gressitt,1937)

- ◆**国内外の分布** 本州、四国、九州。
- ◆**県内の分布** 大館市矢立峠、山内村大日向山、森吉町森吉山、比内町。
- ◆**本種の概要** ある程度の太さがあるブナの生木を食する関係でブナ帯に限られる。ブナ帯を生息域とするが、原生林の環境では発見されたことはなく、ある程度伐採され、島状に孤立した直幹のブナに本種の飛孔が見られることが多い。
- ◆**本種の現状** いずれの地でも得られる個体数は極めて少なく、一頭の場合が多い。特に雄の記録は少なく、採集されたのは産卵のため地表に近い部分に降りてきたと思われる個体の場合が多い。ブナ帯の周辺を精査すれば他にも確認できると思われるが、極めて採集が困難な種である。
- ◆**生存に対する脅威** ブナ林の伐採。

(佐藤福男)

## オオヨモギハムシ

*Chrysolina angusticollis* (Motschulsky,1860)

- ◆**国内外の分布** 北海道、利尻島、本州（青森県、岩手県、秋田県）、中国、シベリア。
- ◆**県内の分布** 八森町、藤里町（白神山地）、角館町（羽後朝日岳）。
- ◆**本種の概要** 白神山地には青森県側にも記録があり、その後岩手県早池峰山小田越でも採集されている。羽後朝日岳は飛び離れた分布地であり、ここより南ではまだ知られていない。白神山地における生息地はブナ帯であるが、世界遺産の保全対策がなされている地域から外れている場所でもある。羽後朝日岳の生息地は亜高山帯であり、平成14年3月に植物群落保護林となり、保全される。本県で確認された場所はこの2ヶ所であるが、環境的にはかなり異なる。
- ◆**本種の現状** 現状では大きな問題はないが、将来的には分布限界に近い地帯では生息環境、摂食植物等を精査し、分布地の環境に即した対応を講じないと将来的には危うい状態に至ると考えられる。
- ◆**生存に対する脅威** 林道開設による環境の改変。
- ◆**特記事項** 八森町産と羽後朝日岳産の個体間には形態的、色彩的に若干の相違が認められる。

(佐藤福男)

## ベニカメノコハムシ

*Cassida murraea* Linnaeus,1767

- ◆**国内外の分布** 本州（東北六県）、モンゴル、シベリア、ヨーロッパ。
- ◆**県内の分布** 田沢湖町（2ヶ所）、鹿角市（2ヶ所）。
- ◆**本種の概要** 日本では主に東北地方に分布が限られ、本県での分布は最近になって確認された。現在の所、奥羽山脈に添った山地に分布している。本県では湿地帯に生ずるミズギクが食草となっており、ブナ帯上部などに存在する開けた湿地で背の低い草本が優占する環境を好むようである。湿原が乾燥し、背の高い草本が優占してくると個体数は激減するようである。
- ◆**本種の現状** 県内でミズギクが生育し、本種が好む環境が山間地を中心に存在するが、上記以外には発見されていない。田沢湖町の生息地は、1つは牧場の中、他の1つは乾燥化によって消滅寸前である。鹿角市の2ヶ所の内、1つは蒸ノ湯付近の広さ40㎡程の場所である。結局、安定した産地としては、鹿角市、田沢湖町の境界に位置する大場谷地が唯一の場所である。
- ◆**生存に対する脅威** 乾燥化、開発（牧場、道路）。
- ◆**現在講じられている保護対策** 大場谷地の生息地は国立公園に指定されている。

(佐藤福男)

# クドウツトガ

*Pseudobissetia terrestrella kudoi* Inoue, 1990

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** チュニジア、シリア、イラン、カスピ海沿岸、ルーマニアなどのほか、中国上海からも記録がある。北アフリカからユーラシア南部に広く分布する種と考えられている。日本の個体群は、秋田県、新潟県、埼玉県の標本に基づき大陸のものとは別亜種として記載された。その後愛知県からも発見されている。

◆**県内の分布** 天王町細谷、能代市小友沼、秋田市横山、同仁井田、雄和町安養寺で採集されている。

◆**本種の概要** 幼虫はヨシの茎に食入することが知られている。これまでの産出の状況からも低湿地を棲みかとする蛾である。

◆**本種の現状** 産地は必ずしも普遍的ではなく個体数も多くない。既知の産地のうち、天王町細谷と秋田市横山の湿地は、その後周辺の埋め立てが進んでいる。

◆**生存に対する脅威** 生息地の埋め立てなど。

(佐々木明夫)

# ヘリグロチャバネセセリ

*Thymelicus sylvaticus* (Bremer, 1861)

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** 北海道、本州、四国、九州、チベット、アムール、中国大陸、朝鮮半島。

◆**県内の分布** 県北内陸部の小坂町、鹿角市、大館市の一部。

◆**本種の概要** 分布は県北地方内陸部に限られ、個体数も極めて少ない。

◆**本種の現状** 1987年まで少数の採集記録があるが、それ以降は確認されていない。

◆**生存に対する脅威** 不明。

(成田 弘)

# ハヤシミドリシジミ

*Favonius ultramarinus* (Fixsen, 1887)

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** 北海道、四国、九州、中国東北部、朝鮮半島。

◆**県内の分布** 峰浜村、本荘市、田沢湖町。

◆**本種の概要** 幼虫食草のカシワ林、カシワ混生林に生息する。

◆**本種の現状** 日本海沿岸北部の峰浜村では生息個体数が多いが、沿岸南部の本荘市では少ない。内陸部の田沢湖町では観光開発、植林などにより、僅かに残されたカシワ林に依存しているに過ぎない。

◆**生存に対する脅威** 食草カシワ林の減少。観光開発、植林などによる環境改変。

(成田 弘)

チョウ目タテハチョウ科

準絶滅危惧種

# ヒョウモンチョウ

*Brenthis daphne iwatensis* Okano,1951

環境省：準絶滅危惧

- ◆**国内外の分布** 北海道、本州（中部以北）、ヨーロッパ、東アジア。
- ◆**県内の分布** 鹿角市、森吉町、鷹巣町。
- ◆**本種の概要** 鹿角市ではオニシモツケ、森吉町、鷹巣町ではナガボノシロワレモコウに依存する両個体群が分布しているが、両個体群に形態的な差異はない。幼虫の食草が自生する草地、河川周辺、沢沿い、小規模湿地周辺に生息する。
- ◆**本種の現状** 里山、草地などの管理放棄による生息環境の荒廃で、食草の衰退がみられている。
- ◆**生存に対する脅威** 里山、草地の維持管理放棄。

(成田 弘)

チョウ目ジャノメチョウ科

準絶滅危惧種

# ベニヒカゲ

*Erebia nipponica* Janson,1877

環境省：準絶滅危惧

- ◆**国内外の分布** 本州（中部以北の高山、山岳地帯）、北海道（別亜種）。
- ◆**県内の分布** 田沢湖町、角館町、太田町の亜高山帯。
- ◆**本種の概要** 高山、亜高山の草原に生息する。東北地方では偽高山性（偽高山：標高的には亜高山帯であるにもかかわらず、多雪等の影響で高木林が発達せず高山帯の様相を示すもの）。本県は本州の北限地で、本州内で最も低い生息地（標高900m）がある。
- ◆**本種の現状** 山頂付近の生息地は自然公園などとして保護されているが、最も標高の低い生息地は生息範囲が狭く（約400m）、人による食草の踏み荒らしや採集圧によって消滅する可能性がある。
- ◆**生存に対する脅威** 低標高地の食草の踏み荒らし。採集圧。
- ◆**現在講じられている保護対策** 生息地の一部は自然公園として保護されている。

(成田 弘)

チョウ目シャクガ科ヒメシャク亜科

準絶滅危惧種

# ミチノクヒメシャク

*Scopula michinoku* Sato,1994

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 本州（秋田県、岩手県、宮城県）。日本特産種。
- ◆**県内の分布** 鹿角市十和田大湯大清水および北野から知られた。
- ◆**本種の概要** 東北地方特産。湿性の草地（河畔林の周辺）に生息する。
- ◆**本種の現状** 平地にも見られるが、開発によって生息地が失われる危険性がある。北野の生息地は牧草地に変わっており絶滅した可能性がある。
- ◆**生存に対する脅威** 牧草地化の進行。

(高橋雅彌)

昆虫類

- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD
- LP
- N

チョウ目シャチホコガ科

準絶滅危惧種

## トビギンボシシャチホコ *Rosama ornata* (Oberthür,1884)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 沿海州、中国。北海道から九州に至る本土域と対馬。
- ◆**県内の分布** 秋田市横山、河辺町上ノ台、本荘市石沢、田沢湖町刺巻、湯沢市内館、湯沢市山谷。
- ◆**本種の概要** 人里周辺で採集された例が多い。幼虫はヤマハギを食する。
- ◆**本種の現状** 産出はきわめて散発的。
- ◆**生存に対する脅威** 里山の放置による植生変化。

(梅津一史)

チョウ目ドクガ科

準絶滅危惧種

## スゲドクガ *Laelia coenosa sangaica* Moore,1877

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 旧北区。北海道、東北から関東、中部の山地。本州ではまれ。
- ◆**県内の分布** 仁賀保町冬師、由利町南由利原。
- ◆**本種の概要** 湿地に生息する。幼虫はヨーロッパではウシノケグサ属、スゲ属など各種の草につくという。
- ◆**本種の現状** 産地はきわめて限られるが、個体数は少なくない。
- ◆**生存に対する脅威** 低湿地が減少・悪化している。
- ◆**現在講じられている保護対策** 生息地の一部は冬師および南由利原自然環境保全地域に指定されている。

(梅津一史)

チョウ目ヤガ科ケンモンヤガ亜科

準絶滅危惧種

## ウスジロケンモン *Viminia lutea leucoptera* (Butler,1881)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 沿海州、朝鮮。本州中部以北に産するが、産出は局地的で北海道、青森県、岩手県、秋田県、長野県など。
- ◆**県内の分布** 秋市長田、雄和町高尾山、本荘市石沢、湯沢市内館。
- ◆**本種の概要** 里山に生息するものと思われる。幼虫はワレモコウから得られた記録がある。
- ◆**本種の現状** 産出はきわめて散発的。
- ◆**生存に対する脅威** 里山の放置による植生変化。

(梅津一史)

## クモマウスグロヤガ *Euxoa ochrogaster rossica* (Staudinger,1881)

- ◆**国内外の分布** 本州の高山帯。岩手山、秋田駒、蔵王、吾妻、白山、妙高、飛騨山脈、上信山地、蓼科、八ヶ岳、入笠、赤石山脈、富士山。
- ◆**県内の分布** 秋田駒ヶ岳八合目、アミダ池、十丈の滝、大焼砂。
- ◆**本種の概要** 本州の高山に生息する。秋季に低標高地で採集されることがある。
- ◆**本種の現状** 県内では秋田駒ヶ岳にのみ生息する。
- ◆**生存に対する脅威** 生息環境がきわめて限定されており、常に悪化のおそれがある。
- ◆**現在講じられている保護対策** 発生地が国立公園の特別保護地区、国指定天然記念物として保護されている。

(梅津一史)

## シロテンキヨトウ *Mythimna conigera* (Denis et Schiffermüller,1775)

- ◆**国内外の分布** ユーラシア。北海道から本州中部山地。
- ◆**県内の分布** 鹿角市田代岱、熊取平、田代森、小田代川出合、広森川出合、金右衛門沼、十和田大平。
- ◆**本種の概要** 高冷地の草地に住むものと思われる。この属の幼虫はイネ科草本を食べる。
- ◆**本種の現状** 産地は限られているが、継続して見出されている。
- ◆**生存に対する脅威** 半自然草原の放置による植生の変化。

(梅津一史)

## ウスキトガリキリガ *Telorta acuminata* (Butler,1878)

- ◆**国内外の分布** 日本特産。北海道を除く本土域と対馬。
- ◆**県内の分布** 本荘市新山公園、金浦町前川、西仙北町皆別当、雄勝町湯ノ沢温泉、八森町小入川、男鹿市戸賀。
- ◆**本種の概要** 特定の植生との結びつきは見い出せない。
- ◆**本種の現状** 産出はきわめて散発的で、現状を把握しがたい。時に複数が採集される事もある。
- ◆**生存に対する脅威** 里山の放置による植生変化。

(梅津一史)

# クロビロードヨトウ *Sidemia bremeri* (Erschoff, 1867)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 沿海州、朝鮮、中国。北海道および本州の内陸草原や盆地部に産し、局地的。西は岡山県まで。
- ◆**県内の分布** 大館市獅子ヶ森、鷹巣町平崎上岱、鷹巣町赤川岱、河辺町和田、仁賀保町冬師、田沢湖町高野。
- ◆**本種の概要** 幼生期は不明。草原に見られることが多い。
- ◆**本種の現状** 産出は散発的な場合が多いが、仁賀保町の産地では継続して見出され、個体数も少なくない。
- ◆**生存に対する脅威** 半自然草原の放置による植生の変化。

(梅津一史)

# ヨコスジヨトウ *Mesoligia furuncula* (Denis et Schiffmüller, 1775)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** ユーラシア。北海道、青森県、秋田県、福島県。
- ◆**県内の分布** 八森町チゴギ崎、男鹿市戸賀塩浜、男鹿市船越水道、天王町長沼、秋田市雄物川河口。
- ◆**本種の概要** 秋田では海岸に限定されている。幼生期は不明。
- ◆**本種の現状** 産地はきわめて限られるが、個体数は少なくない。護岸工事などで環境の変化がはげしい。
- ◆**生存に対する脅威** 護岸工事などによる植生の破壊。

(梅津一史)

# オオチャバネヨトウ *Nonagria puengeleri* (Schawerda, 1923)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 沿海州、イラク。北海道東部、青森県、秋田県、岩手県、宮城県、茨城県、千葉県、神奈川県、群馬県、長野県、石川県、新潟県、岐阜県、三重県、岡山県、小豆島、北九州。
- ◆**県内の分布** 鹿角市トロコ温泉、天王町長沼、田沢湖町戸瀬、鹿角市大渉、峰浜村蝦夷倉、大瀧村A-40、秋田市平和公園、田沢湖町刺巻、大曲市大川原、仁賀保町冬師。
- ◆**本種の概要** 低湿地に住む。幼虫はガマの茎に食入する。
- ◆**本種の現状** 低湿地を中心に生息しており、継続して見出される産地もあるが、環境が変わった場所もある。
- ◆**生存に対する脅威** 低湿地が減少・悪化している。

(梅津一史)

# キスジウスキヨトウ

*Archanara sparganii* (Esper,1790)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** ユーラシア。北海道、本州、四国、九州北部。
- ◆**県内の分布** 鷹巣町東塚ノ岱、鷹巣町平崎上岱、上小阿仁村中茂、河辺町和田、田沢湖町戸瀬、仁賀保町冬師、秋田市平和公園、天王町細谷、秋田市女潟、鹿角市小田代川出合、大館市獅子ヶ森、鹿角市菩提野、大潟村A-40、五城目町上樋口、田沢湖町五十曲、天王町長沼、秋田市仁井田、秋田市横山、秋田市豊岩、本荘市石沢、由利町南由利原。
- ◆**本種の概要** 低湿地に住むが、山間部の小規模な湿地にも生息しているようである。幼虫はガマ属やミクリ属の茎に潜る。
- ◆**本種の現状** 低湿地を中心に生息しており、継続して見出される産地もあるが、環境が変わった場所もある。
- ◆**生存に対する脅威** 低湿地が減少・悪化している。

(梅津一史)

# ガマヨトウ

*Archanara aerata* (Butler,1878)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 日本特産。北海道（十勝、釧路）、青森県、秋田県、群馬県板倉町、新潟県、千葉県市川市、愛知県、石川県、岐阜県。
- ◆**県内の分布** 鷹巣町平崎上岱、仁賀保町冬師、秋田市女潟、鹿角市熊取沢出合、鷹巣町東塚ノ岱、能代市浅内、大潟村A-40、男鹿市男鹿温泉、天王町長沼、秋田市金足福田堤、秋田市横山、秋田市豊岩、河辺町和田、協和町上船沢、田沢湖町刺巻、協和町湯野沢、大曲市上大戸、横手市西沼、横手市赤沢、横手市梅ノ木、湯沢市山田、東成瀬村大柳。
- ◆**本種の概要** 低湿地に住む。幼虫はマコモにつく。
- ◆**本種の現状** 低湿地を中心に生息しており、継続して見出される産地もあるが、環境が変わった場所もある。
- ◆**生存に対する脅威** 低湿地が減少・悪化している。

(梅津一史)

# ヌマベウスキヨトウ

*Chilodes pacifica* Sugi,1982

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 北海道（長万部、函館市、標茶）、秋田県、宮城県、青森県、茨城県、群馬県、埼玉県、新潟県、富山県、愛知県、大阪府。
- ◆**県内の分布** 鹿角市広森川出合、天王町細谷、秋田市鳩崎、秋田市金足福田堤、秋田市雄物川河口、秋田市豊岩、金浦町前川。
- ◆**本種の概要** 低湿地に住むが、山間部の小規模な湿地にも生息しているようである。
- ◆**本種の現状** 低湿地を中心に生息しており、継続して見出される産地もあるが、環境が変わった場所もある。
- ◆**生存に対する脅威** 低湿地が減少・悪化している。

(梅津一史)

昆虫類

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

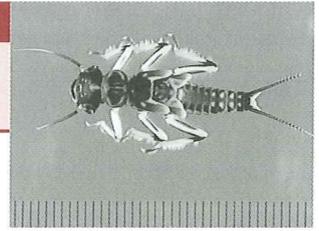
カワゲラ目アミメカワゲラ科

情報不足種

## シノビアミメカワゲラ

環境省：該当なし

*Megaperlodes niger* Yokoyama, Isobe et Yamamoto, 1990



◆**国内外の分布** 本州の山地渓流域。

◆**県内の分布** 雄物川支流役内川上流とその支流の数地点および協和町淀川上流1地点から幼虫が採集されたのみ。他の雄物川水系、米代川水系、子吉川水系からは発見されていない。

◆**本種の概要** 雄物川上流域から中流域の本流および2、3の支流の石礫底に見られる。幼虫の生息域は狭く、個体数も多くない。

◆**本種の現状** 河川上流域に分布するが、源流部の急流ではなく、それよりやや下流の流れがゆるやかな場所に生息する。生息場所は限られており、雄物川水系では河床工事などで激減している。

◆**生存に対する脅威** 不明。

(青谷晃吉)

コウチュウ目オサムシ科オサムシ亜科

情報不足種

## アオカタビロオサムシ

環境省：該当なし

*Calosoma inquisitor cyanescens* Motschulsky, 1858

◆**国内外の分布** 北海道、本州（中部以北）、アジア大陸東部。

◆**県内の分布** 平鹿町金峰山山麓 1♀ 16.V.1997 成田弘採集の1例があるのみ。

◆**本種の概要** 本種に近似のクロカタビロオサムシ *C. maximowiczii* は8月頃ブナ帯でしばしば大発生することが報告されているが、本種はやや低標高のミズナラ主体の二次林で5～6月に得られることで前種とは異なる。得られる個体数ははるかに少なく、生態的にも不明な点が多い。

◆**本種の現状** ミズナラ主体のブナ帯下部を生息域とする関係で分布域は広いと思われるが、本県で得られた個体が1♀のみのため、詳しいことは不明である。

◆**生存に対する脅威** 不明。

(佐藤福男)

コウチュウ目オサムシ科ヌレチゴミムシ亜科

情報不足種

## シラカミナガチビゴミムシ

環境省：該当なし

*Trechiana albidivalis* S.Ueno, 1994

◆**国内外の分布** 本種は秋田・青森両県に広がる白神山地（世界遺産に登録）に限って分布する。近似の別種は青森の岩木山、八幡平などに分布する。

◆**県内の分布** 白神山地特産種である関係で、八森町、藤里町にのみ分布が知られている。

◆**本種の概要** 地下浅層空間に適応した結果、体色は全体褐色で、後翅は退化しており、目も退化傾向である。そのため、種としての分散能力は極めて低く、山地毎に特有の種を形成しやすい。白神山地以外では生息しない。山頂部では地上部で得られることもあるが、その下部では沢の最上流部付近の地下浅層で発見される。

◆**本種の現状** 生息地の白神山地が世界遺産に登録され、主たる生息地は核心部に含まれる関係で将来とも環境が人為的に破壊される可能性は低いと考えられる。

◆**生存に対する脅威** 不明。

◆**現在講じられている保護対策** 生息地は世界遺産に登録されている。

(佐藤福男)

コウチュウ目コガネムシ科ダイコクコガネ亜科

情報不足種

環境省：該当なし

## ダイコクコガネ *Copris ochus* Motschulsky, 1860

◆**国内外の分布** 日本全土、濟州島、朝鮮半島、中国、モンゴル。

◆**県内の分布** 河辺町、田沢湖町（各1例）。

◆**本種の概要** 牛のふんに特異的で、下に深い穴を掘り、その中にふん玉を作り、産卵、育児を行う習性がある。日本では最大の糞虫で、草原性の広大な牧場を必要とするが、開発等により、日本ではそのような環境が少なくなっている。本県では、丘陵地～低山地に産する。河辺町の記録は丘陵地の牧場付近での例、田沢湖町玉川ダム上流部は牧場と関係のない場所である。

◆**本種の現状** 広大な面積のある草地をともなった牧場は低山地ではなくなりつつあり、河辺町の産地は開発により既に失われた。

◆**生存に対する脅威** 不明。

(佐藤福男)

コウチュウ目マルトゲムシ科

情報不足種

環境省：該当なし

## カラフトマルトゲムシ *Byrrhus geminatus* LeConte, 1854

◆**国内外の分布** 北海道（各地）、本州（八幡平、栗駒山、苗場山）、サハリン、ヨーロッパ、北アメリカ。

◆**県内の分布** 八幡平、栗駒山（頂上付近）。

◆**本種の概要** 従来本州では新潟県の苗場山からのみ知られていたが、八幡平、栗駒山は本州での2、3番目の生息地となる。高山植物帯の石下から発見される。より下部にも生息するが、山腹に堆積した礫から冷風が吹き出す風穴のような場所でコケが優占するような環境でも得られる。いずれにしても冷涼な環境が本種の生息条件である。

◆**本種の現状** 保護地域として開発等ができない場所であるが、道路脇の側溝で死骸で採集された。高山地帯を通る道路の側溝は時として地上性の昆虫にとって大きな脅威になる場合がある。

◆**生存に対する脅威** 不明。

◆**現在講じられている保護対策** 生息地は十和田八幡平国立公園、栗駒国定公園に指定されている。

(佐藤福男)

コウチュウ目コメツキムシ科ヒサゴコメツキ亜科

情報不足種

環境省：該当なし

## トウホクミヤマヒサゴコメツキ *Hypolithus motschulskyi izumii* Kishii, 1985

◆**国内外の分布** 本亜種は秋田県特産。

◆**県内の分布** 白神山地ニツ森。

◆**本種の概要** 上記地点の1♂をホロタイプとして記載された。この個体以外にも数個体採集されている。ブナ帯上部の沢に生息する。

◆**本種の現状** 生息地はその後世界遺産に登録されたことで環境等の改変はなくなった。

◆**生存に対する脅威** 不明。

◆**特記事項** 得られた1♂がタイプ標本となっているが、それ以降、数個体の採集記録があるのみ。今の所、県内には標本も写真もない。

◆**現在講じられている保護対策** 生息地は世界遺産に登録されている。

(佐藤福男)

クロキカフムシ *Pytho ezoensis* Kôno,1936

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** 北海道、本州。

◆**県内の分布** 森吉町（森吉山上谷地）、鹿角市（谷内）。

◆**本種の概要** 明らかに北方系の種であるが、記録の少ない種で、青森県ではまだ記録がない。県北の2ヶ所で記録されている。高山の針葉樹樹皮下にいると図鑑には記されているが、本県での例はクロベの伐採木に飛来した個体と、同じく伐採されたアカマツ樹皮下で越冬中の個体が得られている。クロベ、アカマツともに山地では稜線等の岩礫地帯に立地する。

◆**本種の現状** 2例とも伐採が契機となって発見されている。保護の網がかかっている場所ではないことから伐採による環境の変化により、姿を消す可能性は高い。

◆**生存に対する脅威** 森林伐採。

(佐藤福男)

コウヤホソハナカミキリ *Strangalia koyaensis* Matsushita,1933

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** 本州、四国に分布する。東北地方では秋田県で初めて採集され、その後、青森県でも発見された。

◆**県内の分布** 上小阿仁村萩形で1♂がノリウツギの花上から得られたのが唯一の記録である。

◆**本種の概要** 東北では秋田、青森から知られているが、以南には分布空白域があり、関東地方まで分布しない。秋田ではスギの植林地で得られた。青森県では田代町に隣接する相馬村で数個体が得られ、ヒバが宿主であることが判明している。

◆**本種の現状** 上記1個体のみ記録であり、その後の記録もないことから、現状は不明である。

◆**生存に対する脅威** 不明。

(佐藤福男)

ムモンベニカミキリ *Amarysius sanguinipennis* (Blessig,1872)

環境省：該当なし

◆**国内外の分布** 本州、九州、朝鮮、済州島、中国東北部、シベリア。

◆**県内の分布** 河辺町筑紫森、稲川町雄長子内岳の2ヶ所のみ。

◆**本種の概要** 以前は非常に稀な種であったが、九州でカシワを食樹とする事が判明してから九州では採集されやすくなったが、その他の地域では極めて稀な種で食樹も不明である。本県で記録があった場所は2例とも岩山の頂上で、春先で晴天無風の日に得られている。宿主としては、ブナ科、ニレ科、バラ科、カエデ科などがあるが、雄長子内岳では矮小化したミズナラの葉上から得られた。

◆**本種の現状** 上記2例のみ記録で環境もやや特殊であることから生息環境改変の可能性は低い。筑紫森の産地は数年間再確認のため訪れたが、本種は得られていない。

◆**生存に対する脅威** 不明。

(佐藤福男)

## サメハダチョッキリ

*Byctiscus rugosus* (Gebler,1830)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 北海道、本州、シベリア。
- ◆**県内の分布** 田沢湖町（玉川）、森吉町（森吉山上谷地）。
- ◆**本種の概要** 殆ど記録されることのない種であり、秋田県でも上記2ヶ所のみしか知られていない。ポプラ、リンゴの葉を食べることが知られているが、上記2ヶ所ともドロノキ（ヤマナラシ属*Populus*）を利用していることが確認された。
- ◆**本種の現状** 不明。
- ◆**生存に対する脅威** ドロノキの林の立地は河川上中流域の攪乱された場所であり、改修等により消滅する場合が多い。  
(佐藤福男)

## ツマグロトビケラ

*Phryganea japonica* McLachlan,1866

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 北海道、本州、四国、九州、朝鮮。平地のため池や湧水池。
- ◆**県内の分布** 1985年、奥羽山脈西部の中仙町九日町にある雄物川支流玉川の伏流水地帯の燈火で2個体採集されたのみ。その後の採集記録は非常に少なく、年に数回、燈火で採集されたに過ぎない（西木村赤平、大曲市中沢、秋田市添川、稲川町上久保；田中、私信）。1985年に本種成虫を採集したころは、玉川の右岸が幅数百メートル、流程数キロメートルにわたり伏流地帯となっており、数十もの湧水池があった。また、周辺には落葉樹がうっそうと生い茂っていた。現在は、河川改修工事や雑木林の伐採によりその環境は一変した。
- ◆**本種の概要** 本種は、自然状態が保たれた湧水池などに広く生息していたものと考えられる。後翅の先端部に黒色の顕著な斑紋を持つ大型のトビケラである。それゆえに、比較的記録が残りやすいと思われるが、県内におけるこれまでの報告は極めて少ない。幼虫の生息は、平地の近くに雑木林がある湧水、ため池、ゆるやかな流れのある河川の淀みなどに限定される。詳しい生態は分かっていない。
- ◆**本種の現状** 河川改修工事などによる河川中流域の伏流地帯に見られる湧水池の埋没、自然状態が保たれた川岸の雑木林の伐採により、生息域が狭められていると推察される。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(青谷晃吉)

## ルリハダホソクロバ

*Rhagades pruni esmeralda* (Butler,1877)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** ヨーロッパ～朝鮮半島、本州北部～中部、九州。
- ◆**県内の分布** 能代市落合、秋田市下浜、象潟町上の山牧場で、それぞれ1個体が採集されている。
- ◆**本種の概要** 採集された3地点は、いずれも明るい草地～雑木林を伴っている地域である。幼虫の食草はズミであるが、ほかにサクラ属にもつくものと推定されている。
- ◆**本種の現状** 昼飛性の蛾で、本県では調査不足の面もあるかも知れない。東北地方では本県以外からは知られていない。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(佐々木明夫)

ヤホシホソマダラ *Artona octomaculata* (Bremer,1861)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** シベリア南東部、中国北部、朝鮮半島、本州、四国、九州。
- ◆**県内の分布** 雄和町安養寺ダム付近の湿地で1♂採集されたのみ。
- ◆**本種の概要** 東北地方からの発見例は見当たらない。かつて灌漑に使われたとみられる小さな沼の周辺の小規模な湿地で、訪花中の個体を採集したものである。幼虫はヌマガヤに強い嗜好性を持つことが報告されており、明るい湿地草原に結びついている種と考えられる。
- ◆**本種の現状** 上記の採集記録のみ。以後数回の調査を行ったが発見できなかった。採集地は県立中央公園の一部として沼畔に遊歩道が設置され、湿原の状態は悪化しつつある。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(佐々木明夫)

ヒカゲチョウ *Lethe sicelis* (Hewitson,[1862])

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 本州、四国、九州。日本特産種。
- ◆**県内の分布** 鹿角市、田沢湖町。
- ◆**本種の概要** 分布北限に近い。ブナ、ミズナラ帯を生息域とする特異な個体群である。幼虫の食草チシマザサが自生するミズナラ、ブナなどの河畔林縁部に生息する。暗い林内には同属のクロヒカゲが生息し、住み分けをしている。
- ◆**本種の現状** 生息数は少ない。森林、里山などの管理放棄による生息環境の荒廃の影響が懸念される。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(成田 弘)

マンレイカギバ *Microblepsis manleyi* (Leech,1898)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 本州（東北地方北部より）、四国、九州。中国（別亜種）。
- ◆**県内の分布** 秋田市藤倉、八森町小入川。
- ◆**本種の概要** 幼虫はカマツカにつく。
- ◆**本種の現状** 1983年に秋田市で同時に2個体採集された例と、最近八森町で採集された例があるのみ。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(梅津一史)

# クラマトガリバ

*Sugitaniella kuramana* Matsumura, 1933

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 北海道、東北南部から九州に分布。
- ◆**県内の分布** 八森町小入川。
- ◆**本種の概要** 幼生期の知見はない。
- ◆**本種の現状** 1999年に初めて採集された。生息環境も明らかでない。現状について判断しがたい。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(梅津一史)

# イチゴナミシヤク

*Mesoleuca albicillata casta* (Butler, 1878)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 北海道、本州（秋田県、関東、中部山地）、旧北区。
- ◆**県内の分布** 田沢湖町の戸瀬でのみ知られている。
- ◆**本種の概要** 寒冷地に隔離分布。詳細は不明である。生活史が解明されていない（ヨーロッパではキイチゴ属を食する）。
- ◆**本種の現状** 戸瀬では年に数個体得られている。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(高橋雅彌)

# フタモンコナミシヤク

*Venusia megaspilata* (Warren, 1895)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 北海道、本州、四国。
- ◆**県内の分布** 田沢湖町夏瀬および川口溪谷から知られている。
- ◆**本種の概要** 全国的に非常に少ない。生息環境の詳細は不明である。夏瀬はダム周辺の河畔林である。
- ◆**本種の現状** 夏瀬ではある程度まとまった個体数が得られた。付近の森林が失われると絶滅する可能性がある。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(高橋雅彌)

チョウ目シャクガ科ナミシャク亜科

情報不足種

## ヤハズナミシャク *Perizoma sagittata albiflua* (Prout,1939)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 北海道、本州（秋田県、関東、中部山地）、旧北区。
- ◆**県内の分布** 鹿角市十和田大湯および湯瀬、田沢湖町玉川戸瀬、森吉町杣温泉から知られている。各1個体のみ採集されている。
- ◆**本種の概要** 寒冷地に隔離分布。草原性と思われる。
- ◆**本種の現状** 隔離された個体群で、個体群そのものが脆弱である。付近の森林の伐採が進んでいる。最も近い産地は宮城県である。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(高橋雅彌)

チョウ目シャクガ科エダシャク亜科

情報不足種

## キバネトビスジエダシャク *Myrioblephara cilicornaria* (Püngeler,1903)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 北海道、本州、九州。
- ◆**県内の分布** 鹿角市十和田の山中および秋田市仁別砥沢で知られる。
- ◆**本種の概要** 山地の二次林に生息すると思われる。
- ◆**本種の現状** 十和田では年数個体採集されている。個体数が少なく種そのものが脆弱。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(高橋雅彌)

チョウ目シャクガ科エダシャク亜科

情報不足種

## スモモエダシャク *Angerona prunaria turbata* Prout,1930

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 北海道、本州、四国、旧北区。
- ◆**県内の分布** 鹿角市十和田および湯瀬から知られている。田沢湖町戸瀬でも採集されている。
- ◆**本種の概要** 寒冷地に隔離分布。林地に生息する。
- ◆**本種の現状** この個体群は東北地方北東部に分布するもので個体数は多いが、開発によって生息地が失われる可能性がある。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(高橋雅彌)

# ヨスジキエダシャク

*Cotta incongruaria* (Walker,1860)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 本州（秋田県、関東以西）、四国、九州。
- ◆**県内の分布** 男鹿半島戸賀から2000年に数頭採集された。
- ◆**本種の概要** 本県の生息地は、極めてかけ離れた産地である。関東から秋田県の間には産地が知られていない。男鹿半島の海岸段丘上に生息する。周辺はシナノキやカシワなどの樹木のほか、シバ、ススキなどの草地である。
- ◆**本種の現状** 2000年に2頭得られた。他に類似の環境があり、生息地が広がる可能性がある。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(高橋雅彌)

# ハガタフタオ

*Dysaethria flavistriga* (Warren,1901)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 台湾、中国南部、インドからマレー。本州（秋田県以南）、四国、九州、屋久島、奄美大島、沖縄本島、石垣島、西表島。
- ◆**県内の分布** 秋田市豊岩、協和町三軒屋、山内村赤倉。
- ◆**本種の概要** 北限。幼生期の知見はない。
- ◆**本種の現状** 採集例が少なく、現状について判断しがたい。生息環境も特定しがたい。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(梅津一史)

# イブキスズメ

*Hyles gallii* (Rottemburg,1775)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 千島、サハリン、朝鮮、シベリア東部、インド北部からヨーロッパ。北海道、本州、対馬。きわめて局地的で、単発的にしか得られない。
- ◆**県内の分布** 男鹿市戸賀塩浜、鳥海山唐獅子平。
- ◆**本種の概要** 中部の高地草原や北海道では幼虫が見つかるほどの生息密度になることもあるが、一般に産出は単発的で稀である。食草としては、カワラマツバ、ヤエムグラ、アカバナ、キバナノカワラマツバ、オオマツヨイグサ、オオバコなどが知られている。
- ◆**本種の現状** 2000年に相次いで2個体採集されたが、定着しているかどうかは全く不明。現状について判断しがたい。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(梅津一史)

**ゲンカイハガタシャチホコ** *Hagapteryx mirabilior* (Oberthür, 1911)

- ◆**国内外の分布** 秋田県、岩手県、宮城県、新潟県、山梨県、東京都、長野県、四国、対馬。
- ◆**県内の分布** 横手市御岳ブナ林（横手）、鳥海町玉田溪谷、太平山御手洗。
- ◆**本種の概要** 本州での産出はきわめて散発的。本県ではいずれもブナ帯の森林内で得られている。
- ◆**本種の現状** 産出はきわめて散発的で、現状について判断しがたい。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(梅津一史)

**ジョウザンケンモン** *Hyboma jozana* (Matsumura, 1926)

- ◆**国内外の分布** 北海道、青森県、秋田県、宮城県、新潟県、長野県、岐阜県。
- ◆**県内の分布** 森吉町杣温泉。
- ◆**本種の概要** 森林に住むものと考えられる。幼生期は全く不明。
- ◆**本種の現状** 1971年と1974年に同じ場所で各1個体採集されて以来全く採集されていない。現状は全く不明。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(梅津一史)

**オオカブラヤガ** *Agrotis tokionis* Butler, 1881

- ◆**国内外の分布** 沿海州、朝鮮。北海道、東北地方北部から四国、九州、対馬に産する。
- ◆**県内の分布** 鷹巣町平崎上岱、天王町細谷、長沼。
- ◆**本種の概要** 幼生期等は不明。生息環境も特定しがたい。秋季に成虫が出現するため調査が不十分であるかも知れない。
- ◆**本種の現状** 1972年と1988年に各1個体の採集例があるのみ。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(梅津一史)

チョウ目ヤガ科モンヤガ亜科 情報不足種  
環境省：該当なし  
**マエグロヤガ** *Agrotis scotacra* (Filipjev,1927)

- ◆**国内外の分布** 沿海州、朝鮮北部。国内では秋田県の1頭のみ。
- ◆**県内の分布** 天王町長沼。
- ◆**本種の概要** 天王町長沼の記録が国内で唯一の採集例。
- ◆**本種の現状** 1979年に1個体採集されたのみ。現状は全く不明。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(梅津一史)

チョウ目ヤガ科モンヤガ亜科 情報不足種  
環境省：該当なし  
**ナカグロヤガ** *Xestia undosa* (Leech,1889)

- ◆**国内外の分布** 日本特産。北海道から本州中部、四国剣山。
- ◆**県内の分布** 仁賀保町冬師、東成瀬村野鳥の森入口。
- ◆**本種の概要** 生態等はほとんど不明。生息環境も特定しがたい。
- ◆**本種の現状** 採集例が少なく、現状について判断しがたい。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(梅津一史)

チョウ目ヤガ科ヨトウガ亜科 情報不足種  
環境省：該当なし  
**タイリクウスイロヨトウ** *Hadula trifolii* (Hufnagel,1766)

- ◆**国内外の分布** ヨーロッパからアフリカ北部～東アジア、北アメリカ。北海道（浜頓別、斜里郡、大雪山塊、石狩町など）、秋田県、新潟県三面・大峰山など。
- ◆**県内の分布** 大館市獅子ヶ森、秋田市雄物川河口、西目町鯉沢、由利町南由利原、田沢湖町戸瀬、戸賀塩浜、船越水道。
- ◆**本種の概要** 生息環境は特定しがたく、生態等不明な点が多い。
- ◆**本種の現状** 採集例が散発的で、生息環境も不明なため、現状について判断しがたい。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(梅津一史)

- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD
- LP
- N

## クロチャマダラキリガ *Rhynchaglaea fuscipennis* Sugi, 1958

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 日本特産種。本州（秋田県、宮城県石巻市、福島県、関東南部・福井県以南）、四国、九州、対馬、屋久島。
- ◆**県内の分布** 秋田市金足鳩崎。
- ◆**本種の概要** 暖温帯に生息する種で、北限の採集例となる。秋田市の産地はカシワ林。アラカシ、アカガシなどが食樹として知られている。
- ◆**本種の現状** 最近1ヶ所で2年にわたり各1個体が採集されたのみ。偶産は考えにくい。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(梅津一史)

## チャイロカドモンヨトウ *Apamea sodalis* (Butler, 1878)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** インド北部からボルネオ、中国。本州（八甲田山、秋田県、宮城県、関東南部以西）、四国、九州、対馬、屋久島。
- ◆**県内の分布** 西目町鯉沢、仁賀保町冬師、秋田駒ヶ岳八合目。
- ◆**本種の概要** 東北地方での産出はきわめて稀。幼虫はイネ科を好むという。
- ◆**本種の現状** 採集例が散発的で、生息環境も不明なため、定着しているかどうかも含め現状について判断しがたい。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(梅津一史)

## カバマダラヨトウ *Anapamea cuneatoides* Poole, 1989

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 日本特産。主として関東地方以西の本州、四国、九州に産するが、東北地方でも宮城県、秋田県、青森県などに見出されている。
- ◆**県内の分布** 鹿角市林崎、大館市籠谷、八森町お殿水、横手市西沼。
- ◆**本種の概要** 生息環境などは明らかでない。
- ◆**本種の現状** 初めての記録以来しばらく採集例がなく、最近になって相次いで見出された。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(梅津一史)

# クマソオオヨトウ *Kumasia kumaso* (Sugi,1963)

- ◆**国内外の分布** 日本特産。本州（秋田県、宮城県、新潟県、長野県、福井県、静岡県、岡山県など）、四国、九州、伊豆新島。
- ◆**県内の分布** 西目町鯉沢、岩城町上荒谷。
- ◆**本種の概要** 東北地方での産出はきわめて稀。中国ではハチク、マダケなど数種のタケノコを食べるといふ。
- ◆**本種の現状** 採集例がきわめて少なく、現状について判断しがたい。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(梅津一史)

# ヒメシロテナオヨトウ *Trachea melanospila* Kollar,1844

- ◆**国内外の分布** ヒマラヤ西部から中国、沿海州。北海道南部および東部、本州（青森県、秋田県、中部上信山地）。
- ◆**県内の分布** 鹿角市中ノ沢林道、秋田駒ヶ岳八合目、八幡平大沼。
- ◆**本種の概要** 産出はきわめて少ない。
- ◆**本種の現状** 採集例がきわめて少なく、現状について判断しがたい。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(梅津一史)

# ナンキンキノカワガ *Iscladia uniformis* (Inoue et Sugi,1958)

- ◆**国内外の分布** 本州（秋田県・宮城県以南）、四国、九州の本土域。
- ◆**県内の分布** 象潟町西中野沢、岩城町上荒谷。
- ◆**本種の概要** 暖温帯に生息する種で、北限の採集例となる。幼虫はシラキ、ナンキンハゼを食べる。
- ◆**本種の現状** 採集例が少ないが、食樹も見出されており、おそらく定着しているものと思われる。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(梅津一史)

ベニエグリコヤガ *Holocryptis nymphula* Rebel, 1909

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 沿海州。北海道から九州に至る本土域と対馬。
- ◆**県内の分布** 森吉町六郎沢、田沢湖町戸瀬、田沢湖町五十曲、象潟町川袋、象潟町小砂川。
- ◆**本種の概要** 幼生期は全く不明。
- ◆**本種の現状** 採集例がきわめて散発的で、現状について判断しがたい。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(梅津一史)

ヒメクルマコヤガ *Oruza divisa* (Walker, 1862)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** アフリカからインドマレー地域、中国。およそ宮城県を北限とし、本州、四国、九州、対馬、屋久島、三宅島、石垣島。
- ◆**県内の分布** 雄勝町泉沢。
- ◆**本種の概要** 秋季に稲の穂に寄生するイネコウジを食べる幼虫が見ついている。
- ◆**本種の現状** 1 採集例があるだけで、生息環境も不明なため、現状について判断しがたい。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(梅津一史)

モトグロコヤガ *Xanthograptia basinigra* Sugi, 1982

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 北海道大樹町、秋田県、新潟県三面、長野県軽井沢、岐阜県蛭ヶ野。
- ◆**県内の分布** 森吉町湯ノ岱、河辺町上ノ台、田沢湖町水沢温泉。
- ◆**本種の概要** 幼生期は全く不明。
- ◆**本種の現状** 採集例がきわめて散発的で、現状を把握しがたい。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(梅津一史)

コシロシタバ *Catocala actaea* Felder et Rogenhofer, 1874

- ◆**国内外の分布** 中国、朝鮮。東北地方（北限は岩手・秋田）ではまれ。関東地方、中国地方から九州北部、四国（瀬戸内側）。
- ◆**県内の分布** 大曲市花館。
- ◆**本種の概要** 盛岡と大曲が北限。幼虫はクヌギに固有で、クヌギ林に限られる。
- ◆**本種の現状** 最初の発見例以来全く調査が行われておらず、現状は不明。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(梅津一史)

プライヤキリバ *Goniocraspidum pryeri* (Leech, 1889)

- ◆**国内外の分布** 台湾。日本海側では秋田県まで北上しているが、関東では記録はごく少なく、確実な定着地は静岡県西部以西、四国、九州。
- ◆**県内の分布** 田沢湖町刺巻、田沢湖町戸瀬、横手市貴船、横手市横手公園、横手市大鳥。
- ◆**本種の概要** 幼虫はアラカシ、クヌギ、コナラなどに見られる。
- ◆**本種の現状** 初めての記録以来しばらく採集例がなく、最近になって相次いで見出された。生息環境も明らかでない。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(梅津一史)

ナミグルマアツバ *Antatha lignea* (Butler, 1879)

- ◆**国内外の分布** 沿海州。本州、四国、九州。北限は宮城県、秋田県。産出量は少なくかなり局地的。
- ◆**県内の分布** 鹿角市小田代川出合、秋田市仁井田、秋田市豊岩、湯沢市山葵沢。
- ◆**本種の概要** 幼生期は全く不明。
- ◆**本種の現状** 採集例がきわめて散発的で、現状を把握しがたい。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(梅津一史)

**サザナミアツバ** *Hypena abducalis* Walker, 1859

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** インド。東北地方から四国、九州。
- ◆**県内の分布** 田沢湖町大深沢、秋田市平和公園、仁賀保町冬師。
- ◆**本種の概要** 幼生期は全く不明。近似種はマメ科につく。
- ◆**本種の現状** 採集例がきわめて散発的で、現状を把握しがたい。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(梅津一史)

**マガリウスツマアツバ** *Bomolocha mandarina* (Leech, 1900)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 中国西南部および中部。山形県の記録を最北とし、関東、中部地方、四国、九州山地。産出は普遍的でない。
- ◆**県内の分布** 秋田市山内湯の里林道、雄勝町湯ノ沢温泉。
- ◆**本種の概要** 幼生期は全く不明。
- ◆**本種の現状** 2採集例が知られるのみで、産出はきわめて散発的であり、現状を把握しがたい。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(梅津一史)

**アカマエアツバ** *Simplicia rectalis* (Eversmann, 1842)

環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** ウスリー、シベリアからヨーロッパまで。北海道では比較的ふつう。本州では東北から東海地方の低地で採集されているが非常にまれ。
- ◆**県内の分布** 増田町真人公園、秋田市平和公園、天王町長沼、秋田市仁井田。
- ◆**本種の概要** 生態等不明な点が多い。
- ◆**本種の現状** 採集例がきわめて散発的で、現状を把握しがたい。
- ◆**生存に対する脅威** 不明。

(梅津一史)

コウチュウ目テントウムシ科マダラテントウムシ亜科 地域個体群  
**ヤマトアザミテントウ玉川個体群** *Epilachna niponica* Lewis,1896 環境省：該当なし

- ◆**国内外の分布** 北海道南部と本州、北海道北部には別種エゾアザミテントウ *pustulosa* が分布し、4型に区分されている。*niponica* も4型に区分されているが、本県に産する個体群は大沼型とされる。
- ◆**県内の分布** 本県には上記大沼型が広く分布しているが、田沢湖町玉川戸瀬に分布する個体群は、エゾアザミテントウの稚内型に似ており、中間型を経て周囲の大沼型に移行している。この個体群は戸瀬周辺に限って分布しており、遺伝子的な研究などの材料として貴重である。
- ◆**本種の概要** 戸瀬を中心として数キロ以内にしか発見されていないことから、この地に特異的に残存した遺伝型と思われるが、今後の詳しい調査に期待したい。戸瀬では林床のアザミ（特にヒレアザミ）類に見られるが、最近公園化が進行しており、生息地の環境が大きく変化してきている。
- ◆**本種の現状** 戸瀬周辺が大きく改変されれば本個体群は消滅するおそれがある。
- ◆**生存に対する脅威** 生息地の公園化による改変、公園化の拡大、下草刈り強化による環境劣化。

(佐藤福男)

トンボ目アオイトトンボ科 留意種  
**コバネアオイトトンボ** *Lestes japonicus* Selys,1883 環境省：絶滅危惧Ⅱ類

- ◆**国内外の分布** 朝鮮半島、中国に分布。日本では青森県～鹿児島県に分布。
- ◆**県内の分布** 能代市小友沼および鮫淵、秋田市小泉湯、賀川、仁賀保町冬師などに知られる。
- ◆**本種の概要** 青森県が北限。植生の豊かな湖沼あるいは低湿地に発生する。
- ◆**本種の現状** 秋田県では個体数も多く、環境も良好に保たれている。

(高橋雅彌)

コウチュウ目ゲンゴロウ科 留意種  
**エゾゲンゴロウモドキ (キタゲンゴロウモドキ)** *Dytiscus marginalis czerskii* Zaitzev,1953 環境省：準絶滅危惧

- ◆**国内外の分布** 北海道、東北（青森、岩手、秋田、山形、宮城県）地方に産する。国外ではシベリアからヨーロッパまで分布しており、日本は本種の分布東端にあたる。
- ◆**県内の分布** 小坂町若木立、鹿角市八幡平、大場谷地、田沢湖町鎧畑、ぶな森牧場、柳沢林道、戸瀬、象潟町観音森、仁賀保町西冬師、矢島町ムラ杉、千畑町一丈木。
- ◆**本種の概要** 種の分布に示した如く、北方系の種である。分布の中心は1,000m未満のブナ帯で、小規模で低温な止水域を好む。そのような環境では個体数も多く、優占種である。ブナ帯中で平坦な場所が分布好適地になる関係で急峻な地形では生息できない。
- ◆**本種の現状** ブナ帯中の小規模な水域が生息域にしている関係で周囲の水を涵養している森林が保護されていない場所では本種が消滅した場所もあるが、本県においては当分絶滅の心配はないと考えられる。
- ◆**現在講じられている保護対策** 生息地のうち、鹿角市大場谷地は十和田八幡平国立公園内、矢島町ムラ杉は鳥海国立公園内である。

(佐藤福男)

- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD
- LP
- N

チョウ目セセリチョウ科

留意種

## ギンイチモンジセセリ *Leptalina unicolor* (Bremer et Grey, 1852)

環境省：準絶滅危惧

- ◆**国内外の分布** 北海道、本州、四国、九州、シベリア極東地域、中国大陸中～北部、朝鮮半島。
- ◆**県内の分布** 鹿角市、大館市、森吉町、阿仁町、能代市、五城目町、雄和町、河辺町、田沢湖町、矢島町、仁賀保町、由利町、山内村、東成瀬村、皆瀬村、湯沢市、雄勝町などに点在。
- ◆**本種の概要** 幼虫食草のススキが多い草原、湿地帯、沢筋、林道などに生息する。
- ◆**本種の現状** 1990年代は生息個体数が減少傾向。草地などの管理放棄による生息環境の改変が一因と推定されている。

(成田 弘)

チョウ目セセリチョウ科

留意種

## スジグロチャバネセセリ *Thymelicus leoninus* (Butler, 1878)

環境省：準絶滅危惧

- ◆**国内外の分布** 北海道（西南部）、本州、四国、九州の局部、シベリア極東地域、中国大陸、朝鮮半島。
- ◆**県内の分布** 小坂町、鹿角市、大館市、峰浜村、二ツ井町、河辺町、田沢湖町、角館町、太田町、横手市などの一部。
- ◆**本種の概要** 内陸部を中心に局地的に分布している。樹林が混在する草原、住宅地の庭、道路沿、クロマツ林内などに生息する。
- ◆**本種の現状** 山地の草地に局地的に分布し、生息個体数は多い。管理が放棄された草原環境の変化が大きい。また、住宅地や道路沿など不安定な環境にも生息している。

(成田 弘)

チョウ目アゲハチョウ科

留意種

## ヒメギフチョウ *Luehdorfia puziloi inexpecta* Sheljuzhko, 1913

環境省：準絶滅危惧

- ◆**国内外の分布** 北海道、本州（中部以北）。
- ◆**県内の分布** 県内51市町村に広く生息し、生息個体数も多い。
- ◆**本種の概要** 主な幼虫の食草はウスバサイシンに依存しているが、鳥海山、森吉町、田沢湖町などの高地ブナ帯ではオクエゾサイシンに依存している個体群が確認されている。ギフチョウと同じく若いスギ林や雑木林で地表に日光が到達する明るい環境に生息する。
- ◆**本種の現状** 観光開発、植林などによる森林、里山の開発。反面、森林、里山の維持管理の放棄による生息環境の人為的改変などによる生息個体数の衰退地も見られるが、県内に広く分布し、生息個体数も多く絶滅の危険性は少ない。

(成田 弘)

# オオゴマシジミ

*Maculinea arionides takamukai* (Matsumura,1919)

環境省：準絶滅危惧

- ◆**国内外の分布** 北海道（西南部）、本州（中部以北）に断続的に分布、ソビエト極東地域、中国北部、朝鮮半島。
- ◆**県内の分布** 藤里町、河辺町、西木村、田沢湖町、東成瀬村、鳥海町に点在。
- ◆**本種の概要** 幼虫は3齢までクロバナヒキオコシの花を食し、4齢からクシケアリの巣内でアリの幼虫を食す。食草が自生し、共生するクシケアリが生息する渓谷上流部、沢の崩落地や急斜面に生息する。
- ◆**本種の現状** 生息個体数は少ないが、生息地は点在している。
- ◆**現在講じられている保護対策** 藤里町の生息地は白神山地の世界遺産地域（核心地域）内。

(成田 弘)

# ヒメシジミ

*Plebejus argus micrargus* (Butler,1878)

環境省：準絶滅危惧

- ◆**国内外の分布** 北海道、本州、四国、九州、ヨーロッパ、東南アジア。
- ◆**県内の分布** 鹿角市、田沢湖町、由利町、矢島町、山内村、平鹿町、東成瀬村、湯沢市、皆瀬村など県内内陸部に多い。
- ◆**本種の概要** 県内では内陸部の栗駒山周辺、成瀬川、皆瀬川、高松川上流域に分布が集中しているが、鹿角市、矢島町では消失した生息地もある。一般的に本県では生息密度が低い。県内における食草は不明であるが、イタドリ、ヨモギなどが自生する明るい草地、道路際などに生息している。
- ◆**本種の現状** 草原、草地の維持管理が放棄されて、生息地、生息個体数が減少している。

(成田 弘)

# オオムラサキ

*Sasakia charonda* (Hewitson,[1863])

環境省：準絶滅危惧

- ◆**国内外の分布** 北海道（西部）、本州、四国、九州。中国～朝鮮、台湾に別亜種を産する。
- ◆**県内の分布** 鹿角市、二ツ井町、五城目町、秋田市、河辺町、岩城町、本荘市、矢島町、横手市、稲川町、東成瀬村、雄勝町。
- ◆**本種の概要** 幼虫の食草エゾエノキ、エノキが自生する落葉広葉樹林地に生息する。
- ◆**本種の現状** 生息地も多く、生息個体数も少なくない。全国的には絶滅地もあるほど生息地、生息個体数が減少している。

(成田 弘)

## 昆虫類参考文献

### 【トンボ目】

- 浜田康・井上清, 1985. 日本産トンボ大図鑑. 講談社.
- 小岩勲夫, 1979. 栗駒山のトンボ覚え書. 岩手蟲乃會會報 第二号.
- 松山 忠, 1953. 秋田県の蜻蛉 Dragonflies from AKITA-KEN:1-8. 秋田県立児童会館.
- 松山 忠, 1935. 大館産の蜻蛉目録. 昆虫界 vol. III 20:460-464.
- 松山 忠, 1935. おほるりぼしやんまの羽化. 昆虫界 vol. III 20:452-460.
- 松山 忠, 1974. トンボの採集報告. 秋田自然史研究 2:4.
- 松山 忠, 1975. トンボの知見 '74. 秋田自然史研究 3:19-20.
- 宮川幸三, 1972. 秋田県横手盆地のトンボ覚え書. *New Entomologist* 21(1):15-17.
- 室谷洋司, 1988. 秋田県白神山地のムカシトンボ7月の採集例. 青森の蝶 10(1):170-171.
- 成田 弘, 1992. 栗駒山西部山麓で採集されたトンボ類. 秋田自然史研究 28:6-10.
- 成田 弘, 1994. 栗駒山西部山麓で採集された7種の昆虫. 秋田自然史研究 30:38-39.
- 佐々木行夫, 1954. 太平山麓昆虫仮目録 II Odonata 蜻蛉目:1-8. 太平昆虫同好会.
- 佐々木行夫, 1956. 太平山麓の *Davidius* の分布. 羽城(秋田高校生徒会誌) 7:28-31.
- 佐藤福男, 1990. ホソミホツネトンボ秋田県に産す. 秋田自然史研究 26:22.
- 佐藤福男, 1990. カオジロトンボ大谷地(八幡平)に産す. 秋田自然史研究 24:24.
- 佐藤福男, 1992. ムカシトンボ鳥海山に産す. 秋田自然史研究 28:10.
- 白畑孝太郎・黒沢良彦, 1972. 鳥海山・飛島の昆虫類:218-262. 山形総合学術調査会.
- 高橋雅彌, 1959. 秋田市付近の蜻蛉目均翅亜目について. ばっけ(秋田高校生物部報) 9:43-46.
- 高橋雅彌, 1960. 横手市の虫思いで記. ばっけ(秋田高校生物部報) 10:12-16.
- 高橋雅彌, 1970. 秋田県の蜻蛉 I. TOMBO XIII:27.
- 高橋雅彌, 1973. 男鹿半島の昆虫相(主として夏季の蝶類, 蜻蛉類について). 男鹿半島自然公園学術調査報告(財団法人日本自然保護協会報告) 44:80-85. 秋田県.
- 高橋雅彌, 1978. 秋田湾地区自然環境調査報告書, II 開発予定地域生物環境調査, 2 動物, (3) 昆虫類:108-115.
- 高橋雅彌, 1978. 昭和52年度「工場立地に伴う生態系影響調査報告書」, IV 陸域動物調査 3. 昆虫類の調査:99-147. 通商産業省委託 野村総合研究所.
- 高橋雅彌, 1979. 秋田県の蜻蛉(II). 秋田自然史研究 11:16-17.
- 高橋雅彌, 1992. 秋田県の蜻蛉(III). 秋田自然史研究 28:11-24.
- 高橋雅彌, 1992. マダラナニワトンボの再発見. 秋田自然史研究 28:24.
- 高橋雅彌, 1993. 秋田県の蜻蛉 IV. 秋田自然史研究 29:9-16.
- 高橋雅彌, 1994. 秋田県の蜻蛉 V. 秋田自然史研究 30:1-7.
- 高橋雅彌, 1994. 佐々木明夫氏採集のトンボ類. 秋田自然史研究 30:7.
- 高橋雅彌, 1995. 秋田県の蜻蛉 VI. 秋田自然史研究 31:21-25.

### 【カワゲラ目】

- 建設省河川局治水課, 1994. 米代川の底生動物. 河川水辺の平成4年度国勢調査年間底生動物調査編:75-83. 財団法人リバーフロント整備センター編, 山海堂.
- 建設省河川局治水課, 1997. 雄物川の底生動物. 河川水辺の平成4年度国勢調査年間底生動物調査編, CD-ROM版. 財団法人リバーフロント整備センター編, 山海堂.
- 建設省河川局治水課, 1997. 子吉川の底生動物. 河川水辺の平成4年度国勢調査年間底生動物調査編, CD-ROM版. 財団法人リバーフロント整備センター編, 山海堂.
- 財団法人リバーフロント整備センター, 2000. 節足動物門 Arthropoda 昆虫綱 Insecta カワゲラ目(セキ翅目). 河川水辺の国勢調査のための生物リスト ~平成11年度河川版~:147-150.
- 横山宣雄・磯辺ゆう・山本 茂, 1990. アミメカワゲラ科の新属新種シノピアミメカワゲラ (*Megaperlodes niger*) の山形県における分布. 第55回大会日本陸水学会講演要旨集:65. 175pp, 日本陸水学会.
- 吉成 暁, 2001. 茨城県のシノピアミメカワゲラ. 兵庫陸水生物 53:97-99.

### 【カメムシ目】

- 環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物, 無脊椎動物編.  
宮武頼夫, 1994. タガメのすべて. トンボ出版.  
岡 睦男, 1993. タガメ・ゲンゴロウ 秋田の消息. 生物秋田 35:10-11.

### 【コウチュウ目】

- 阿部光典, 1989. 秋田県で発見したゲンゴロウもどき. 甲虫ニュース 86:4.  
赤石川流域の自然, 1991. トーホクミヤマヒサゴの記録白神山地(青森県側)の記録. 青森県立郷土館調査報告, 第28集, 自然-3.  
芦田 久・鎌田邦彦, 1993. 鳥海山麓におけるホンシュウオオイチモンジシマゲンゴロウとマルコガタノゲンゴロウの記録. 月刊むし 274:11.  
Brancucci, 1983. Revision des especes estpalearectiques, Orientales et australiennes dugenere *Laccophilus*.  
藤岡昌介・佐藤福男・加納彦一, 1982. 秋田県のクワガタムシ. 甲虫ニュース 56:7-8.  
林 匡夫・森本 桂・木元新作, 1984. 原色日本甲虫図鑑(IV). 保育社.  
雛倉 正人, 1990. 南アルプスにおけるカノシマゲンゴロウの採集例. 甲虫ニュース 92:6.  
平野俊秀, 1990. 秋田県田沢湖町のオオクワガタ. 月刊むし 238:25.  
保谷忠良, 1991. 宮城県のゲンゴロウ.  
井村有希・水沢清行, 1996. 世界のオサムシ大図鑑. むし社.  
利部輝男, 1954. 太平山麓昆虫仮目録 3. 太平生物同好会.  
環境庁編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物, 無脊椎動物編.  
加納彦一, 1987. 秋田県のオトシブミ. 秋田自然史研究 21:1-3.  
笠原須磨生, 1985. 秋田県のゴミムシ類. 秋田自然史研究会.  
片倉晴雄, 1988. 日本の昆虫10, オオニジュウヤホシテントウ. 文一総合出版.  
木元新作・滝沢春雄, 1994. 日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説. 東海大学出版会.  
記野直人・長谷川洋, 1992. マルコガタノゲンゴロウの記録. 甲虫ニュース 97:5.  
Kishii, T., 1985. Some new forms of Elateridae in Japan. 平安学園紀要 29:6.  
黒沢良彦・久松定成・佐々治寛之, 1985. 原色日本甲虫図鑑(III). 保育社.  
丸屋良博, 1992. 秋田県北部におけるマルコガタノゲンゴロウの記録. 月刊むし 262:7.  
丸屋良博, 1993. 秋田県北部におけるオオクワガタの記録. 月刊むし 272:37.  
森 正人・北山 昭, 1993. 図説 日本のゲンゴロウ. 文一総合出版.  
永幡嘉之, 1997. ニセルイスツブゲンゴロウの鳥取県における採集記録. 月刊むし 321:44.  
那波晴己・望月 淳・伊藤雅和, 1994. 秋田県のオオクワガタについて. 月刊むし 280:24-25  
日本鞘翅目学会編, 1984. 日本産カミキリ大図鑑. 講談社.  
野村周平, 1997. 宮城県におけるニセルイスツブゲンゴロウの記録. 月刊むし 322:15.  
沼田 仁, 1998. 秋田県におけるクマガイクロアオゴミムシの採集例. 月刊むし 323:38.  
沼田 仁, 1992. 秋田県におけるヨコヤマヒゲナガカミキリの生態. 秋田自然史研究 28:41-47.  
大平仁夫, 1989. 日本産シモフリコメツキ類について(2). 月刊むし 219:23-27.  
大平仁夫・尾崎俊寛, 1995. 青森県に産するミヤマヒサゴコメツキについて トーホクミヤマヒサゴ (*izumii*)とシモヤマミヤマヒサゴ(*shimoyamai*)との比較. *Celastrina* 30:33.  
桜井俊一, 1992. 鳥海山麓のセスジゲンゴロウ3種の記録. 月刊むし 262:20-21.  
佐藤福男, 1982. 秋田県およびその周辺におけるホソヒメクロオサムシとヒメクロオサムシの分布について. 甲虫ニュース 57:5-6.  
佐藤福男, 1995. キアシネクイハムシ秋田県に産す. 月刊むし 294:34-35.  
佐藤福男, 1995. 秋田県でムモンベニカミキリを多数採集. 月刊むし 295:34.  
佐藤福男, 1996. 秋田県のベニカメノコハムシ分布と生態. 秋田自然史研究 32:20-22.  
佐藤福男, 1996. 秋田県のゲンゴロウ類. 秋田自然史研究 33:5-9.

- 佐藤福男, 1996. 秋田県で採集したツブゲンゴロウ属の日本未記録種. 月刊むし 307:22-23.
- 佐藤福男, 2000. 秋田県のオサムシ類. 秋田自然史研究 40:5-13.
- 佐藤福男, 2000. オオヨモギハムシ秋田県に産す. 秋田自然史研究 41:4.
- 佐藤福男・加納彦一, 1984. 秋田県のカミキリムシ上. 月刊むし 161:13-20.
- 佐藤福男・加納彦一, 1988. 秋田県初記録のカミキリ11種. 月刊むし 206:39-40.
- 佐藤福男・沼田 仁, 1995. 秋田県初記録のゲンゴロウ類5種. 月刊むし 293:38-39.
- 高橋 誠, 1994. チンメルマンセスジゲンゴロウの記録. 甲虫ニュース 105:5.
- Takizawa, T. and T. Nakane, 1977. Byrrhus Linne and Cytillus Erichson from Japan and its adjacent areas. *Bull. Natn. Sci. Mus., Ser. A (zool.)* 3(1):55-65
- 上田 昇, 1992. オオイチモンジシマゲンゴロウの採集記録. 翔 98:12.
- Ueno, S., 1994. New oculate *Trechiana* mainly from non-volcanic mountains of northern Honshu, northeast Japan. *Elytra*, Tokyo, 22(1):23-44
- 上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝, 1985. 原色日本甲虫図鑑(II). 保育社.
- 渡辺徳, 1972. 十和田八幡平国立公園後生掛地区地熱発電計画に伴う学術調査報告書.
- 安富和男・新保友之, 1976. 秋田県で発見された本州未記録のコブオオニジュウヤホシテントウの1型. *Kontyu*, Tokyo, 44(4):570
- 横山裕正, 1981. ケマダラカミキリの秋田県鹿角市の記録. 月刊むし 121:33.

#### 【トビケラ目】

- 青谷晃吉, 1988. 秋田県中仙町に生息する止水生のトビケラについて. 兵庫陸水生物 30:9 - 12.
- 青谷晃吉・野崎隆夫, 2001. 秋田県雄物川扇状地の湧水流におけるババホタルトビケラの生活史. 陸水学雑誌 62:23-39.
- Ito, T., K. Tanida and T. Nozaki, 1993. Checklists of Trichoptera in Japan 1. Hydroptilidae and Lepidostomatidae. *Jap. J. Limnol.*, 54:141-150.
- Ito, T., 1994. Description of four new species of Lepidostomatid Caddisflies (Trichoptera) from Honshu, central Japan. *Jap. J. Ent.*, 62:79-92.
- 建設省河川局治水課, 1994. 米代川の底生動物. 河川水辺の平成4年度国勢調査年間底生動物調査編:75-83. 財団法人リバーフロント整備センター編, 山海堂.
- 建設省河川局治水課, 1997. 雄物川の底生動物. 河川水辺の平成4年度国勢調査年間底生動物調査編, CD-ROM版. 財団法人リバーフロント整備センター編, 山海堂.
- 建設省河川局治水課, 1997. 子吉川の底生動物. 河川水辺の平成4年度国勢調査年間底生動物調査編, CD-ROM版. 財団法人リバーフロント整備センター編, 山海堂.
- Kobayashi, M., 1968. Notes on Caddisflies of Niigata Prefecture, with six new species. (Insecta:Trichoptera), *Bull. Kanagawa Pref. Mus.*, Natural Science. 1:1-12.
- 野崎隆夫, 1989. ホタルトビケラ属—生活史と分布. 日本の水生昆虫 種分化とすみわけをめぐって:99-108. 柴谷篤弘・谷田一三編, 184pp, 東海大学出版会.
- Nozaki, T., 2002. Revision of the genus *Nothopsyche* Banks (Trichoptera:Limnephilidae) in Japan. *Entomological Science*, 5.
- Nozaki, T., K. Tanida and T. Ito, 2000. Checklists of Trichoptera in Japan. 4. Goeridae, Uenoidea and Limnephilidae. *The Japanese Society of Limnology*, 1:197-208.
- 財団法人リバーフロント整備センター, 2000. 節足動物門 Arthropoda 昆虫綱 Insecta トビケラ目(毛翅目). 河川水辺の国勢調査のための生物リスト ~平成11年度河川版~:186-194.
- 谷 幸三, 1977. トビケラ目(毛翅目)Trichoptera. 原色日本昆虫図鑑(下), 伊藤修四郎・奥谷禎一・日浦勇編, 保育社.
- 谷田一三, 1985. トビケラ目. 日本産水生昆虫検索図説:167-226. 川合禎次編, 409pp, 東海大学出版会.

## 【チョウ目】

- 青木俊彦, 2000. ゲンカイハガタシャチホコを岩手県で採集. 誘蛾灯 160:48.
- 新谷明弘, 1975. 五城目町のチョウ類. 秋田自然史研究 5:13-15.
- 新谷明弘, 1977. 鹿角市湯瀬の7月中旬の蝶. 秋田自然史研究 8:19.
- 新谷明弘, 1977. 1976年秋田県の蝶に関する覚え書. 秋田自然史研究 8:19
- 新谷明弘, 1980. 田沢湖町におけるホシミスジの記録. 秋田自然史研究 12:20.
- 新谷明弘, 1989. 秋田県のヒメシジミについて—その分布と形態. 秋田自然史研究 24:1-4.
- 新谷明弘, 1989. 秋田県のチョウに関する知見など. 秋田自然史研究 24:5-7.
- 新谷明弘, 1989. 田沢湖町高野周辺の蝶. 秋田自然史研究 24:8-12.
- 新谷明弘, 1999. 田沢湖町におけるキタアカシジミの記録. 秋田自然史研究 37:18.
- 新谷明弘, 2000. 秋田県および隣接地域のオオウラギンヒョウモン. 秋田自然史研究 40:30-37.
- 朝比奈正二郎ほか, 1992. レッドデータアニマルズ. ジック出版局.
- 藤平 暁, 1999. 日本の珍しい蛾 -13- マエアカヒトリ. やどりが 183:28.
- 福田晴夫・美ノ谷憲久・岩野秀俊, 2000. 北上高地のホシミスジについて. 月刊むし 352:4-11.
- 福田晴夫ほか, 1989. 原色日本蝶類生態図鑑, I-IV. 保育社.
- 船越進太郎, 1984. 岐阜県美濃市休耕田の蛾類. 誘蛾灯 97:117-127.
- 船越進太郎, 1991. スゲドクガ, シラユキコヤガ岐阜県における記録. 誘蛾灯 125:99-100.
- 八郎瀧新農村建設事業団, 1973. 昭和47年病害虫発生予察報告書.
- 八郎瀧新農村建設事業団, 1974. 昭和48年病害虫発生予察報告書.
- 八郎瀧新農村建設事業団, 1976. 病気・害虫発生予察年報.
- 蜂谷 剛, 1965. 福島県史 25:496-528.
- 飯島一雄, 1996. 釧路湿原から発見されたホクトギンウワバ. *Coenonympha* 41:854.
- 飯島一雄・小杉時規, 1984. 北海道から初めて発見された3種の蛾. 蛾類通信 126:5.
- 猪子龍夫・亀田 満・小松利民, 1997. 北海道南部のメイガ III. 誘蛾灯 149:75-81.
- 猪又敏男, 1990. 原色蝶類図鑑. 北隆館.
- Inoue, H., 1986. Descriptions and records of some Japanese Geometridae (VI) *Tinea* 12(7):45-71.
- Inoue, H., 1991. Notes on the Nolinae (Lepidoptera, Noctuidae): Four new species from Japan and two species described by Staudinger from southeast Siberia. *Tyō to Ga*, 42(2):63-73.
- Inoue, H., 1990. A new species of *Pseudobissetia terrestrella* (Christoph) (Pyralidae, Crambinae) from Japan. *Japan Heterocerists' J.* 157:108-109.
- 井上 寛, 1992. カバシタムクゲエダシャクと中国に産する近縁の一新種. 蛾類通信 169:327-330.
- 井上 寛・杉 繁郎・黒子 浩・森内 茂・川辺 湛, 1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社.
- 岩本裕之・工藤広悦, 1986. 北海道低地湿原のメイガ. 誘蛾灯 106:139-140.
- 岩崎史郎, 1992. 宮城県未記録の蛾(第4報). 誘蛾灯 127:17-21.
- 岩崎史郎・梅津一史, 1988. 宮城県未記録の蛾(第3報). 誘蛾灯 112:61-67.
- 神保一義・中谷正彦・小木広行, 1996. 北海道低地のホクトギンウワバの記録. 蛾類通信 190:239-241.
- 神保一義・柳田慶浩・葛西 充, 1991. 岩木山と八甲田山の高山帯の蛾類. 蛾類通信 162:204-207.
- 亀田 満, 1992. 北海道胆振支庁管内ヤガ科の採集記録. *Coenonympha* 39:777-788.
- 加納彦一, 1983. ニツ井町七座山の蝶類. 秋田自然史研究 16:78.
- 葛西 充, 1985. 青森県蛾想記その6「エゾスジヨトウ」. 誘蛾灯 102:151-154.
- 葛西 充, 1987. 青森県の蛾(VIII). 誘蛾灯 109:81-85.
- 葛西 充, 1988. 青森県の蛾(XI). 誘蛾灯 111:17-21.
- 葛西 充, 1988. 青森県の蛾(XII). 誘蛾灯 112:51-56.
- 葛西 充, 1988. 「青森県の蛾(VI)」の追加記録. 誘蛾灯 113:99-100.
- 加藤陸奥雄, 1993. 滅びゆく日本の昆虫50種. 築地書館.
- 木俣 繁, 1992. 山形県の蛾類分布資料(VII). 山形県立博物館研究報告 13:29-58.
- 木下総一郎・内藤恒夫, 1985. シロオビヨトウを糸魚川で採る. 誘蛾灯 102:138.

- 岸田泰則, 1982. 大分県九重山で得た稀少種の蛾若干. 誘蛾燈 90:124.
- 岸田泰則, 1989. 静岡県朝霧高原で得た分布上興味ある蛾. 月刊むし 224:27.
- 岸田泰則・川原 進, 1989. 北海道小清水町の稀少種の蛾. 蛾類通信 156:86.
- 小松利民, 1994. 北海道南部から得られたヤガ科3種. *Coenonympha* 39:776.
- 越野誠一郎・宇根崎博信, 1992. 大阪府南部の注目すべき蛾類I. 蛾類通信 166:278-281.
- 工藤広悦, 1982. 江戸川河川敷(埼玉県庄和町)の蛾3種. 誘蛾燈 90:125-126.
- 工藤広悦, 1983. 北海道低地湿原のヤガ. 誘蛾燈 94:163-169.
- 間野隆裕, 1989. 三重県北部の注目すべき蛾. 蛾類通信 152:24-26.
- 間野隆裕, 1991. 愛知県で採集した注目すべき蛾. 誘蛾燈 123:3-8.
- 松野武敏, 1987. 青森県のオオシラホシヤガ. 蛾類通信 140:227.
- 三浦重光, 1985. 岡崎市の蛾類. 新編岡崎市史, 自然 14:853-972.
- 望月 淳, 1991. オクエゾサイシン依存型のヒメギフチョウの新産地. 秋田自然史研究 27:8.
- 中島秀雄, 1991. カバシタムクゲエダシャクと思われる雌の採集記録. 蛾類通信 163:229.
- 中村正直, 1993. ヤシホソマダラの幼虫. 蛾類通信 172:385-388.
- 中村正直・工藤広悦, 1997. ダイセンセダカモクメの幼虫について. 蛾類通信 192:275-279.
- 中村正直・工藤広悦・田中政行, 2000. アオモンギンセダカモクメの幼生期. 蛾類通信 207:129-131.
- 中村正直・工藤広悦・内藤孝之助, 1996. 葦毛湿原(豊橋市岩崎町)で獲られた蛾類目録. 蛾類通信 189:223-230.
- 中野 潔, 1990. 新潟市佐潟で得た県未記録のヤガ2種. 誘蛾燈 120:98.
- 中塩一夫, 1992. 宮城県のヤガ科5種の記録. 誘蛾燈 129:61-62.
- 成田正弘, 1995. ヒメシジミその後. 秋田自然史研究 31:27-28.
- 成田正弘, 1996. 大野台で発見されたヒョウモンチョウ. 秋田自然史研究 33:10.
- 成田正弘, 1998. 秋田県未記録のヒカゲチョウについて. 秋田自然史研究 37:16-17.
- 成田正弘, 2000. 秋田の蝶. 秋田自然史研究会.
- 成田正弘・望月淳, 1997. 秋田県のキタアカシジミ. 秋田自然史研究 35:7-9.
- 小田島順治, 1978. 横手市付近の蝶類. 秋田自然史研究 10:18-21.
- 小木広行, 1984. ウスジロケンモンとオオカブラヤガの北海道の記録. 誘蛾燈 95:20.
- 小木広行, 1986. マガリキンウワバおよびシロスジキンウワバの幼虫と食草. 蛾類通信 135:145-146.
- 小木広行, 1999. 北海道でクラマトガリバを採集. 誘蛾燈 158:112.
- 岡野磨瑳郎, 1957. 東北地方の注目すべき蛾類 (1). 蛾類同志会通信 9:42-43.
- Okano, M., 1962. The systematic study of the Japanese Crambinae. (Lepidoptera, Pyralidae). *Ann. Rep. Gakugei Fac. Iwate Univ.* 20(3):83-137, pls 1-15.
- 岡野磨瑳郎・朝霧康雄, 1960. 秋田県北部の蛾類. 秋田県立花輪高等学校八幡平分校.
- 大倉 慎, 1997. キタルリモンエダシャク秋田県冬師に産す. 誘蛾燈 147:29.
- 大倉 慎, 2000. クラマトガリバを八森町で採集. 秋田自然史研究 41:24.
- 大友良和・菅原 亮・佐藤福男, 1998. 秋田県のギフチョウ属. 秋田自然史研究 22:1-7.
- Palm, E., 1986. Nordeuropas Pyralider. *Danmarks dyreliv* Bind 3. Kobenhavn.
- Ragonot, E. L., 1894. Notes synonymiques sur les microlepidopteres et descriptions d'espèces ou inédites. *Annls Soc. ent. Fr.* 63:161-226.
- 佐川隆一・小田島順治, 1980. 東成瀬村のヒメシジミについて. 秋田自然史研究 13:5-6.
- 佐々木明夫, 1980. ミカボコブガ秋田県に産す. 誘蛾燈 79:15.
- 佐々木明夫, 1980. 大潟草原特別鳥獣保護区の蛾類. 秋田自然史研究 13:1-5.
- 佐々木明夫, 1984. 秋田県のメイガ分布資料(2). 秋田自然史研究 18:1-5.
- 佐々木明夫, 1986. ナンキンキノカワガ秋田県に産す. 誘蛾燈 106:126.
- 佐々木明夫, 1987. 自然環境保全地域等調査報告書, 鹿角市湯瀬溪谷. 秋田県.
- 佐々木明夫, 1989. 秋田県で得られた注目すべきシャクガ(1). 誘蛾燈 118:145-148.
- 佐々木明夫, 1991. 秋田県のメイガ分布資料(10). 秋田自然史研究 27:34-35.

- 佐々木明夫, 1991. 秋田県未記録のタニガワモクメキリガとウスクモチアツバ. 蛾類通信 163:211.
- Sasaki, A., 1993. A new species of Nolinae (Noctuidae) from Japan. *Japan Heterocerists' J.* 172:389-390.
- 佐々木明夫, 1993. 青森県下北で得た蛾数種. 誘蛾燈 134:89-90.
- Sasaki, A., 1994. A new species of the genus *Scirpophaga* (Pyraridae, Schoenobiinae) from Japan. *Japan Heterocerists' J.* 177:20-21.
- 佐々木明夫, 1996. フタクロテンマダラメイガを秋田県冬師で採集. 誘蛾燈 143:3-4.
- 佐々木明夫, 1996. フタオレウスグロエダシヤクを冬師で採集. 秋田自然史研究 32:23.
- 佐々木明夫, 1997. トウホクチビコブガの♀の発見と記載. 誘蛾燈 149:96-97.
- 佐々木明夫, 1999. 日本の珍しい蛾 -12- アオモンギンセダカモクメ. やどりが 182:30.
- 佐々木明夫, 2000. ヤシホソマダラ秋田県に産す. 秋田自然史研究 41:9.
- 佐々木明夫, 2001. ルリハダホソクロバ上の山牧場に産す. 秋田自然史研究 42:24.
- 佐々木明夫・土井信夫, 1996. ギンスジマダラメイガの追加産地. 誘蛾燈 143:8.
- 佐々木明夫・葛西 充, 1994. 日本産ソトシロスジズメイガについて. 蛾類通信 181:87-89.
- 佐々木明夫・大倉 慎, 1985. 秋田未記録のヤガ 4種. 秋田自然史研究 19:4.
- 佐々木明夫・大倉 慎, 1986. 秋田県未記録のヤガ. 秋田自然史研究 20:16.
- 佐々木明夫・大倉 慎, 1989. 珍しいヤガ2種の記録. 秋田自然史研究 25:23.
- 佐々木明夫・大倉 慎, 1995. 秋田県未記録のヤガ(3). 誘蛾燈 140:94.
- 佐々木明夫・高橋雅彌, 1973. 秋田県の蛾(I). 秋田自然史研究会.
- 佐々木明夫・高橋雅彌, 1974. 秋田県の蛾(I)にその後追加された種について. 秋田自然史研究 2:5-8.
- 佐々木明夫・高橋雅彌, 1975. 秋田県の蛾(I)にその後追加された種について(第2報). 秋田自然史研究 5:1-10.
- 佐々木明夫・高橋雅彌, 1975. ふるさとの蛾お国めぐり. やどりが 83:13-18.
- 佐々木明夫・高橋雅彌, 1976. 秋田県の蛾(I)にその後追加された種について(第3報). 秋田自然史研究 7:6-11.
- 佐々木明夫・高橋雅彌, 1977. 秋田県の蛾(I)にその後追加された種について(第4報). 秋田自然史研究 9:14-18.
- 佐々木明夫・高橋雅彌, 1979. 秋田県の蛾(I)にその後追加された種について(第5報). 秋田自然史研究 11:7-9.
- 佐々木明夫・高橋雅彌, 1983. 秋田県未記録のヤガについて. 秋田自然史研究 16:4-6.
- 佐々木明夫・高橋雅彌・田中政行・梅津一史, 1994. 秋田県の蛾(II). 秋田自然史研究会.
- 佐々木明夫・梅津一史, 1996. ウスキミズメイガを本州から再確認. 誘蛾燈 145:70.
- 佐藤福男, 1985. 秋田県の蝶その後の知見(I). 秋田自然史研究 19:1-3.
- 佐藤福男, 1988. オクエゾサイシンを食す南限のヒメギフチョウ. 秋田自然史研究 23:4.
- 佐藤福男, 1992. 鳥海山におけるギフチョウ属の分布と混生. 秋田自然史研究 28:30-31.
- 佐藤福男, 1992. ホシミスジの新産地. 秋田自然史研究 28:47.
- 佐藤福男, 1994. キタアカシジミ秋田県に産す. 月刊むし 274:3.
- 佐藤福男, 1998. 秋田県にヒカゲチョウ産す. 月刊むし 334:15.
- 佐藤 博, 1985. 青森県の蛾(VI). 誘蛾燈 101:117-124.
- 佐藤力夫, 1994. 日本産ヒメシヤク亜科の3新種. 蛾類通信 179:57-60.
- 佐藤力夫・清野昭夫・内藤恒夫・石塚健一, 1976. 八幡平地域 8月上旬の蛾. 誘蛾燈 65:108-121.
- 佐藤 猛, 1976. 秋田県未記録のヤガ 2種. 秋田自然史研究 7:16.
- 杉 繁郎, 1988. タイリクウスイロヨトウの学名の訂正. 誘蛾燈 112:45-46.
- 杉 繁郎, 1990. シラユキコヤガ第2の産地と棲息環境の知見. 蛾類通信 157:99-100.
- 杉 繁郎, 1995. 北海道低地湿原のホクトギンウワバ. 誘蛾燈 141:109-113.
- 杉 繁郎・神保一義, 1978. 本州の高山帯に分布するクモマウスグロヤガについて. 蛾類通信 97:611-616.
- 杉山徹朗, 1982. 新潟県長岡市西山丘陵のヤガ3種. 誘蛾燈 89:88.

- 杉山徹朗, 1984. ハマヤガを新潟県柿崎町で採集. 誘蛾燈 97:114.
- 杉山徹朗, 1985. 新潟県におけるハマヤガの新産地. 誘蛾燈 102:149.
- 杉山徹朗, 1986. 埼玉県岩槻市で得た湿地性のヤガ4種. 誘蛾燈 106:137.
- 杉山徹朗, 1991. 本州におけるゲンカイハガタシャチホコの2新産地. 蛾類通信 163:224.
- 鈴木智史, 1991. ヨコスジヨトウ福島県に産す. 蛾類通信 163:214.
- 高橋雅彌, 1977. 秋田県の蝶・補遺(I). 秋田自然史研究 8:24.
- 高橋雅彌, 1977. 鹿角市北半の鱗翅類 第1報. 秋田県立博物館研究報告 2:34-65.
- 高橋雅彌, 1978. 秋田県の蝶・補遺(II). 秋田自然史研究 10:21.
- 高橋雅彌, 1981. 鹿角市北半の鱗翅類 第2報. 秋田県立博物館研究報告 6:37-58.
- 高橋雅彌, 1984. ホクトギンウワバを秋田県で採集. 蛾類通信 127:29.
- 高橋雅彌, 1987. 鱗翅類. 環境影響評価手法策定調査報告書. 東北農政局計画資源課.
- 高橋雅彌, 1987. 秋田県の蝶・補遺(III). 秋田自然史研究 21:19.
- 高橋雅彌, 1988. 秋田県の蝶・補遺(IV). 秋田自然史研究 22:34.
- 高橋雅彌, 1990. 秋田県の蝶・補遺(V). 秋田自然史研究 26:17-21.
- 高橋雅彌, 1994. 秋田県の各植生における蛾類, 3. 秋田県中央部湿地における湿地の蛾類. 秋田自然史研究 30:25-37.
- 高橋雅彌・佐々木明夫, 1979. 動物分布調査報告書(昆虫類). 第2回自然環境保全基礎調査. 環境庁.
- 高橋輝幸, 2000. 横手の蛾類. 横手市生物分布調査報告書. 横手市生物分布調査指導委員会・横手市生物分布調査員連絡会.
- 田中政行, 1999. 須川高原の蛾類. 秋田自然史研究 39:15-19.
- 田中政行・梅津一史, 1992. 鹿角市中の沢の蛾類. 秋田自然史研究 28:38-41.
- 田中政行・梅津一史, 1996. 秋田県内における記録の少ないヤガについて. 秋田自然史研究 32:9-15.
- 田中政行・梅津一史, 1996. 秋田県内における記録の少ないヤガについての補遺. 秋田自然史研究 33:17-18.
- 田中政行・梅津一史・大倉 慎, 1993. 秋田県未記録のヤガ. 誘蛾燈 130:99-101.
- 田中政行・梅津一史・大倉 慎, 1996. 「秋田県の蛾[II]」の追加記録. 秋田自然史研究 33:23.
- 田中政行・梅津一史・又井庸生, 1980. 秋田市天徳寺のヤガ. 誘蛾燈 80:70-89.
- 田中政行・梅津一史・又井庸生, 1980. 秋田市平和公園の興味ある蛾類. 秋田自然史研究 12:17-19.
- 田中政行・梅津一史・又井庸生, 1996. 秋田県未記録のヤガ. 秋田自然史研究 33:18.
- 富沢 章, 1987. 加賀市柴山潟の蛾類. 誘蛾燈 109:87-97.
- 富沢 章, 1999. 石川県でアオモンギンセダカモクメを採集. 蛾類通信 202:32.
- 朝長政昭・神部昭夫, 1995. 観音経溪谷(山梨県)の注目すべき蛾4種. 誘蛾燈 141:143-144.
- 鳥倉英徳, 1989. ハマヤガの幼虫探訪記. 誘蛾燈 116:53-54.
- 鳥倉英徳, 1994. イブキスズメの幼虫. 誘蛾燈 136:46-47.
- 鳥倉英徳・小木広行, 1986. ヤガ科稀少種の道内分布図. 蛾類通信 136:173-174.
- 梅津一史, 1982. 宮城県未記録の蛾. 誘蛾燈 87:21.
- 梅津一史, 1995. ヒメナミガタアオシャクの第2の産地. 秋田自然史研究 31:28.
- 梅津一史, 1999. 秋田駒ヶ岳山頂部で採集した蛾類. 秋田県博研報 24:9-14.
- 梅津一史, 2000. 秋田県田沢湖町玉川戸瀬の蛾類(1). 秋田県博研報 25:9-36.
- 梅津一史・田中政行, 1994. 秋田県仁賀保町冬師のヤガ. 秋田県立博物館研究報告 19:15-34.
- 梅津一史・田中政行, 1996. 秋田県仁賀保町冬師の蛾類. 秋田県立博物館研究報告 21:17-35.
- 梅津一史・田中政行, 1998. 秋田県仁賀保町冬師の蛾類(2). 秋田県立博物館研究報告 23:7-22.
- 渡辺 徳, 1972. 八幡平地域の昆虫相. 十和田八幡平国立公園後生掛地区地熱発電所計画に伴う学術調査報告書. 日本自然保護協会.
- 渡辺義汎, 1993. 「宮城県の鱗翅類」の追加種. 誘蛾燈 134:101-113.
- 席 客, 1988. 淡竹筭夜蛾-中国新記録. 昆虫分類学報 10:101-102.
- 矢田 脩・上田恭一郎, 1993. 日本産蝶類の衰亡と保護第2集:27-28. 日本鱗翅学会・日本自然保護協会.

- 山本光人, 1993. ヌマベウスキヨトウを富山県で採る. 蛾類通信 174:419.
- 矢野重明, 1992. カバシタムクゲエダシャクの雌と思われる蛾の採集記録. 蛾類通信 167:300.
- Yoshiyasu, Y., 1985. A systematic study of the Nymphulinae and Musotiminae of Japan (Lepidoptera : Pyralidae). *Sci. Rep. Kyoto Pref. Univ. (Agric.)* 37:1-162.
- 吉安 裕, 1989. メイガ科2種の食草記録. 蛾類通信 156:91.
- 吉安 裕, 1991. ギンツバメの食草. 蛾類通信 162:201.
- 吉安 裕・鴨志田, 1999. 日本鱗翅学会第46回大会講演要旨集:19.

# 陸産貝類 概説

秋田県の陸産貝類研究の始まりは、明治42年に山形の大滝五百太氏が発表した、「奥羽産陸上介類」(介類雑誌第3巻第3号) だろうと思われる。氏は本県の東成瀬、男鹿、十二所などを採集して回り、17種を記録している。しかしその後、我々の力不足のせい、そのうちの4種は再採集できていない。

その後、昭和12年、黒田徳米博士・鳥羽源蔵氏共著の「*Euhadra decorata* とその諸型について」や、昭和15年発行の「南秋田郡誌」などの発表がある。

昭和16年頃、田添健治氏という医師が、男鹿の陸貝を研究していたという事を聞いたが、南方で戦死されたとのことで、研究結果は残されていない。

昭和18年には、西村正氏・渡部景一氏共著「男鹿半島貝類目録」が発表されている。

昭和22年、西村・渡部両氏の採集したミチノクマイマイが、吉良哲明氏によって新亜種として発表され、昭和24年には黒田博士が「夢蛤」(謄写刷)に、ニシムラギセルと新称し、西村正氏採集のキセルガイを発表している。

昭和30年、雄勝郡高松岳より三好功一氏によって、新種ミヨシギセルが発見され、昭和54年湊宏博士によって正式に記載された。

その後、西村氏は「十和田の陸産貝類」「県内より知られた新貝類について」「秋田県陸産貝類目録」「秋田県陸産貝類研究史」など、多くの研究文を発表した。

また、昭和36年、筆者が秋田駒ヶ岳で採集したものが波部忠重博士によりカワグチレンズガイと命名され、学会誌に発表された。その後、筆者は「生物秋田」や「秋田自然史研究」などに数編の報文を発表し、平成12年「秋田県の陸産貝類」と題して「秋田県環境と文化のむら」から、県内陸貝の概要をまとめた冊子を出版した。

本県の陸産貝類の調査は大変遅れているが、近年、各市町村で動植物調査がさかんに行われるようになり、いずれ県内の陸貝相も次第に明らかになってゆくものと思われる。

本県は、亜寒帯に近い温帯に位置している。また、いわゆる日本海側気候帯に属しており、気温の日較差が年間で冬に最も小さく、降水量の年変化が大きく、日照時間の年変化が極端に小さい日本海側気候の特色をはっきり示している。さらに、日本海を流れる海流の影響などから、本県の気候は、海岸部と内陸部で降雪量、気温などに大きな違いがある。一般に陸貝の生息に適した地域は、温暖多湿の土地、広葉樹林の多い場所などがあげられ、全県的にみて海岸部が内陸部よりいくらか個体数が多いように考えられる。また、本県東部の内陸部の大部分を占める奥羽山系には、山地性の陸貝が数種みられる。全般的にみて本県は、陸貝類にとって必ずしも良い生活環境とはいえないようである。

秋田県の陸産貝類の生息種数や個体数は、他県にくらべてやや貧弱である。しかし、奥羽山系の一部の和賀山塊などでは、稀産種が数種確認されている。また、県内一カ所でしか確認されていないハコダテヤマキサゴや、南限と考えられるエゾコギセルの生息なども確かめられている。これらは共に個体数が極めて少なく、生息地も県内では和賀山塊に限られている。この山塊は山が深く、陸貝研究者の入ったことのない地域が大部分なので、今後の調査次第では、新たな種が発見されるものと思われる。その他、ミヨシギセル、カワグチレンズガイ等本県に関係深く、秋田・岩手の両県でしか記録されていない陸貝も生息している。

和賀山塊と共に今後の調査が特に必要とされる地域としては、十和田湖畔があげられる。この地域にはスカシベッコウ、ヒメコハクモドキなどの県内稀産種が生息しているが、観光地であるため、土地開発や施設の建設などにより、その生存が危惧されている。また、スジキビなどの微小貝類の調査と、県北部の陸産貝類の分布状態の確認が未だ進んでない状態である。

また、本県で確認された特異な分布様式を示している種としては、本県北部から青森県にかけて

の日本海側にみられるミチノクマイマイ、太平山のヤママメタニシ、秋田市千秋公園のナミコギセルなどがあげられる。

陸産貝類はその行動半径（移動性）が狭いため、山地や里ごとに種が違うなど、特殊な分布を示すものが多い。また、乾燥に弱く、森林の開発などによる林床の変化により、絶滅することが考えられる種もある。そのため、樹木の伐採や林の下草刈り等は、陸貝の生息に影響のないように、十分配慮した計画のもとに実施されるべきものと考えられる。

本書では、県内で絶滅のおそれのある陸産貝類を守るための第一歩として、ここに数種を挙げたが、これらの種を保護することだけでいいのではなく、これを足がかりとして自然界全体の保全を図ってゆかなければならないと思われる。

陸貝は特に、自然環境の変化や人間のもたらす影響に大きく左右されるので、今日まで、ある種は絶滅の危機にさらされ、また、既にその確認が困難になった種もいくつか数えられるようになった。

我々の身の回りにも、いまだ正確な情報を得ることができず放置されている種が、相当数あることが予測される。これら未記録種の分布状態を把握することと、地域生態系の確認調査を早急に行う必要があるものと考えられる。

現生の生態系を保つために、民間と自治体などが協力しあって、調査研究を進めてゆくことが望ましいと思われる。

(川口洋治)

オキナエビス目ヤマキサゴ科

絶滅危惧種 I A類

## ハコダテヤマキサゴ

*Hemipoma hakodadiense* (Hartmann,1890)

環境省：準絶滅危惧



◆**国内外の分布** 青森県・秋田県以北、佐渡島、北海道、択捉島。

◆**県内の分布** 1965年に湊宏博士が湯沢市泥湯付近で死殻1個を採集したとの記録があったが、その後確認されていなかった。1990年に和賀山塊の生保内川支流オソグテ沢の標高600m付近で生貝が確認された。現在県内で生息が確認されているのは、ここ1ヶ所のみである。

◆**本種の概要** 北海道には広く分布しているが、本州での分布記録は極めて少なく、4～5ヶ所が確認されているにすぎない。ブナ林中の地上の落葉中に見られるが、個体数が少ない。

◆**本種の現状** 本県では生息範囲が極めて限定されている。

◆**生存に対する脅威** 森林地域の開発などにより、絶滅が危ぶまれる。

◆**特記事項** 1属1種であり、極めて希少な種なので保全に留意が必要である。

(川口洋治)

ニナ目イツマデガイ科

絶滅危惧種 I A類

## ヤマメタニシ

*Blanfordia integra* Pilsbry,1924

環境省：絶滅危惧II類

◆**国内外の分布** 秋田県（日本海側）以南～島根県、伊吹山、箱根、天城山。

◆**県内の分布** 太平山皿見内口600m。現在県内では、ここ1ヶ所のみ。

◆**本種の概要** 秋田県がこの種の北限である。県内では太平山以外では記録がなく、分布が限定されている。個体数は極めて少ない。ヒメアオキの葉を好んで食べ、落葉の下や、夏期には低木の葉の裏などに見られる。

◆**本種の現状** 分布範囲が極めて狭いが、県内では太平山皿見内口に似た環境のところがある他にもあるので、今後の調査により分布地域が新しく見つかる可能性もある。

◆**生存に対する脅威** 生息環境の悪化。飛び石状の分布状態で、生息数も極めて少ないので、登山などによる周辺地域の環境悪化が心配である。

◆**現在講じられている保護対策** 生息地付近は太平山県立公園に指定されている。

(川口洋治)

マイマイ目キセルガイ科

絶滅危惧種 I A類

## エゾコギセル

*Pictophaedusa monelasmus* (Pilsbry,1900)

環境省：絶滅危惧I類



◆**国内外の分布** 北海道南部、青森県（下北半島）、秋田県の一部。

◆**県内の分布** 太田町薬師岳滝倉810m。現在本県では、ここ1ヶ所のみ。

◆**本種の概要** 本県の生息地以外に下北半島以南の分布は知られておらず、この生息地が南限である。ブナの古木などの樹表に付着しているコケ類の間などに生息している。大木に付着生息していることもある。

◆**本種の現状** 極めて特異な分布様式を示している種で、個体数も極めて少なく、本県では貴重種といってよいと思われる。

◆**生存に対する脅威** 森林伐採などによって生存場所を失うおそれが懸念される。

◆**現在講じられている保護対策** 生息地は真木真昼県立自然公園に指定されている。

(川口洋治)

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

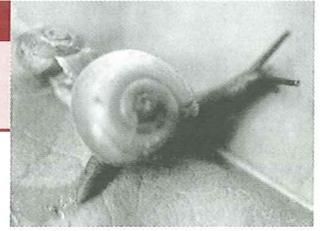
マイマイ目ナンバンマイマイ科

絶滅危惧種 I A類

## イワテビロウドマイマイ

*Nipponochloritis oscitans iwatensis* Sorita, 1986

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** 岩手県、宮城県、秋田県。
- ◆**県内の分布** 男鹿半島寒風山、和賀山塊朝日沢。
- ◆**本種の概要** 東北3県にのみ生息が確認されていて、本県では2ヶ所のみで確認されている。山中の朽木に付着していたり、高温度の落葉下などに多い。
- ◆**本種の現状** 現在のところ、県内では男鹿、和賀山塊での生息確認があるのみで、他に記録がなく個体数も大変少ない。
- ◆**生存に対する脅威** 個体数が少ない。観光開発（男鹿）。
- ◆**特記事項** 特になし。
- ◆**現在講じられている保護対策** 寒風山は男鹿国定公園に指定されている。

(川口洋治)

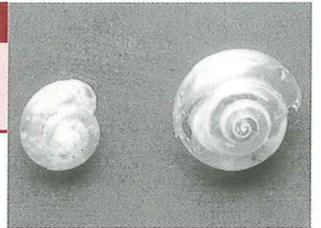
マイマイ目ベッコウマイマイ科

絶滅危惧種 I B類

## スカシベッコウ

*Bekkochlamys serenus* (Pilsbry et Hirase, 1908)

環境省：該当なし



- ◆**国内外の分布** 青森県、秋田県、関東地方の一部。
- ◆**県内の分布** 十和田湖畔（和井内・水無沢）、峰浜村水沢川上流。本県では、この2ヶ所で確認されているのみで、他での生息は確認されていない。
- ◆**本種の概要** 本種はベッコウマイマイ属とタイワンベッコウ属の中間的な特徴の生殖器形態をしている。関東地方で数ヶ所生息が確認されているが、東北では青森・秋田の県境付近でのみ記録されている。サワグルミ林などにみられ、林間の落葉の下に棲む。終日、太陽光線のあたらないような所に生息しているので、周囲の森林の保護も重要である。
- ◆**本種の現状** 個体数が極めて少ないが、十和田湖畔は国立公園として保護されているので、当面は問題がないと思われる。
- ◆**生存に対する脅威** 森林開発（十和田湖畔）。
- ◆**現在講じられている保護対策** 十和田湖畔の生息地は十和田八幡平国立公園に指定されている。

(川口洋治)

マイマイ目ベッコウマイマイ科

絶滅危惧種 I B類

## ヒメコハクモドキ

*Retinella radiatella* (Reinhardt, 1877)

環境省：情報不足

- ◆**国内外の分布** 北海道西南部以南、本州北部。
- ◆**県内の分布** 十和田湖畔和井内付近。
- ◆**本種の概要** 本県では、十和田湖畔の分布のみが記録されている。森林などの落葉下に生息している。コハクモドキが南部に移行した型で、コハクモドキと同一種と考えるべきだという意見もあるようである。個体数は少ない。
- ◆**本種の現状** 個体数が少ない。
- ◆**生存に対する脅威** 生息環境の悪化。
- ◆**現在講じられている保護対策** 生息地は十和田八幡平国立公園に指定されている。

(川口洋治)

マイマイ目オナジマイマイ科

絶滅危惧種 I B 類

# ヒタチマイマイ

*Euhadra brandtii brandtii* (Kobelt, 1875)

環境省：該当なし



◆**国内外の分布** 関東地方中央部以北、東北地方（太平洋岸、青森県五戸まで）、秋田県の一部。

◆**県内の分布** 雄勝郡東成瀬村。現在県内では、東成瀬村内での2ヶ所のみである。

◆**本種の概要** 関東地方や、東北地方太平洋側ではよくみられる種であるが、本県では東成瀬村が唯一の分布地である。ケヤキ・エノキの幹に登ることが多く、15mほどの高さにまで登ることもある。群生するといわれているが、本県の場合は群生しているとはいえないようである。雨後には地上を這っていることもある。

◆**本種の現状** 本県では岩手県に近い山地で生息が確認されており、生息地は狭く、個体数も少ない。

◆**生存に対する脅威** 森林開発事業や、大気汚染などによる環境変化の影響が大きい。

◆**現在講じられている保護対策** 生息地付近は栗駒国定公園になっている。

(川口洋治)

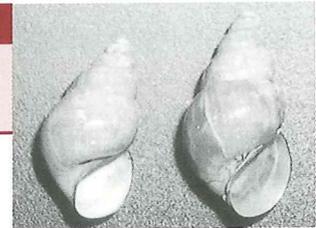
ニナ目イツマデガイ科

絶滅危惧種 II 類

# ニクイロシブキツボ

*Fukuia kurodai kurodai* Abbott et Hunter, 1949

環境省：準絶滅危惧



◆**国内外の分布** 青森県～京都府。

◆**県内の分布** 鳥海町、本荘市、上小阿仁村、八森町。

◆**本種の概要** 分布が散在的で、飛び石状に数ヶ所生息が確認されている状態である。滝や溪流沿いの蘚苔類、下草の間または岩のくぼみなどに見られる。

◆**本種の現状** 京都以北～山形県までは生息が以前から知られていたが、本県では長い間発見されていなかった。しかし、1981年に鳥海町甌山麓で採集され、その後、県内数ヶ所で生息が確認されている。

◆**生存に対する脅威** 河川の改修などによる環境や、水温の変化・山林の道路工事による流れの分断。

◆**特記事項** 山間地の溪流や、滝付近を精査すると、まだ生息地域の確認ができると思われる。

(川口洋治)

マイマイ目ベッコウマイマイ科

絶滅危惧種 II 類

# スジキビ

*Parakaliella ruida* (Pilsbry, 1901)

環境省：準絶滅危惧

◆**国内外の分布** 東北地方以南、関東・中部・北陸・近畿地方。

◆**県内の分布** 高松岳、山伏岳、湯沢市下新田、雄勝峠。

◆**本種の概要** 樹木下の落葉の中に生息する。他の陸貝に比べて、やや乾燥したところに棲む。

◆**本種の現状** 殻高2mm、殻径3～4mm程度の微小貝であるせいか、見つける機会が少ない。個体数は少ない。

◆**生存に対する脅威** 森林の伐採、道路工事などによる環境の変化。

◆**現在講じられている保護対策** 高松岳・山伏岳は栗駒国定公園に指定されている。

(川口洋治)

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

LP

N

マイマイ目ベッコウマイマイ科

絶滅危惧種Ⅱ類

## カワグチレンズガイ

環境省：準絶滅危惧

*Otiosiopsis kawaguchii* Habe, 1961

- ◆**国内外の分布** 秋田県・岩手県の山岳地帯。
- ◆**県内の分布** 秋田駒ヶ岳、高松岳、山伏岳、鳥海山、八幡平、和賀山塊、太良峡、森吉山、大内町黒森山。
- ◆**本種の概要** 秋田駒ヶ岳で最初に発見された種で、県内の山岳地帯に散在的に分布しているが、稀である。山地の落葉下に生息する。
- ◆**本種の現状** わりあい各地域で見つけられているが、個体数は少ない。
- ◆**生存に対する脅威** 開発事業などによる環境の悪化や、登山者の急増による環境の汚染。

(川口洋治)

マイマイ目キセルガイ科

準絶滅危惧種

## ミヨシギセル

環境省：絶滅危惧Ⅱ類

*Kundiphaedusa miyosii* Kuroda et Minato, 1979

- ◆**国内外の分布** 岩手県、秋田県、山形県（湯殿山）の山岳地帯。
- ◆**県内の分布** 高松岳、秋田駒ヶ岳、真昼山、鳥海山、栗駒山、乳頭山、山伏岳、八塩山、和賀山塊。
- ◆**本種の概要** 秋田駒ヶ岳山麓の国見温泉が模式産地となっているが、最初の発見は本県雄勝郡の高松岳である。分布は東北3県の山地帯に限られていて、標高の高い山地帯上部から高山帯にかけて生息する種である。標高1000m前後のブナ・ダケカンバの林内や、チシマザサの密生している地帯の倒木や落葉の下などに生息している。
- ◆**本種の現状** 上記のように高地帯に生息し、分布も限られている。個体数は少ない。
- ◆**生存に対する脅威** 生息環境の悪化。大気汚染。山岳地帯特有の種であるので、登山者の増加による環境の変化が心配される。
- ◆**現在講じられている保護対策** 大部分の産地が、自然公園に指定されている。

(川口洋治)

マイマイ目オナジマイマイ科

準絶滅危惧種

## ササミケマイマイ

環境省：情報不足

*Aegista (Aegista) kunimiensis* M. Azuma et Y. Azuma, 1982

- ◆**国内外の分布** 秋田県、岩手県の山岳地帯。
- ◆**県内の分布** 八幡平、和賀山塊、大内町黒森山、本荘市東光山。
- ◆**本種の概要** 岩手県の国見温泉付近や、八幡平大沼付近などで比較的良好にみられる。主にチシマザサの密生地の落葉や、ブナの落葉の堆積しているところなどにみられる。
- ◆**本種の現状** 森林伐採などにより、生息地が狭められてきているようである。
- ◆**生存に対する脅威** 森林伐採。
- ◆**現在講じられている保護対策** 県内分布地の一部は十和田八幡平国立公園内にあるが、他は保護対策が必要。

(川口洋治)

マイマイ目オナジマイマイ科 準絶滅危惧種  
環境省：準絶滅危惧  
**オオタキマイマイ** *Euhadra grata grata* (Gude,1900)

- ◆**国内外の分布** 秋田県～福島県。
  - ◆**県内の分布** 男鹿半島、皆瀬村、雄勝町、八森町、峰浜村。
  - ◆**本種の概要** 樹上性の陸貝である。
  - ◆**本種の現状** 産地は極度に狭く限られており、個体数も少ない。年々、採集確認することが難しくなっているように思われる。
  - ◆**生存に対する脅威** 森林の開発。大気汚染などによる環境の悪化。
- (川口洋治)

マイマイ目オナジマイマイ科 準絶滅危惧種  
環境省：該当なし  
**ミチノクマイマイ** *Euhadra grata gratoides* Kira,1959

- ◆**国内外の分布** 青森県、秋田県の日本海側。
  - ◆**県内の分布** 能代市から岩館にかけての日本海側に分布。
  - ◆**本種の概要** 山本郡八森町岩館がこの種の模式産地である。秋田県北部から青森県西南部にかけての海岸地帯に点々と分布している。樹上性の種である。岩館付近では人家の垣根などにも多くみられる。
  - ◆**本種の現状** この種の特徴である群生をしめしているが、生息地域が限られている。
  - ◆**生存に対する脅威** 海岸地域の土地改修。
  - ◆**特記事項** 日本海側に分布する種であるが、近年内陸部でも時々見られるようになった。
- (川口洋治)

マイマイ目キセルガイ科 情報不足種  
環境省：該当なし  
**ナミコギセル** *Euphaedusa tau tau* (Boettger,1877)

- ◆**国内外の分布** 関東地方以西、東海、中部、近畿、中国地方のほぼ全域、四国（鳴門市）、朝鮮（羅州）。
  - ◆**県内の分布** 秋田市千秋公園。現在県内では、ここ1ヶ所のみ。
  - ◆**本種の概要** 日本の代表的な種であって、関東より中国地方にかけて分布するといわれていたが、これから飛び離れて秋田県での生息が確認されたことから、その分布様式は極めて特異性をもっていると考えられる。平地から丘陵地、竹・雑木林等の根元や朽木などに生息しているといわれているが、秋田市千秋公園では、古木の切り株などに見られた。
  - ◆**本種の現状** 公園内の整備や、切り株の除去などにより、近年では、その生息が確認できなくなっている。
  - ◆**生存に対する脅威** 環境の整備による樹木の伐採や、大気汚染による環境の悪化。
  - ◆**特記事項** 移入された種である可能性も考えられる。
- (川口洋治)

- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD
- LP
- N

マイマイ目オオコウラナメクジ科

情報不足種

## ヤマコウラナメクジ

*Nipponolimax monticola* Yamaguchi et Habe, 1955

環境省：準絶滅危惧

- ◆**国内外の分布** 四国・近畿地方以北。
- ◆**県内の分布** 和賀山塊（薬師岳）、小坂町、能代市。
- ◆**本種の概要** 本県では主に山地の落葉下や、朽ち木の間などにみられる。
- ◆**本種の現状** ナメクジの仲間でもきわめて稀な種で、国内でも約10ヶ所程で生息が確認されているのみである。
- ◆**生存に対する脅威** 樹木の伐採、草原の刈払いなど。ナメクジ類は乾燥に非常に弱いので、雑草、樹木の刈払いなどは致命的である。

(川口洋治)

マイマイ目オナジマイマイ科

情報不足種

## コシタカオオベソマイマイ

*Aegista (Aegista) celsa* (Pilsbry et Hirase, 1908)

環境省：情報不足

- ◆**国内外の分布** 秋田県、山形県、新潟県。
- ◆**県内の分布** 秋田駒ヶ岳900m。
- ◆**本種の概要** 稀産の陸貝である。山地の落葉下などで稀に見られる。
- ◆**本種の現状** 県内では現在のところ1ヶ所のみ確認である。調査が不十分なので、分布状況が正確に把握されていない感がある。今後の調査等により生息地が増えることが考えられる。
- ◆**生存に対する脅威** 極めて稀産の種で、乱獲は勿論、登山者の増加、森林開発など。
- ◆**現在講じられている保護対策** 生息地は十和田八幡平国立公園に指定されている。

(川口洋治)

マイマイ目キセルガイモドキ科

留意種

## クリロキセルガイモドキ

*Mirus andersonianus* (Moellendorff, 1885)

環境省：準絶滅危惧

- ◆**国内外の分布** 北海道、青森、秋田、岩手の各県、山形県以西の本州（鳥取県まで）。
- ◆**県内の分布** 県内各地の山地等でみられ、その分布は割合多く、10数ヶ所で確認されている。
- ◆**本種の概要** 北海道知床半島から東北地方を経て山陰地方までの主として日本海側に分布し、特に東北地方には広く分布している。広葉樹の古木などにみられ。特にブナの古大木を含む森林内にすむ。主にブナの幹に付着している。
- ◆**本種の現状** 秋田県での分布は非常に多く、個体数も豊富である。

(川口洋治)

## 陸産貝類参考文献

- 東 正雄, 1995. 原色日本陸産貝類図鑑. 保育社.
- 肥後俊一・後藤芳央, 1993. 日本及び周辺地域軟体動物総目録. エル貝類出版局.
- 環境庁, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物(無脊椎動物編).
- 川口洋治, 1974. ミヨシギセルの生息地点とその分布について. 秋田自然史研究 2:2-3. 秋田自然史研究会.
- 川口洋治, 1975. 秋田県におけるエムラマイマイの生息地点とその分布について. 秋田自然史研究 5:11-12. 秋田自然史研究会.
- 川口洋治, 1975. 秋田県におけるカワグチレンズガイの生息地点とその分布について. 秋田自然史研究 3:3-5. 秋田自然史研究会.
- 川口洋治, 1981. 秋田駒ヶ岳の陸産貝類相. 秋田自然史研究 14:4-5. 秋田自然史研究会.
- 川口洋治, 1982. シブキツボ属 (*Fukuia*) について. 秋田自然史研究 15:1-3. 秋田自然史研究会.
- 川口洋治, 1982. 高松岳・山伏岳の陸産貝類相. 生物秋田 26:15-17. 秋田生物学会.
- 川口洋治, 1983. 雄勝峠の陸貝. 生物秋田 27:25-26. 秋田生物学会.
- 川口洋治, 1984. 栗駒山とその周辺の陸貝. 生物秋田 28:4-6. 秋田生物学会.
- 川口洋治, 1986. 陸貝分布論(陸産貝類からみた生物地理的考察). 生物秋田 20:7-8. 秋田生物学会.
- 川口洋治, 1987. 秋田県未記録の *Aegista* 属について. 秋田自然史研究 27:30-31. 秋田自然史研究会.
- 川口洋治, 1989. 蝸牛山の陸貝. 生物秋田 31:6. 秋田生物学会.
- 川口洋治, 1991. 秋田県和賀山塊の陸貝. 秋田自然史研究 27:1-3. 秋田自然史研究会.
- 川口洋治, 1992. 秋田県和賀山塊の陸貝第2報. 秋田自然史研究 28:49-51. 秋田自然史研究会.
- 川口洋治, 1994. 和賀山塊で確認された秋田県未記録の陸産貝類. 生物秋田 36:1-2. 秋田生物学会.
- 川口洋治, 1997. 秋田県陸産貝類誌.
- 川口洋治, 1999. 和賀山塊の陸棲貝類. 和賀山塊の自然(和賀山塊学術調査報告書):130-134. 和賀山塊自然学術調査会.
- 川口洋治, 1999. 和賀山塊陸産貝類採集目録. 和賀山塊の自然(和賀山塊学術調査報告書):288-295. 和賀山塊自然学術調査会.
- 湊 宏, 1988. 日本産陸産貝類総目録.
- 湊 宏・川口洋治, 1994. 秋田県奥羽山脈で採集されたエゾコギセル. ちりぼたん vol. 24, 3:103-104. 日本貝類学会.
- 西村 正, 1958. 県内より知られた新貝類について. 生物秋田 5:1-12. 秋田生物学会.
- 西村 正, 1959. 十和田の陸産貝類. 生物秋田 6:1-3. 秋田生物学会.
- 西村 正, 1965. 秋田県陸産貝類目録. 生物秋田 9:4-7. 秋田生物学会.
- 西村 正, 1981. 秋田県陸産貝類研究史. 生物秋田 24:9-11. 秋田生物学会.

# 著者、 写真提供者

## 【著者】

哺乳類：揚妻直樹、向山満

鳥類：泉祐一、小笠原暁、佐藤磯男、高橋一郎

爬虫類：本郷敏夫

両生類：本郷敏夫

淡水魚類：杉山秀樹

昆虫類：青谷晃吉、梅津一史、佐々木明夫、佐藤福男、高橋雅彌、成田弘

陸産貝類：川口洋治

## 【写真提供者】

哺乳類：青木満、揚妻直樹、泉祐一、小笠原暁、長崎富雄、向山満、横山正義

鳥類：石川寿一、伊藤信義、泉祐一、小笠原暁、小笠原学、後藤恭子、佐藤正生、武田栄悦、  
堤朗、西出隆、原田勇成、船橋功、三浦哲也

爬虫類：佐々木昇、田中政行

両生類：梅津一史

淡水魚類：杉山秀樹

昆虫類：青谷晃吉、梅津一史、加納彦一、熊谷和樹、佐々木明夫、佐藤福男、(株)自然科学調査事  
務所、高橋雅彌

陸産貝類：川口洋治

(氏名五十音順、敬称略)

## 索引 (\*は口絵写真掲載)

和名	ランク	ページ		ページ
【ア】			オオヨモギハムシ	163
アイヌハンミョウ*	VU	146	オオワシ*	54
アオカタビロオサムシ	DD	170	オカヨシガモ*	53
アオサナエ*	CR	126	オジロサナエ*	127
アオシギ	DD	81	オジロワシ*	54
アオバズク	NT	69	オツネントンボ*	136
アオハダトンボ*	NT	155	オナガ	82
アオバト	DD	81	【カ】	
アオバネソクビゴミムシ*	CR	129	カグヤコウモリ*	29
アオモンギンセダカモクメ*	CR	133	カジカ中卵型*	110
アカエリカイツブリ	DD	77	カトリヤンマ*	127
アカガネオサムシ*	VU	147	カノシマチビゲンゴロウ	160
アカザ*	CR	108	カバシタムクゲエダシヤク	125
アカショウビン	NT	69	カバマダラヨトウ	180
アカヒレタビラ	NT	113	カマキリ*	112
アカマエアツバ	DD	184	ガマヨトウ	169
アカモズ*	VU	58	カヤクグリ	71
アトジロキリガ*	VU	153	カラフトマルトゲムシ	171
アビ	DD	76	カワウ	77
アマサギ	DD	78	カワグチレンズガイ*	204
アユカケ*	VU	112	カワラゴミムシ*	136
アリスイ*	EN	52	カワラハンミョウ*	146
【イ】			カンキョウカジカ*	112
イガブチヒゲハナカミキリ	NT	162	カンムリカイツブリ	60
イカル	NT	76	【キ】	
イカルチドリ	NT	66	キアシネクイハムシ*	137
イスカ*	VU	59	キスジウスキヨトウ	169
イチゴナミシヤク	DD	175	キタアカシジミ*	150
イトヨ降海型*	VU	111	キタゲンゴロウモドキ	185
イヌワシ*	CR	49	キタヨトウ*	134
イバラトミヨ雄物型*	CR	108	キタルリモンエダシヤク*	132
イブキスズメ	DD	177	キバシリ*	58
イワテピロウドマイマイ*	CR	202	ギバチ*	111
イワヒバリ	NT	71	キバネトビスジエダシヤク	176
【ウ】			キブサヒメエダシヤク*	140
ウケクチウグイ	DD	115	ギフチョウ*	149
ウスキトガリキリガ	NT	167	キマダラモドキ*	131
ウスキミズメイガ*	EN	138	キレンシヤク	71
ウスジロケンモン	NT	166	ギンイチモンジセセリ	186
ウスジロドクガ*	EN	141	ギンスジマダラメイガ*	130
ウスチャマエモンコヤガ*	VU	153	ギンツバメ*	151
ウスマダラミズメイガ*	VU	149	ギンボシシヤチホコ*	151
ウンモンキシタバ*	EN	145	ギンモンアカヨトウ	143
【エ】			【ク】	
エゾウグイ*	VU	110	クイナ	80
エゾゲンゴロウモドキ	N	185	クシロモクメヨトウ*	134
エゾコギセル*	CR	201	クドウトガ	164
エソトンボ	NT	157	クニマス*	107
エンマハバピロガムシ	NT	161	クマガイクロアオゴミムシ*	128
【オ】			クマゲラ*	50
オオウラギンヒョウモン*	EX	125	クマソオヨトウ	181
オオカブラヤガ	DD	178	クマタカ*	52
オオキトンボ*	VU	145	クモマウスグロヤガ	167
オオクワガタ*	VU	148	クラマトガリバ	175
オオコノハズク	NT	68	クリイロキセルガイモドキ	206
オオゴマシジミ	N	187	クロガモ	63
オオジシギ	NT	67	クロキカワムシ	172
オオジュリン	NT	75	クロサギ*	51
オオセスジイトトンボ*	NT	154	クロシジミ*	131
オオセツカ*	CR	50	クロスジシロコブガ*	152
オオタカ	NT	64	クロチャマダラキリガ	180
オオタキマイマイ	NT	205	クロツヤシモフリコメツキ	162
オオチャイロハナムグリ	NT	161	クロナガオサムシ*	137
オオチャバネヨトウ	NT	168	クロピロードヨトウ	168
オオトラフトンボ	NT	157	クロホオヒゲコウモリ	30
オオハム	DD	76	クロモンエグリトビケラ*	130
オオヒシクイ	NT	62	クロヤガ*	141
オオホシハジロ	NT	63	クロヨシノボリ*	109
オオマシコ	DD	82	クワヤマエグリシヤチホコ*	132
オオムラサキ	N	187	【ケ】	
オオヨシゴイ*	EN	51	ケアシノスリ	80
			ゲンカイハガタシヤチホコ	178

索引

【コ】			
コアジサシ*	・VU	57	
コウヤホソハナカミキリ	・DD	172	
コクガン*	・EN	51	
コサギ	・DD	79	
コサメビタキ	・NT	73	
コシアカツバメ	・NT	70	
コシカオオベソマイマイ	・DD	206	
コシボソヤンマ*	・CR	127	
コジュリン	・NT	74	
コシロシタバ	・DD	183	
コチョウゲンボウ*	・VU	56	
コノシメトンボ	・NT	158	
コノハズク	・NT	68	
コハイイロヨトウ*	・EN	142	
コバネアオイトトンボ	・N	185	
コボトケヒゲナガコバネカミキリ	・NT	162	
コマドリ	・NT	72	
コヤマコウモリ	・DD	37	
コルリ	・NT	72	
【サ】			
ササゴイ	・NT	61	
サザナミアツバ	・DD	184	
ササミケマイマイ	・NT	204	
サシバ	・NT	64	
サメハダチョッキリ	・DD	173	
サンカノゴイ	・DD	78	
サンコウチョウ	・NT	74	
サンショウクイ*	・VU	57	
【シ】			
シジュウカラガン*	・CR	49	
シタベニヒメシャク*	・EN	139	
シナイモツゴ*	・CR	107	
シノビアミメカワゲラ*	・DD	170	
シノリガモ	・DD	79	
シマオシノボリ陸封型*	・LP	115	
ジョウザンケンモン	・DD	178	
シラカミナガチビゴミムシ	・DD	170	
シラクキコヤガ*	・EN	144	
シロウオ	・NT	114	
シロエリオオハム	・DD	77	
シロオビヨトウ*	・EN	142	
シロカモメ	・NT	67	
シロスジキンウワバ*	・EN	144	
シロチドリ	・NT	66	
シロテンキヨトウ	・NT	167	
シロマダラ*	・DD	89	
シロマダラカバナミシャク*	・EN	140	
シロミミチビヨトウ*	・CR	133	
【ス】			
スカシベッコウ*	・EN	202	
スゲドクガ	・NT	166	
スジキビ	・VU	203	
スジグロチャバネセセリ	・N	186	
スナヤツメ	・NT	112	
スミウキゴリ	・NT	114	
スミレクビグロクチバ*	・VU	154	
スモモエダシャク	・DD	176	
【セ】			
セッカ	・CR	50	
ゼニタナゴ*	・CR	107	
セプトモクメヨトウ*	・CR	135	
【ソ】			
ソトシロスジミズメイガ*	・EN	138	
【タ】			
ダイコクコガネ	・DD	171	
ダイサギ	・DD	78	
ダイセンセダカモクメ*	・EN	143	
タイリクウスイロヨトウ	・DD	179	
タカチホヘビ*	・DD	89	
タガメ*	・VU	146	
タマシギ	・NT	65	
【チ】			
チゴハヤブサ*	・VU	56	
チゴモズ*	・VU	57	
チチブ*	・EN	109	
チビウスキオオメイガ*	・CR	130	
チャイロカドモンヨトウ	・DD	180	
チャマダラセセリ	・EX	125	
チュウサギ	・DD	79	
チュウヒ*	・EN	52	
チョウカイシロコブガ*	・CR	133	
チョウゲンボウ	・NT	65	
チンメルマンセスジゲンゴロウ*	・VU	147	
【ツ】			
ツマグロトビケラ	・DD	173	
ツミ*	・VU	55	
【テ】			
テラニシセスジゲンゴロウ*	・CR	129	
テンモントガリヨトウ*	・CR	134	
【ト】			
トウホクナガケシゲンゴロウ	・NT	159	
トウホクミヤマヒサゴメツキ	・DD	171	
トウホクヤチネズミ	・VU	36	
トビギンボシシャチホコ	・NT	166	
トミヨ・淡水型*	・VU	111	
トモエガモ*	・VU	53	
トラツグミ	・NT	73	
トラフズク	・NT	68	
【ナ】			
ナカグロヤガ	・DD	179	
ナナメヒメヨトウ*	・CR	135	
ナミグルマアツバ	・DD	183	
ナミコギセル	・DD	205	
ナンキンキノカワガ	・DD	181	
【ニ】			
ニクイロシブキツボ*	・VU	203	
ニセタバコガ*	・EN	141	
ニセルイスツブゲンゴロウ	・NT	160	
ニッコウムササビ*	・NT	37	
ニホンアカガエル*	・NT	97	
ニホナイズナ	・EN	32	
ニホンウサギコウモリ*	・EN	31	
ニホンカモシカ	・N	40	
ニホンカワネズミ	・VU	33	
ニホンキクガシラコウモリ	・N	38	
ニホンコキクガシラコウモリ*	・VU	33	
ニホンコテングコウモリ*	・VU	34	
ニホンツキノワグマ	・N	39	
ニホntenゴウモリ*	・VU	35	
ニホンユビナガコウモリ*	・VU	34	
ニホンリス	・N	38	
【ヌ】			
ヌマバウスキヨトウ	・NT	169	
【ネ】			
ネグロアツバ*	・VU	154	
【ノ】			
ノジコ	・NT	74	
【ハ】			
ハイロチュウヒ	・DD	80	
ハイタカ*	・VU	55	
ハガタフタオ	・DD	177	
ハギマシコ	・NT	75	
ハクガン*	・CR	49	
ハコダテヤマキサゴ*	・CR	201	
ハシビロガモ	・NT	63	

- ハジロカイツブリ……………NT…………… 59  
ハチクマ\*……………VU…………… 54  
ハツチョウトンボ……………NT…………… 158  
ハナカジカ\*……………EN…………… 109  
ババホタルトビケラ\*……………VU…………… 148  
ハマヤガ\*……………EN…………… 142  
ハヤシミドリシジミ……………NT…………… 164  
ハヤチネヌレチゴミムシ\*……………VU…………… 147  
ハヤブサ\*……………VU…………… 55  
ハンエンカクツツトビケラ\*……………VU…………… 148
- 【ヒ】  
ヒカゲチョウ……………DD…………… 174  
ヒクイナ……………NT…………… 65  
ヒシクイ……………NT…………… 62  
ヒタチマイマイ\*……………EN…………… 203  
ヒナコウモリ……………EN…………… 30  
ヒメアカネ……………NT…………… 158  
ヒメウ……………NT…………… 60  
ヒメギフチョウ……………N…………… 186  
ヒメクイナ……………DD…………… 81  
ヒメクルマコヤガ……………DD…………… 182  
ヒメコハクモドキ……………EN…………… 202  
ヒメサナエ\*……………CR…………… 126  
ヒメシジミ……………N…………… 187  
ヒメシタコバナナミシヤク\*……………EN…………… 139  
ヒメシロチョウ\*……………VU…………… 150  
ヒメシロテナアオヨトウ……………DD…………… 181  
ヒメナミガタアオシヤク\*……………EN…………… 139  
ヒメヒミズ……………VU…………… 33  
ヒョウモンチョウ……………NT…………… 165  
ピリング……………NT…………… 114  
ヒレンジャク\*……………VU…………… 58  
ピロードキンクロ\*……………VU…………… 53  
ピンズイ……………NT…………… 70
- 【フ】  
フジホオヒゲコウモリ……………EN…………… 29  
フタオレウスグロエダシヤク\*……………EN…………… 140  
フタクロテンマダラメイガ\*……………EN…………… 138  
フタスジチョウ\*……………CR…………… 131  
フタテンエダシヤク\*……………VU…………… 151  
フタモンコナミシヤク……………DD…………… 175  
フツボウソウ……………NT…………… 70  
フトクチヒゲヒラタゴミムシ……………NT…………… 159  
プライヤキリバ……………DD…………… 183
- 【ヘ】  
ベニエグリコヤガ……………DD…………… 182  
ベニカメノコハムシ……………NT…………… 163  
ベニヒカゲ……………NT…………… 165  
ベニヒワ……………NT…………… 75  
ヘリグロチャバナセセリ……………NT…………… 164
- 【ホ】  
ホクトギンウワバ……………CR…………… 135  
ホシミスジ北上高地亜種\*……………VU…………… 150  
ホソハンミョウ……………EN…………… 137  
ホソヒメクロオサムシ……………NT…………… 159  
ホソミオツネントンボ……………NT…………… 155  
ホトケドジョウ\*……………CR…………… 108  
ホンサナエ\*……………CR…………… 126  
ホンシュウオオイチモンジシマゲンゴロウ……………NT…………… 161  
ホンシュウジネズミ……………VU…………… 32  
ホンシュウトガリネズミ……………VU…………… 32  
ホンドオコジョ\*……………VU…………… 36  
ホンドギツネ……………N…………… 39  
ホンドザル\*……………EN…………… 31  
ホンドジカ……………EX…………… 29  
ホンドモモンガ\*……………VU…………… 35
- 【マ】  
マークオサムシ\*……………CR…………… 128
- マエアカヒトリ\*……………CR…………… 132  
マエグロヤガ……………DD…………… 179  
マガリウスヅマアツバ……………DD…………… 184  
マガリスジコヤガ\*……………EN…………… 144  
マガン……………NT…………… 62  
マダラナニワトンボ\*……………EN…………… 136  
マダラヤンマ……………NT…………… 157  
マミジロ……………NT…………… 73  
マルコガタノゲンゴロウ……………NT…………… 160  
マルタ\*……………VU…………… 110  
マンレイカギバ……………DD…………… 174
- 【ミ】  
ミカボコブガ\*……………VU…………… 152  
ミサゴ\*……………NT…………… 64  
ミスジキリガ\*……………VU…………… 153  
ミズノモグラ……………DD…………… 37  
ミゾゴイ……………NT…………… 61  
ミチノクケマダラカミキリ……………CR…………… 129  
ミチノクヒメシヤク……………NT…………… 165  
ミチノクマイマイ……………NT…………… 205  
ミツユビカモメ\*……………VU…………… 56  
ミミカイツブリ……………NT…………… 60  
ミミズハゼ……………NT…………… 115  
ミヤマサナエ……………NT…………… 156  
ミヤマショウブヨトウ\*……………EN…………… 143  
ミヨシギセル……………NT…………… 204
- 【ム】  
ムカシトンボ……………NT…………… 156  
ムモンベニカミキリ……………DD…………… 172  
ムラサキヨトウ\*……………VU…………… 152
- 【メ】  
メダカ……………NT…………… 113
- 【モ】  
モートンイトトンボ……………NT…………… 155  
モトグロコヤガ……………DD…………… 182  
モモジロコウモリ\*……………NT…………… 36  
モリオカツトガ\*……………VU…………… 149
- 【ヤ】  
ヤハズナミシヤク……………DD…………… 176  
ヤブヤンマ\*……………CR…………… 128  
ヤホシホソマダラ……………DD…………… 174  
ヤマコウモリ\*……………EN…………… 30  
ヤマコウラナメクジ……………DD…………… 206  
ヤマサナエ……………NT…………… 156  
ヤマシギ……………NT…………… 66  
ヤマセミ……………NT…………… 69  
ヤマトアザミテントウ玉川個体群……………LP…………… 185  
ヤマネ\*……………VU…………… 35  
ヤマママタニシ……………CR…………… 201  
ヤリタナゴ……………NT…………… 113
- 【ユ】  
ユキホオジロ\*……………VU…………… 59
- 【ヨ】  
ヨコスジトウ……………NT…………… 168  
ヨコヤマヒゲナガカミキリ……………NT…………… 163  
ヨシゴイ……………NT…………… 61  
ヨスジカパイロアツバ\*……………EN…………… 145  
ヨスジキエダシヤク……………DD…………… 177
- 【ル】  
ルリハダホソクロバ……………DD…………… 173  
ルリビタキ……………NT…………… 72  
ルリヨシノポリ陸封型\*……………LP…………… 116
- 【ワ】  
ワシカモメ……………NT…………… 67

---

秋田県の絶滅のおそれのある野生生物2002  
—秋田県版レッドデータブック— 動物編  
Threatened Wildlife of Akita Prefecture 2002  
— Red Data Book of Akita Prefecture — Animals

2002年3月 初版第1刷発行

編集 秋田県生活環境文化部自然保護課  
〒010-8570 秋田市山王四丁目1番1号  
電話 018-860-1613 FAX 018-860-3835  
発行 秋田県環境と文化のむら協会  
〒018-1723 南秋田郡五城目町上樋口字山田沢156-1  
電話 018-852-2134 FAX 018-852-5251

---